山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第39集

金生遺跡Ⅰ（中世編）

県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書

１９８８．３

山 梨 県 教 育 委 員 会

金生遺跡Ⅰ（中世編）

１９８８．３

序

本報告書は、県営圃場整備事業に先立ち、山梨県北巨摩郡大泉村谷戸地内で発掘調査された金生遺跡のうち、中世遺構が集中していたB区の調査結果をまとめたものであります。

金生遺跡は縄文時代後晩期の配石遺構として国史跡に指定されたA区が著名であります。しかし、調査経過のなかで説明しておりますとおり、1979年の試掘調査で確認されました中世遺構は、長坂町が史跡に指定しております深草館の外郭部分にあたると考え、当初はこの部分の盛土保存を計画していた訳であります。本遺跡は山梨の中世史を語る上で欠くことのできない重要な地域に所在いたしておりますために、この中世遺構が今後重要性を増すものと判断いたしたのであります。しかし、縄文時代後期から晩期の遺構の検出が進むにつれ、県民各層や全国の考古学研究者から保存を希望する声が高まってきたのであります。そのため、この判断を若干修正する必要が生じ、当初の計画より中世遺構の調査面積を一部増加させることによって、縄文時代の遺構保存を行ったのであります。当初計画では、縄文時代の遺構部分を調査終了後掘削いたしまして、その土を中世遺構の上に盛る予定となっておりましたが、掘削面積が減少したための緊急な措置でありました。

調査により検出されました49基にのぼる地下式土坑や多くの掘立柱建物址、平安時代の住居址6軒、縄文時代の住居址1軒、土坑約200基などの遺構は、10年近く経た今日でも県内では他に例を見ておりません。また瀬戸・美濃地方で生産された陶器、中国産の白磁や青磁などの出土は、同時期に存続していたと考えられております、国指定史跡勝沼氏館跡の様相とは、大きく異なっております。この発掘調査の成果が山梨県の中世史研究に多くの資料を提供し、戦国期の甲斐の歴史研究に新たな方法を示唆したものと自負いたしております。来年度は縄文時代後期から晩期の遺構と遺物が多量に検出されましたA区の調査報告書を刊行する予定で、現在鋭意作業を進めております。本報告書と併せてご活用戴ければ幸甚に思います。

なお、本報告書が刊行されるまでに多くの方々からご支援ご協力を賜りました。調査に多大なご協力を戴いた峡北土地改良事務所をはじめとする工事関係者や地元の方々、また直接調査に参加されたり出土品の整理にあたられた方々には、末筆ながら改めて厚く御礼申し上げます。

1988年　3　月

山梨県埋蔵文化財センター

所　長　磯　貝　正　義

金生遺跡の例言

① 本書は県営圃場整備事業に伴って1980年に発掘調査した北巨摩郡大泉村谷戸字金生に所在する金生遺跡の調査報告書である。

② 金生遺跡は国指定史跡となった縄文時代後晩期の配石遺構を中心としたA区とその南に位置する掘立柱建物址や地下式土坑を中心とする中世遺構が検出されたB区とに大別されるが、本書はこのB区の報告書である。

③ 本遺跡から出土した遺物及び写真、図面は山梨県埋蔵文化財センターで保管しているが、遺物の一部は山梨県立考古博物館と大泉村歴史民俗史料館において展示されている。

④ 本報告書に掲載した遺物図面は斉木千恵子、渡辺かほる、武川ます美、弦間千鶴、五味芳子、柏木まつ江、遠藤映子、宮川菊江が作成し、遺構遺物図面のトレースは斉木千恵子、渡辺かほる、武川ます美、弦間千鶴、五味芳子、柏木まつ江が行った。

⑤ 本報告書の執筆は八巻与志夫が行った。

⑥ 出土人骨の分析は聖マリアンナ医科大学の森本岩太郎先生に依頼した。

⑦ 金属遺物の処理に際して、山梨文化財研究所の鈴木稔室長にX線撮影を依頼した。

⑧ 本遺跡の調査及び報告書刊行にあたってご指導、ご協力を戴いた方々を以下に記して感謝したい。

伊東公明、上野晴朗、森本岩太郎、鈴木稔、山路恭之助、桜井正樹、江崎武、大泉村教育委員会、長坂町教育委員会（順不同）

凡　　例

1　本書では次のように遺構を表示した。
　ＳＢ……縄文時代と平安時代の住居址
　　Ｈ……堀

2　地下式土坑の図面は、次のように表現した。
　①平面図には縦坑と横坑の平面プランを描き、横坑には太線で床の輪郭を、細線で天井の輪郭を画いた。
　②断面図では縦坑と横坑を直線で切ったが、横坑の隅に縦坑がある場合は、横坑の中央部を断面とした。
　③複雑に重複している地下式土坑については、図版の隅に位置関係を示す略図を載せた。
　④重複している地下式土坑は、一部の輪郭だけ記入した。
　⑤地上から崩落している部分については一点鎖線で、天井などが一部崩落している部分は、推定線を破線で表現した。

3　掘立柱建物址の図面は次のように表現した。
　①直線的に並ぶ柱穴群から、等間隔に並ぶものを建物と想定して、外側の柱穴を建物の規模と考えて実線で結んだ。
　②柱穴が検出されなかった部分は、破線で推定の柱穴を描いた。
　③柱穴の切り合いについては、現場でも十分に確認できなかったため、建物の時期差については特に表現しなかった。
　④柱穴の断面は、建物と想定したものであるため、明確な１号掘立柱建物址以外は割愛した。

4　土坑の図版は、一部柱穴を含んで図化している。また、土坑の一覧表は、各土坑の最大値を計測した。

目　　次

序

例　　言

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　遺跡の歴史的地理的環境 …… 3

第３章　遺　　構

1　地下式土坑 …… 6

2　土坑と溝 …… 22

3　住　居　址 …… 52

4　掘立柱建物址 …… 57

第４章　遺　　物

1　内耳土器 …… 70

2　陶 磁 器 …… 70

3　石　　臼 …… 80

4　金属製品 …… 80

5　銭　　貨 …… 82

6　平安時代の遺物 …… 82

7　土師質土器 …… 83

8　その他の遺物 …… 107

9　金生遺跡出土人骨について …… 108

第５章　ま　と　め …… 109

附　　金生遺跡土坑計測値一覧表 …… 111

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図…… 2
第２図　住居址等位置図…… 3
第３図　地下式土坑位置図１…… 10
第４図　地下式土坑位置図２…… 11
第５図　地下式土坑位置図３…… 11
第６図　地下式土坑位置図４…… 11
第７図　地下式土坑平面図１…… 12
第８図　地下式土坑平面図２…… 13
第９図　地下式土坑平面図３…… 14
第10図　地下式土坑平面図４…… 15
第11図　地下式土坑平面図５…… 16
第12図　地下式土坑平面図６…… 17
第13図　地下式土坑平面図７…… 18
第14図　地下式土坑平面図８…… 19
第15図　地下式土坑平面図９…… 20
第16図　土坑全体図１…… 24
第17図　土坑全体図２…… 25
第18図　土坑平面図１…… 26
第19図　土坑平面図２…… 27
第20図　土坑平面図３…… 28
第21図　土坑平面図４…… 29
第22図　土坑平面図５…… 30
第23図　土坑平面図６…… 31
第24図　土坑平面図７…… 32
第25図　土坑平面図８…… 33
第26図　土坑平面図９…… 34
第27図　土坑平面図10…… 35
第28図　土坑平面図11…… 36
第29図　土坑平面図12…… 37
第30図　土坑平面図13…… 38
第31図　土坑平面図14…… 39
第32図　土坑平面図15…… 40
第33図　土坑平面図16…… 41
第34図　土坑平面図17…… 42
第35図　土坑平面図18…… 43
第36図　土坑平面図19…… 44
第37図　土坑平面図20…… 45
第38図　土坑平面図21…… 46
第39図　土坑平面図22…… 47
第40図　土坑平面図23…… 48
第41図　土坑平面図24…… 49
第42図　土坑平面図25…… 50
第43図　土坑平面図26…… 51
第44図　１～３号住居址平面図…… 54
第45図　５、６号住居址平面図…… 55
第46図　４、７号住居址平面図…… 56
第47図　掘立柱建物群全体図…… 60
第48図　１号掘立柱建物址…… 61
第49図　１号掘立柱建物址群…… 62
第50図　２号掘立柱建物址群…… 63
第51図　３号掘立柱建物址群…… 64
第52図　４号掘立柱建物址群…… 64
第53図　５号掘立柱建物址群…… 65
第54図　６号掘立柱建物址群…… 66
第55図　７号掘立柱建物址群…… 66
第56図　８号掘立柱建物址群…… 67
第57図　９号掘立柱建物址群…… 68
第58図　10号掘立柱建物址群…… 69
第59図　内耳土器実測図１…… 72
第60図　内耳土器実測図２…… 73
第61図　内耳土器実測図３…… 74
第62図　陶磁器実測図１…… 75
第63図　陶磁器実測図２…… 76
第64図　陶磁器実測図３…… 77
第65図　陶磁器実測図４…… 78
第66図　陶磁器実測図５…… 79
第67図　石臼実測図１…… 84
第68図　石臼実測図２…… 85
第69図　石臼実測図３…… 86
第70図　石臼実測図４…… 87
第71図　金属製品実測図１…… 88
第72図　金属製品実測図２…… 89
第73図　金属製品実測図３…… 90
第74図　金属製品実測図４…… 91
第75図　銭貨１…… 92
第76図　銭貨２…… 93
第77図　銭貨３…… 94
第78図　銭貨４…… 95
第79図　銭貨５…… 96
第80図　平安時代の遺物１…… 97
第81図　平安時代の遺物２…… 98
第82図　平安時代の遺物３…… 99
第83図　平安時代の遺物４…… 100
第84図　土師質土器１…… 101
第85図　土師質土器２…… 102
第86図　土師質土器３…… 103
第87図　その他の遺物１…… 104
第88図　その他の遺物２…… 105
第89図　その他の遺物３…… 106
第90図　鉄釉水滴実測図…… 107

図　版　目　次

図版１　No.1 調査区北西部分　No.2 内堀周辺　No.3 調査区中央の作業風景　No.4 １号掘立柱建物址群の調査風景　No.5 １号掘立柱建物址群全景

図版２　No.6 調査区北東　No.7 調査区中央から東　No.8 調査区東側

図版３　No.9 ２号住居址　No.10 ３号住居址　No.11 ４号住居址　No.12 １号掘立柱建物址根石　No.13 １号掘立柱建物址柱痕

図版４　No.14 106号土坑　No.15　No.16　No.17

図版５　No.18 １号石組　No.19 南西側の石組群　No.20 中央の石組群　No.21 南西石組全景

図版６　No.22 15号地下式土坑　No.23 ３号地下式土坑　No.24 15・17号地下式土坑　No.25 ４号・６号地下式土坑

図版７　No.26 10号地下式土坑閉塞石　No.27 ８号地下式土坑内部　No.28 10から13号地下式土坑を見る　No.29 13号地下式土坑内部　No.30 ６号地下式土坑工具痕

図版８　No.31 ２号人骨　No.32 ２号土坑　No.33 74号土坑　No.34 106号土坑　No.35 ４号土坑墓

図版９　No.36 １号人骨　No.37 ３号人骨上部　No.38 ３号人骨

図版10　No.39 ２号柵列　No.40 ２号溝　No.41 ２号溝南部分

図版11　No.42 試掘調査で確認された堀（西側）　No.43 試掘調査で確認された堀（東側）　No.44 内堀と土橋

図版12　No.45 茶臼（上臼裏面）　No.46 茶臼全体　No.47 茶臼下臼　No.48 挽き臼（上臼裏面）　No.49 挽き臼（上臼）　No.50 挽き臼（下臼）

図版13　No.51 内耳土器（内耳部分）　No.52 内耳土器　No.53 内耳土器出土状況　No.54 挽き臼（上臼裏面）　No.55 ひで鉢

図版14　No.56 陶磁器（見込部分）　No.57 陶磁器（底部）　No.58 陶磁器（見込部分）　No.59 縄文土器・土師質土器　No.60 土師

図版15　No.61左 灰坑碗・右 志野絵皿　No.62 灰釉丸皿　No.63左 灰釉丸皿・中央 灰釉段皿・右　鉄釉坏　No.64 同裏面

図版16　No.65 鉄釉水滴　No.66 同上　No.67鉄砲玉　No.68 水晶数珠玉

図版17　No.69 鏡　No.70 小柄

図版18　No.71 小札　No.72 毛抜き

図版19　No.73 刀子　No.74 火打ち金　No.75刀装具　No.76 煙管

図版20　No.77 鉄鈴　No.78 銅製管　No.79 その他の金属製品

第１章　調査に至る経緯

1　調査に至る経緯

金生遺跡は八ヶ岳南麓の標高770mに位置する縄文時代前期から晩期・平安時代・中世の遺跡である。昭和54年10月、翌年の圃場整備事業が行われる谷戸下工区の中に、微高地が含まれていることが明らかになった。同年11月から12月にかけて、この地区の試掘調査を実施したところ、縄文時代の遺構が約２ha、平安時代の集落址及び中世遺構が４haにわたって確認された。中世遺構が確認された場所の西には、隣接して深草館と呼ばれる長坂町指定史跡がある。このことから、中世遺構の重要性は高いものと判断され、保存に向けての協議が昭和55年１月以降繰り返された。その結果、中世遺構部分については確認調査を行い北側一部分を除いて遺構に影響のでない厚さに盛土した上で工事を行う。そのため北側の縄文遺構部分については全面調査の上切土し、この土を保存部分に運ぶこととなった。この協議結果に基づいて昭和55年５月より発掘調査に着手した。

昭和55年４月19日	山梨県知事工事計画書を文化庁長官宛に提出、
〃	山梨県教育長金生遺跡発掘を文化庁長官に通知

2　調査組織及び経過

調査は山梨県教育委員会が主体となり、調査担当者、調査員、調査補助員、作業員による発掘調査を実施した。なお、Ａ区では多量の石が検出されたため、山梨県文化財保護審議会委員の西宮克彦先生に鑑定を依頼した。

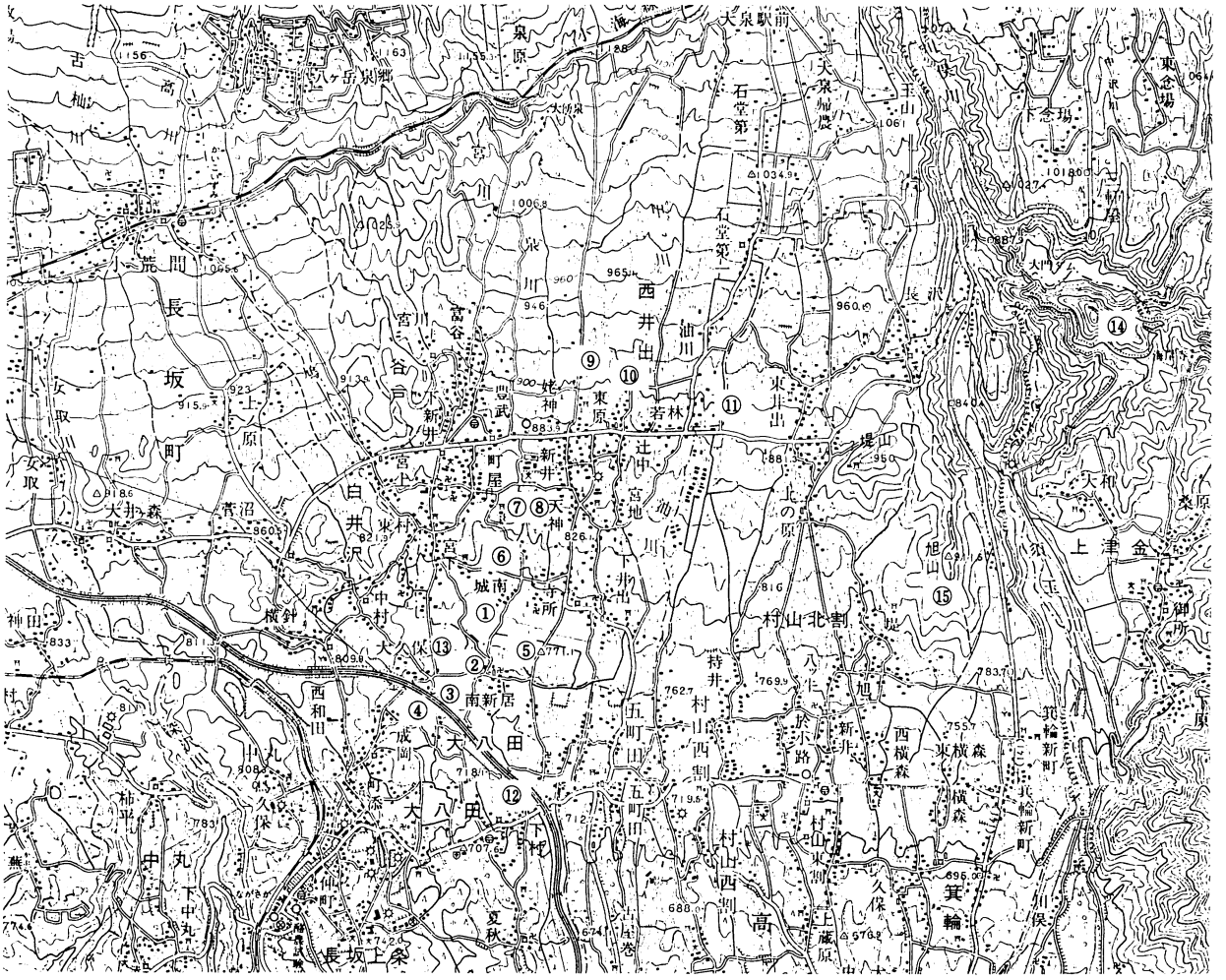
現場での調査は５月から11月末まで行い、途中７月から10月は中断して、Ａ区の調査をおこなった。Ｂ区と呼称した調査区の遺構群は、南を第一建物群・東を第二建物群・中央を第三建物群・西側を第四建物群とした。第一建物群は５月から６月、第二建物群は６月から７月、第三建物群は７月に、第四建物群は１１月に調査した。遺物の整理作業は山梨県埋蔵文化財センターにおいて、昭和61年度に報告書の準備と並行して行い、報告書の刊行は昭和62年度事業として行った。

調査担当者	新 津　健（山梨県教育庁文化課文化財主事）
	八巻与志夫（　　〃　　）
調　査　員	山下 孝司・小林義典・岩山真理子・牛沢百合子・松田丞司　Rolf Fux
調査補助員	畑　大介・小栗信一郎・伊藤正幸・白井満・箕輪伸・加藤光子・谷美雪・日向千恵・星野徳一・漢那早見・中山直治・土屋文子・田中和彦・清水伊万里・新井麻美・岡田典子・代永美代子・宮崎知典・酒井哲嗣・小野寺裕子・流石三夫・吉田哲志・嶌本弥生
作　業　員	平井仁志・藤原芳郎・浅川晃暉・浅川英三・進藤久・浅川洋子・浅川美代・中島ねのえ・浅川もとじ・山口淑江・浅川つた子・浅川満江・浅川けさ子・三井春子・浅川とくえ・浅川日出子・浅川照子・細田茂登枝・細田みぎわ・浅川輝江・浅川久代・浅川宏・大柴とし江・田中真理江・川名隆宏・石原泰一・細田絹代・細田和哉・小池ともえ・藤森房子・浅川喜子・平井一仁・宮沢康司・浅川広夫・浅川直司・谷戸武人・平井由美子・清水ちさと・三井静樹・浅川米子・清水信章・中島秀人・三井はまじ・三井澄子・浅川きよ美・由井峰雄・藤原満
整理作業員	武川ます美・渡辺かほる・斉木千恵子・山崎梅子・斎藤寿子・五味芳子・柏木まつ江・遠藤映子・弦間千鶴

3　調査の方法

昭和54年度には今年度の調査予定地域の試掘調査を行った。その結果に基づいて遺構確認面直上までは機械により掘削し、それから人力により遺構面まで掘り下げた。この作業中に出土した遺物については、表採として扱った。なお、水田の耕作土は工事終了後に利用するため、最初に機械除去し、別に盛り上げておいた。

遺構確認面には５ｍ単位のグリットを設定し、遺構確認に努めた。この作業中に出土した遺物はグリットごとに取り上げた。遺構が確認できた時点では、遺構単位に取りあげた。検出された遺構は、①住居址はセクションベルトを設定し、平面図を含めて1/20の図面を作成した。②掘立柱建物址の柱穴は、明確なプラン確認後に半截し、柱痕が確認できたものはセクション図1/20を作成した。③地下式土坑は、土坑内に流入した土砂を搬出した後に、エレベーション図を含めて1/20の図面を作成した。④その他の遺構については、上記の内容を基本とした調査を行った。

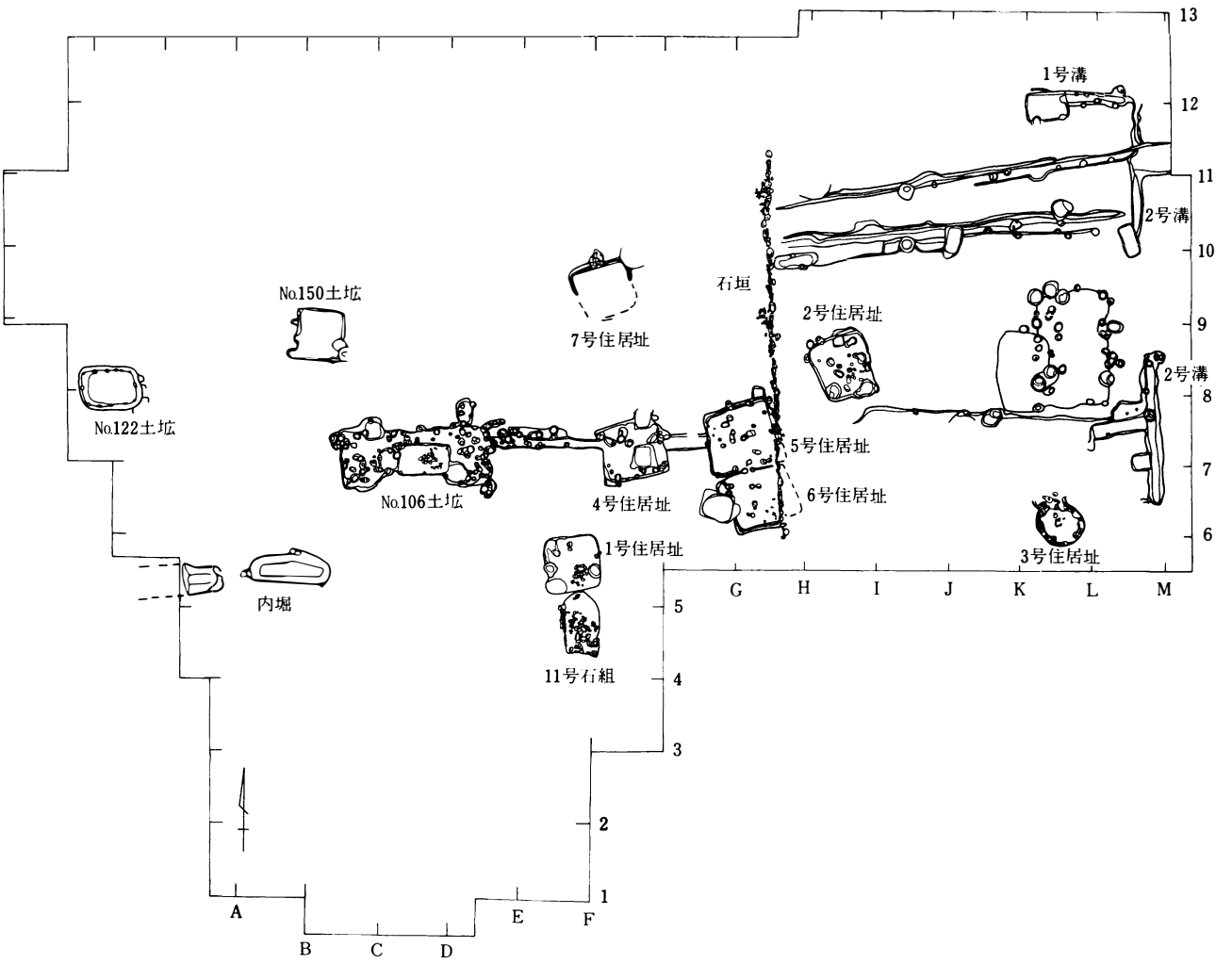


第１図　遺跡位置図

①金生遺跡　⑨姥神遺跡
②深草館　⑩東原遺跡
③小和田遺跡　⑪石堂遺跡
④小和田館　⑫柳坪遺跡
⑤寺所遺跡　⑬別当遺跡
⑥城下遺跡　⑭源太ヶ城
⑦谷戸城　⑮旭山砦
⑧天神遺跡

第２章　　遺跡の地理的歴史的環境

金生遺跡は八ケ岳南麓の標高770m前後の舌状台地上に立地する。この台地は南西に傾斜しており台地上には大泉村北新井集落があり、その南には近世初頭以降に開田された水田が広がっている。この水田の下に本遺跡がある。この台地の左右には浅い沢があり東を東衣川、西を西衣川とよんでいる。この河川の水量は比較的安定しているが、それは標高1100m付近からの湧水によるためである。この遺跡の北には甲斐源氏の基盤形成をした逸見清光の居城と伝えられる谷戸城がある。この城は、『吾妻鏡』の治承４年（1180）９月の条にみえる逸見山に比定する説もある。清光は義光の三男である父義清とともに常陸国で乱行を訴えられ、甲斐国市川庄に配流となった。この訴えられた時の状況は長秋記の大治５年12月の条に見える。配流の時期については明らかでなく、配流先についても『尊卑分脈』に「甲斐国市川庄配流」と記されていることと



第２図　住居址等位置図

『長秋記』の記載とから言えるのである。『甲斐国志』は父義光が甲斐国司をしていたことから甲斐国との関係が強く、その因縁から市川庄の庄官として甲斐国に赴いたもので、『尊卑分脈』にある配流を記載間違いとしており、この説は、近年まで説得力を有していた。しかし、茨城キリスト教大学の志田淳一学長が『勝田市史』で上述した『長秋記』を紹介しながら清光は常陸国で誕生していたことを指摘[註1]した。この指摘で、甲斐源氏の平安時代末の見方に大きな変化が生じている。今後従来の研究成果を総合的に見直す必要があろう。

本遺跡に隣接して西にはその清光の男である逸見光長の居館とも戦国期の武将堀内下総守の館とも伝えられる深草館がある。堀内下総守は天正4(1576)年に死亡していることが高野山にある『武田家日牒帳』に見えるが、この一族の動向については不明である。この館は、南台地に広がる水田地帯への灌漑用水を堀から供給している形態がよく残っており、中世城館と開発とのかかわりを具体的に示す遺構として著名[註2]である。また、この館の南にある長坂町大八田字南新井の集落の中央には、本遺跡の立地する台地先端からの湧水と堀からの用水路が立体交差する場所があり、このことから中世の開発過程をも知ることができる。

谷戸城は逸見清光の居城と伝えられているが、この城と本遺跡の関係は少なくないものと言える。1982年度にこの城の一部で試掘調査がなされ、その結果では15世紀を中心とする遺物の出土が確認されている。この城の現在確認できる遺構は、天正10(1582)年に北条氏の修築によると『甲斐国志』は記している。この時は八ヶ岳南麓一帯が北条氏の勢力下に入ったため、武田家滅亡を生きぬいた土豪層も北条氏方として徳川氏と対陣しなければならなかった。北条氏の敗北は、南麓地域の土豪層の存続を不可能なものにしたことは容易に想像できる。このような経過によって北巨摩郡下の土豪層の多くが没落したものと言えよう。堀内下総守の男主税助の時に疲弊したという『甲斐国志』の記述内容も、上述した経過で理解できるのである。この時に同じ津金衆に属していた塩川流域の武士団の多くが、徳川氏に付いて長く繁栄したのは対照的である。この八ヶ岳南麓台地に割拠していた土豪層の伝承は、このような経過によって消滅していったこととも言えよう。

本遺跡の南西に小和田館がある。この館についての地域伝承や『甲斐国志』などの地誌にも記述はなく、全く知られていなかった館であった。圃場整備事業に先立つ遺跡分布調査によって空堀跡が確認され、小字が「古屋敷」であることから、中世城郭が所在する可能性が高いと判断され、発掘調査が行われたのである。1983年には地下式土坑と南北に走る薬研堀、石組井戸、天目茶碗、硯[註3]などが、1984年にはこの館の東の水田が調査され、四耳壺に入った古銭が百文づつの刺になって二千枚、その他容器に入らない古銭が2箇所からそれぞれ二千枚づつ合わせて約六千枚が出土し、方形竪穴状遺構が多数検出された。この遺跡は15世紀を中心とする集落と考えられる。[註4]また、1985年にはこの集落の北側が調査され、平安時代の銅鏡が出土している。これらの遺跡と金生遺跡（深草館）との関係は不明である。[註5]本遺跡の西には別当山と呼ばれる丘がある。この丘の上には十三塚があり、圃場整備事業に伴う埋土用の採土場となったため長坂町教育委員会で、1986～7年度に調査している。この調査によって確認された10基の塚の内、1基からは壮年男性1体分の人骨が出土した。また陶磁器とともに五輪塔の水輪、空風輪、板碑3枚が出土したが、この塚の時期を明確にするものではない。[註6]またこの地域には、武田氏が戦国時代に信濃攻略のために整備したと伝えられる棒道が走っている。この棒道は上・中・下の3本があったと『甲斐国志』に記されている。本遺跡の南から北西に伸びている須玉町若神子から高根町五町田を経て長坂町大井ヶ森へ通づる幅2m足らずの農道がこの棒道のひとつである「中の棒道」であったと伝えられている。[註7]

深草館の東には東衣川を挟んで東に方形の区画がある。この区画は北を幅10mほどの堀で切り、川沿いには土塁を築いている。やはり中世土豪屋敷の一部と見るべきであろう。また、この遺構の東南300mにも北側と西側に土塁をもった屋敷がある。この屋敷は前者と同様に伝承はないが、やはり中世遺構として間違いないものと考える。[註8]このような状況から、この地域は中世後半には八ヶ岳南麓の一大集落であったとも言えよう。

東には衣川を挟んで1979年にやはり圃場整備事業に先立って調査した平安時代集落址である寺所遺跡があ

る。[註9] 西に流れる鳩川の流域は中世を通して大八田庄として栄えた地域である。南には中央道本線工事で1973年[註10]に、長坂インターチェンジの工事で1984年に調査した柳坪遺跡[註11]がある。この遺跡は縄文中期、弥生後期、平安時代の遺跡である。インターチェンジの調査では平安時代に位置付けられる土層の花粉分析を行っており、これによって当時この付近で稲作を行っていたことが明らかになった。また、北西に位置する天神遺跡は圃場整備事業に係わり1982年に調査された縄文時代前期の大集落址であるが、平安時代の竪穴住居址も多数検出している。谷戸城の南にある城下遺跡は1981年に調査され、平安時代の集落址が検出された。この遺跡では、緑釉陶器の破片が多数出土し、さらに本県では初めて石帯が検出された。このように多くの平安時代の遺跡が周辺に点在していることは、注目に値するが、この点に着目した萩原三雄氏は注目すべき論文を行っている。[註12] 平安時代の遺跡は9世紀後半から10世紀代に位置付けられるものが殆どであり、この傾向は今後とも大きな変化はないものと言えよう。この10世紀という時期をどのような視点でとらえるかが問題であるが、この時期に遺跡が八ヶ岳南麓台地上に急増した事実は、牧の衰退や気象の温暖化との関係も考慮する必要がありそうである。[註13]

甲斐源氏が平安時代末にこの地域を基盤として勢力を伸ばしていったとも言われており、その根拠には八ヶ岳南麓でも比較的安定した水が確保でき、土地も起伏が少なく、日照時間も多いという地理的条件からもこの説には説得力がある。このように、この谷戸城を中心とした中世に大八田庄と呼ばれた地域は、山梨の中世史を理解するうえでは欠くことの出来ない地域であり、今後の発掘調査の成果が期待される。

註1	『勝田市史』中世編	
註2	『日本歴史』398	1981
註3	『小和田遺跡』長坂町教育委員会	1984
註4	『小和田館跡』長坂教育委員会	1985
註5	『小和田館跡』長坂町教育委員会	1986
註6	『別当山・他』長坂町教育委員会	1987
註7	『棒　　道』山梨県教育委員会	1987
註8	『山梨県の中世城館跡』山梨県教育委員会	1986
註9	『寺所遺跡』山梨県教育委員会	1986
註10	『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』山梨県教育委員会	1975
註11	『柳坪遺跡』山梨県教育委員会	1986
註12	「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」『山梨考古学論集Ⅰ』	1986
註13	『気候が語る日本の歴史』山本武雄	1975

第3章　遺　　構

1　地下式土坑

本遺跡の地下式土坑は49基が検出された。ほとんどの遺構はローム層を掘り込んで造られているが、一部はこの土層の下にある白色粘土層に達している。遺跡内に於ける地下式土坑の分布は台地西側に集中する傾向が見られたが、1979年12月に実施した試掘調査の時には、南側でも検出している。同年には本遺跡の東にある上行寺境内・谷戸城の北・寺所集落内でもその所在を確認している。また、1976年には谷戸城の西の山林内でも調査が行われている。1983年と1984年に長坂町大八田地内での発掘調査によっても多くの地下式土坑が検出されている。このようにこの地域においては極めて濃厚に分布していることが確認されているが、用途については従来から多くの説が出されているが、大きく（1）土坑墓、（2）貯蔵穴、（3）隠匿穴、に分けることができる。しかし、（1）の土坑墓説で江崎氏の「中世地下式坑の研究」は注目される。以下では各土坑の概説を行うが、竪坑の高さは確認面から床面手前のテラスまでの数値を、横坑の幅は壁の最大幅を、奥行きも同様で、天井高は最大値をそれぞれ表している。なお、（ ）内数値は推定値である。

1号地下式土坑（第7図）

調査区の北東に位置し、主軸を南北におき、深さ2.33m，奥行き4.11m天井高0.98mを測る。竪坑の上プランは円形で径2.6mを測り、ロート状を呈している。この地下式土坑は表土剝ぎ中に重機の重さによって天井が崩落して確認されたものである。竪坑部分には40cm前後の石が竪坑を塞ぐように入れられていた。この石の間からは古銭が出土している。横坑内に流入していた土砂は、奥までは入っていなかったが入り口部分では厚さ80cm余りであった。また、竪坑にはテラス状施設が若干認められる。

2号地下式土坑（第7図）

調査区の南に位置し、隣接して北には4号、6号地下式土坑がある。竪坑部分の形態は円筒形を呈し、深さ1.38m、横坑の形態は正方形に近く奥壁は北にある。奥行き2.67m，高さ0.95mを測る。出土遺物は中世の土師質土器片と内耳土器片が多数出土した。また、竪坑にはテラス状施設がある。

3号地下式土坑（第10図）

2号地下式土坑の南西に位置し、本遺跡では最小のものである。深さ0.95m、奥行き1.45m，高さ0.70mを測る。天井はドーム状になっており、横坑のプランは楕円形を呈している。また、竪坑にはテラス状施設がある。

4号地下式土坑（第7図）

2号地下式土坑の北に隣接しているが、竪坑が横についていることが他の地下式土坑と異なる。竪坑は円筒形で深さ1.58m，横坑は奥行き2.4m、天井はドーム状を呈し高さ0.96mを測る方形のプランである。

5号地下式土坑（第9図）

この土坑は7号地下式土坑の東にあり、天井が崩落した状態で検出された。入り口の竪坑は東に位置し、確認面から床面までの深さは1.89mである。横坑は方形を呈し、奥行き2.16mを測る。この遺構からの出土遺物は多く、平安から中近世にわたっている。特筆すべきは兎の形をした鉄釉の水滴、鉄釉茶入れの底部などが出土している。

6号地下式土坑（第7図）

この土坑は、平面プランでは4号地下式土坑と一部重複しているが、4号より上に位置している。天井が一部を除いて崩落しており、床面中央には若干の窪みが認められる。竪坑の形態は円筒形に近いものと考えられ、深さ1.5mを測る。横坑は方形のプランを呈し、奥行き1.85m、幅1.45m、天井高（1m）を測る。

7号地下式土坑（第7図）

この土坑は5号地下式土坑の西に位置し、天井は既に崩落している。竪坑は、北西にあり円筒形を呈していたものと考えられるが、確認はできない。竪坑の深さは1.05m、横坑の奥行きは竪坑部分を含めて2mを測る。横坑のプランはややくびれた方形である。

8号地下式土坑（第9図）

この土坑は、1号土坑の南に位置し、竪坑は円筒形を呈する。また横坑は奥行き2.56m、幅1.89m、天井高0.89mを測る直方体である。竪坑部分は深さ2.11mである。横坑内へ流内した土砂は少なく、竪坑中の土には石が入っており、竪坑の下にはテラス状施設がある。

10号（A／B）地下式土坑（第8図）

この土坑は、12号地下式土坑の西にあり、入り口部分の形態がロート状を呈した坑から左右2基の土坑に入るようになっている。上部の土坑（A）は主軸が南北に、下部の土坑（B）は主軸を東西にしている。さらに、下部土坑にはいる入り口には石臼で閉塞されていた。竪坑のプランはロート状を呈している。上部遺構は竪坑付近の天井を中心に崩落している。竪坑の形態はロート状で、上部遺構までは1.5m、下部遺構までは2.4mを測る。横坑の形態は共に直方体を呈し、上部遺構は奥行き3m、幅2.2m，天井高(1)m、下部遺構は奥行き2.9m、幅2.2m、天井高(1.1)mをそれぞれ測る。

12号（A／B）地下式土坑（第9図）

この土坑は、調査区の中央北側で1号地下式土坑の西に位置する。１０号同様に2基が1個の竪坑を共有し重複しているが、入り口部分の形態はロート状を呈し、BはAより1.9m下に造られている。またAは天井がほとんど崩落している。

A　床面より天井が狭く、断面は台形を呈し、奥壁は北にある。天井高(1)m、竪坑1.5m，横坑の奥行きは3.13m、幅2.2mを測る。　B　床面が天井よりやや狭く、奥壁は東にある。天井高は(1.1) m、竪坑はAからの深さ1.15m、横坑の奥行きは2.86m，幅2.18mを測る。

13号地下式土坑（第8図）

この地下式土坑は12号B地下式土坑と10号地下式土坑の中間にあり、10号地下式土坑と地下で続いている。横坑の奥壁は北にあり奥行き3.5m、幅1.5mを測る。中央床面から五輪塔の水輪が、奥壁付近には25cmの直方体の石が出土した。遺物は三足付き土師質土器と土師質土器の破片が出土している。また、竪坑の入り口部形態はロート状を呈し、中には石が混入していた。テラス状の施設はほとんど確認できない。また、確認面には入り口の北に隣接して深さ0.70mの円形の土坑がある。

14号地下式土坑（第11図）

この土坑は13号地下式土坑の南で17号地下式土坑の東に位置する。入り口部分の形態は若干ロート状を呈し、横坑の奥壁は北西にある。プランは方形を呈し、天井高は0.85m、奥行き2.5m、幅1.55mを測り、竪坑の深さは1.95mある。竪坑の内部には石が詰められており、壁面には足をかけるための小さな横穴が所々に見られるが、竪坑の下に見られるテラス状施設は若干認められる。

15号地下式土坑（第10図）

この土坑は17号地下式土坑の南で16号地下式土坑の北に位置する。また下部には18号地下式土坑がある。入り口部分は16号・18号と共有し、形態は若干ロート状を呈していたと推測できるが、崩落のため明らかではない。横坑の奥壁は北にあり、プランは方形を呈し天井高は（１）m，奥行き2.35m、幅2.2mを測り、竪坑の深さは1.3mある。床面は平坦で、竪坑の下に見られるテラス状施設は若干認められる。また北東壁には17号地下式土坑に入る竪坑がある。

16号地下式土坑（第10図）

この土坑は15号地下式土坑の南で22号地下式土坑の北東に位置する。入り口部分は15・18号と共有し、形態は若干ロート状を呈し、横坑のプランは東西にやや長い方形を呈し奥壁は南西にある。竪坑の深さは2.41mある。横坑の奥壁は南西にありプランは方形を呈している。天井高は0.83、奥行き2.6m、幅2.55mを測る。床面は平坦で、竪坑の下に見られるテラス状施設はほとんどない。

17号地下式土坑（第10図）

この土坑は15号地下式土坑の北で14号地下式土坑の西に位置する。入り口部分は15号地下式土坑の北東壁にあり形態は若干ロート状を呈し、奥壁は北にあり、横坑のプランは東西にやや長い方形を呈している。竪坑の深さは2.41mある。横坑の主軸は北東にありプランは方形を呈している。天井高は0.83m、奥行き2.6m、幅2.55mを測る。床面は平坦で、竪坑の下に見られるテラス状施設はほとんどない。

18号地下式土坑（第10図）

この土坑は15号地下式土坑の下部に位置し、16号地下式土坑と同じ竪坑から入る形態である。入り口部分は15号地下式土坑の南壁にあり形態は若干ロート状を呈している。奥壁は北にあり、横坑のプランは正方形に近い形態を呈している。竪坑の深さは2.41mある。天井高は0.73m、奥行き1.5m、幅1.58mを測る。床面は平坦で、竪坑の下に見られるテラス状施設はほとんどない。

19号地下式土坑（第11図）

この土坑は、５号地下式土坑と14号地下式土坑の中間に位置する小型のものである。竪坑は円筒形で、深さ2.09m、横坑は奇麗な直方体を呈して、奥行き2.06m、幅1.52m，天井高0.94mを測る。竪坑と横坑の交わる部分にはテラス状の施設はない。

22号地下式土坑（第７図）

この土坑は７号地下式土坑の北西で16号地下式土坑の南西に位置する小型の土坑である。入り口部分の形態はロート状を呈し、横坑の奥壁は西にあり、プランは方形を呈し、天井高は1.09m、奥行き1.25m、幅1.57mを測る。竪坑の深さは2.08mを測るが、テラス状の施設は認められない。竪坑の内部には石が詰められており、壁面には足をかけるためのくびれ部が１カ所ある。

23号地下式土坑（第12図）

この土坑は28号地下式土坑の北東で、26号地下式土坑の南西に位置する。入り口部分は別の土坑との切り合いによって明確ではない。奥壁は北東にあり、横坑のプランは正方形に近い形態を呈している。竪坑の深さは2.14mある。天井高は1.51m、奥行き1.7m、幅1.6mを測る。床面は平坦で、竪坑の下に見られるテラス状施設はない。

24号地下式土坑（第10図）

１０号地下式土坑の北西に隣接してある土坑群の一つで、25号・26号地下式土坑の竪坑部分が横坑と一部重複している小型の土坑である。この土坑の竪坑は横坑の北西に位置していたものと考えられるが、天井が崩落しているため明確な判断はできない。横坑の規模は、確認面からの深さは1.05m、奥行き1.63m，幅1.3mを測る。

25号地下式土坑（第10図）

10号地下式土坑の北西に位置し、24号と26号地下式土坑に挟まれたような場所にある小型の土坑である。入り口部分の形態は24・26号土坑との切り合いと天井の崩落によって明確ではないが、24号の横坑の一部を経て入ったことは明らかである。奥壁は東にあり、横坑のプランは正方形に近い形態を呈している。竪坑の深さは1.4mあるが、テラス状の施設は認められない。天井高は0.89m、奥行き1.53m、幅1.5mを測る。床面は平坦で、天井はドーム状を呈する。

26号地下式土坑（第10図）

24・25号地下式土坑と群をなす土坑で、竪坑は25号土坑の一部と重複している。横坑は奥行き2.2m、幅2.8m、天井高2.2mを測る大きな土坑である。奥壁は南西にあり、入り口の下部に見られるテラス状施設はない。この３基の土坑の時期関係は24号→25号→26号と考えられる。それは、「24号が造られ、それを意識せず25号を掘ったが、24号の横坑の空洞が出現したため、周囲を掘りこの横坑を埋めた。その後25号の存在を知らずに26号を掘ったが、25号に気付き、更に深く掘る必要が生じた。」と解釈できる。

27号地下式土坑（第11図）

調査区の北西に位置する小型の土坑である。北には28号・29号地下式土坑がある。この土坑は天井が崩落しており旧状を推測することは困難である。崩落の原因は天井上部に別の土坑及び柱穴が掘られたことによる。奥壁は南西にあり、横坑の奥行き1.24m、幅2.1mを測る。

28号地下式土坑（第13図）

この土坑は、23号と27号に挟まれた位置にあり、29号と竪坑を共有している。奥壁は北西にあり、竪坑の深さは1.6m、横坑の奥行き1.56m、幅2.4m，天井高0.9mを測る。竪坑は柱穴との重複の可能性もあるが、確認はできなかった。

29号地下式土坑（第13図）

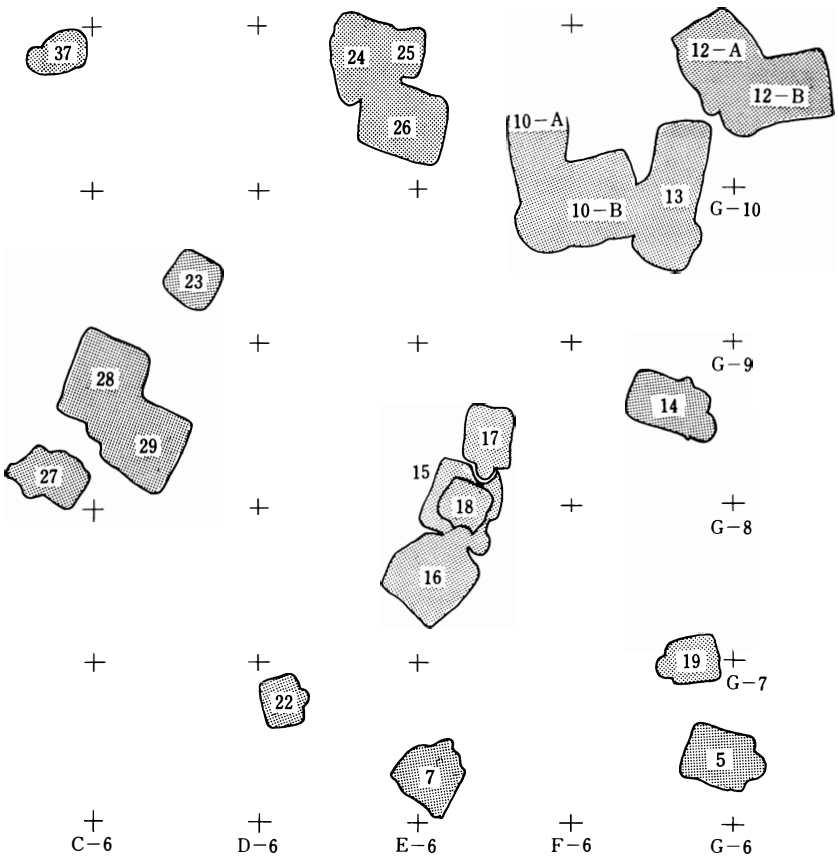
この土坑は28号土坑の南にあり、竪坑を同一にしている。竪坑の深さは2.18m、横坑の奥行きは2.35m、幅2.23m、天井高0.79mを測る。28・29号ともに規模はほぼ同じである。

30号地下式土坑（第14図）

調査区の北西部に位置し、竪穴状遺構に隣接している。西に31号土坑があり、東には27・28土坑がある。竪坑の形態は円筒形を呈するが、天井が落ちており高さは不明である。横坑の奥壁は東にあり、断面はドーム状である。奥行き1.54m、幅2.95m、天井高（0､82)mを測る。

31号地下式土坑（第12図）

この土坑は30号土坑の南西に隣接しており、竪穴状遺構と重複している。竪坑の入り口はこの遺構の床面にあり、形態は円筒形である。横坑の形態は全体的に丸みをおびており、竪坑の深さ1.51m、奥行き2.47m、



第３図　地下式土坑位置図３

幅1.9mを測る。

32号地下式土坑（第12図）

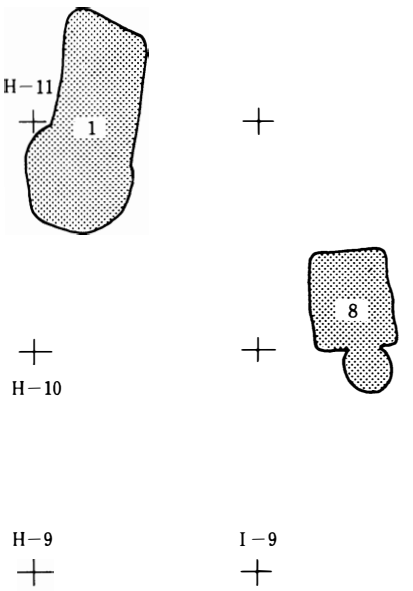
31号土坑の西にあり、この周囲には33・34・35号の各地下式土坑がある。竪坑は南東にあり、若干ロート状を呈し、テラス状施設までの深さは0.88mを測る。上部には別の方形土坑が重複しており、これに伴う石が見られる。横坑の規模は奥行き1.2m、幅1.8m、天井高1.12mを測る。

33号地下式土坑（第11図）

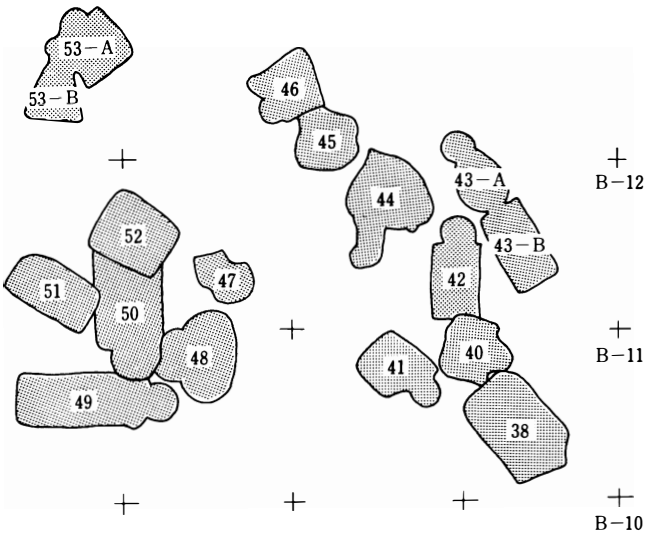
調査区の北西に位置する土坑群の一つである。竪坑は北西にあり、円筒形を呈するが、中程に平らな石が２枚蓋をしたような状態で出土した。また、奥壁は南東にあり、天井は崩落しているが、奥壁の一部に痕跡が認められるため、これから推測すると、高さ(0.93)mを測る。横坑の奥行きは1.98m、幅1.53mを測る。この土坑の上部には柱穴があるが、この土坑との関係は不明である。

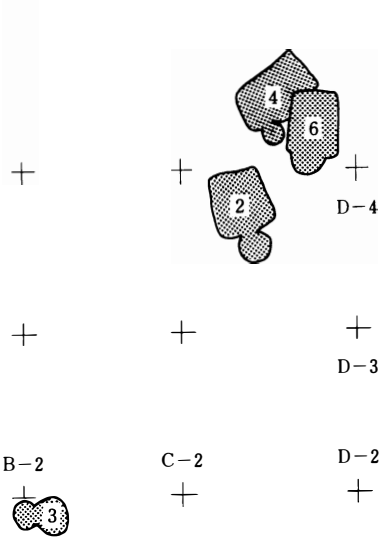
34号地下式土坑（第11図）

この土坑は、33号土坑の西に位置するが、掘り込みが浅いため天井が崩落している。竪坑は南側に位置し、

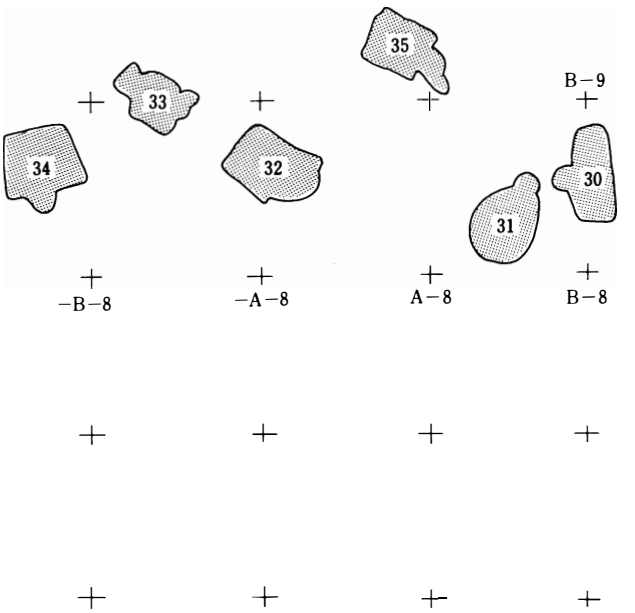


第4図　地下式土坑位置図２





第5図　地下式土坑位置図１



第6図　地下式坑位置図４

奥壁は北西にある。テラス状の施設は確認面から0.71mの浅いところにある。横坑はプランが奥壁が短い台形を呈し、天井高0.65m，奥行き1.97m、幅2.2mを測る。

35号地下式土坑（第14図）

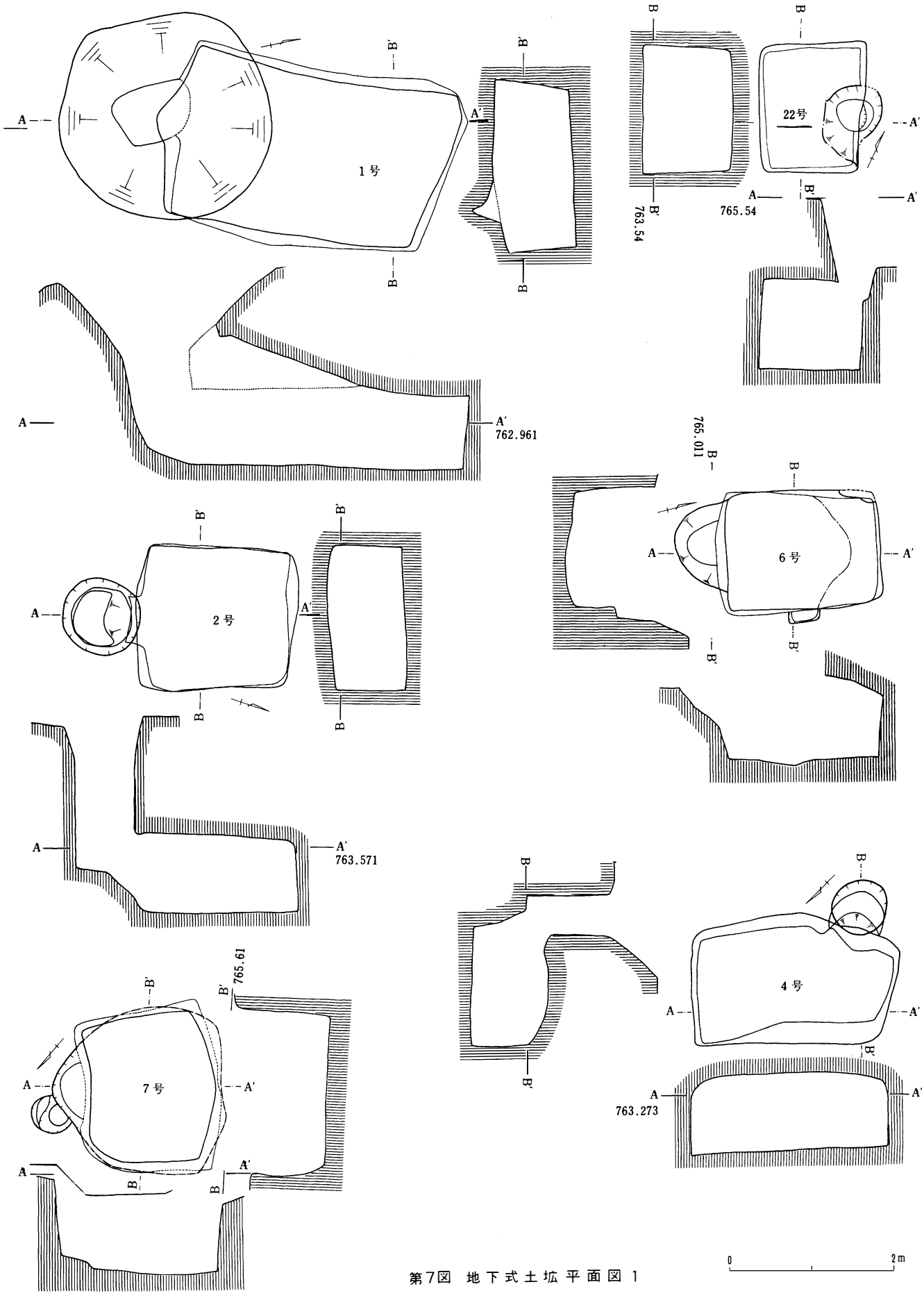
この土坑は、調査区の北西に分布する土坑群の南側にあり、32号と38号に挟まれている小型のものである。竪坑は西側にあり、若干ロート状になっている。またこの入り口部分には柱穴がある。竪坑の深さは1.75m、奥行き2.15m、幅1.65m、天井高は1.02mを測る。

37号地下式土坑（第９図）

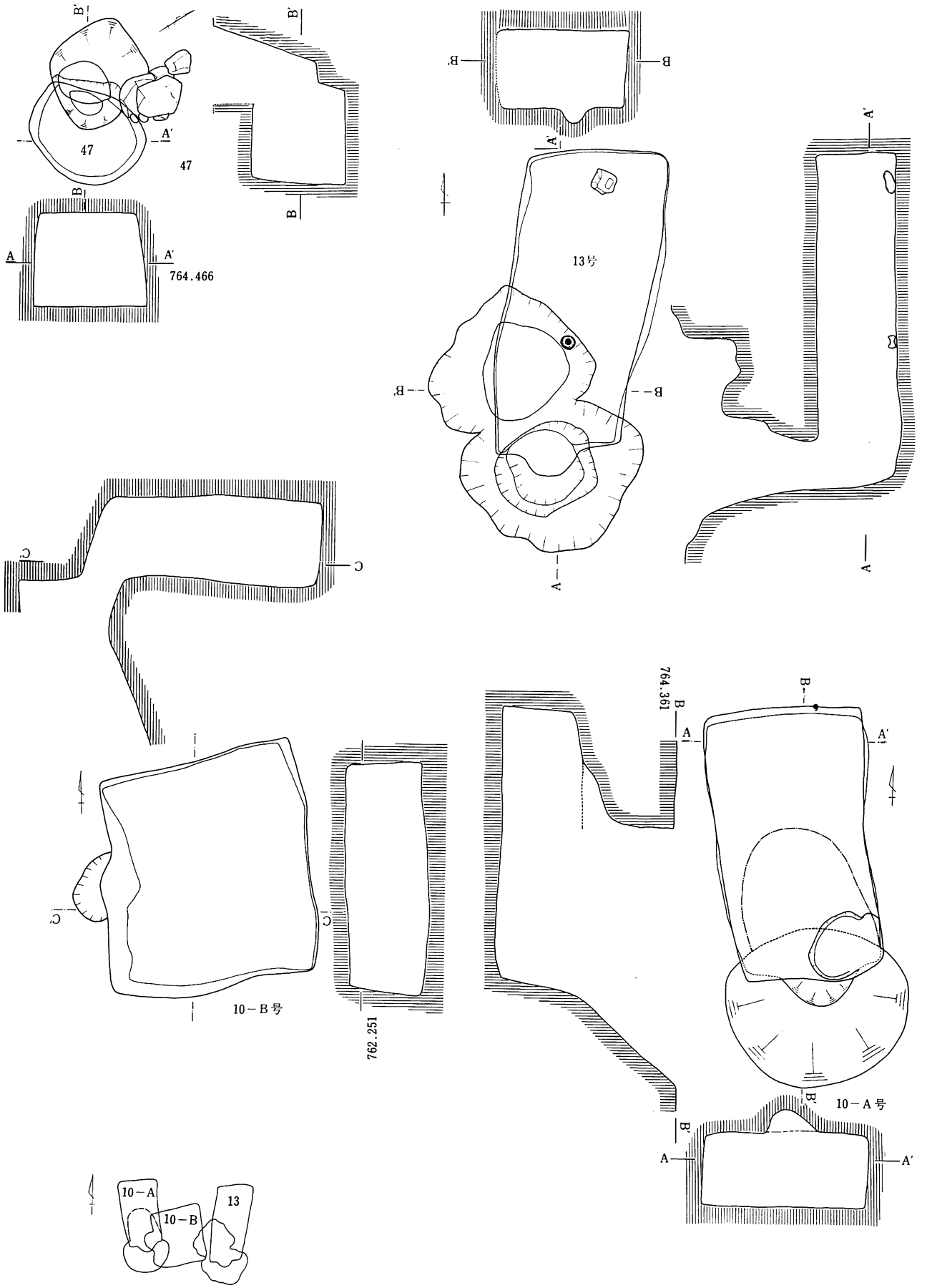
調査区の北西に分布する土坑群の中にある小型の土坑のひとつである。竪坑は西側にあり、ロート状を呈するが、横坑の掘り込みが浅いため天井は崩落している。奥壁は東側にあり、横坑の規模は床から確認面までは1.12m、奥行き1.4m、幅1.1mを測る。

38号地下式土坑（第11図）

調査区の北西に分布する土坑群の一つであるが、天井の崩落後に埋められ、その上に別の施設が造られた

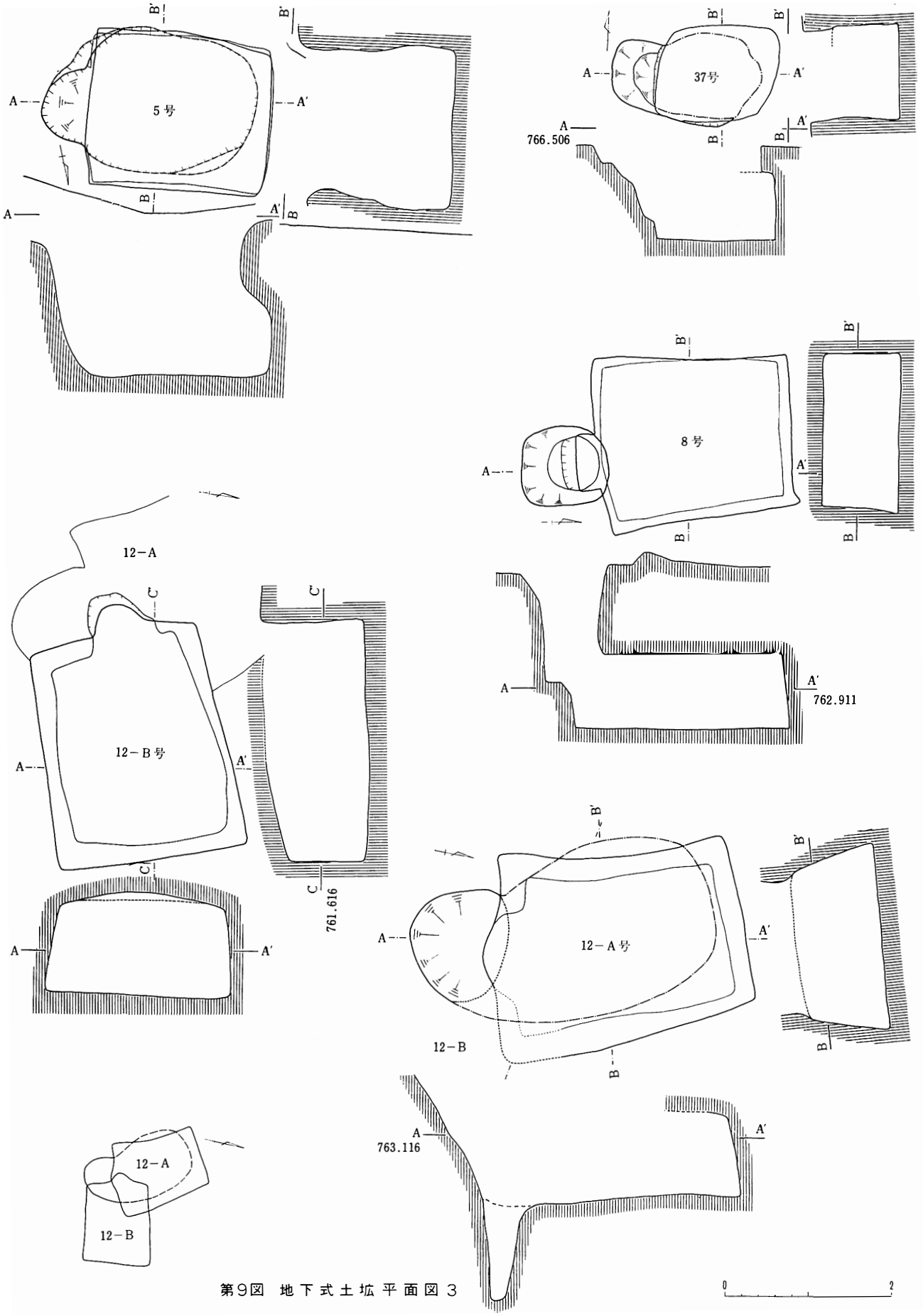


第7図 地下式土坑平面図 1

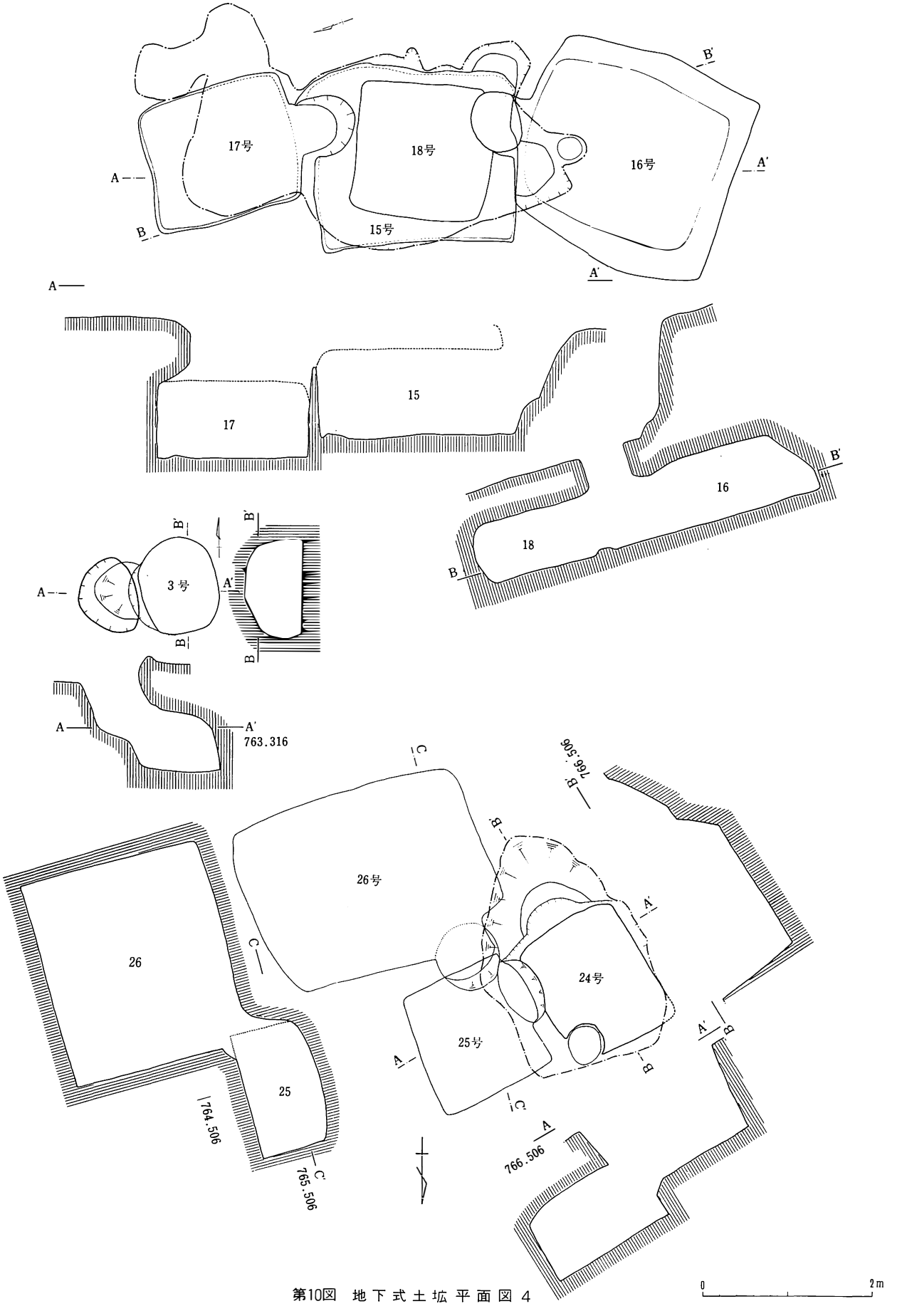


第8図　地下式土坑平面図２

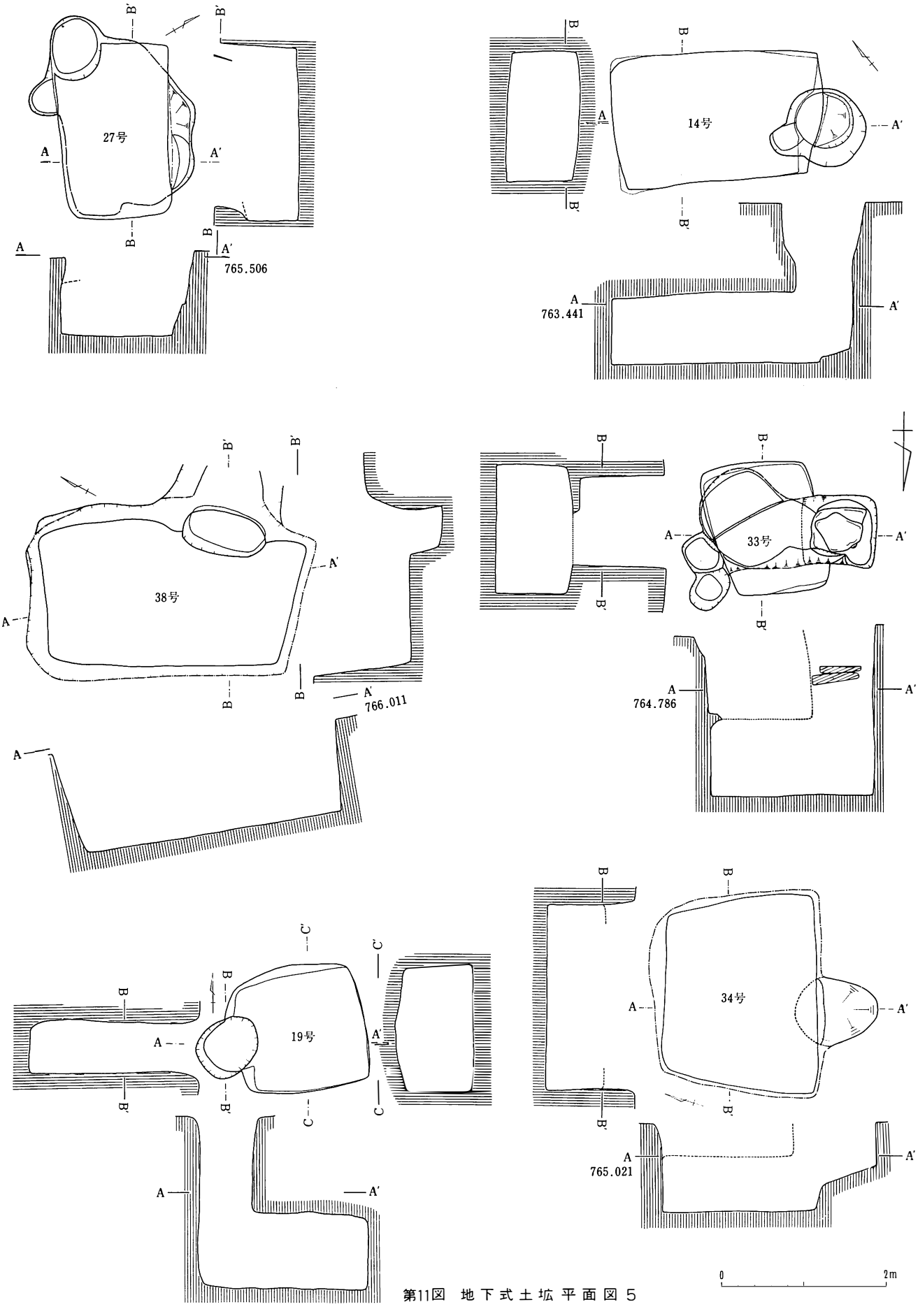
0　2m



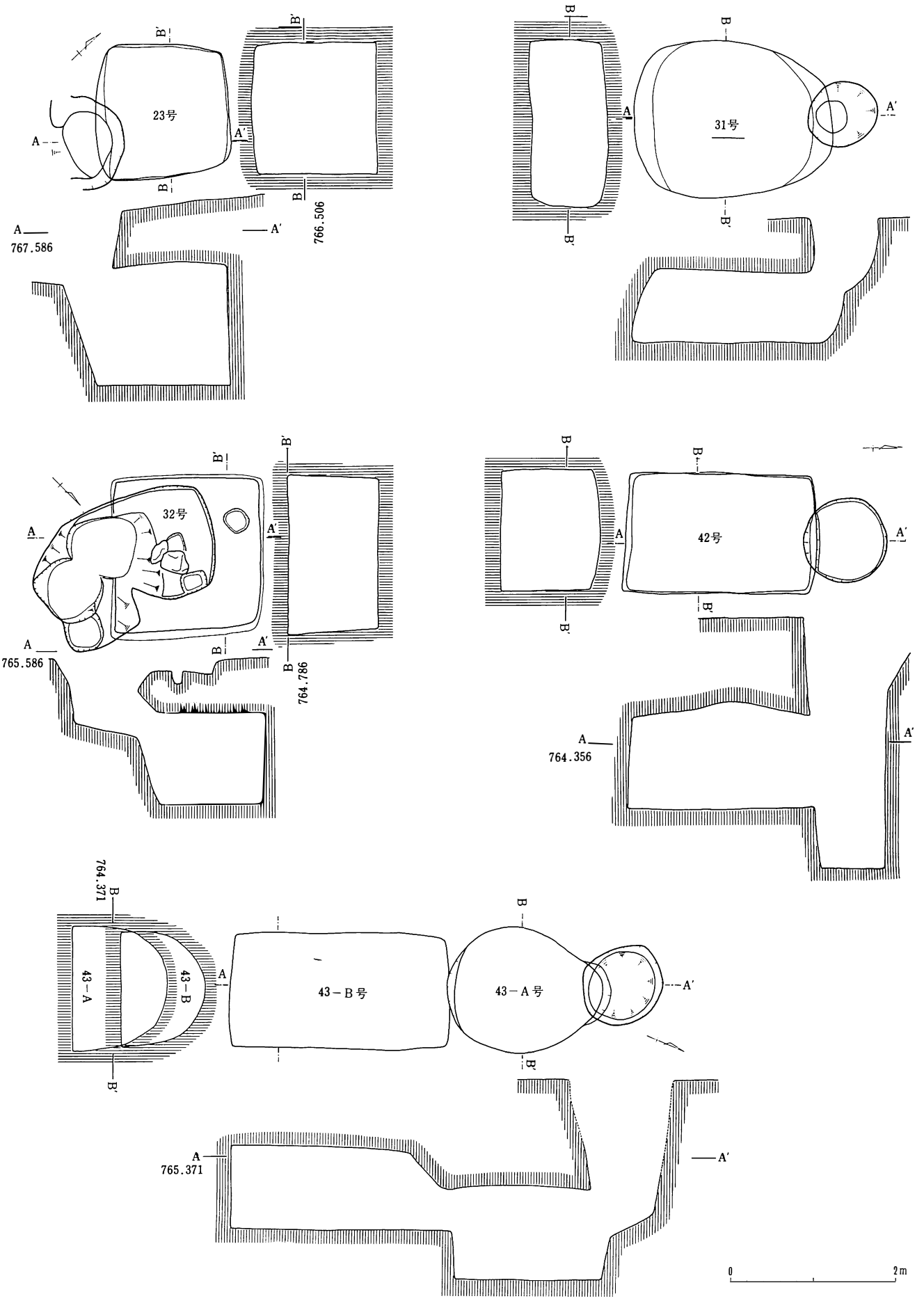
第9図　地下式土坑平面図３



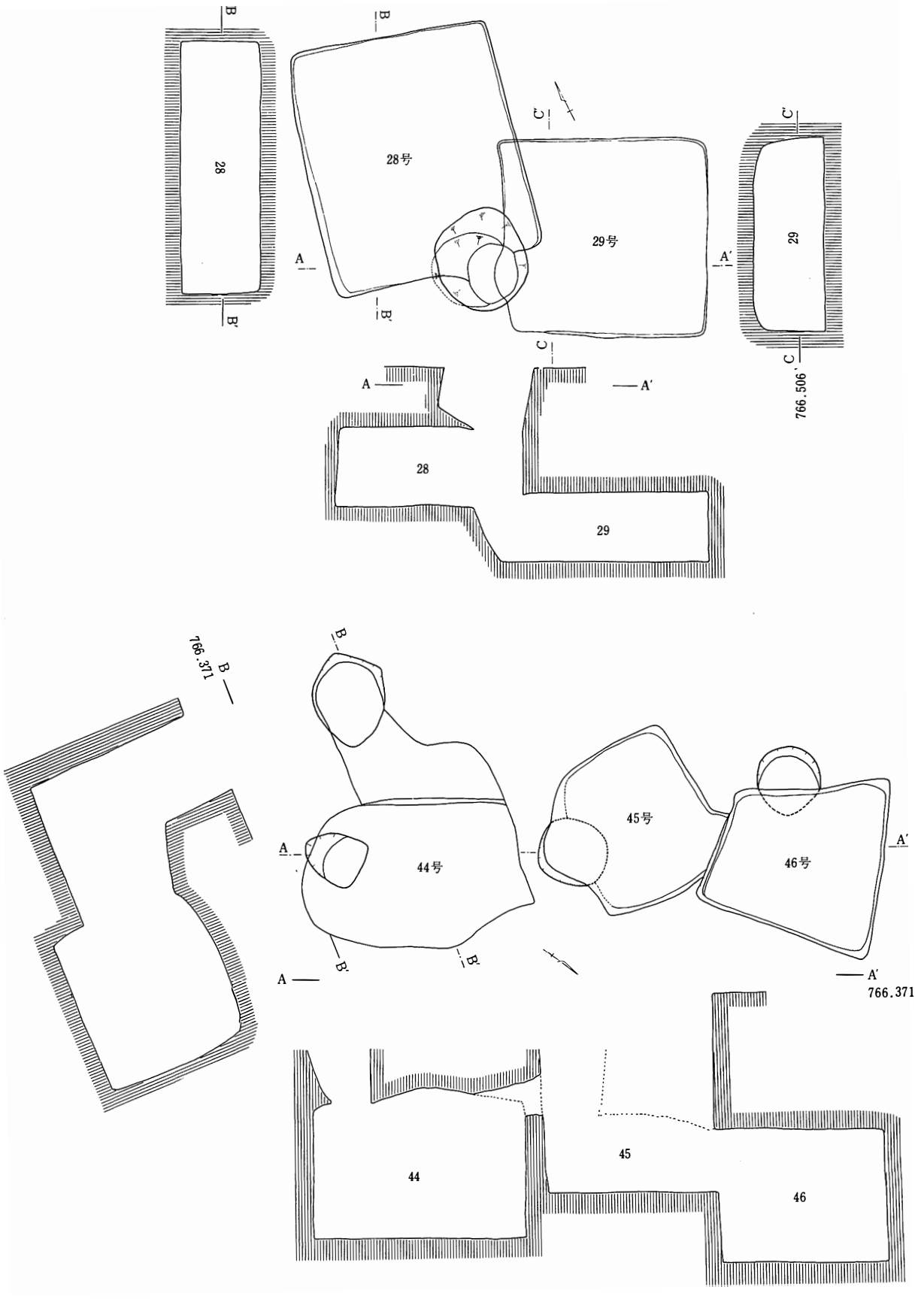
第10図　地下式土坑平面図４



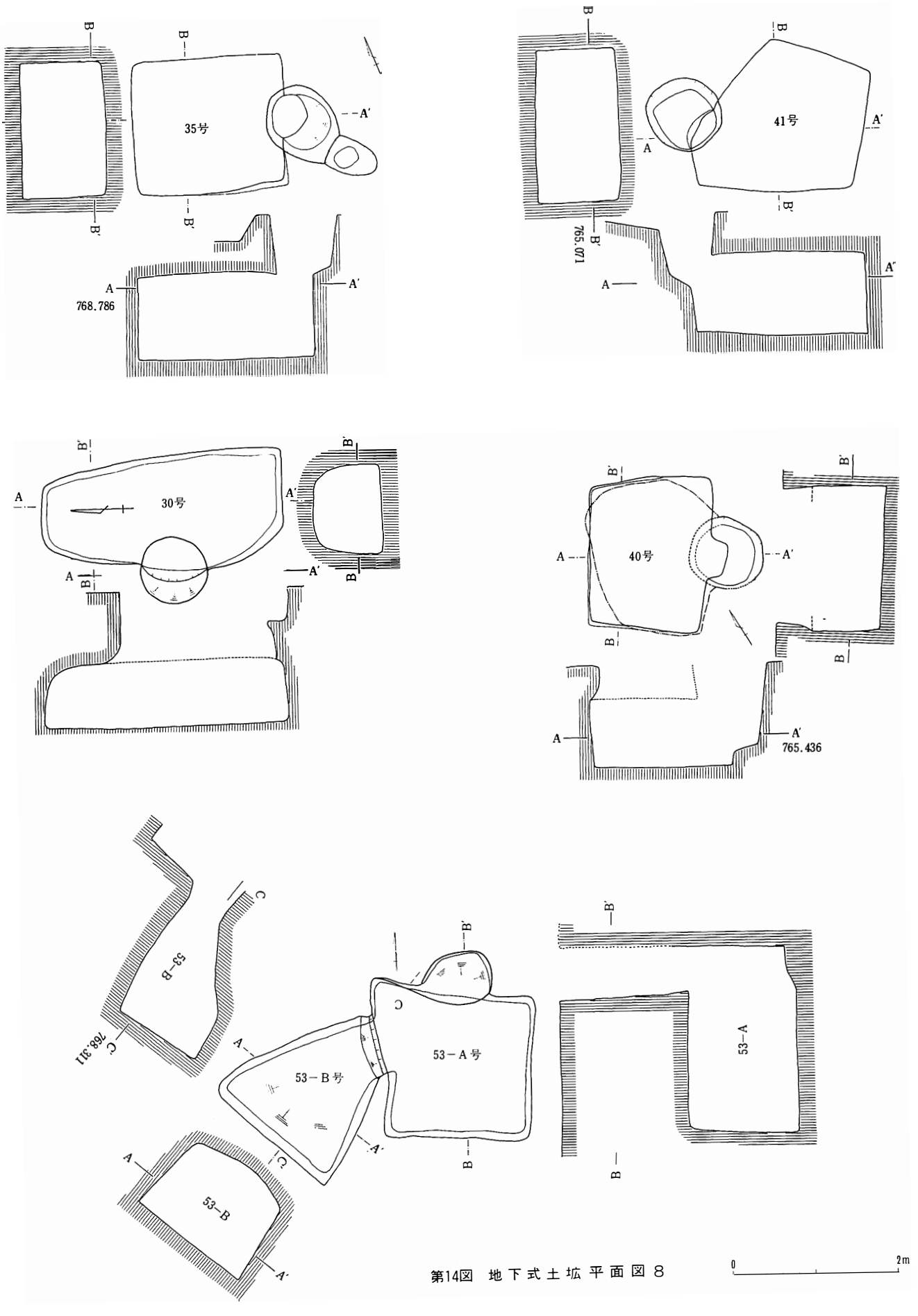
第11図　地下式土坑平面図５



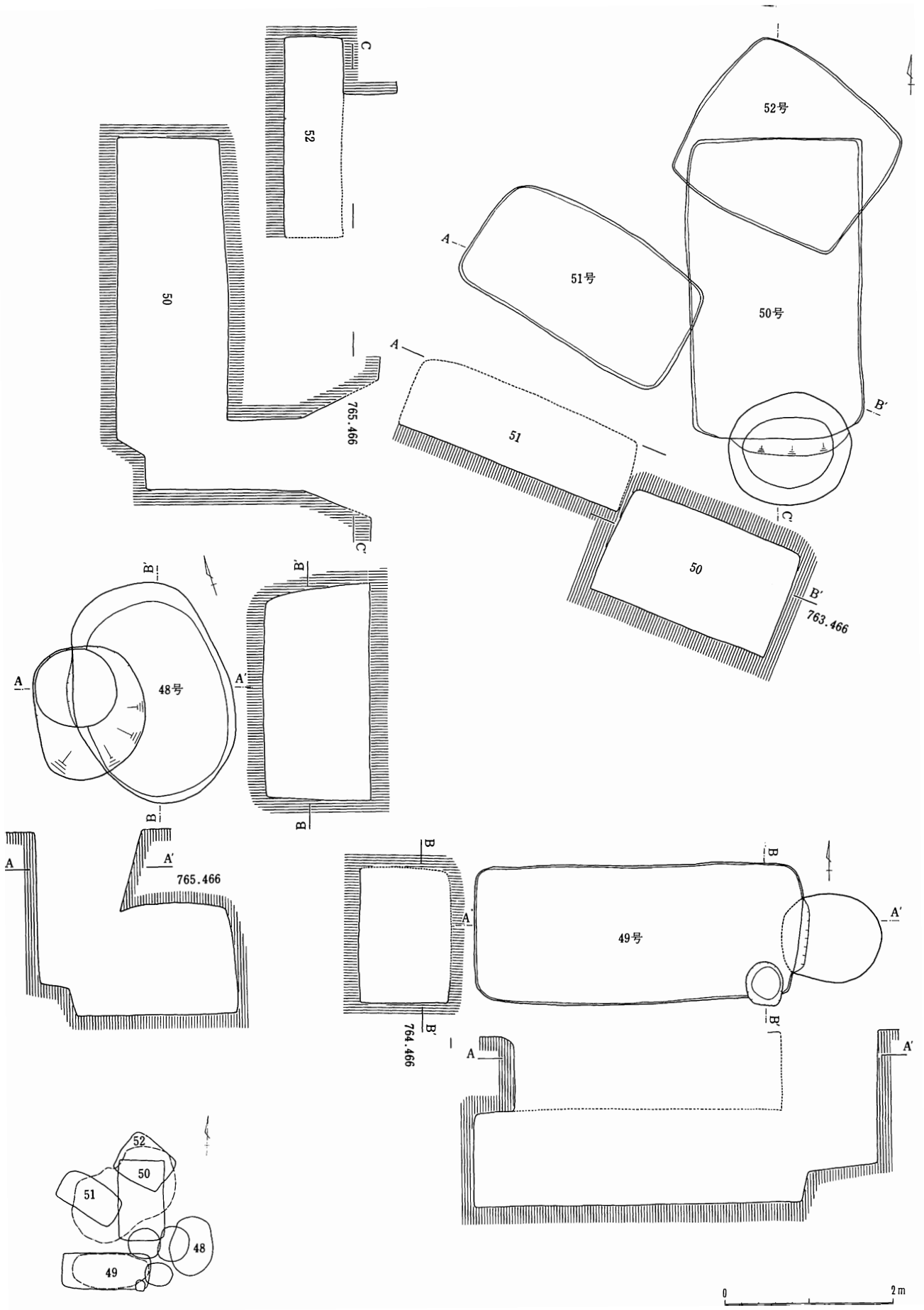
第12図　地下式土坑平面図６



第13図　地下式土坑平面図７



第14図　地下式土坑平面図８



第15図　地下式土坑位置図９

ため、長方形土坑の形態となっている。また、東壁近くの床面には楕円形の土坑が掘られている。竪坑の位置は不明であるが、東にあったものと推測できる。横坑の規模は、南北3.1m、東西1.73m、深さ1.09mを測る。

40号地下式土坑（第14図）

調査区の北西に分布する土坑群のひとつで、奥壁を北西に、竪坑を南東にもつ小型の土坑である。天井が崩落しているが竪坑の形態は円筒形を呈していたと言える。竪坑の下にはテラス状施設が見られ、深さ1mを測る。横坑は奥行き1.68m、幅1.74m天井高(0.83)mを測ることができる。

41号地下式土坑（第14図）

調査区の北西に位置する土坑群の中にある小型の土坑の一つである。竪坑は南東にあり、円筒形を呈し、深さは0.65mでテラス状施設にあたる。横坑の床面からこの施設までは0.55mの高さがある。奥壁は北西にあたる。横坑は不正方形で、奥行き2.01m、幅1.85m、天井高1.03mを測る。

42号地下式土坑（第12図）

この土坑は40号土坑の北に隣接している南北に長く、竪坑を北に、奥壁を南に配している。竪坑の形態は、円筒形を呈し、深さ3.06mを測り、テラス状施設はない。これは竪坑が横坑の床面より0.7mほど深く掘られているためである。横坑は奥行き2.25m、幅1.45m、天井高1.32mを測る。天井の形態はドーム状を呈している。

43号（A／B）地下式土坑（第12図）

この土坑は調査区の北西に位置する土坑群の中にあり、竪坑は北西にあり、形態はロート状を呈し、1.6m下がるとテラス状施設に出る。この竪坑から入ると段差のある、横坑が南北に２つ続いている。はじめの横坑のプランは卵形で天井はドーム型、奥行き1.78m、幅1.4m、天井高1.16mを測る。この奥の横坑は、0.54m上がって奥の横坑に至る。この遺構は奥行き2.71m、幅1.5m、天井高1.03mを測る。ここの天井もドーム状を呈している。

44号地下式土坑（第13図）

この地下式土坑は地下で45号・46号と連なっているが、45号を掘るときに44号の壁の一部が崩落したものと考えられる。また、この土坑は竪坑が南東と南西の２ヵ所ある。いずれの竪坑も他の土坑のそれとは形態が異なっている。南西のものは円筒形であるが幅は広く、横坑への羨道も長さ1.6mほどある。また南東の入り口は44号の天井に開けられた柱穴の様にも思える。横坑の奥行きは1.75m、幅2.38m、天井はドーム状を呈し高さ1.7mを測り、奥壁は北東にある。羨道部分は当初の横坑であった可能性もある。

45号地下式土坑（第13図）

44号地下式土坑の北西に隣接する土坑で、竪坑部分は崩落しており形態は不明である。横坑の奥行きは46号の落ち込みの肩までが1.94m、幅1.84mを測る。

46号地下式土坑（第13図）

45号地下式土坑の横坑の続きに台形のプランの横坑だけがある。天井高1.52m、奥行き1.88m、幅1.6mを測り、奥壁は北西にある。

47号地下式土坑（第８図）

44号地下式土坑の南西にある土坑で、竪坑は西に、奥壁は南東にある。竪坑の入り口部分の東には石がま

とまっているがこの土坑との関係は不明である。竪坑はロート状を呈し、深さ1.23mでテラス状施設になる。横坑は奥行き1.12m、幅1.32m、天井高1.12mを測る。

48号地下式土坑（第15図）

横坑のプランが楕円形を呈する小型の土坑である。竪坑はロート状呈し、深さ1.83mでテラスに至る。横坑は奥行き1.86m、幅2.6m、天井高1.33mを測る。

49号地下式土坑（第15図）

この土坑は天井がほとんど崩落しているが、竪坑は円筒形を呈し、テラス状施設がある。竪坑の深さは1.6m、横坑の奥行きは3.98m、幅1.6m、天井高(1.15m)を測る。

50号地下式土坑（第15図）

調査区の北西に位置する土坑は、大型のものが多いが、この土坑は最大の規模に属する。竪坑はロート状を呈しており、深さは2.82mを測り、この下にテラス状施設がある。横坑は奥行き3.58m、幅2.06m、天井高1.33mを測る。

51号地下式土坑（第15図）

この土坑は天井が崩落しているため、竪坑の位置や形態が不明である。横坑の規模は、縦2.82m、幅1.54m、天井高(0.93m）を測る。

52号地下式土坑（第15図）

50号地下式土坑の北に隣接してある土坑で、竪坑の形態や位置は不明である。横坑は、奥行き2.5m、幅２mを測る方形のプランをもつ。

53号地下式土坑（第14図）

この土坑は、最も北に位置する土坑で、二つの横坑がつながっている。竪坑のある横坑は方形を呈し、これに付属する横坑は台形を呈する。この横坑は、奥から外に向かって下り坂になっている。竪坑は深さ2.74mでテラス状施設をもち、ロート状を呈している。

2. 土坑と溝

本遺跡の土坑の多くは、方形あるいは隅丸方形のものが多いが、円形の遺跡の中央より西側に集中している傾向が認められる。方形土坑の中でも比較的大型のもの（竪穴状遺構）は、やはり同様な分布を示している。このことは、本遺跡の生活空間の中心が西側にあったことを推測させる。ここでは平面プランと深さ及び底部形態などから次のように分類した。

（1）竪穴状遺構

№4・13・43・58・69・74・81・95・96・104・106・107・122・130などがこの範疇に入るが、平面プランが方形で壁の傾斜がきつく深さは50cm以上あるような土壙をここでは竪穴状遺構としてとらえて①覆土中の遺物②柱穴の有無③主軸方向④他の施設との関連⑤大きさ⑥深さなどの諸点について概述すると、

１）122と107の確認面には酸化鉄（スケール）層が厚く認められ、移植鏝では土をはぐことが困難のような状態であった。また、122は隅丸方形と言うよりは楕円形を呈し、深さは120cmを測り底部周辺の西側に

は底部より10cm前後高いテラスがある。このテラスには小さな柱穴があり、周溝も認められこの中に柱穴が左右対称に配されている。柱穴の直径は20cm前後、深さは底部から10cm程である。更に周囲には直径30cm程の柱穴ある。この土坑の覆土は焼土と炭片多く認められた。また、出土した遺物は土師質土器や内耳土器などの以上のことからこの土坑は建物と考えられる。130号は北西側に他の施設に伴う柱穴と切り合っているが、ほぼ正方形のプランをもち、底部には30号・31号地下式土坑が築かれているが、地下式土坑の方が時期的に古いことが土層から確認できた。この土坑に伴う柱穴は、直径15cm前後、深さ40cm程度である。確認面から床面までの深さは80cm余りである。また、106号は長方形のプランをもち、底部周囲に左右対称に3個づつの柱穴をもつ比較的浅い土坑である。土坑中央部やや東には平石が投げ込まれた状態で集中して検出された。これはこの土坑が廃棄される時点での行為であると言える。

（2）土　坑　墓

人骨が出土した土坑はＥ３グリットにある28号土坑と、Ｆ10グリットにある72号土坑、主軸を南北にする方形の土坑である。

１号人骨は28号土坑から出土したものであるが、埋葬形態は屈葬で頭部は柱穴によって除去されたものと考えられる。２号人骨は72号土坑から検出されたが、歯と脚部の一部分が出土した。北枕の屈葬であった。３号人骨はＦ11グリット12号地下式土坑の上部にある方形土坑からの出土で、人頭大の石が人骨全体を覆っていた。頭部付近から古銭が３枚出土している。４号人骨は調査区西側から検出された。このような人骨を伴う土坑墓の形態から、長軸が１ｍ前後で深さ50cm程の方形土坑は墓と考えることが可能であろう。

（3）円形土坑

本遺跡で円形土坑としているものの中には、建物の柱穴であるものも若干は含まれているものと考えられるが、比較的大型のものに限ることとすると浅く直径１ｍ前後の土坑は、調査区東側に多い傾向がみられる。

（4）特殊土坑

１号土坑は調査区南端に位置する方形土坑である。この土坑からは鉄釉坏（第65図№48）と灰釉小皿（第64図№30）と古銭が33枚出土した。覆土は黒褐色土で炭の小片が若干含まれていた。

（5）内　　堀

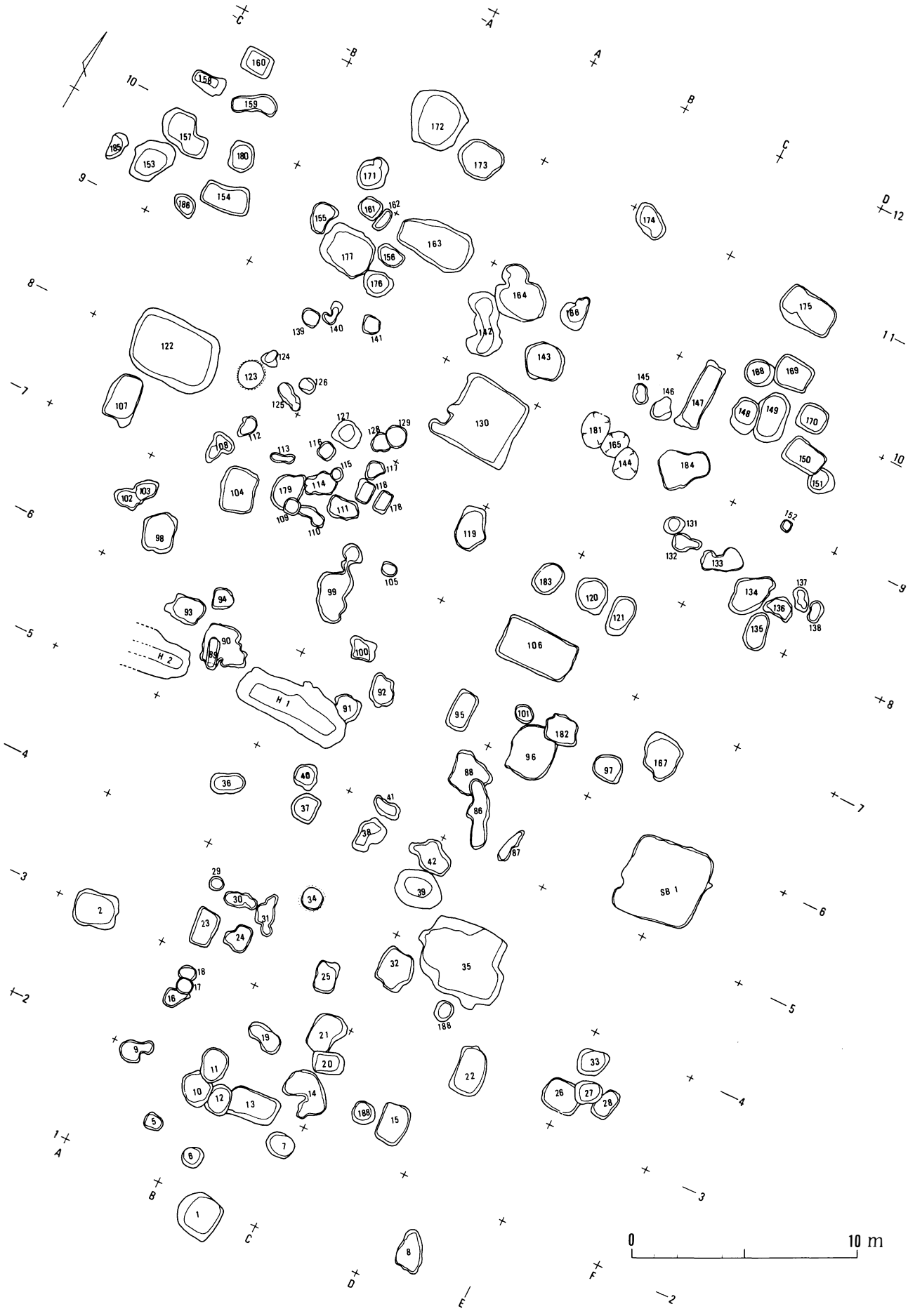
Ａ６グリットの東に幅９～11ｍ深さ50cm前後の空堀が検出された。この堀の西には同様な幅をもつ堀が西に伸びているが、その端は確認できない。この両堀の中央は、土橋状に掘り残されており、その幅は約４ｍである。

（6）石組遺構

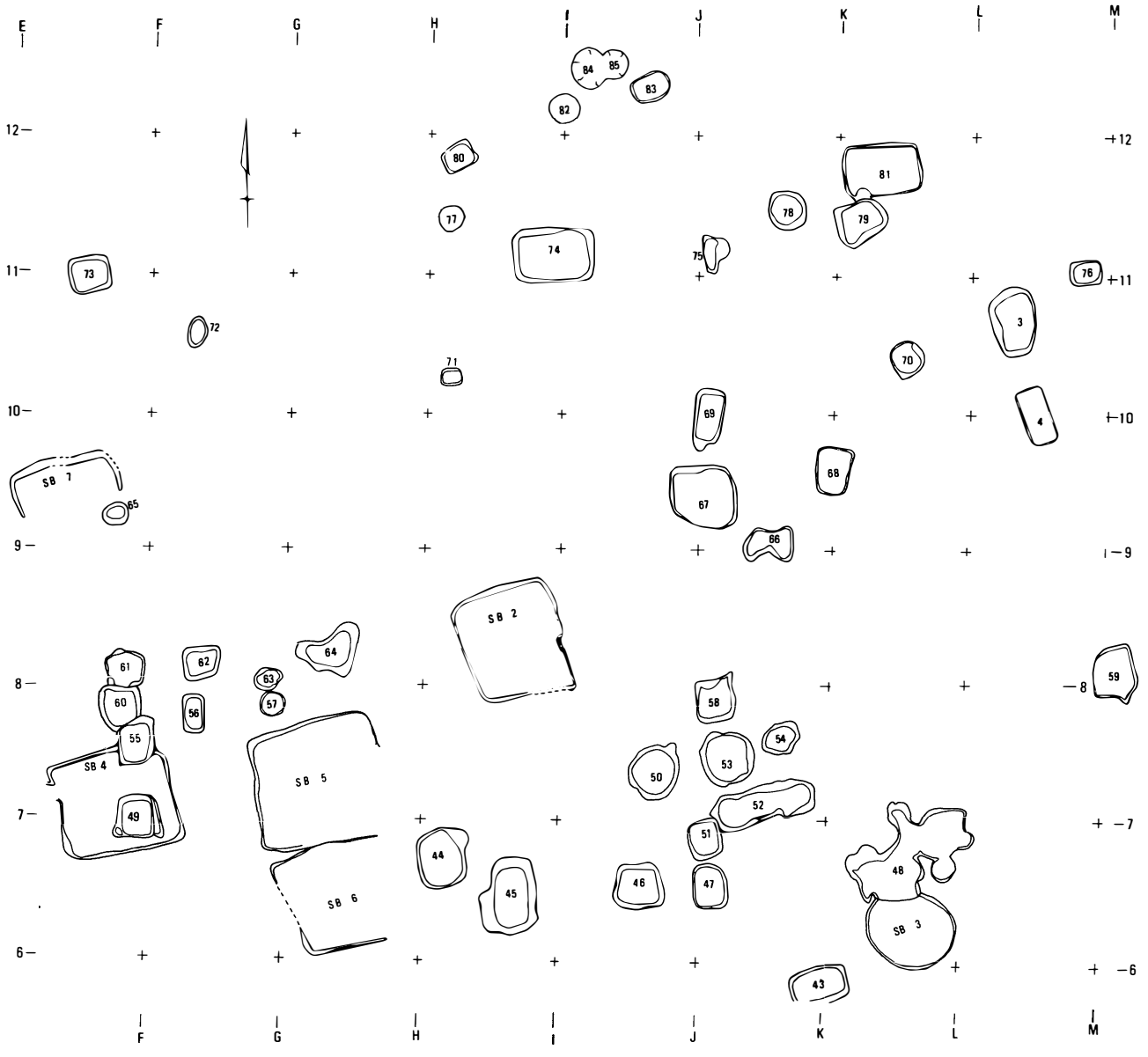
調査区の南西には水溜状の石組１基、集石状の石組６基、竈状の石組が４基が確認されたが、その正確には不明である。11号石組は主軸を南北にする方形で、底部は浅い樋状の断面を有し、西側側面には１段の石積がみられた。これらの石組はグリットの南北線では５、東西線ではＡのラインに直線的に集中している傾向がある。

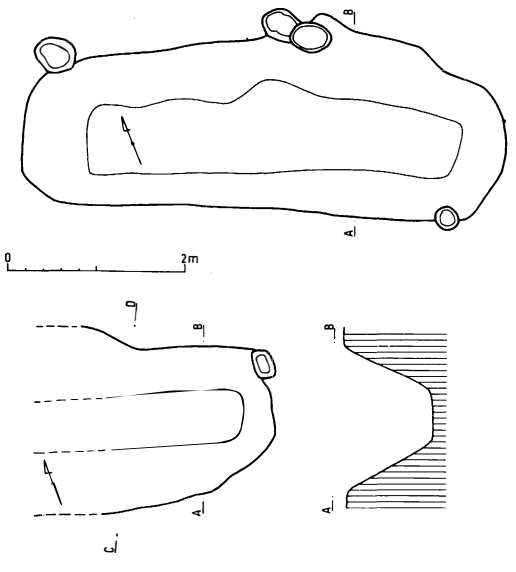
（7）溝・溝状遺構

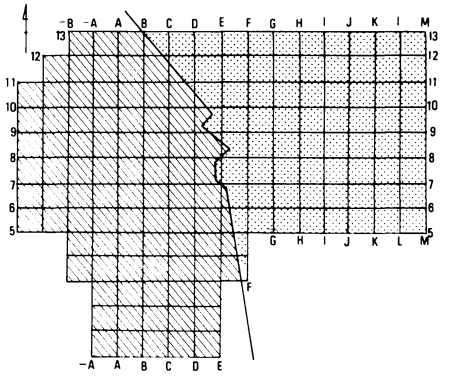
本遺跡で確認された溝あるいは溝状遺構は、４本である。１号溝は調査区北東部分を東西に走る溝で、幅0.9～１ｍ深さ0.2ｍ程度を測り、東端で２号溝につながる。２号溝は調査区東端を南北に走り、幅１ｍ前後、深さ0.3ｍ程を測り、途中が削平されている。覆土中には砂利が厚さ数cm認められ、明らかに水が流れていた。３号溝は、調査区中央に南北に走る石垣に隣接して南に流れるものであるが、溝の遺構は明確には確認

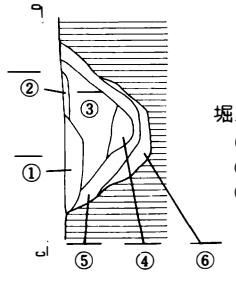


第16図　土 坑 全 体 図 1





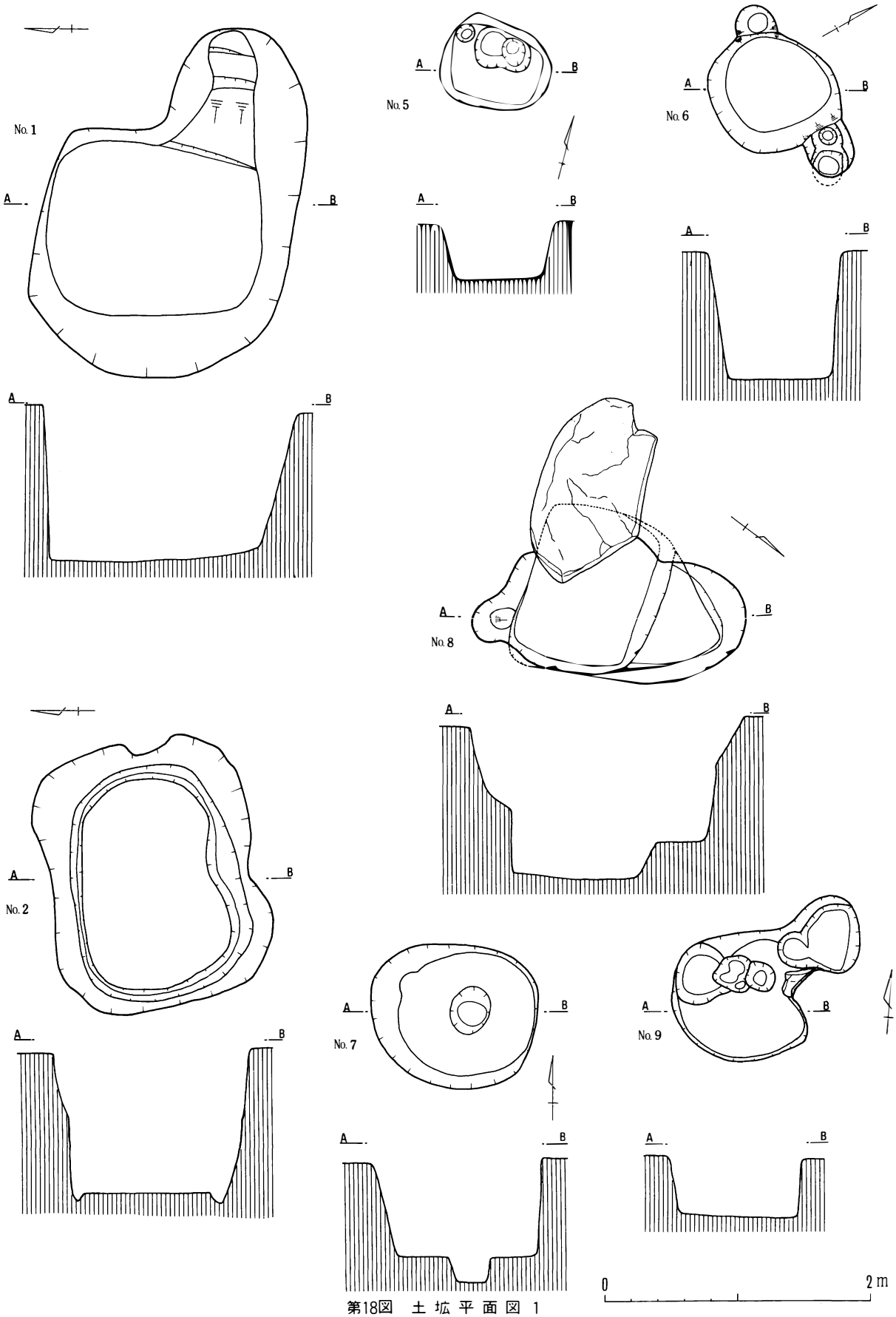




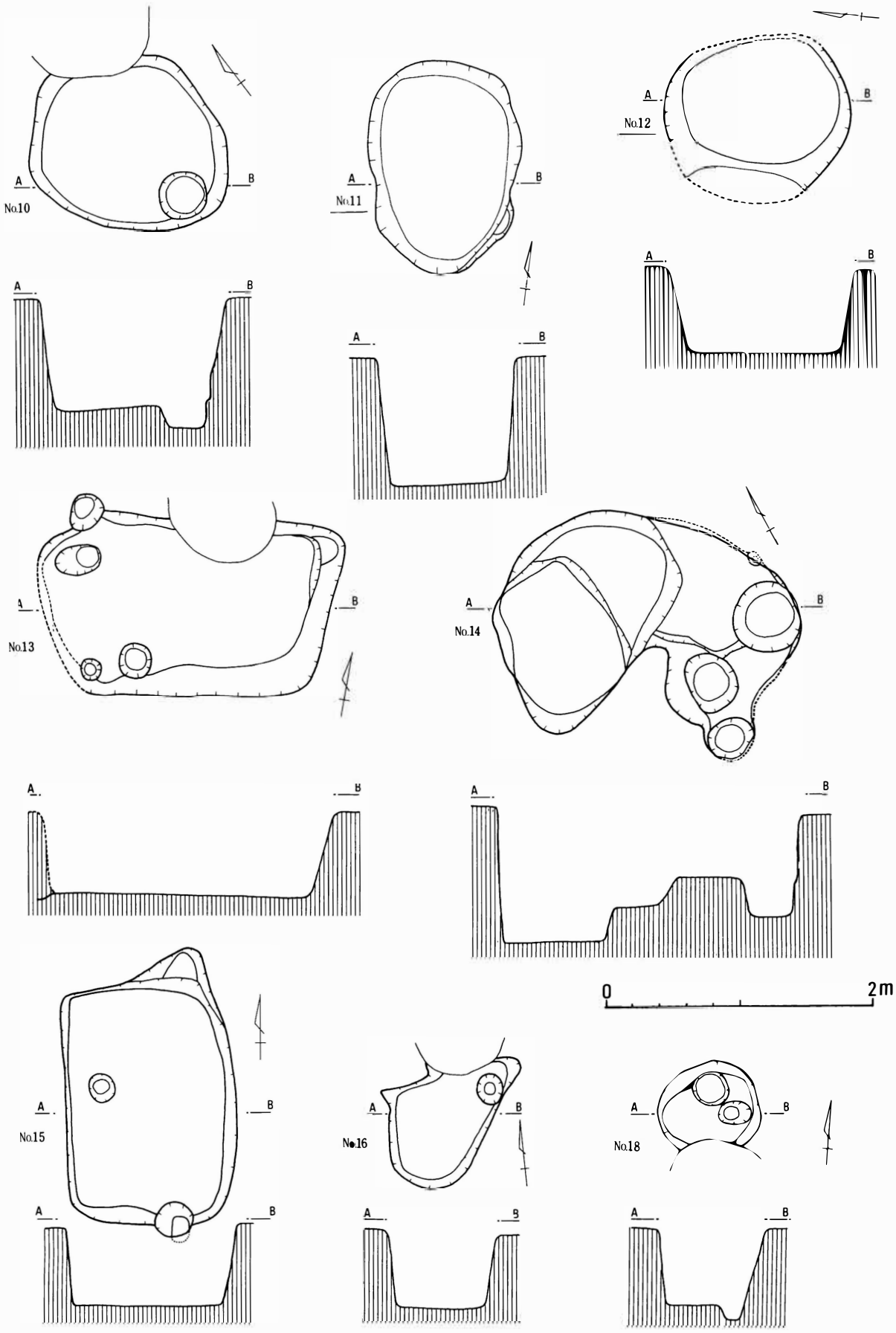
堀土層説明

① 黄褐色土層
② 黒褐色土層
③ 粘性のある黒色土層
④ 粘性のある黒褐色土層
⑤ ローム粒を多量に含んだ褐色土層
⑥ 粘性の弱い黄褐色土層

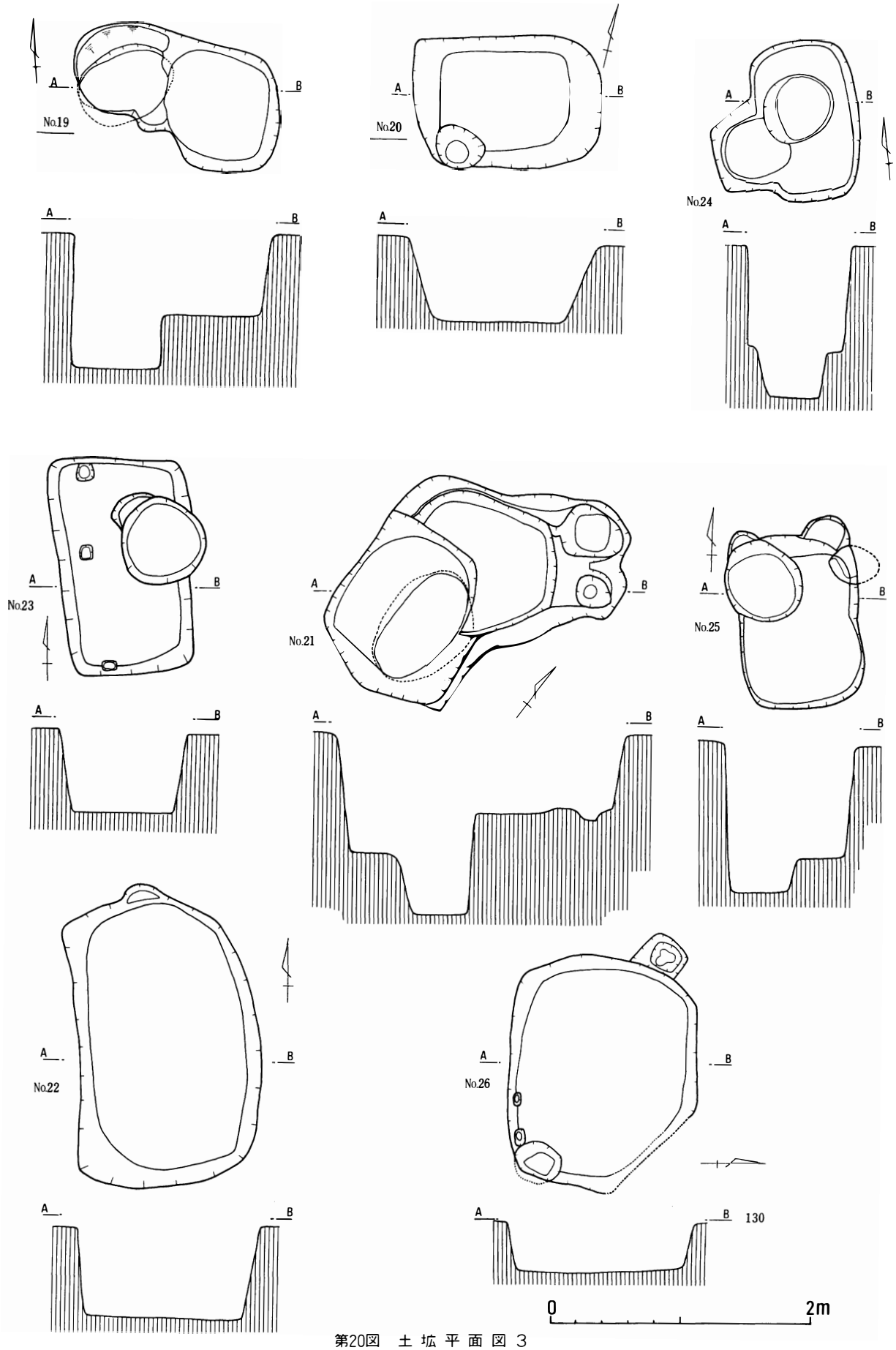
第17図　土 坑 全 体 図 2



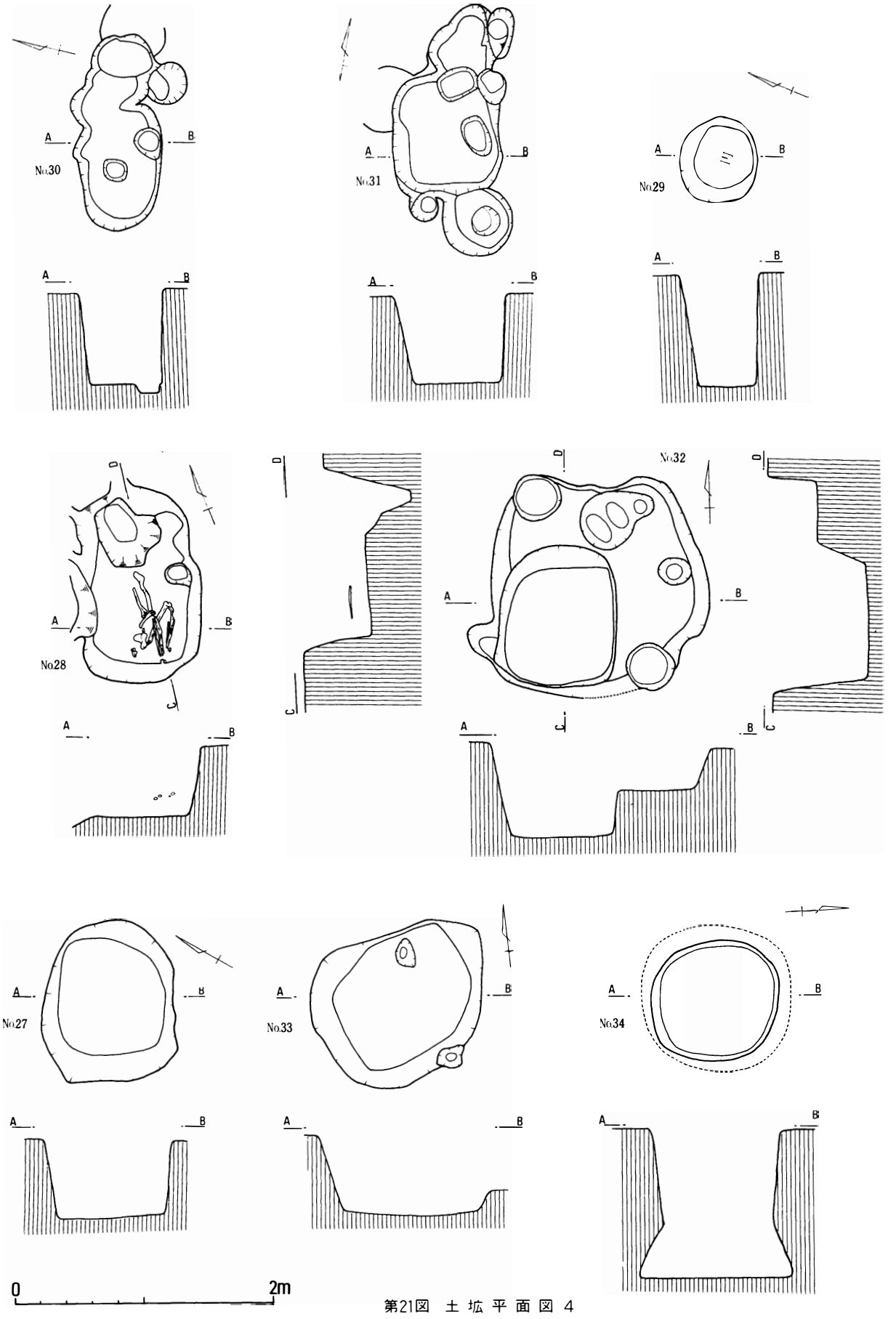
第18図　土 坑 平 面 図 1



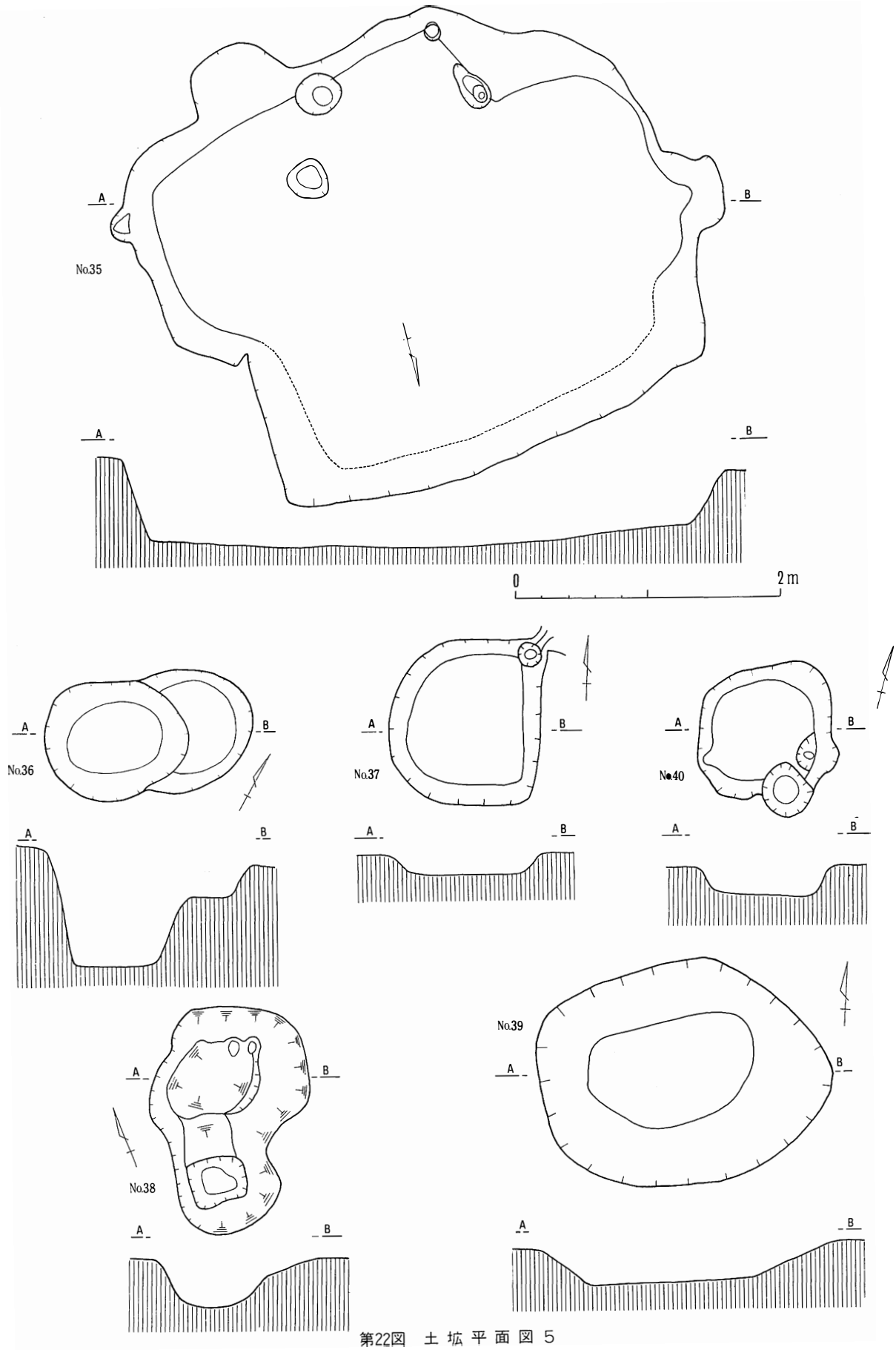
第19図　土 坑 平 面 図 2



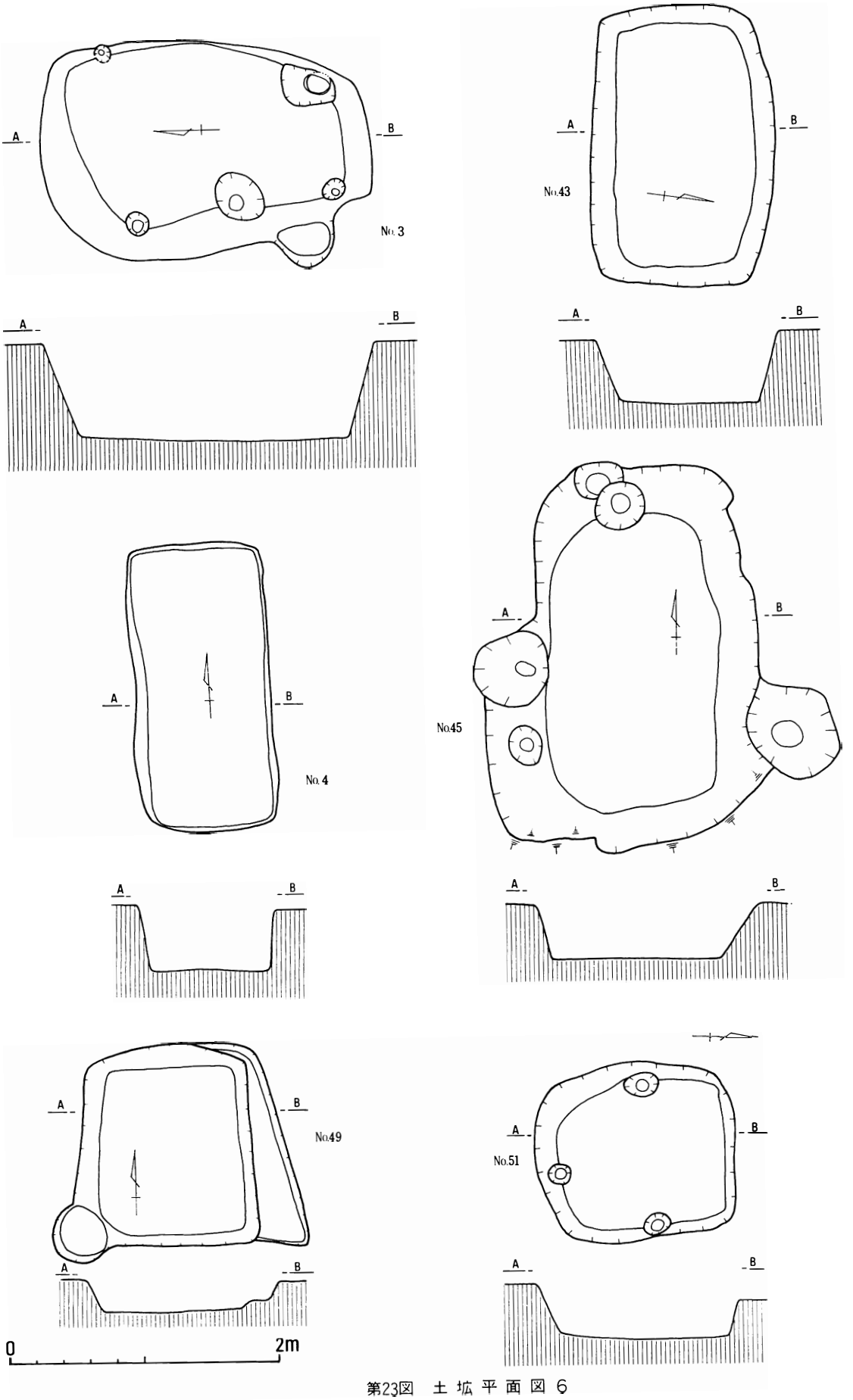
第20図　土 坑 平 面 図 3



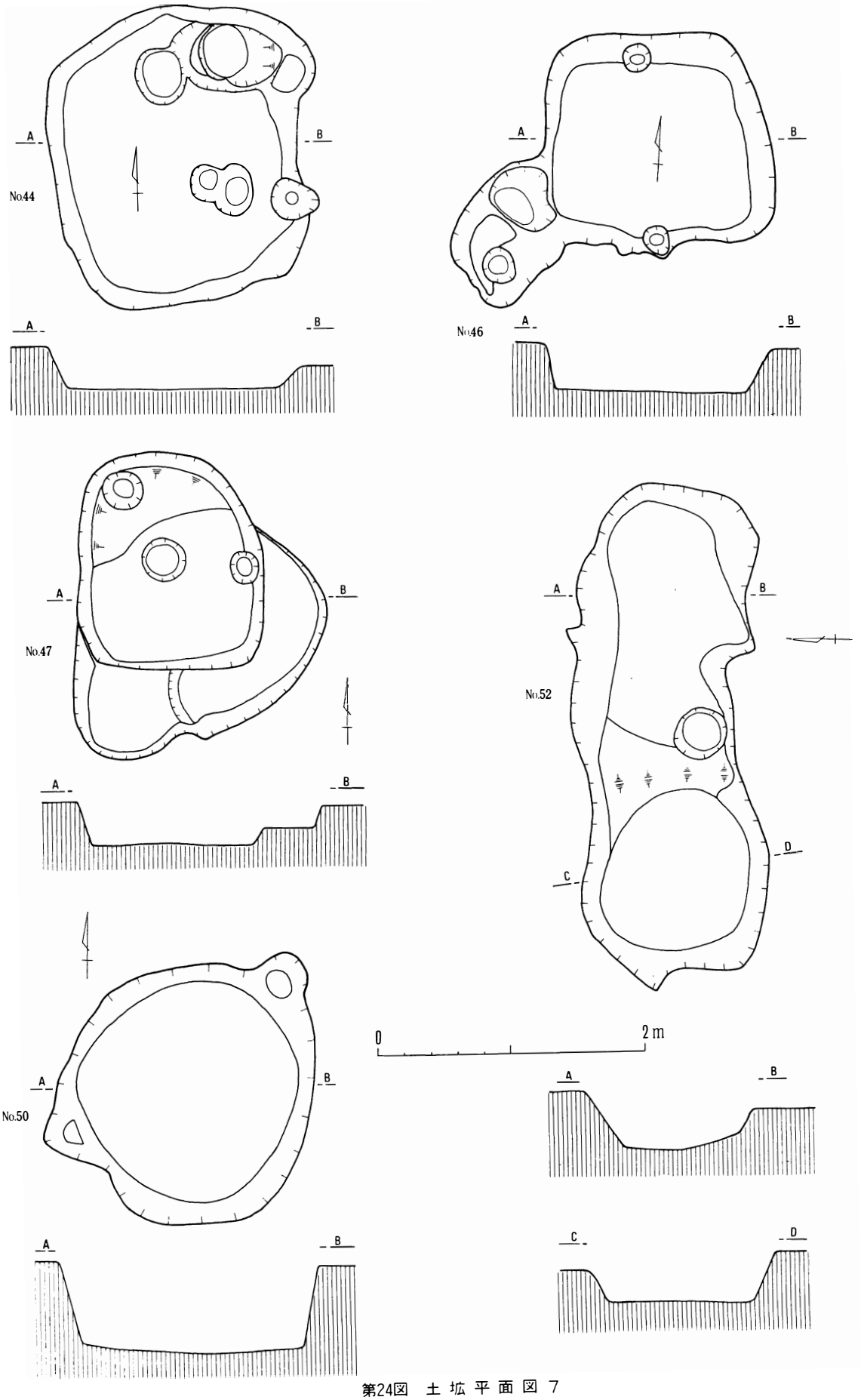
第21図　土 坑 平 面 図 4



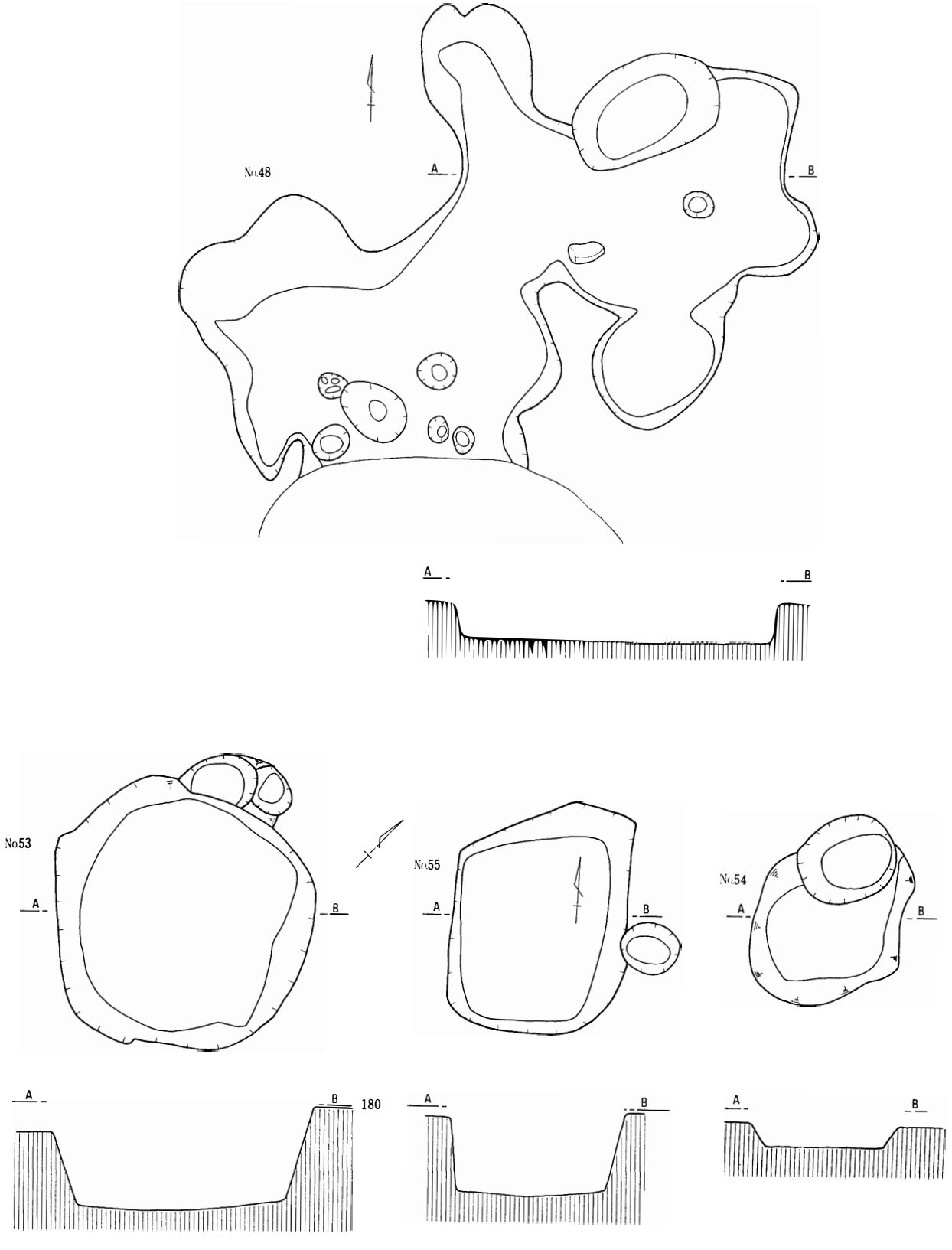
第22図　土 坑 平 面 図 5



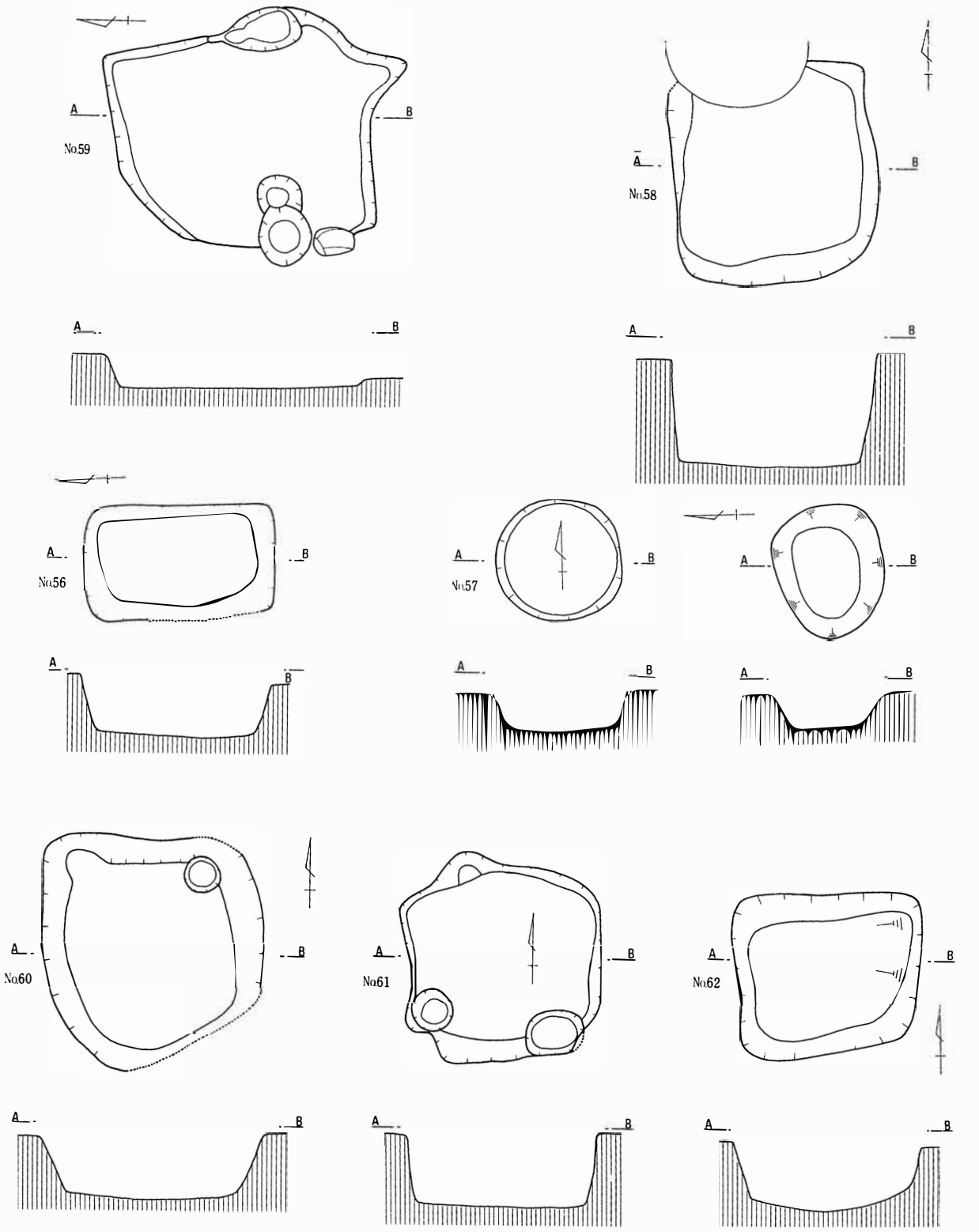
第23図　土 坑 平 面 図 6



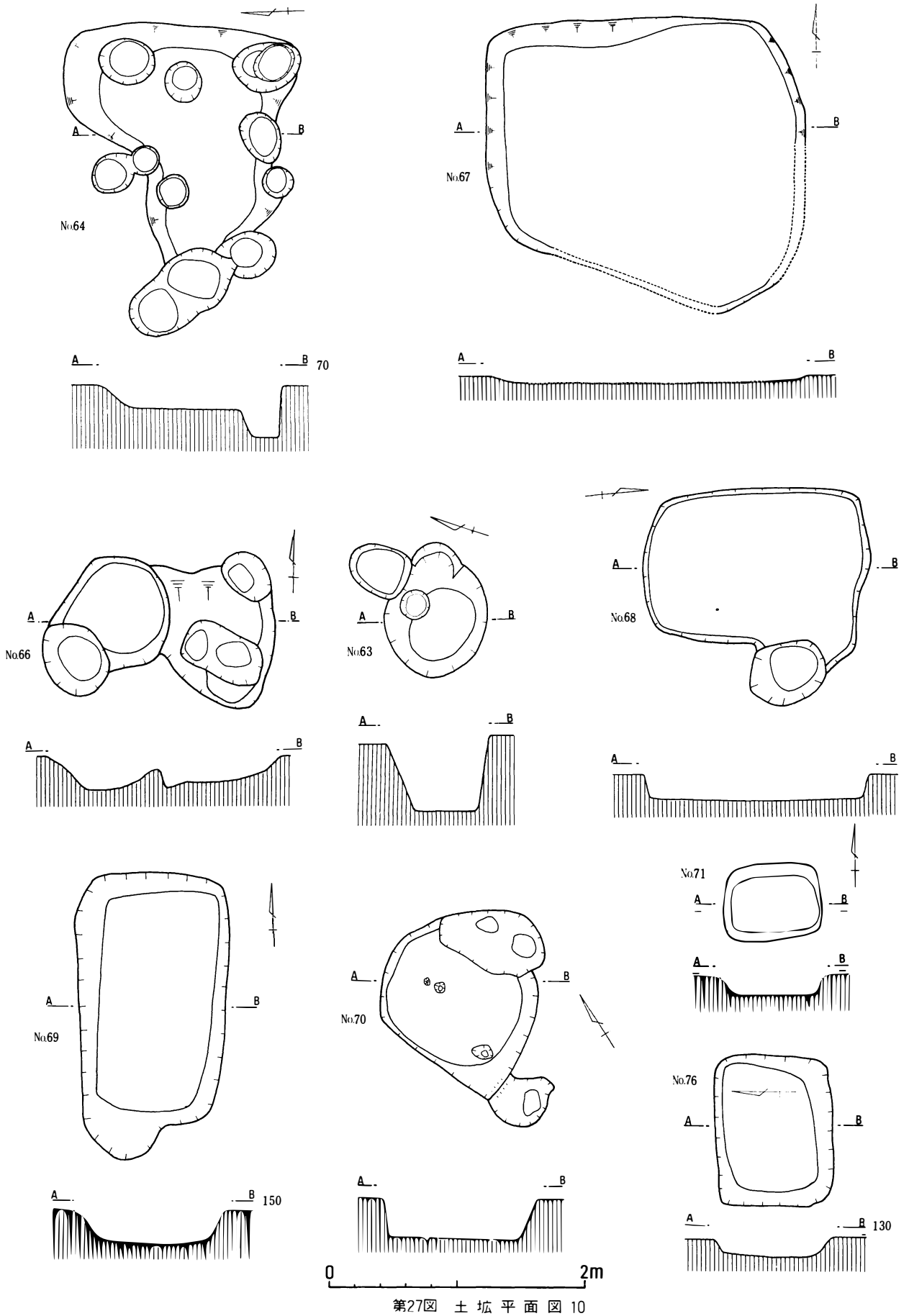
第24図　土 坑 平 面 図 7



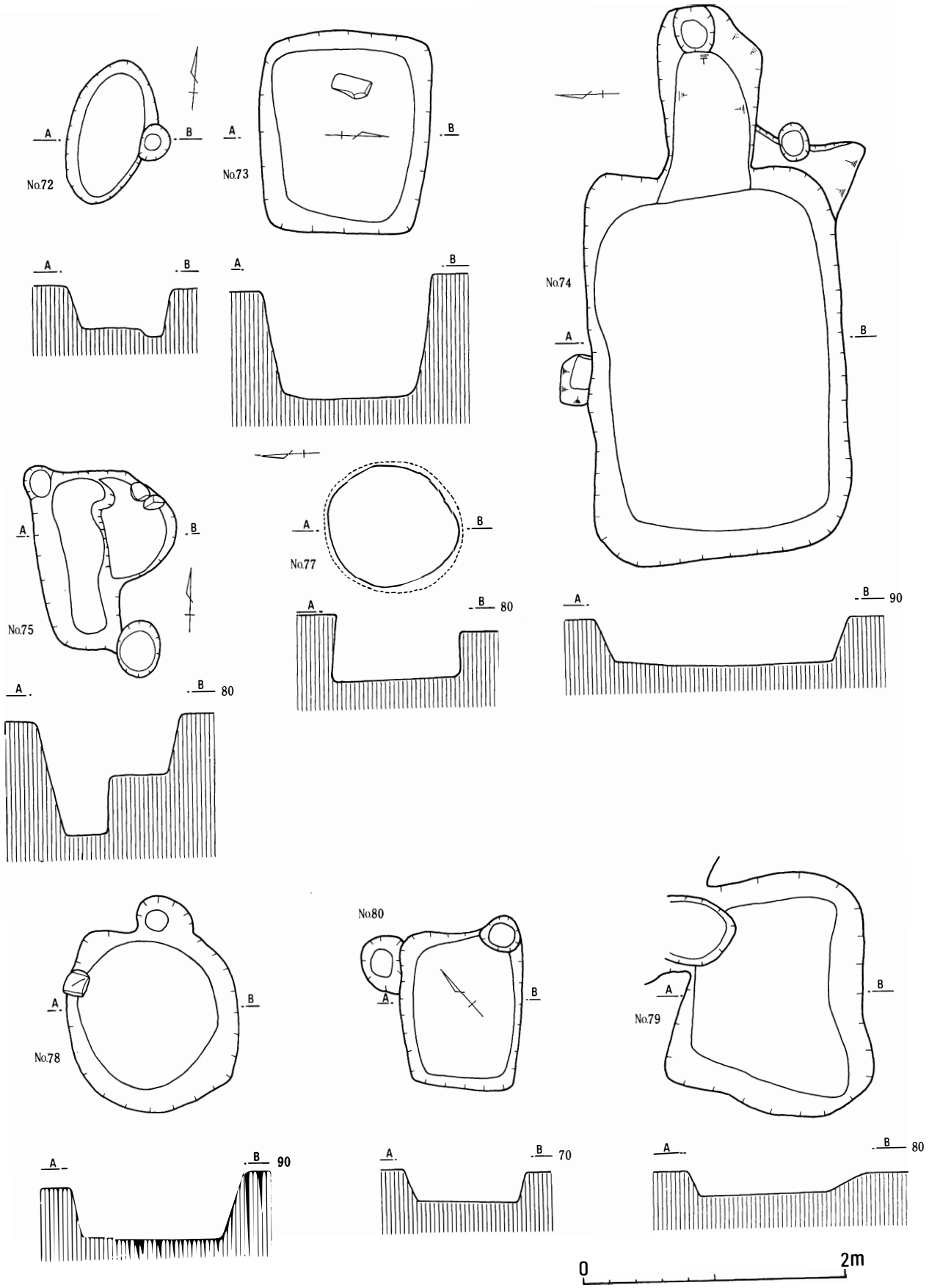
第25図　土 坑 平 面 図 8　0　2m



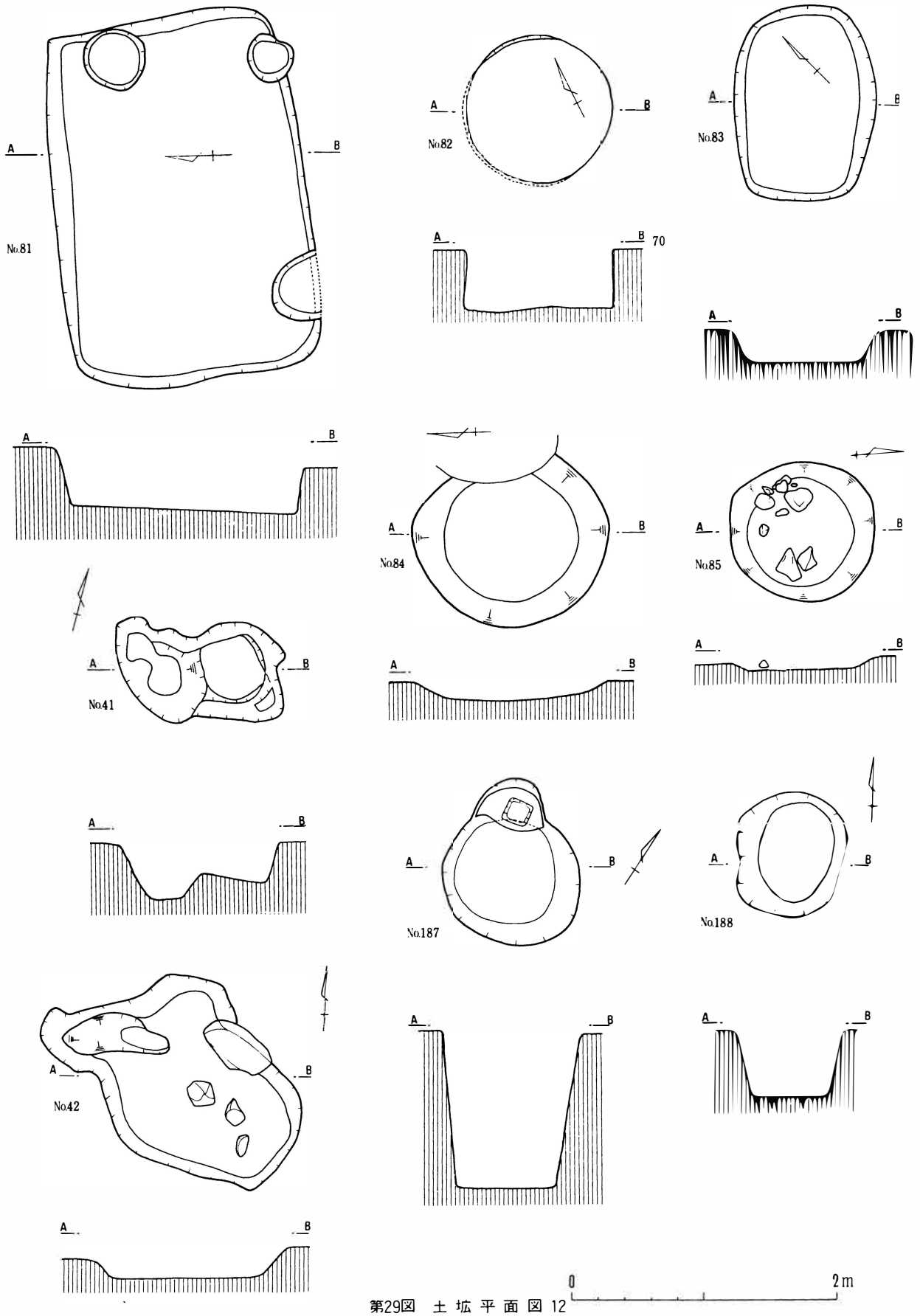
第26図　土 坑 平 面 図 9



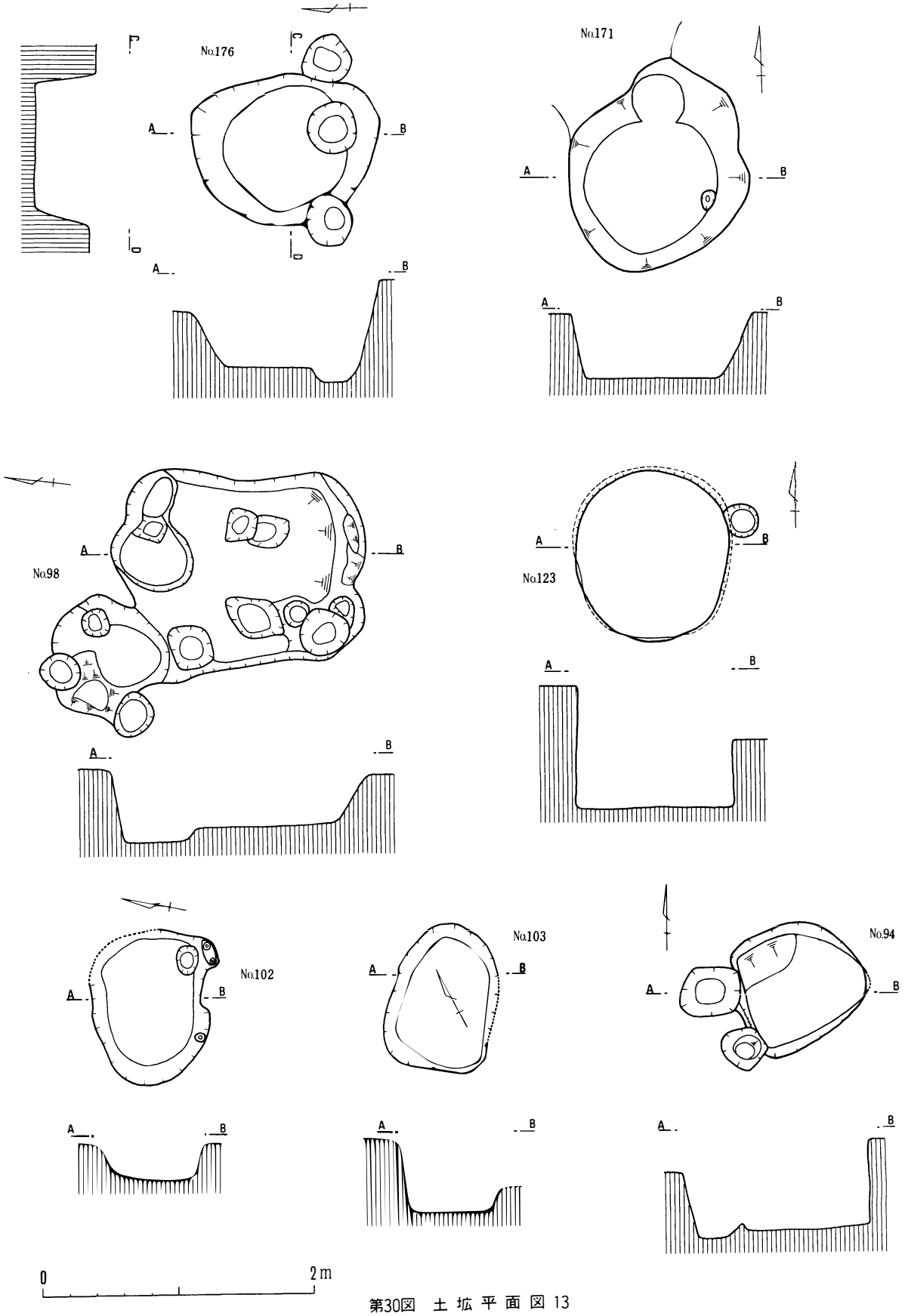
第27図　土 坑 平 面 図 10



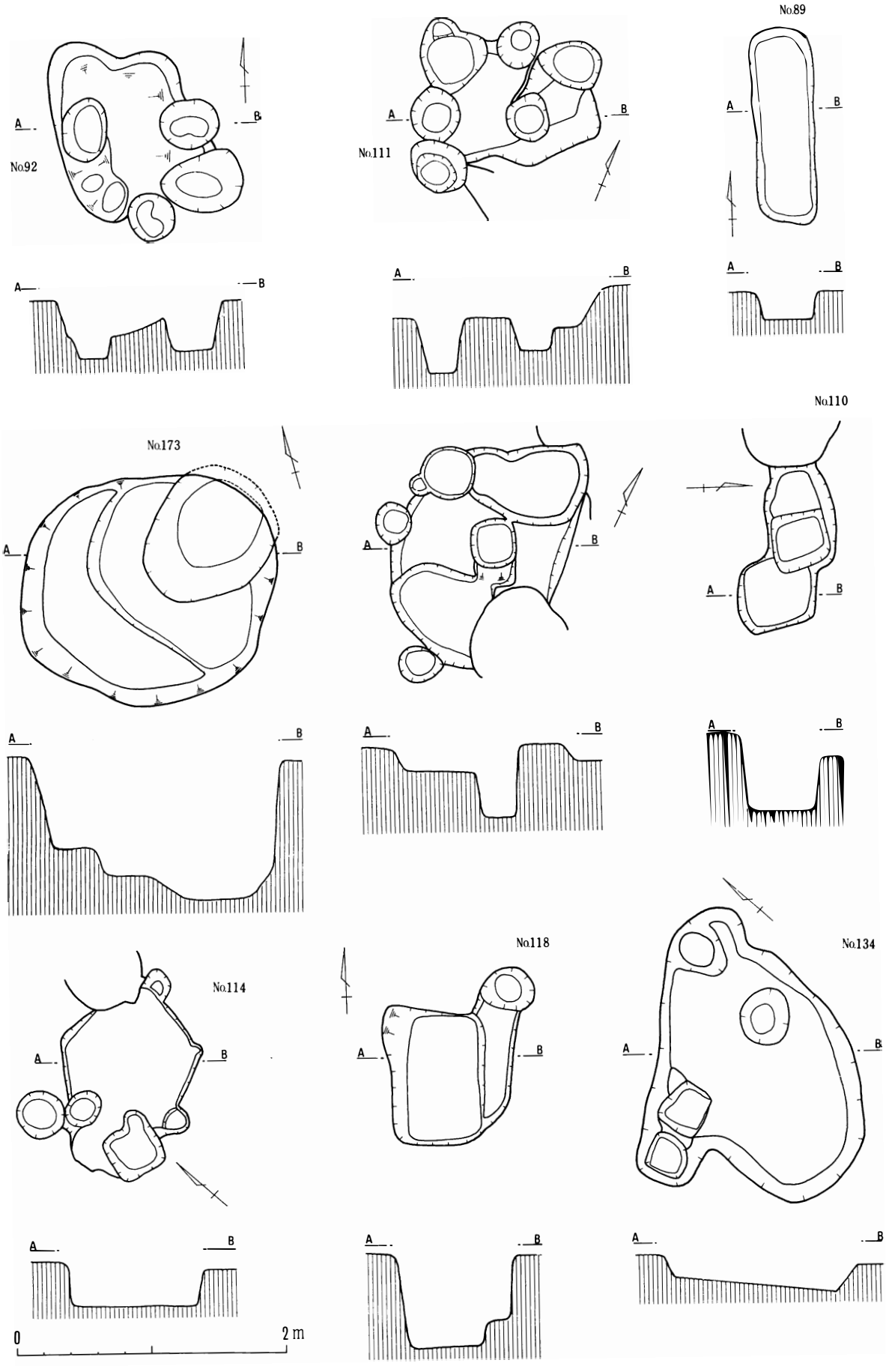
第28図　土 坑 平 面 図 11



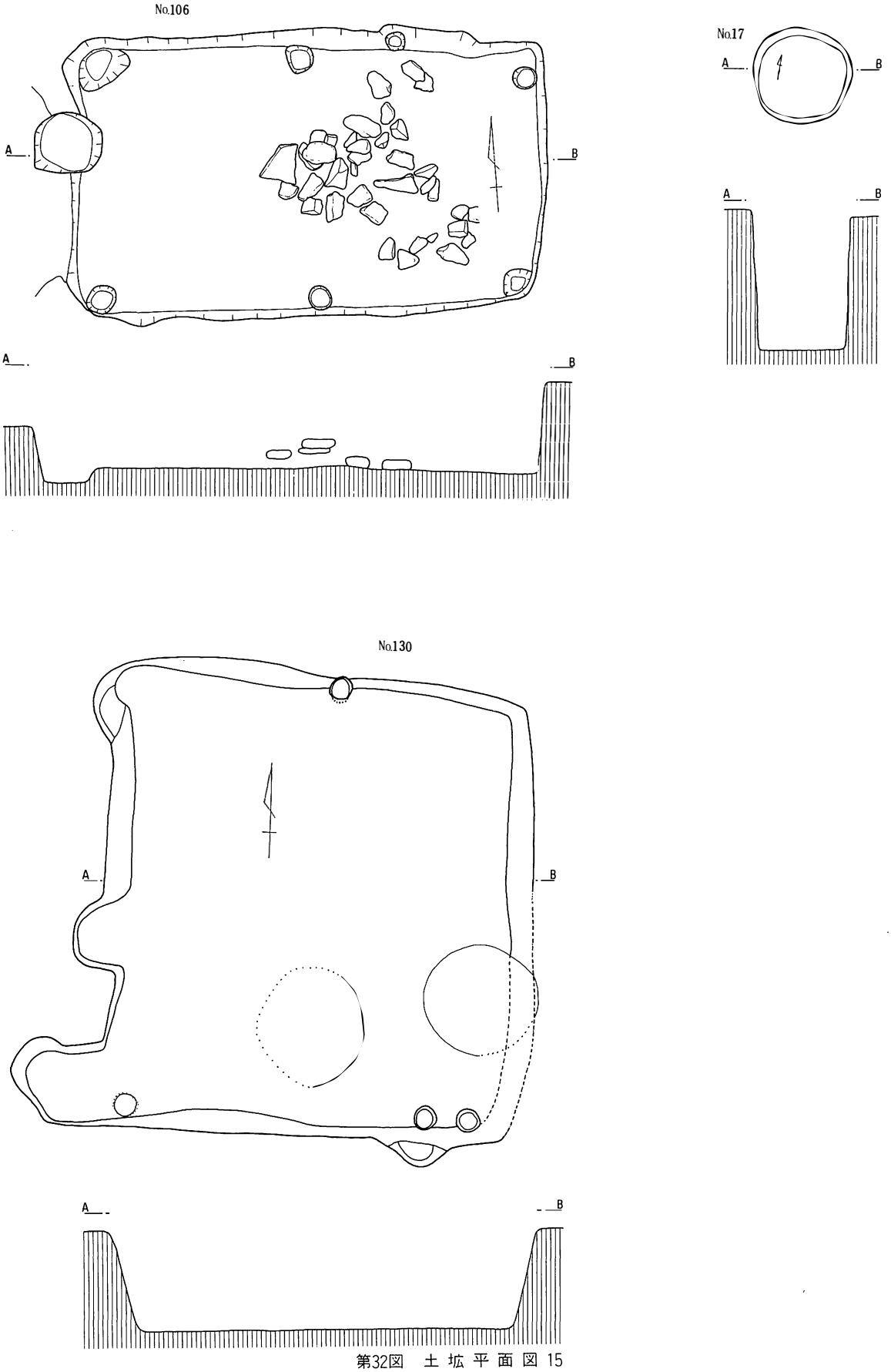
第29図　土 坑 平 面 図 12



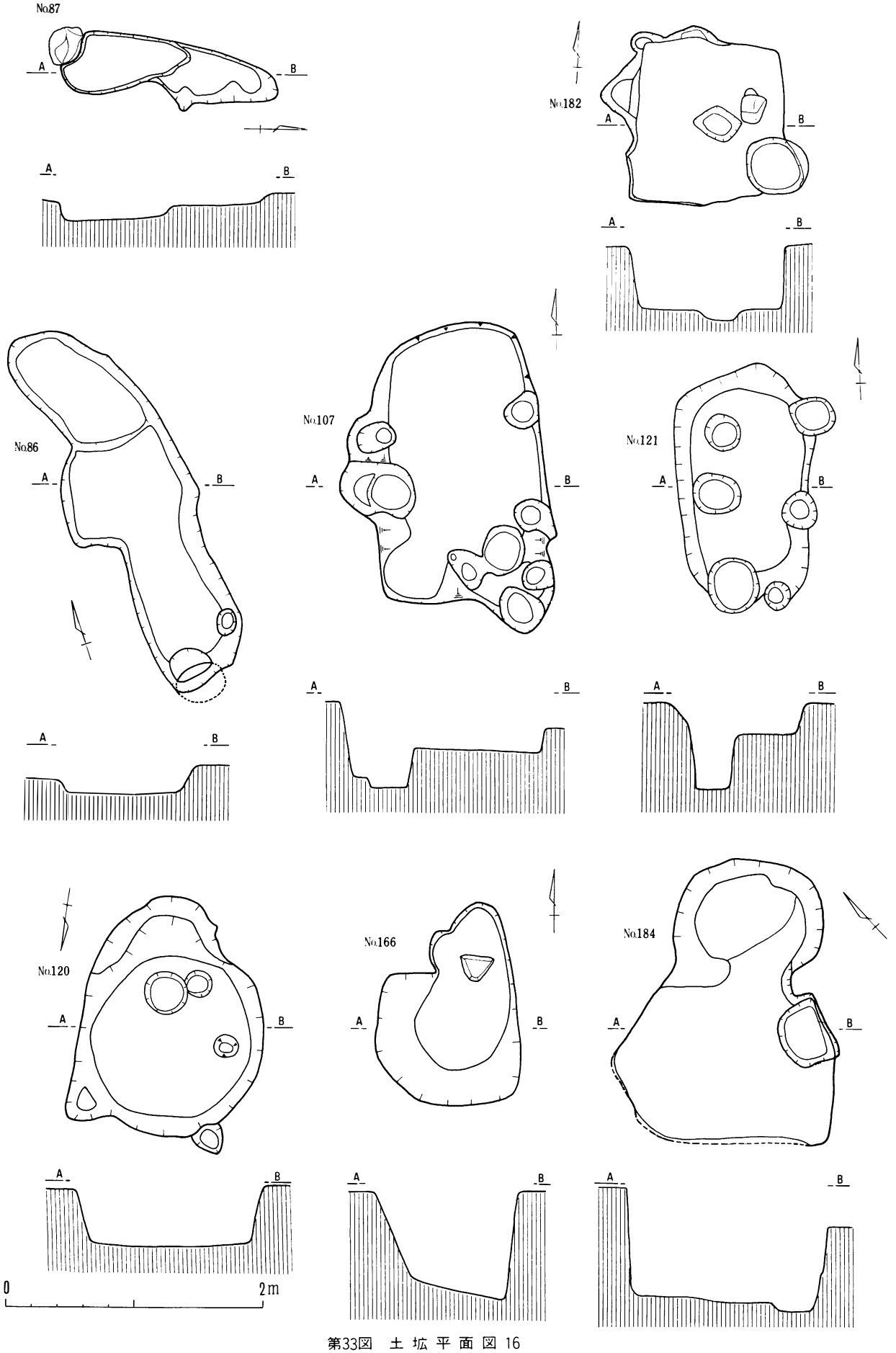
第30図　土 坑 平 面 図 13



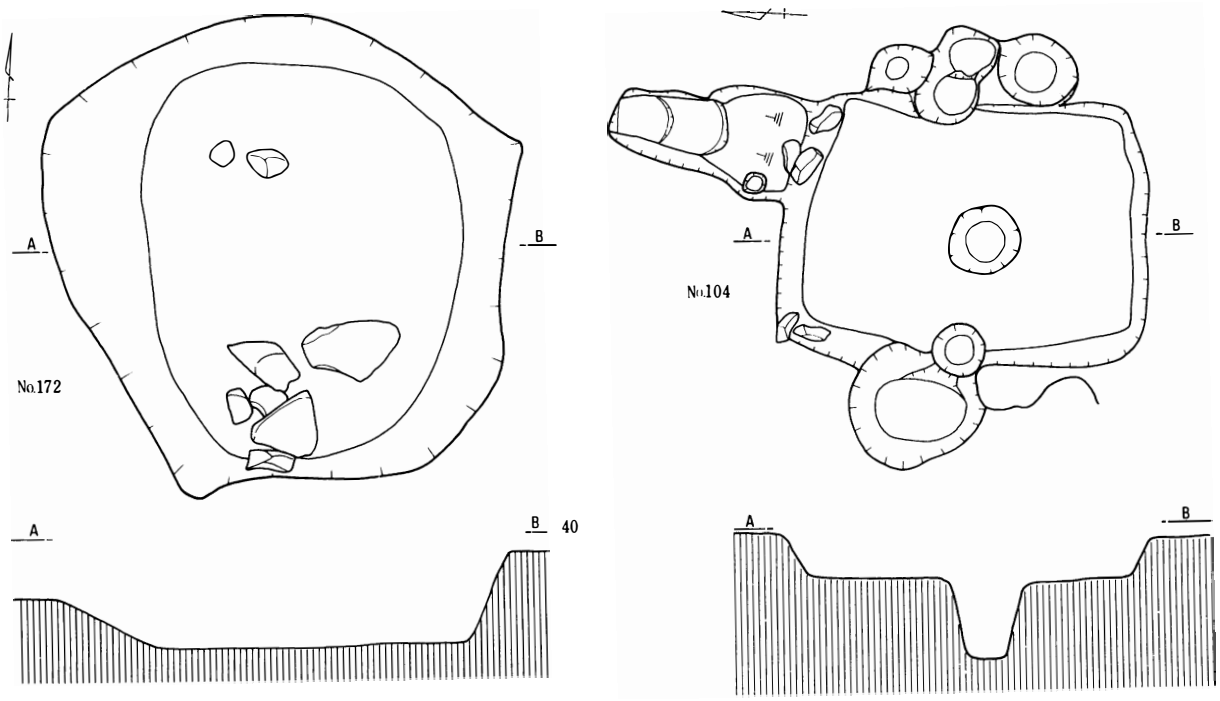
第31図　土 坑 平 面 図 14

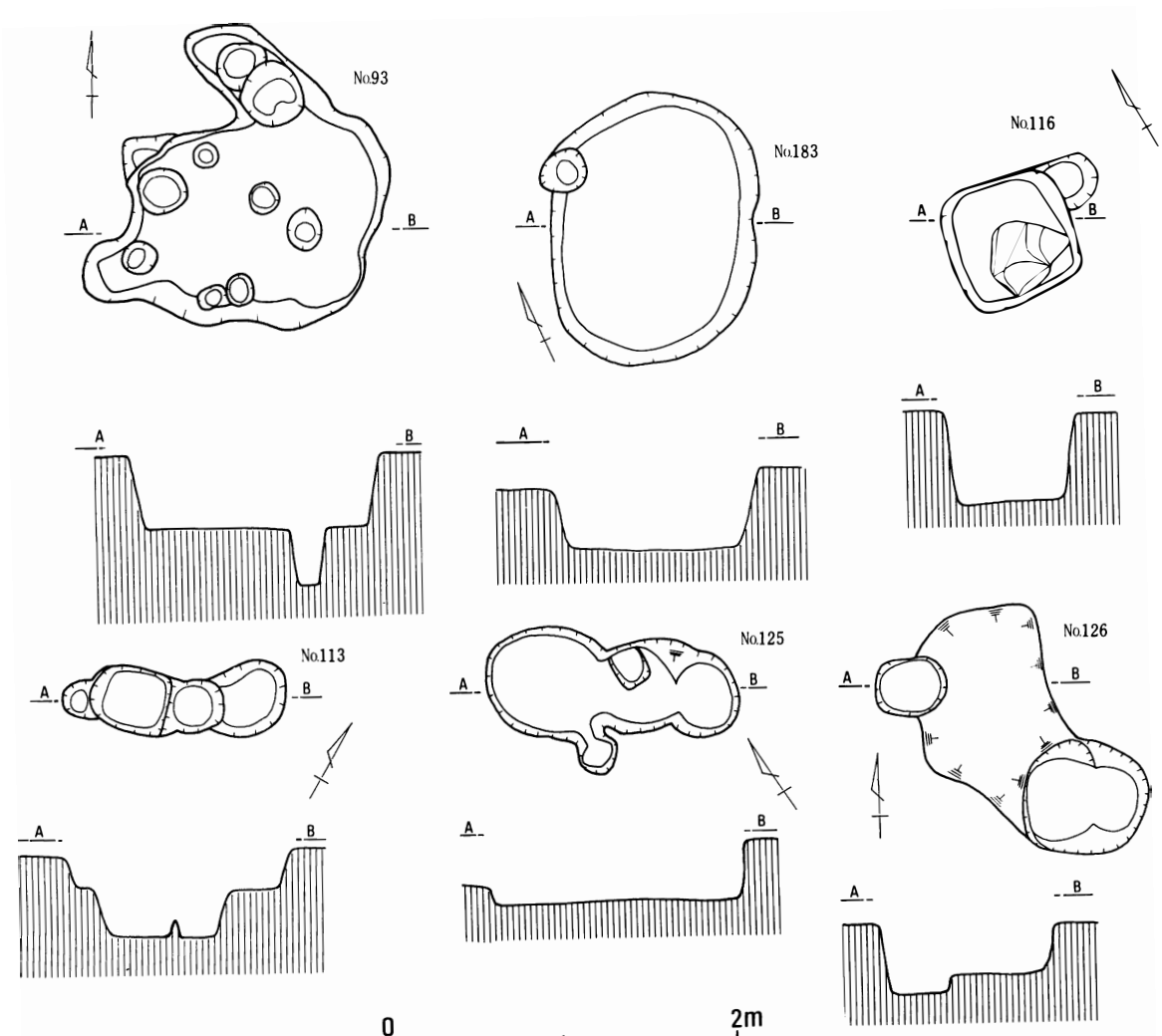


第32図　土 坑 平 面 図 15

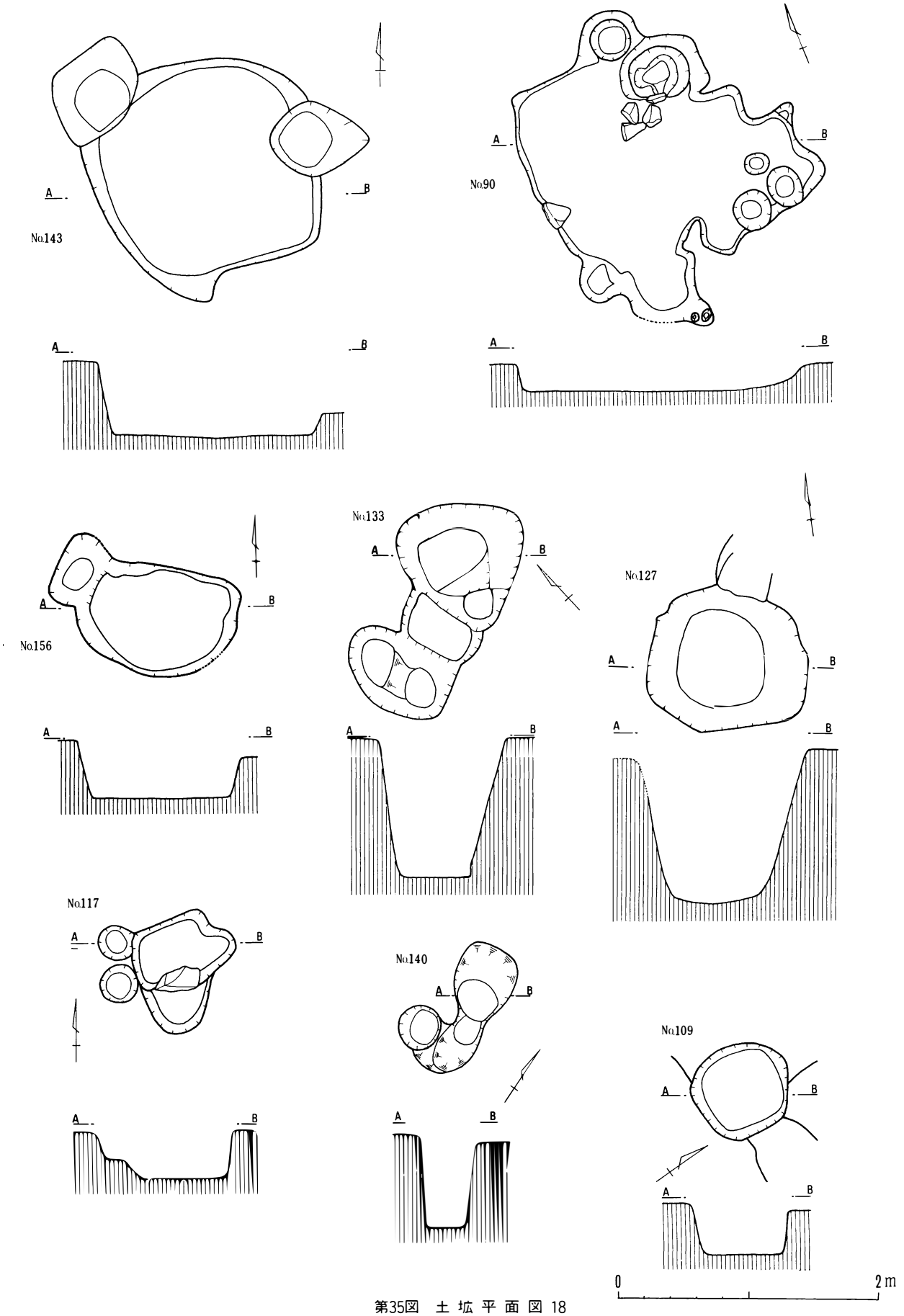


第33図　土 坑 平 面 図 16

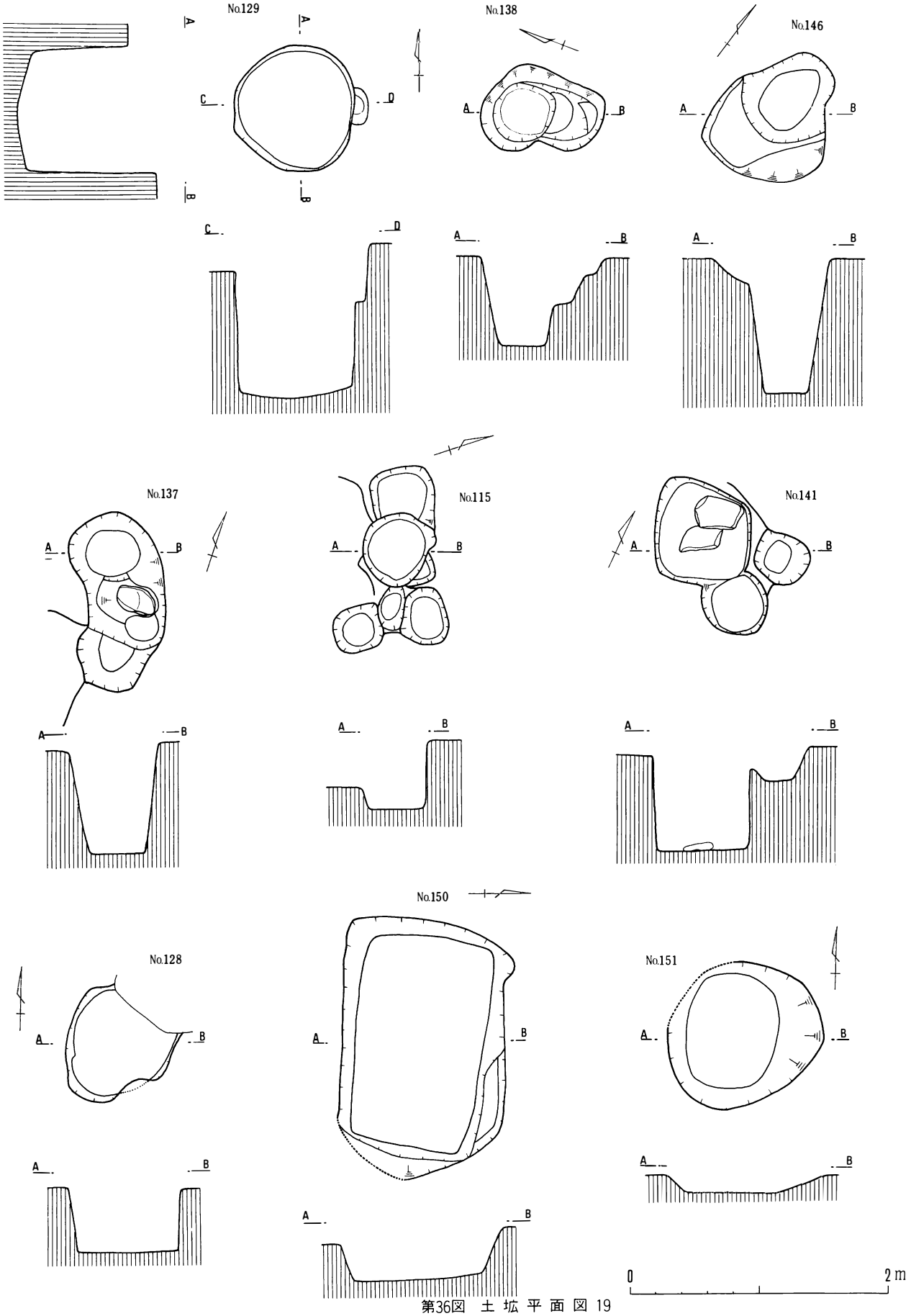




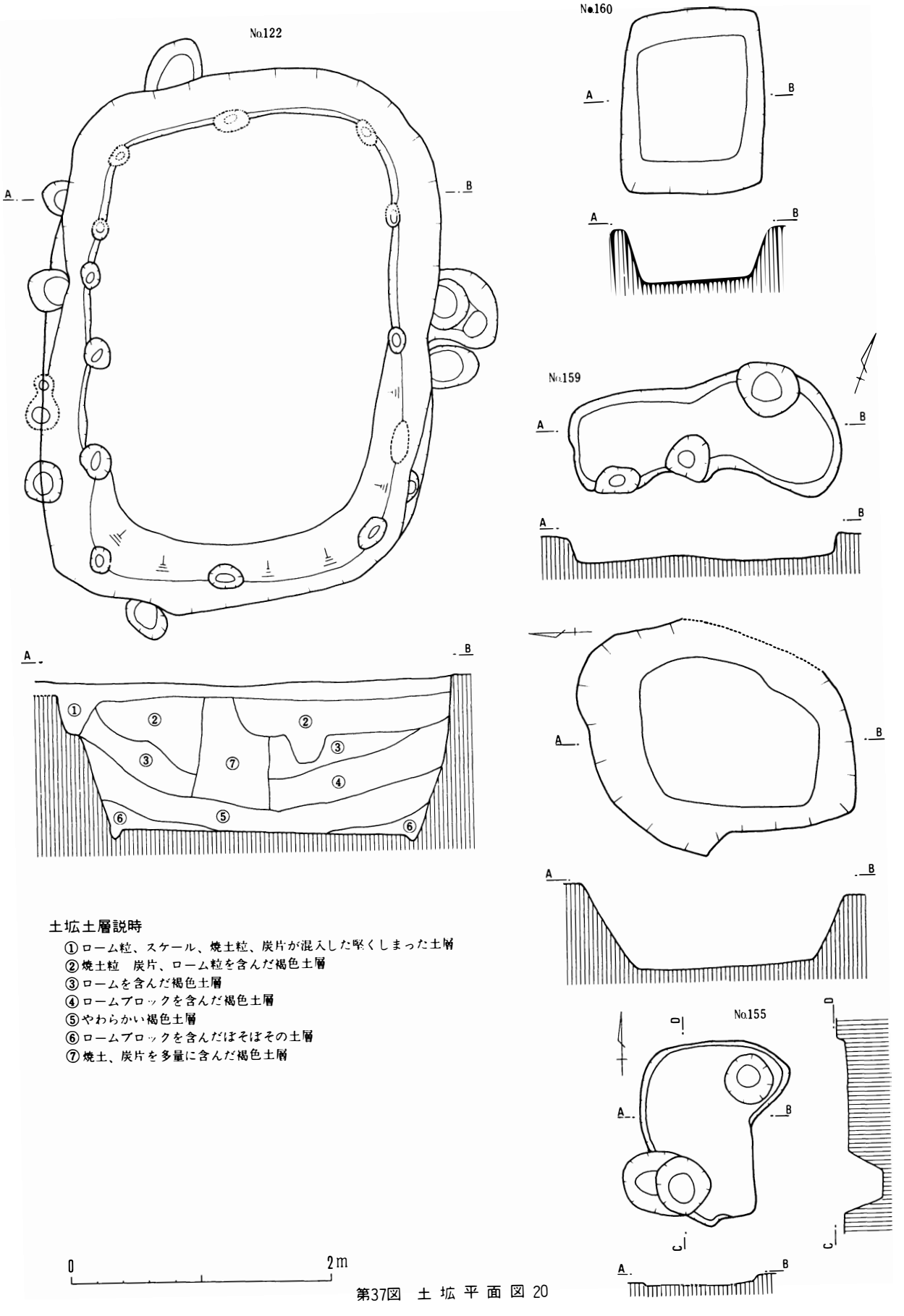
第34図　土 坑 平 面 図 17



第35図　土 坑 平 面 図 18



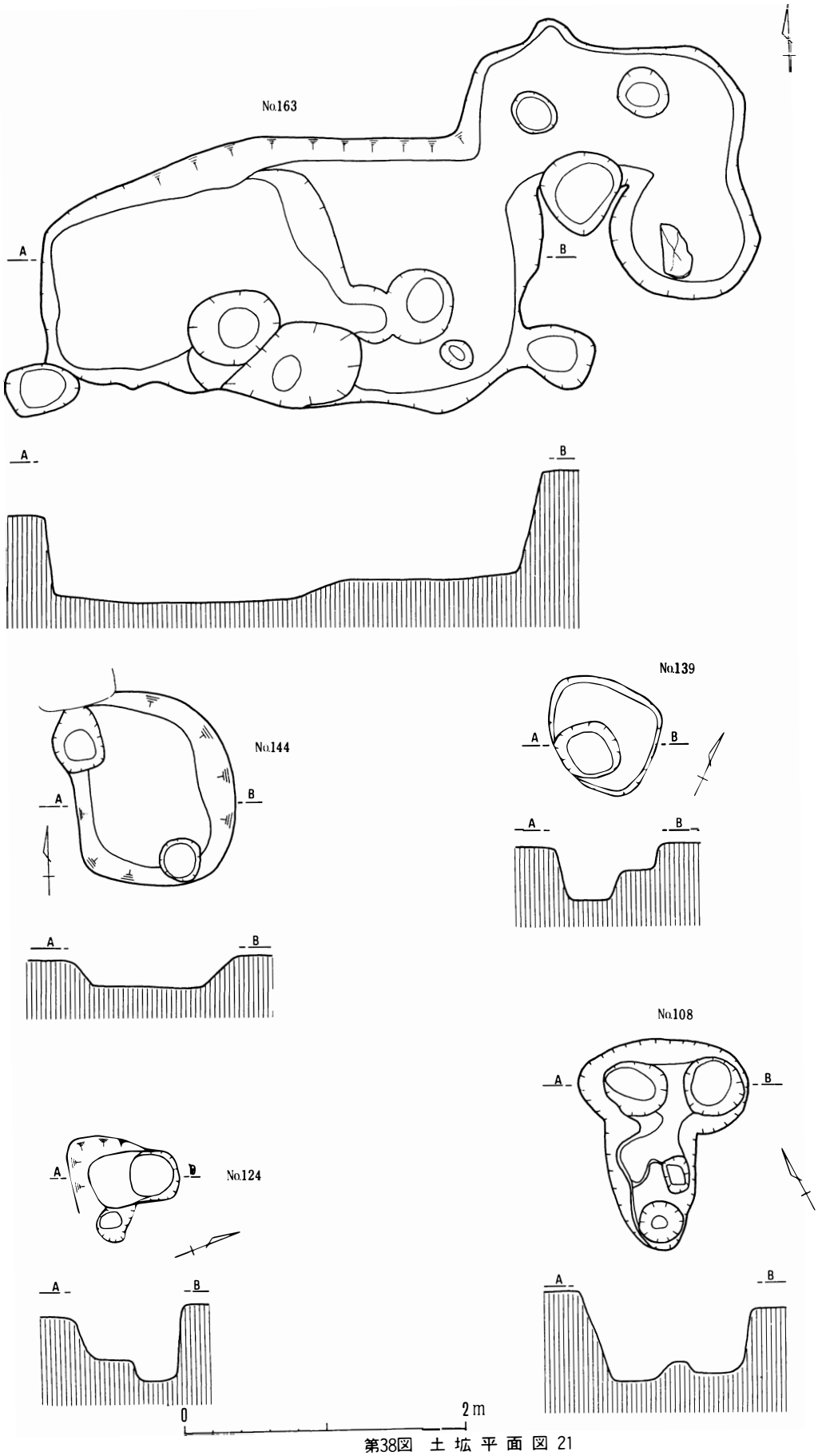
第36図　土 坑 平 面 図 19



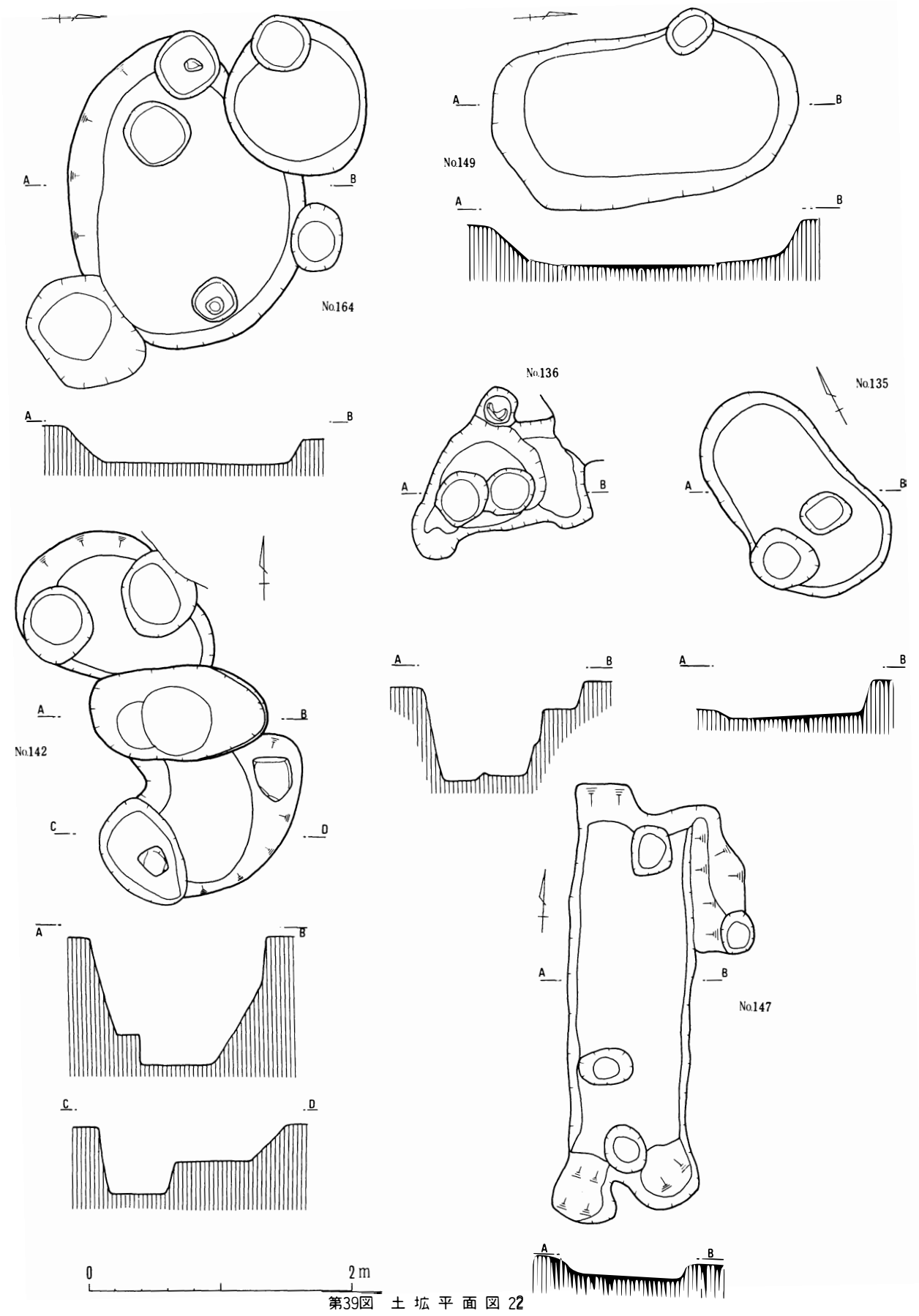
土坑土層説時

①ローム粒、スケール、焼土粒、炭片が混入した堅くしまった土層
②焼土粒　炭片、ローム粒を含んだ褐色土層
③ロームを含んだ褐色土層
④ロームブロックを含んだ褐色土層
⑤やわらかい褐色土層
⑥ロームブロックを含んだほぼその土層
⑦焼土、炭片を多量に含んだ褐色土層

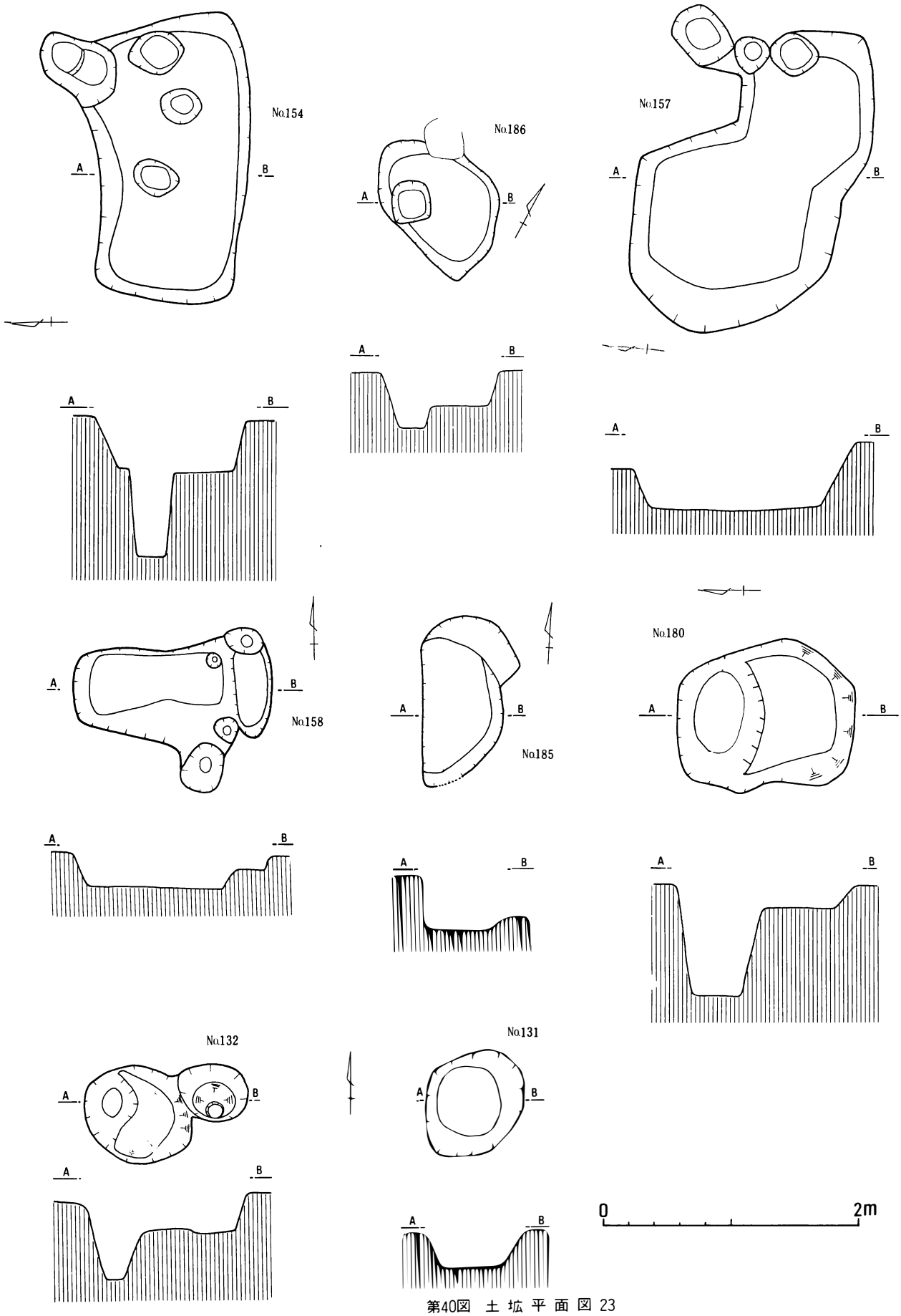
第37図　土 坑 平 面 図 20



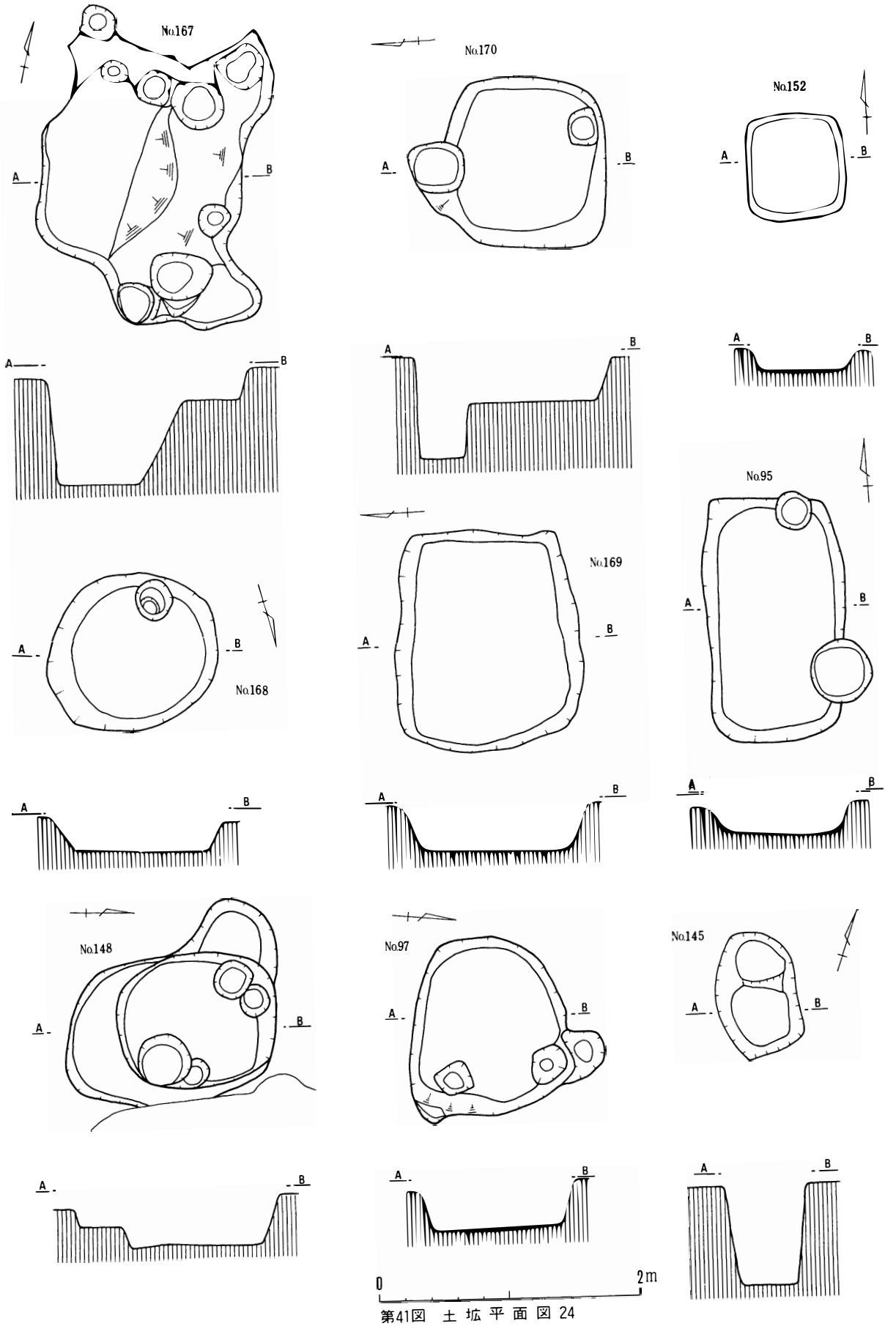
第38図　土 坑 平 面 図 21



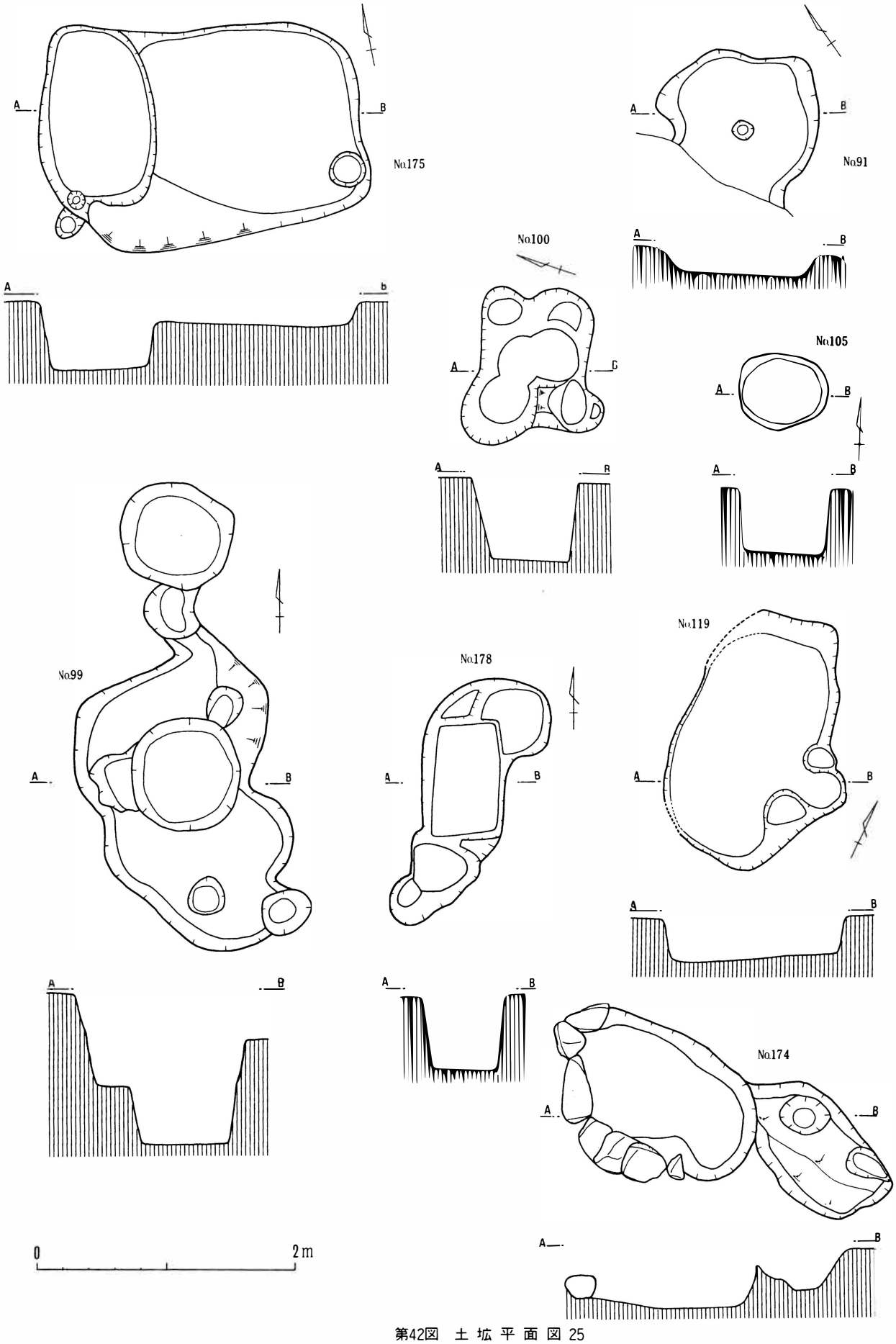
第39図　土 坑 平 面 図 22



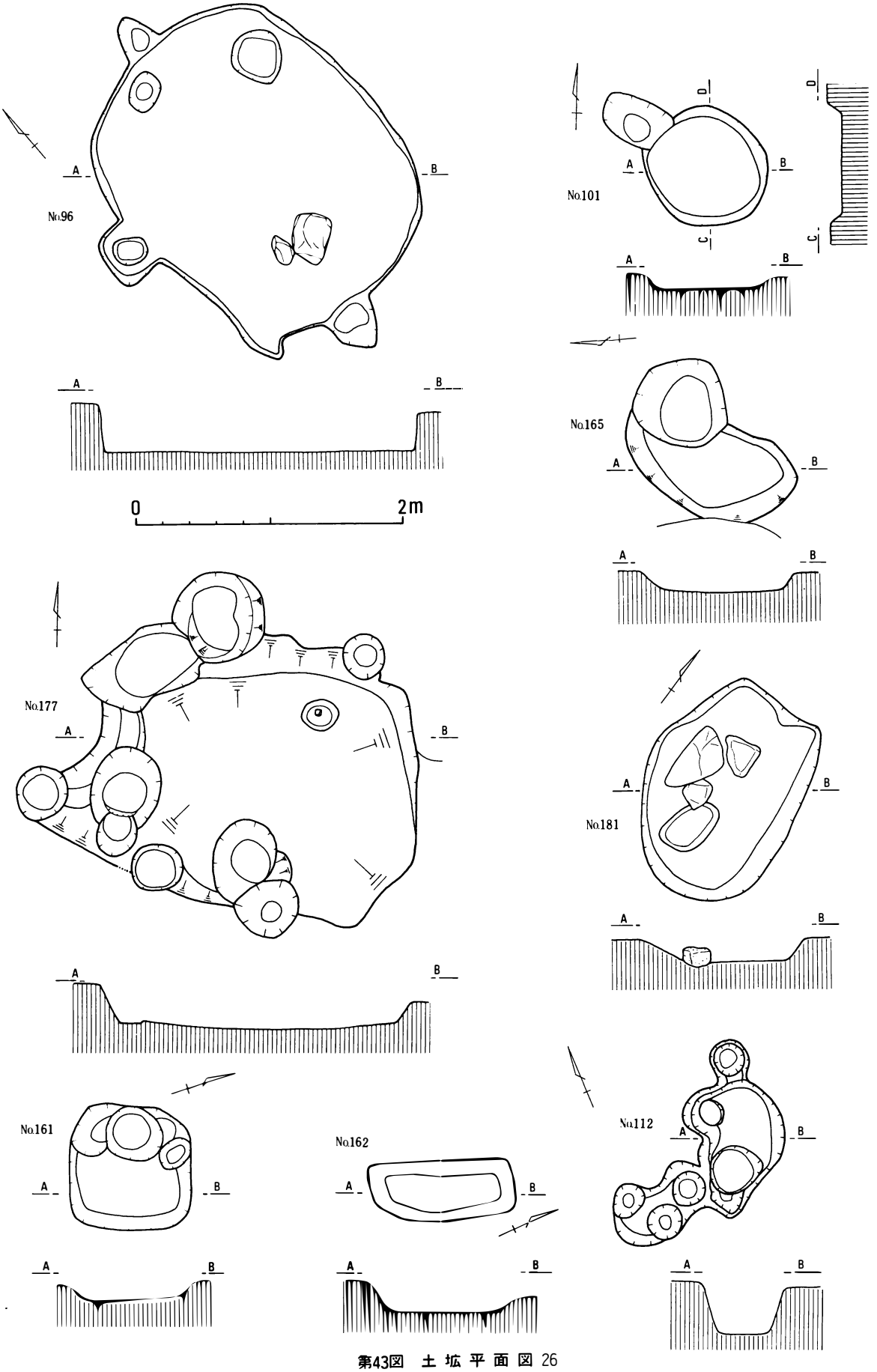
第40図　土 坑 平 面 図 23



第41図　土 坑 平 面 図 24



第42図　土 坑 平 面 図 25



第43図　土 坑 平 面 図 26

できなかった。この溝は11号石組遺構から西に曲がり、石組群を経て空堀の南で南に曲がり、1号石組に向かっている。この溝を4号溝としたが、溝の形状は把握できなかった。3号・4号溝を確認できたのは砂の堆積が認められたからである。

調査区中央部から西に伸びる溝は底部に柱穴が存在しているため、柵列と考えられる。

3 住居址

1号住居址

概要 遺跡の中央部やや南に位置する平安時代の小型の住居である。覆土は浅く、南壁は削平されていて壁を検出できない状態である。カマドは南東隅にあるが原形を留めていないが、近くに袖や天井に使われた平石が散乱した状態で検出された。床面は堅く締まっていたが、住居に伴わない柱穴が所処にある。

床面・壁 住居址の大きさは東壁3.50m，西壁3.45m、南壁3.35m，北壁3.5mを測る。壁の深さは東及び西と北が若干残り、それぞれ30cm、15cm、35cmを測る。

カマド 東壁の中央南よりにあるが、壊されており焼土を伴う楕円形の土坑の状態で確認した。カマドの西にはこの袖石あるいは天井石に使われた平石が集中している。

柱穴 東壁、床面北よりに径20cm前後、深さ30～50cmの柱穴があるが、この住居に伴うものではない。

その他の施設 西南の隅に長径1.4m短径、1.1mの楕円形、また西壁中央には1辺75cmほどの方形に近い土壙がある。

遺物 出土した遺物は、坏とカメが主体である。坏（第80図No.8）は玉状口縁をなし、外面底部に篦削りがなされている。カメ（第82図No.35)は口縁が厚く外反し、内外面ともに篦削りが施されている。その他中世後半に位置付けられる土坑が検出されている。周溝は西壁に一部確認される程度である。

2号住居址

概要 遺跡の中央部東よりに位置する平安時代の小型の住居である。覆土は比較的深く7層に分けられ、平均40cmである。南壁は中世の柱穴によって切られている。カマドは南東にあるが原形を留めた状態で検出された。床面は堅く締まっていたが、住居に伴わない柱穴が所処にある。

床面・壁 東壁3.60m、西壁3.40m、南壁3.30m、北壁3.50mを測る。周溝は認められないが、北壁には東西1.5m、南北0.4m程の張り出しがある。

カマド 東壁の中央南よりにあるが、袖石と天井石がよく残った状態で検出できた。しかし、煙道部分は柱穴によって攪乱されていた。焼土は炊き口付近に厚さ15cmほど確認された。出土した遺物は、カメの破片が多い。

柱穴 南東隅には1号掘立柱建物址の柱穴があり、また煙道の先端も同様である。この住居に伴う柱穴は確認できなかった。

その他の施設 西南隅に床面からの深さ23cm、径1m程の楕円形の土坑がある。北の壁付近には1辺が60cm、深さ20cm程の方形土壙があるがこれは住居址には伴わないものであろう。

遺物 出土した遺物は、坏とカメが主体である。坏（第80図No.13)は「下」と書かれた墨書土器で、糸切り後を篦調整している。カメ（第82図No.37)は口縁が厚く外反し、内外面ともにはけ調整が施されているものと、外反するが口縁部が厚くないもの（第82図No.39）がある。前者は

胴部が膨らまず、後者は膨らむ傾向がある。その他多くの中世の内耳土器や縄文土器の破片が出土した。

3 号 住 居 址

概　　要　この遺構は調査区東南の隅にある縄文後期の住居址である。ローム層を掘り込んで構築されているが、水田を造るときに大きく削平されており、覆土はほとんどなかった。また出土した遺物も破片程度であった。

形　　態　南北3.28m、東西2.86mの楕円形を呈する。

床　面・壁　床面は柔らかく、削平によって壁を10cmを残す程度であった。しかし、周溝が巡り、その中には小さなピットが検出された。このピットは壁際に設けられた施設を意味する。

炉　住居址の中央に方形に石を組んだ炉がある。この石組は東側の石を欠いている。炉の中央には焼土が認められた。

柱　　穴　壁際の周溝の中に小さな柱穴が集中して検出された。この柱穴は壁柱穴と考えられる。

4 号 住 居 址

概　　要　調査区中央で、6・7号住居址の西に位置する平安時代の住居址である。覆土は浅く北側と西側を中世の溝と土坑によって切られている。カマドは東壁の中央よりやや北にあり、既に耕作によって破壊されている。

　また床面には中世と思われる柱穴が見られる。遺物は縄文時代後期から平安時代・中世と各時代にわたって出土している。

形　　態　東壁（3.48）m、西壁（3.12）m、南壁3.85m、北壁（3.65）mを測る方形を呈する。

床　面・壁　床面は堅く締まっているが住居址の北西側に2個、竈付近に1個不成形の土坑がある。また、南には床面からの深さが25cm、一辺が1.3m程の方形土壙が東壁は24～35cm、西壁は24～31cm、南壁29cm、北壁23cm程度の高さがある。周溝は認められず柱穴が南壁際に見られる。

柱　　穴　本住居址に伴う柱穴は、南壁際に見られるものと、北壁際にあるものと考えられ、それ以外の柱穴は中世遺構であろう。このように考えた柱穴の床面からの深さは40cm前後で、径も40cm以下である。

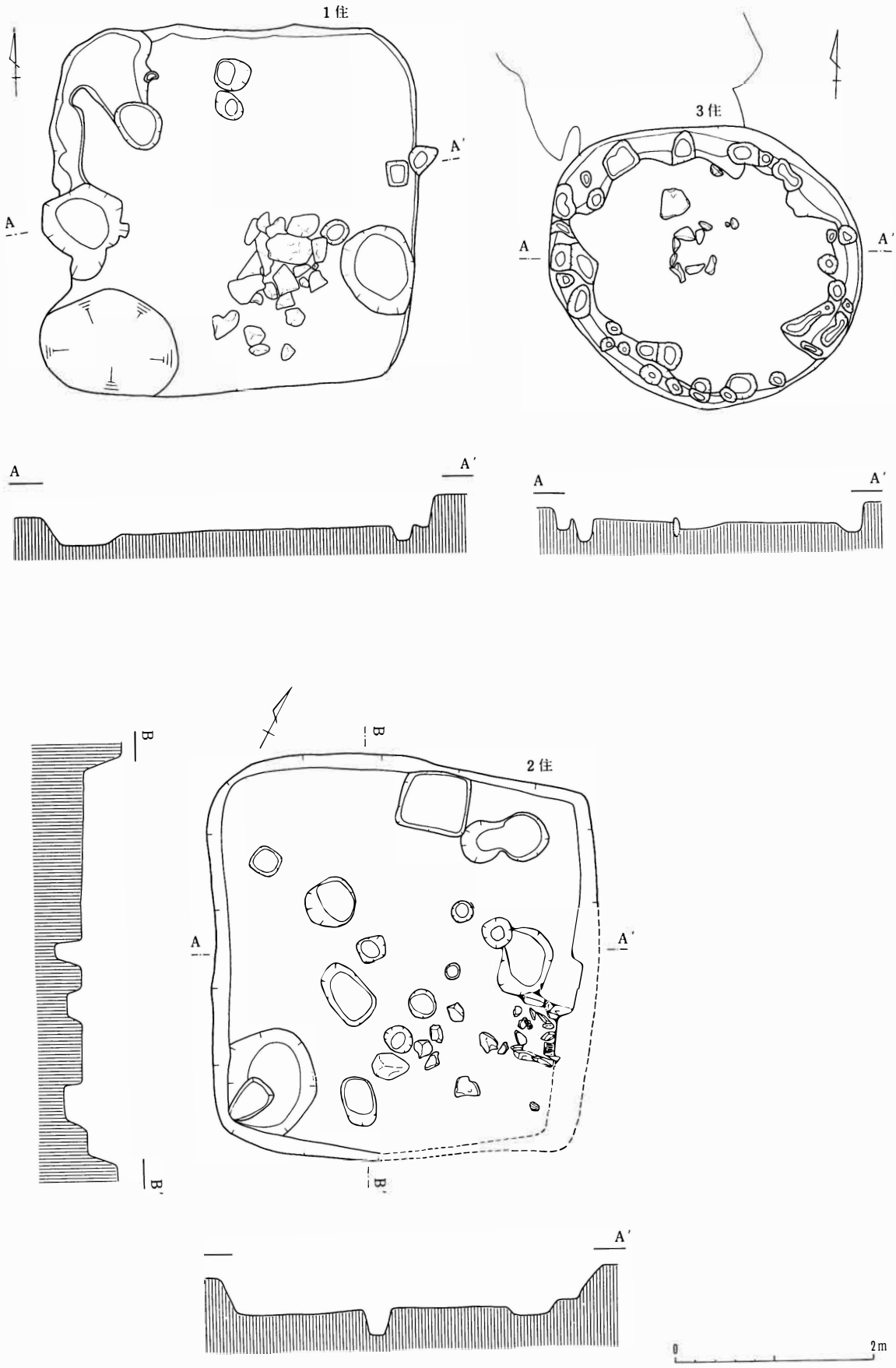
カ　マ　ド　東壁の中央やや北よりに位置し、東西90cm、南北70cmの掘り方を有するが、既に形態を留めない程に壊されている。煙道から石臼の下臼が検出された。

遺　　物　坏は主なもの2点（第80図No.1及びNo.10）が出土している。No.1は暗紋をもついわゆる甲斐型の坏であり、No.10も外面底部付近を篦削りし、糸切痕を残した甲斐型の坏である。カマド内出土遺物はカメが多く出土している。（第80図No.4・5）。このカメは甲斐型土器に伴うもので、器厚は薄く雲母を多く含んで、外面を縦に、内面を横に刷毛調整しているものである。

5 号 住 居 址

概　　要　調査区中央にある南北に延びる石垣によって南東部分を切られた平安時代の住居址である。プラン確認はローム層直上で、この住居址は南にある6号住居址を切って作られており、規模は6号住居よりやや大きい。また北壁と西壁に中世の柵列に伴う溝がある。東壁とカマドは石垣によって壊されている。

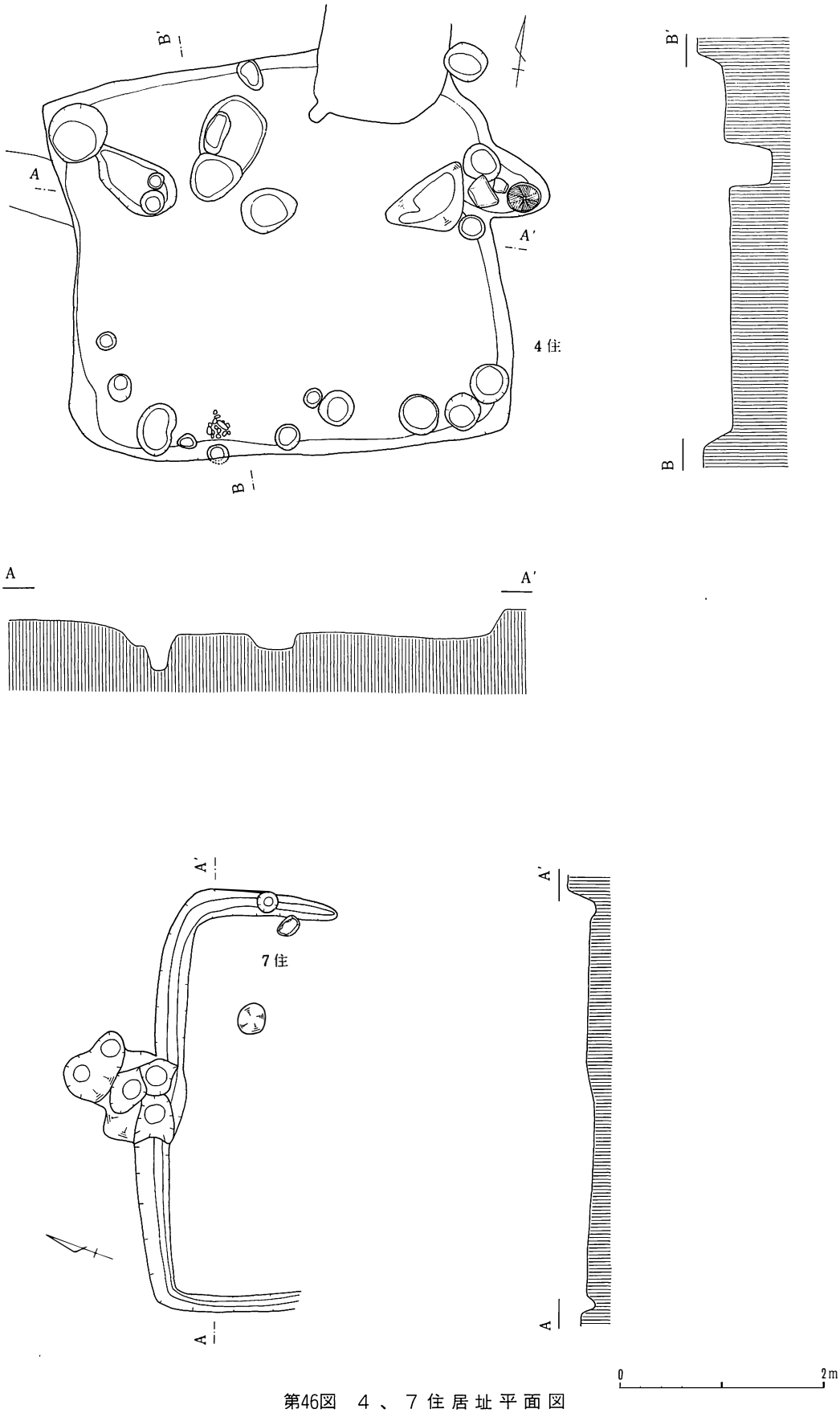
床　・　壁　住居址の大きさは東壁（4.3）m、西壁3.6m、南壁（4.5）m、北壁（4.1）mを測る不正方形を呈する。周溝は全体に確認されたが、数cm程度の浅いものである。壁の深さは東15cm、西12cm、南16cm、北35cmである。床面は堅く締まっているが、中世の柱穴が全体的に検出された。



第44図　1～3号住居址平面図

0 2m

第45図　5、6住居址平面図



第46図　4、7住居址平面図

カ　マ　ド　東壁の中央やや南にあったが、近世初頭の境界石垣によって壊されているため、形を留どめていない。わずかに径90cm程の焼土を含むカマドの痕跡が認められた。

柱　　穴　床には柱穴が多数確認されたが、この住居址に伴うと考えられるものは、南壁中央にある2つである。穴の径は30cm程で深さも44cmである。その他の柱穴は中世遺構に伴うものと考えられる。

遺　　物　覆土とカマド付近から多数の土師器の破片が出土した。また柱穴付近からは中世陶磁器破片が出土した。

6　号　住　居　址

概　　要　5号住居址の南にあり、北壁を5号住居址によって切られている小型の住居址である。また、東南部分は中世の石垣によって壊され、西壁は5号地下式土坑によって切られている。プラン確認はローム層直上で覆土が暗褐色土、周囲が黄色土として確認された。カマドは石垣によって壊されており、痕跡も確認することはできなかった。床面・壁 住居址の大きさは、東壁（3.7）m、西壁3.4m、南壁(3.4) m、北壁(3.4) mの方形を呈する。周溝は南と西壁で確認され、深さ10cm程度である。床面はローム層で比較的平坦で堅く締まっている。

カ　マ　ド　東壁にあったものと考えられるが、中世の石垣によって壊されており痕跡も確認できなかった。

柱　　穴　床面には、西側を中心にして多くの柱穴が存在しているが、住居址に伴うものとは考えられず、中世遺構と言える。浅いものは15cm、深いものは33cmを測る。

遺　　物　遺物は少なく特筆すべきものはないが、5号住居址とほぼ同時期と思われる坏の破片が出土している。

7　号　住　居　址

概　　要　12号地下式土坑の南西に位置し、南半分は削平されているＥ９グリットにある平安時代の住居址である。壁の高さは北東部が20cm程度であるが、西は数cm程度がわずかに残っている。周溝は壁が確認された部分では検出されているが、削平部分では確認できなかった。中世の柱穴に北中央の壁は壊されている。出土した遺物は、坏の小破片が数点あった。

4.掘立柱建物址

本遺跡に於ける建物址はすべて柱穴によって形成されたものであり、礎石建物は確認できなかった。しかし、1号掘立柱建物址の様に柱穴の底に平石をおいて柱が沈むのを防止している建物や地下式土坑上に柱穴が当たったために埋め土をしてその上に平石を置く柱穴もみられた。遺構確認面が既に削平されている可能性が高く、生活面を十分に把握することができない状況でもあったので、建築当時あるいは使用当時の規模や形態を正確に押さえることはできなかったと言える。また、柱穴相互の切り合いが西側部分において極めて激しく、調査中に相互関係を十分検討することもできなかった。以下に解説する建物址は、多くが図面と写真から建物址として柱穴群を結び付けたものである。1号掘立柱建物址群では、調査中に柱穴部分が陥没したり、掘り進むと、内部から柱材の残欠が出土したりした。このような状況は、建物が廃絶されてから比較的早く水田となったことを意味しているように考えられる。

1号掘立柱建物址

この遺構は、調査区東側にあり、最も柱間が大きく、柱穴の大きい建物である。柱穴を検出した遺構面は

ほぼ水平である。規模は東西２間（11m）、南北１間（5.5m）、柱間55cmである。注目すべきは、２時期の遺構が同規模で切り合い、新しい遺構は、柱穴の底部に平石を据えている点である。また、柱穴底部には柱痕が確認された。この柱痕の大きさは直径20cm前後の円形であった。出土した遺物は、北東隅の礎石を伴う柱穴から、１６世紀後半に位置付けられる昔田窯あるいは日向窯の製品であろうと思われる灰釉の丸皿が出土している。このことからこの２時期目の建物の時期は16世紀後半以降であることが言えよう。

１号掘立柱建物址群

この遺構は、調査区南にある柱穴群を指し、東西12.25m、南北10.5mの規模の方形に南に東西７m、南北3.5mの張り出しがある柱穴群である。柱穴を検出した面はほぼ水平と言え、この遺構面からは土師質土器や古銭、内耳土器などの遺物が出土し、焼土や炭も検出されている。柱穴のプランは、遺構面が黒色土であるため確認しにくいがやや黒色が強い程度である。また、調査作業中に、足や一輪車が落ちるところがあり、この部分はすべて柱穴であった。このような柱穴の中には、柱が腐らずに残っている例がある。柱の太さは７寸角程度のものと思われる。南西隅に近い所から、灰釉の丸碗が出土している。この碗は口径11.8cm、器高6.5cm、高台径５cmを測り内側に漆と思われる赤褐色の付着物が見られる。この丸碗は17世紀代に位置付けられるものであるため、本遺構は17世紀を中心とした時期に存続していたことが考えられる。柱間最小単位が1.75mであるが、柱間は1.5間・２間・４間と一定ではない。これは複数の建物址が重複しているためと考えられるが、調査中にもそれを把握することはできなかった。

２号掘立柱建物址群

１号掘立柱建物址に重なるこの遺構は、少なくも４棟の建物が重複していると考えられる。この柱穴群がある遺構面は、南端１m程が20cm程度低くなっている以外は平坦である。

①　第50図の東にある方形の柱穴群は東西7.8m、南北6.8mの規模で、中央より東側には土間状の床面と同一であるので、土間の時期と並行して存在していたと考えられる。出土した遺物は、②に述べる。建物の性格は、土間状の床面が浅く凹状になっていることから馬屋とも考えられる。

②　上述した遺構に一部重複した状態で東に突き出た建物址は①の遺構の一部とも言えるが、ここでは別の遺構として考える。規模は東西8.5m、南北５mを測り、南西部分と北東部分が括れている。柱間の最小単位は１mと思われる。この遺構面から出土した遺物は、青磁片・白磁片・染め付け片・鉄釉碗片、緑釉片がそれぞれ１片出土しているが、直接この遺構と関連があるかは不明である。

③　第50図の西側にある東西に長い長方形が二つ接したような形態を有している建物址は、東西10m、南北4.8m・東西9.4m、南北５mをそれぞれ測り、前者と後者は中央で1.5m程ずれている。出土した遺物は、白磁皿片・鉄釉碗片・緑釉碗片・志野焼の皿片・青磁片・染め付け片などが検出されている。

３号掘立柱建物址

調査区北東端に位置し、東西７m、南北2.5mの建物と東西3.8m、南北６mの長方形の建物が結合した建物で、東側に東西1.5m南北2.5mの張り出しが付く形態である。この柱穴がある面は平坦であるが、２号掘立柱建物址のある遺構面と途中20cmの段を隔てて40cm程度の段差がある。柱穴は黄色のローム層を基盤として黒褐色土が入っている状態でプランが確認された。深さは20～30cm程度である。この周辺から出土した遺物は、平安時代と縄文時代の土器片が殆どであったが、少量の土師質土器片も検出されている。

４号掘立柱建物址

この遺構は３号掘立柱建物址の西に同じレベルで隣接して存在する。規模は東西６m、南北５mを測り、柱穴の数も少なく、深さも浅いものである。出土した遺物は、志野焼片・白磁片鉄釉碗片・鉄釉摺鉢片・染め付け片などである。この内染め付け片は古伊万里と思われる。鉄釉碗片、摺鉢片は共に瀬戸美濃系のもの

である。

1号柱列

3号掘立柱建物址の南に隣接して東西に1列、長さ6m余りの柱列がある。これは、3号掘立柱建物址の築かれている基盤より、40cm程度下がった2号掘立柱建物址と同じ基盤にある。この柱列と3号掘立柱建物址との間には幅2～1.5mのテラスがある。このテラスには柱穴は殆ど見られないため通路とも考えられる。そのすぐ南にこの施設と平行して存在しているため、塀的な性格を想像させる柱列である。

5号掘立柱建物址

この掘立柱建物址は調査区中央に集中して存在している大型の建物のひとつである。南に入口状の施設が張り出し、東側には濡縁か庇状の施設の存在が考えられる柱列がある。また、西には、2間四方の張り出しがあり、これを、6号掘立柱建物址との渡り廊下的な施設としてとらえることも可能である。また北側には半間の張り出しが付き、床の間などの施設を想定できる。柱間は1.8mを基本としており、建物の規模も東西10.8m（6間）、南北10.8m（6間）である。西側の張り出しの規模は東西南北ともに3.6m（1.5間）を測る。この5号掘立柱建物址の南には、1号石組遺構があり、その間は特に中世遺構は確認されていないため、この部分は庭として考えることも可能である。このように考えると、この建物は客殿とも言えるのである。この地区から出土した遺物は、主に東側部分からの出土が多く、青磁皿片・志野小皿片・菊皿片・鉄釉長瓶底部・摺鉢片・鉄釉茶入底部・鉄釉碗片・灰釉皿片・染め付け片など種類も豊富である。また内耳土器や土師質土器などの日用雑器の出土数も多い。この遺物の出土状況からもこの建物の性格が一般的なものでないと言えよう。

6号掘立柱建物址

5号掘立柱建物址の西に平行して建てられているもので規模は東西10.8m（6間）、南北4.5m（2.5間）を測り、南西に東西1.5間、南北1間の張り出しがある。柱間は1.8mを基本としている。この建物は、1号掘立柱建物址群の北で、7号掘立柱建物址の正面に位置している。またこの建物の北には8号掘立柱建物址がある。周辺から出土した遺物は、灰釉の小皿と鉢の破片、鉄釉の燭台などであるが出土量は少ない。この建物の南側下には東西に走る溝があるが、この溝はこの建物とは時期的に異なると言える。

7号掘立柱建物址

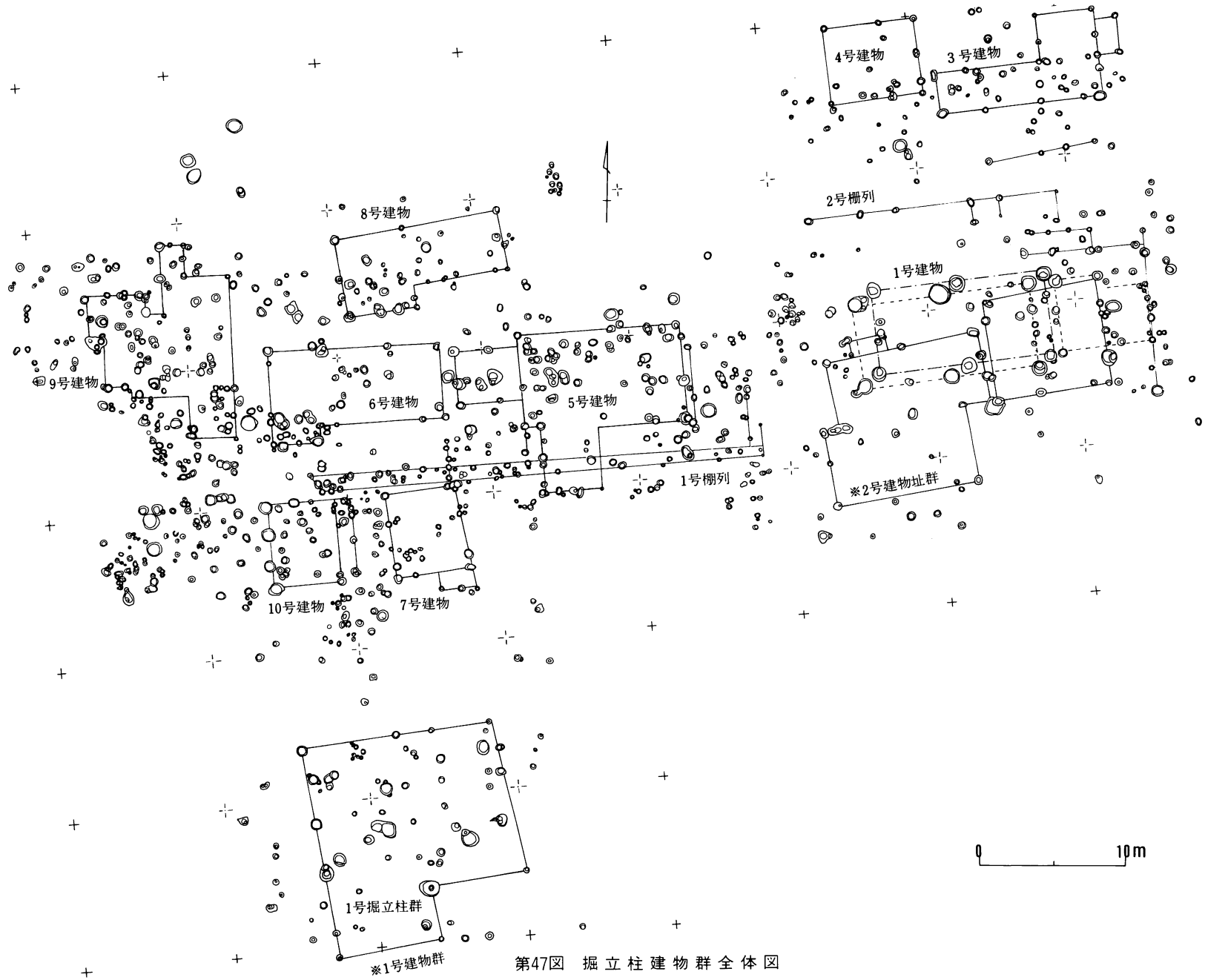
6号掘立柱建物址の南で1号掘立柱建物址の北に位置するこの建物は、主軸を南北にもち東西4.5m、南北5.6mの規模を有する。南に南北1間、東西1.5間の張り出しがある。この建物の北側下には竪穴状遺構があり、更に柵列と思われる東西に走る溝がある。竪穴状遺構はこの建物と並行して存在したとは考えられず、建物の方が新しいと言える。

8号掘立柱建物址

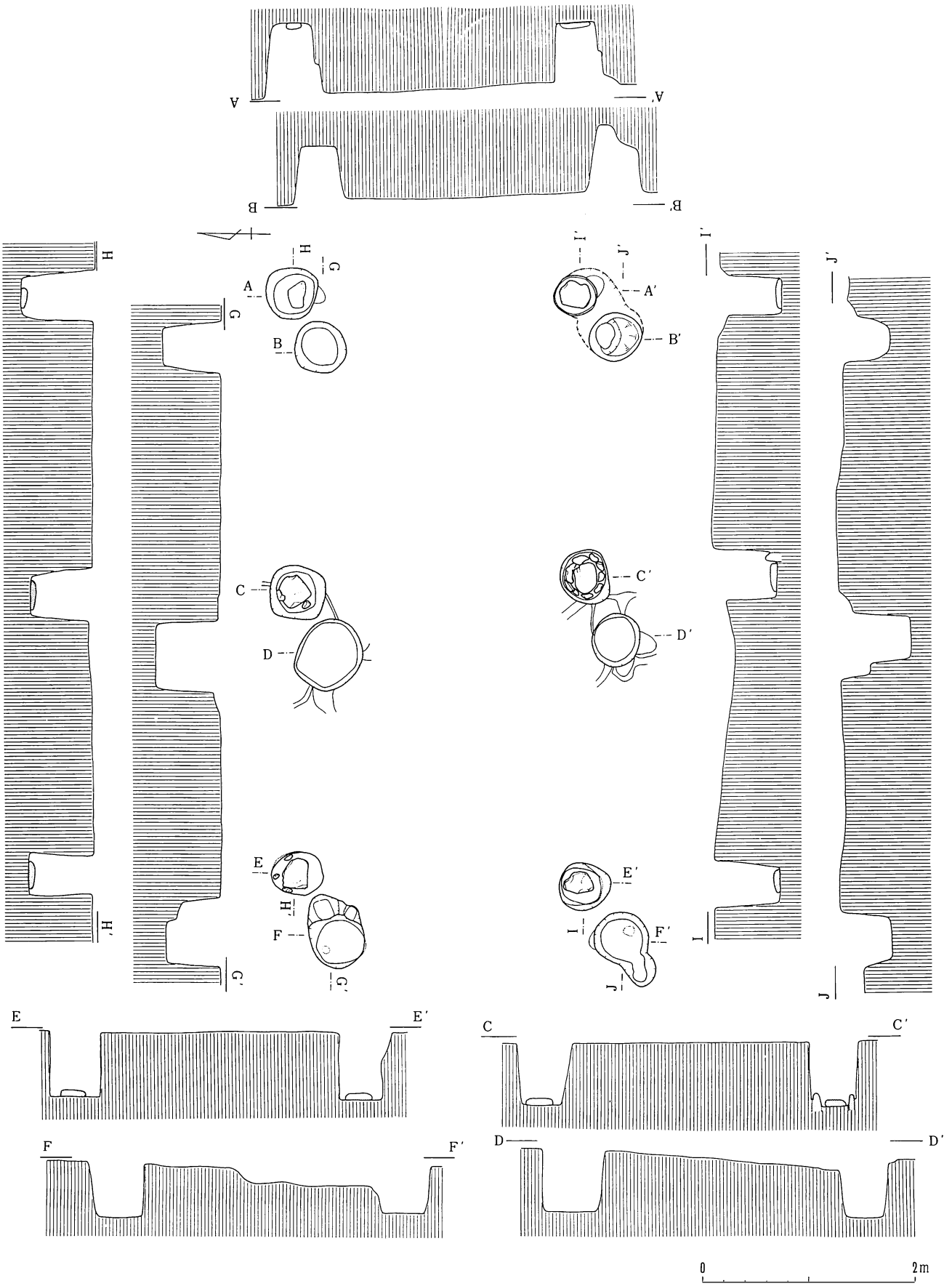
この建物は調査区北側に位置し、東西10.8m、南北5.4mを測り、南東側が奥行き1.6m程欠けている。建物の下には多くの土坑が切り合っており、建物に伴うすべての柱穴を検出できなかった。柱間は1.8mを基本としており、他の多くの建物同様に主軸は南北である。しかし、中央にある大型の建物よりやや北に振れており、建設時期が異なる可能性がある。この地区から出土した遺物は、灰釉の皿の底部である。

9号掘立柱建物址

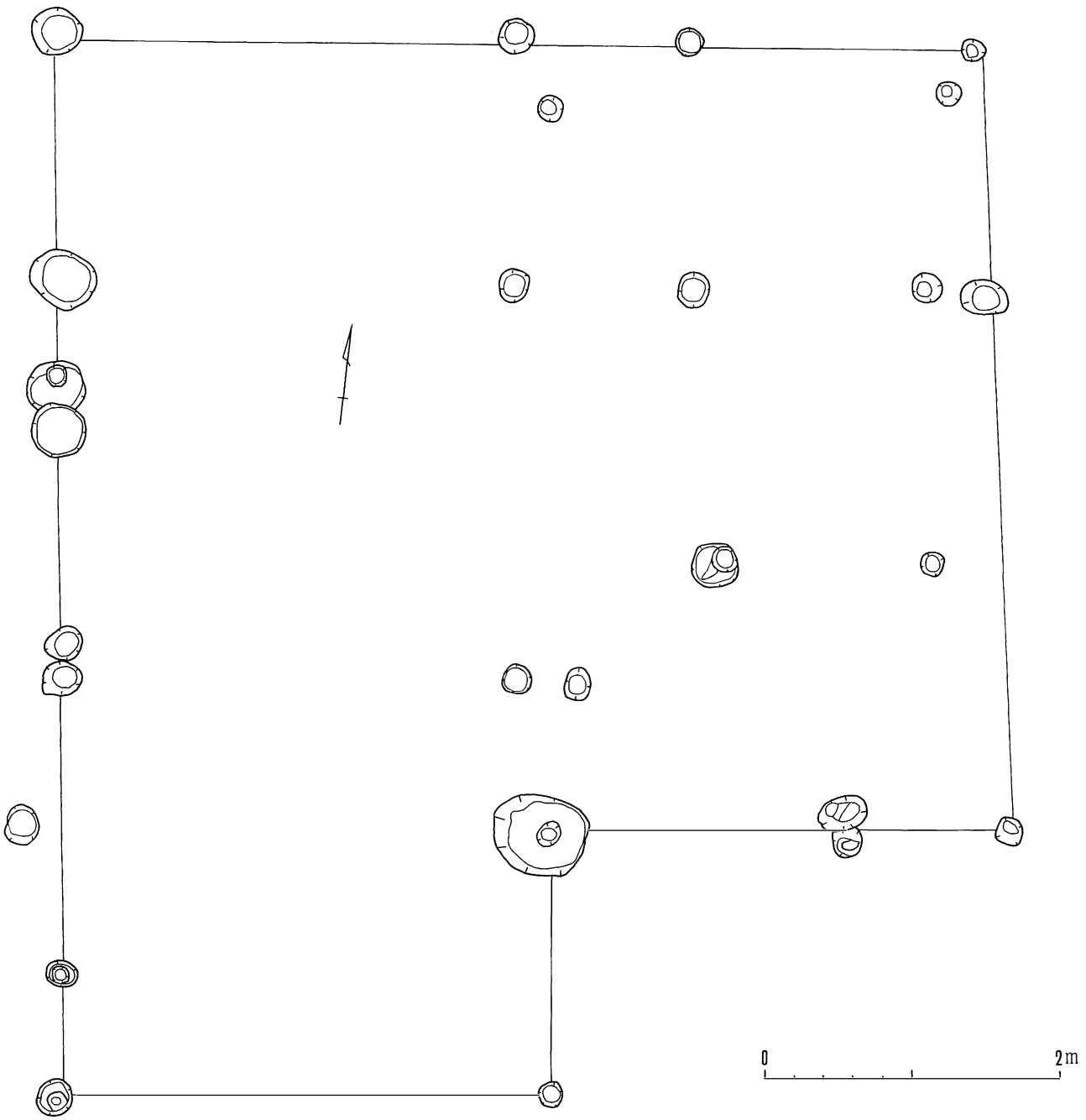
8号掘立柱建物址の西に隣接して建てられている主軸を南北とする建物である。この下には8号同様に多くの土坑があり、地下式土坑も存在している。規模は東西9.5m、南北10.8mを測り、北側に張り出しが、



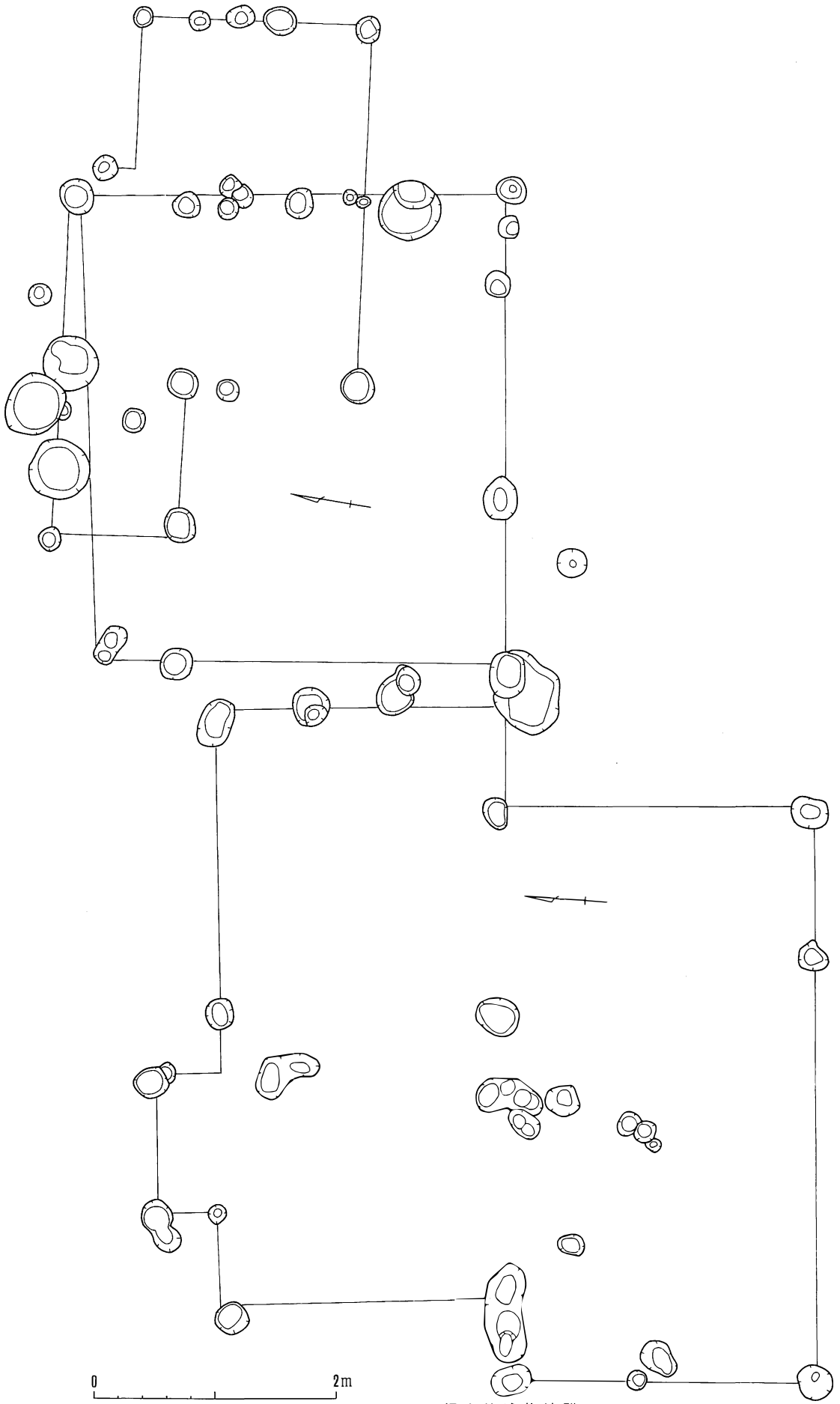
第47図　掘立柱建物群全体図



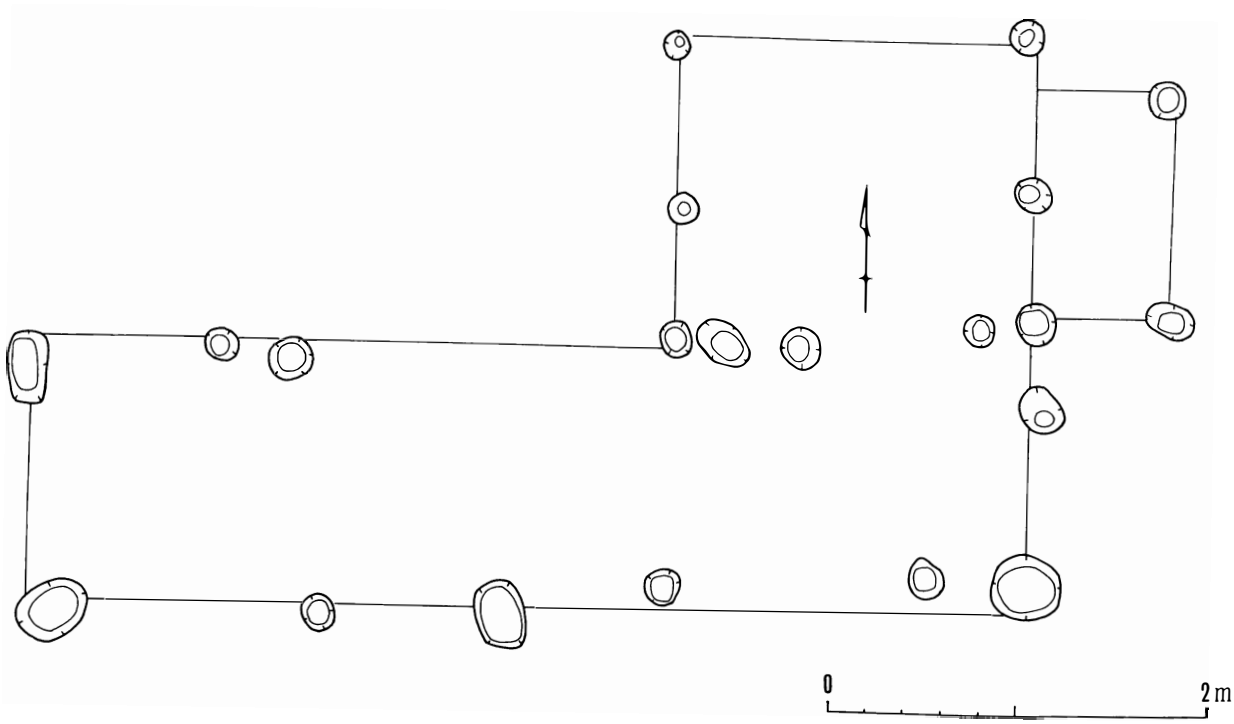
第48図　1号掘立柱建物址



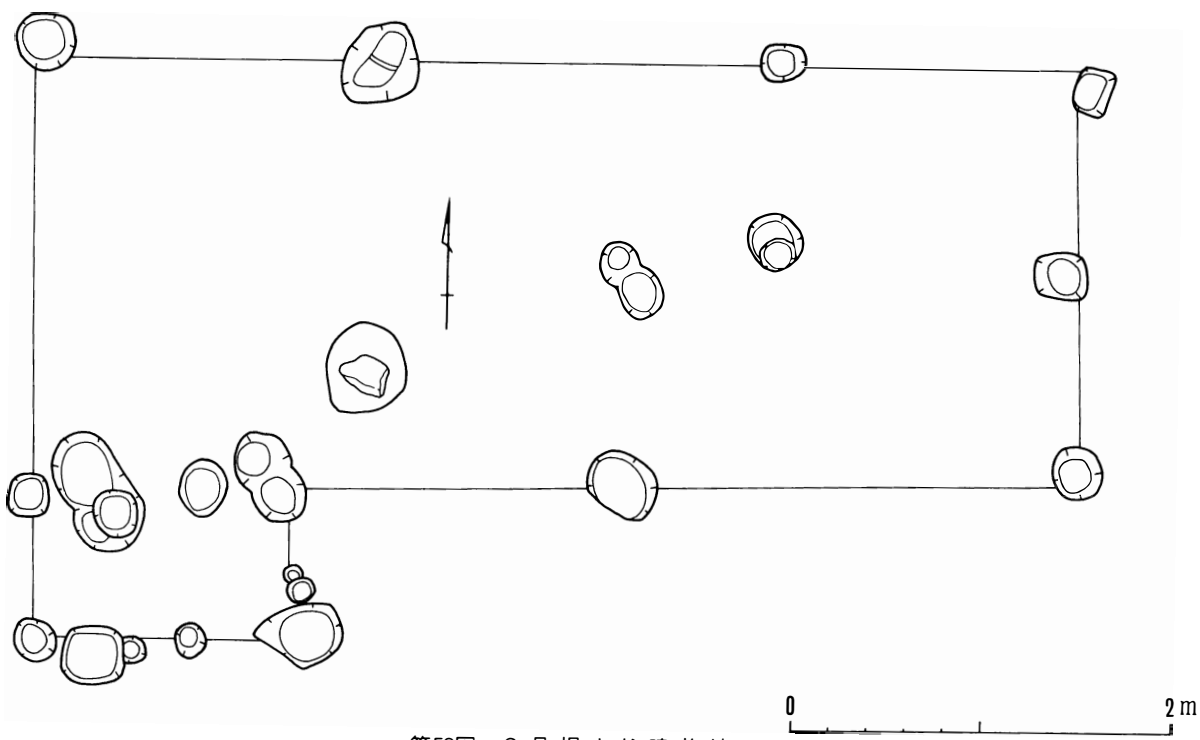
第49図　1号掘立柱建物址群



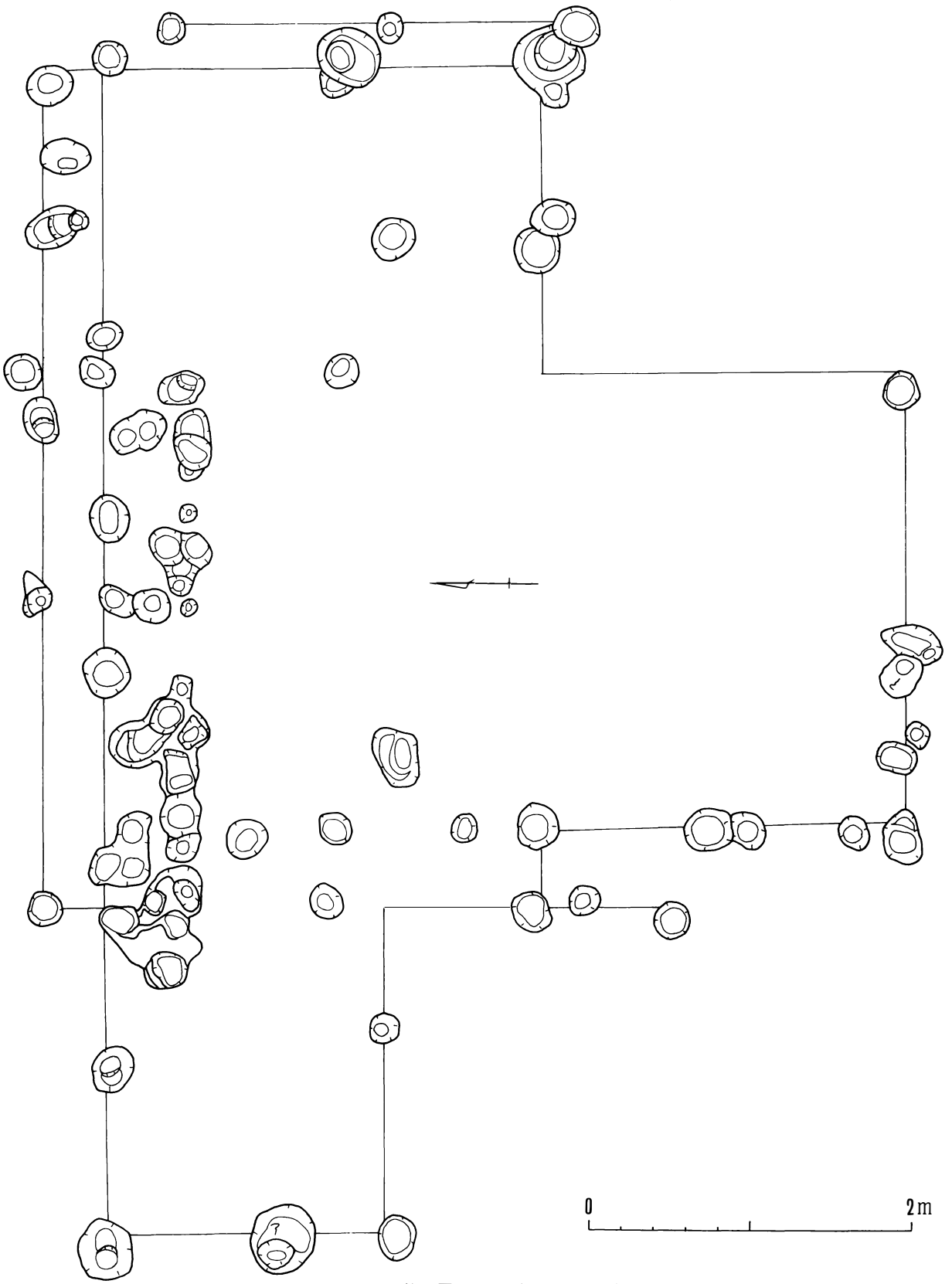
第50図　2号掘立柱建物址群



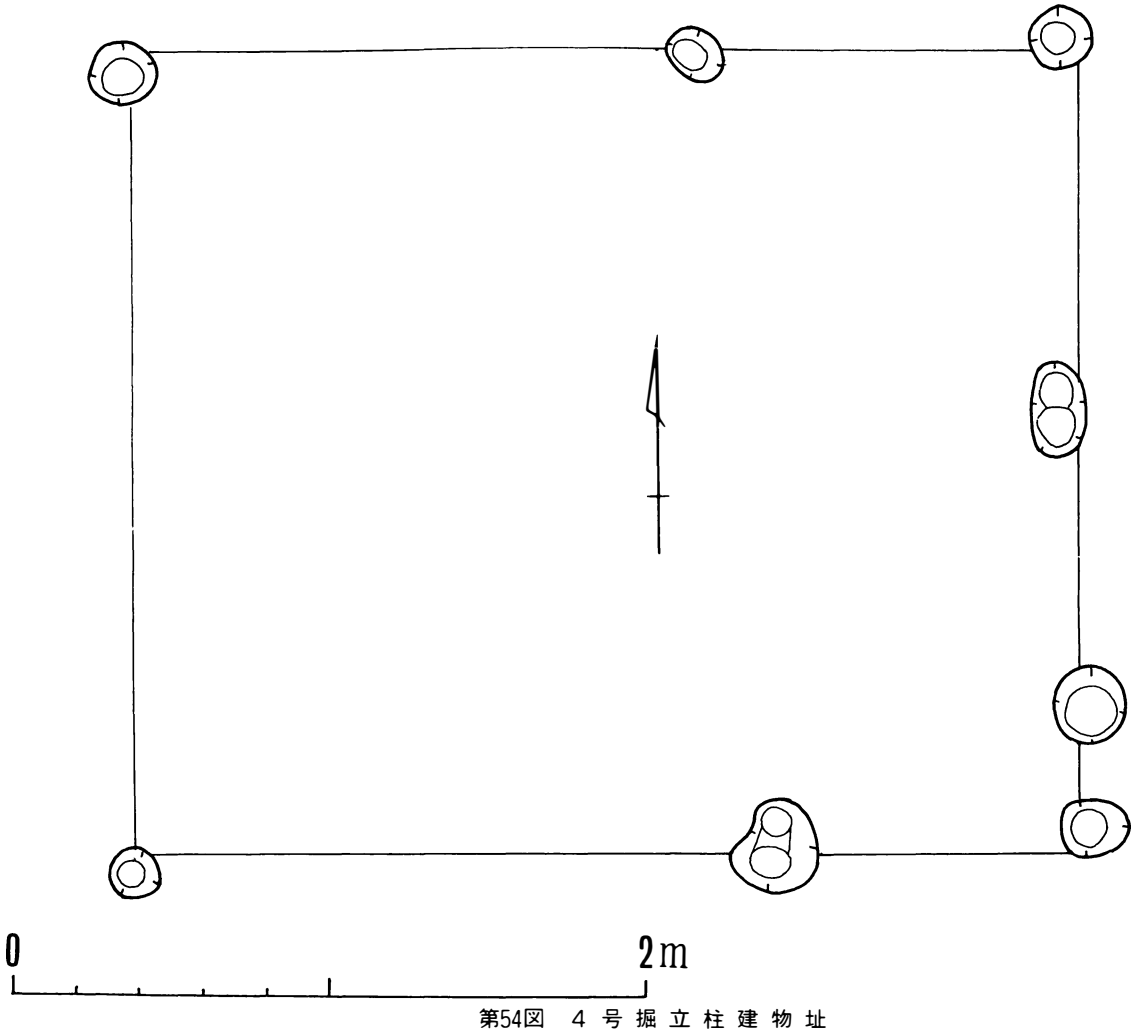
第51図　3 号 掘 立 柱 建 物 址



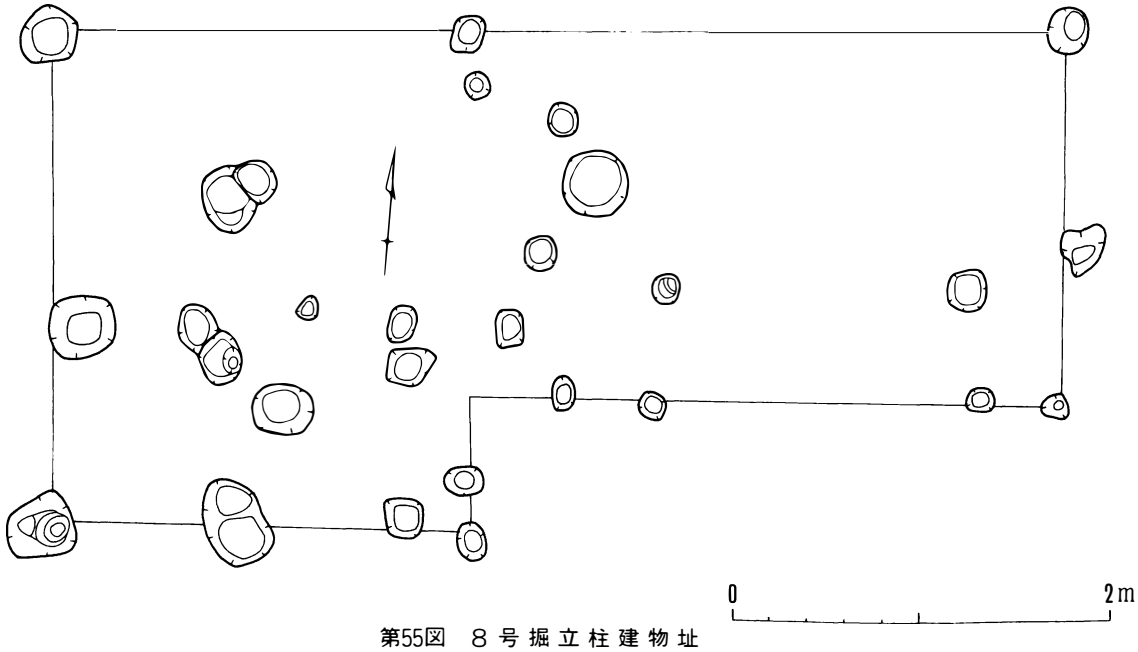
第52図　6 号 掘 立 柱 建 物 址



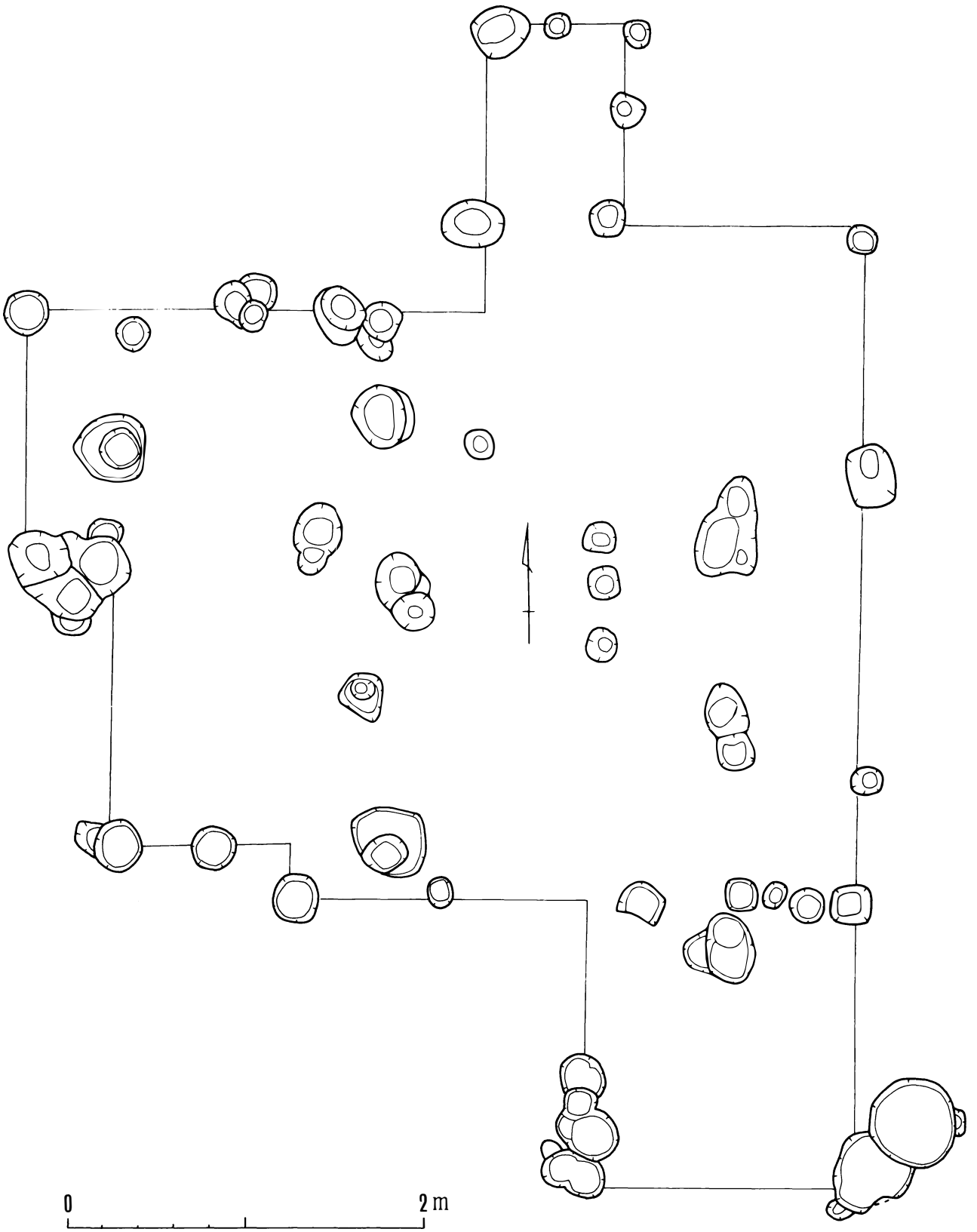
第53図　5号掘立柱建物址



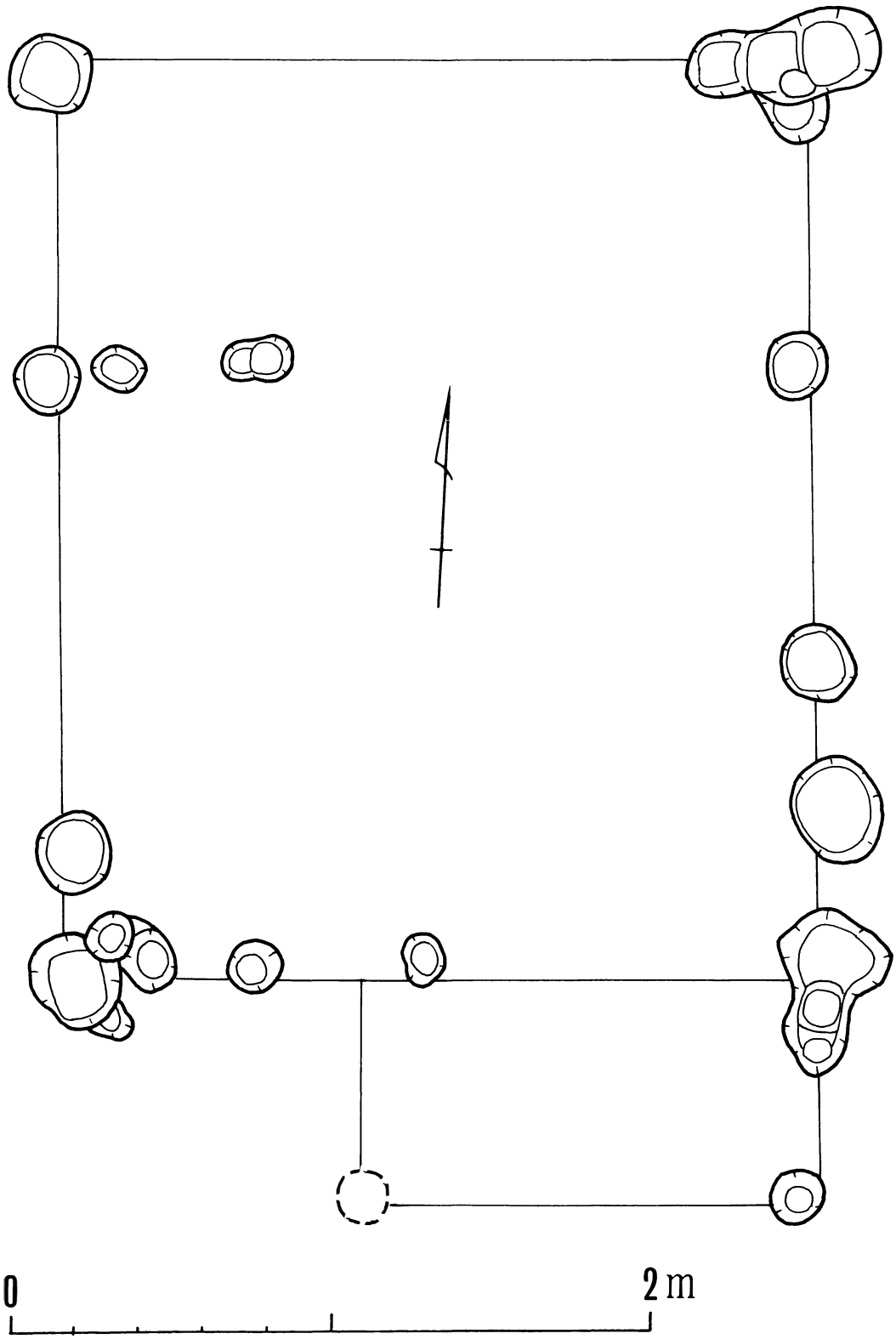
第54図　4 号 掘 立 柱 建 物 址



第55図　8 号 掘 立 柱 建 物 址



第56図　9号掘立柱建物址



第57図　7号掘立柱建物址

南西にへこみがある平面プランである。遺物は、内耳土器や鉄滓と砥石などが出土した。

10号掘立柱建物址

この建物は、1号掘立柱建物址の北西にある空堀と土橋の北側に位置し、柱穴も1号掘立柱建物址を除くと本遺跡では最も大きい。このような状況から、門址と考えられる。この門址の形態は、左右に建物が付属しているため長屋門と考えられる。堀の中間にある土橋の幅は3.4mあり、門址の中間にも同様な幅の柱穴が確認できる。柱間は1.8mを基本として大型柱穴は東側に4個、西側の端に2個認められる。この建物の存続時期は、1号掘立柱建物址群が存在していない時期と考えられるが、堀が背後にある時期に1号掘立柱建物址群があるとは考えにくいので、この施設の方が古いと考えることが妥当であろう。この周辺から出土した遺物は多く、灰釉の小皿、碗、鉢、香炉・鉄釉の碗・青磁の碗、皿・白磁の小皿・染め付け小皿、碗などである。また建物東側からは安南系の染め付け小皿が検出された。この遺物の時期は16世紀後半以前と考えた方が妥当である。

以上本遺跡の掘立柱建物址について概観してきたが、これらの特徴は次の点に要約されると思う。

1）柱間は1.5mの建物と1.8mの建物がある。

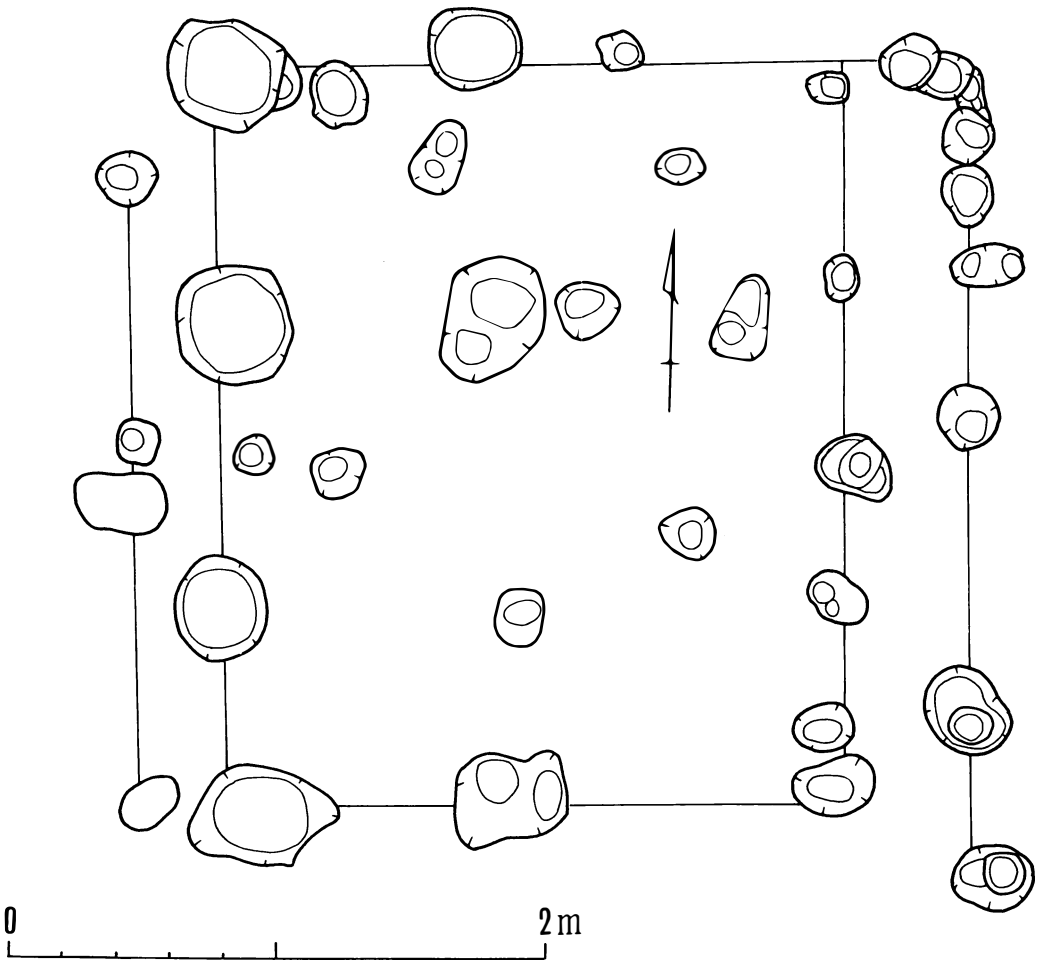
2）重複している部分があることから2時期以上の時間的な隔たりがある。

3）新しい建物の柱穴には底部に平石を置くものが見られる。

4）建物の多くは、主軸が東西にある。

5）遺跡の中央部にある建物は一直線上に並んでいる。

このことから、時期が異なる建物でも、この地に建設する意志には共通したものが存在していたことが言える。このことは、この遺跡は連続性があることを意味しているのである。



第58図　10号掘立柱建物址

第4章　遺　　物

1　内耳土器

出土した内耳土器は、口縁部と底部の形態及び器の深さから4類に大別することができる。復元実測による大きさからは、第59図No.5（口径24.6cm、底径21.6cm、器高15.1cm）を中心とするもの、第59図No.10（口径29cm、底径27cm、器高17.5cm）を中心とするもの、第61図No.26（口径29.6cm、底径20cm、器高15.5cm）を中心とするもの、第61図（口径35cm、底径27cm、器高17.3cm）を中心とするもの、第60図No.22（口径45cm、底径39.4cm、器高11.7cm）を中心とするものに分けることができる。口径と器高との比率は、No.22が0.26である以外は0.5～0.6の範疇に入る。また、口径と底径の比率は、No.5・7・10・22が1～0.9前後であり、残りのものは0.7～6である。

第　1　類

第61図No.21のように胴部上半から口縁部にかけて大きく外反し、耳がこのくびれ部をまたぐように取り付けられている。胴部はやや直線的内側に傾斜しながらに底部に移行し、底部は平底を呈している。第59図No.5も内耳部分が残存していないが同様な器形であろう。この器形は御社宮司遺跡における第Ⅰ期に比定されると思われる。

第　2　類

第61図No.26・24・25、第59図No.6のように口縁部から底部にかけて緩やかなカーブを描き、耳が口縁部直下に付けられている。御社宮司遺跡の第Ⅲ期に比定される遺物であろう。

第　3　類

第59図No.1・7、第60図No.17・19が該当し、胴部が直角に近く立ち上がる器形を呈するが、(第60図No.18)胴部の立ち上がりが内湾するものもある。御社宮司遺跡の第Ⅴ期に比定されるものである。

第　4　類

第59図No.1・8、第60図No.13、第61図No.30のように胴部の立ち上がりがやや外反する形態のもので、御社宮司遺跡の第Ⅱ期に比定されるものであろう。

2　陶　磁　器

本遺跡から出土した陶磁器は白磁、青磁、染付などの舶載品と灰釉小皿、天目茶碗、鉄釉碗、緑釉碗、鉄釉水滴、灰釉碗、鉄釉瓶、菊皿、志野小皿などの瀬戸美濃焼の国産品に大別できる。出土量が多いのは灰釉端反皿と丸皿で、大窯期Ⅰ～Ⅲ段階に見られるものである。また、志野丸皿も出土している。

①　志野丸皿

実測可能な破片は5点出土した。第62図No.10～13、第64図No.37であるが、No.10は完型で、口縁部の一部が欠けている。この部分を中心に煤が付着している。内面には鉄絵が描かれている17世紀中葉に位置付けられる穴田2号窯の製品と考えられる。この遺物を含めて高台は断面三角形の削り出し輪高台で、釉の色調は、乳白色でピンホールが多い。

② 灰釉丸皿

実測可能な遺物は破片を含めては、20点以上出土した。第63図No.14～17・19、第66図No.65・66は見込みに印花文があり、No.65は昔田窯のものに、No.66は小金山窯のものに酷似している。第63図No.17は、Ｃ７から３枚重なって出土した１枚である。

③ 灰釉端反皿

第63図No.15、18、第64図No.24・25・32が相当するものであるが、口径11.2cm、器高2.7cm、高台径5.8～６cm前後を測る。昔田窯出土物に酷似している。見込み部分に印花文が施されているものが多い。高台は断面三角形の付け高台である。

④ 灰釉小皿

第64図No.30は、口径10.2cm、器高3.2cmを測り、口縁部の反りが大きく立ち上がりも比較的強い物で、高台は付け高台で15世紀の後半に位置付けられる遺物である。釉の表面には灰が降り製品としては良くない。１号土坑から第65図No.47と共に出土している。

⑤ 鉄釉小杯

第65図No.47は１号土坑から出土したもので、底部は糸切り痕を残し、無釉である。

⑥ 染付皿

第63図No.20～23は染付であるが、No.20は古伊万里の浅鉢で口径14.6cmを測る。No.21～23は明の染付でNo.21と22は同じグリット(A10)からの出土で、同一個体とも考えられる。No.23はＧ７グリットからの出土で高台径4.2cmを測る。この他実測不能な小破片が30片程出土している。これらの多くは江戸時代に属するもので、耕作中に紛れこんだものと考えられる。安南写しとも考えられる数片も含まれている。

⑦ 灰釉碗

第66図No.64は、１号土坑の北の柱穴から出土し、口縁部の一部が破損している程度の完形の碗である。内側に赤色の薄い付着物がみられたが、これは漆かとも考えられる。

⑧ 緑釉碗

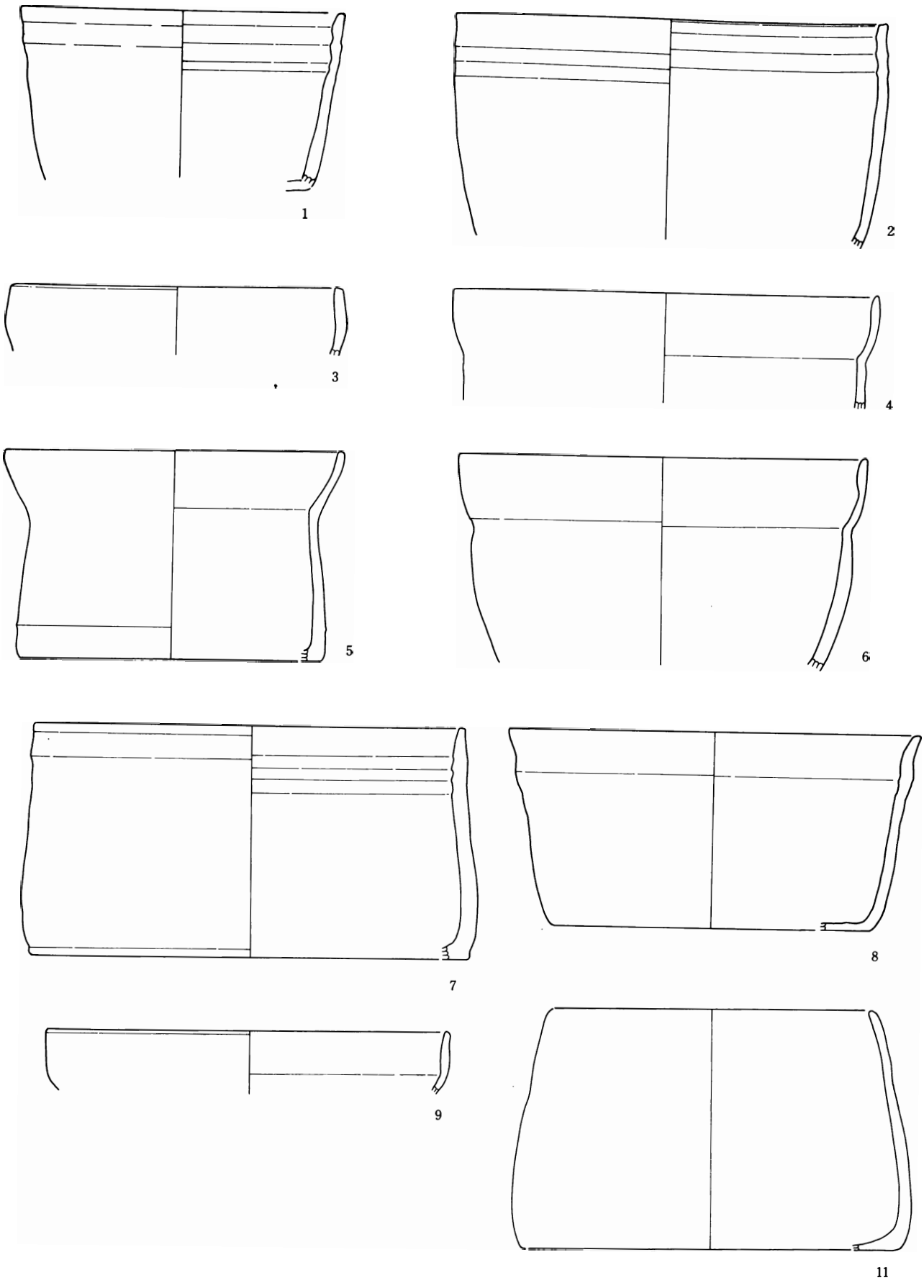
第62図No.７は、Ｊ８グリットとＬ８グリットから出土した破片が接合したものであり口径11cmを測る。釉に色調は濃緑色を呈し、胎土は乳白色でやや柔らかい。この遺物と同一固体と考えられる破片がK11グリットからも出土している。16世紀前半に位置付けられるものと考えられる。

⑨ 鉄釉菊皿

第65図No.48は15号地下式土坑から出土したもので、口径10.7cm、底径6.3cm、器高1.8cmを測る。高台は削り出しで、釉はない。見込み部分の釉は口縁部に比較すると薄い。No.55は調査区中央のＦ７グリットの柱穴内から出土したもので、見込みと高台部分は無釉である。

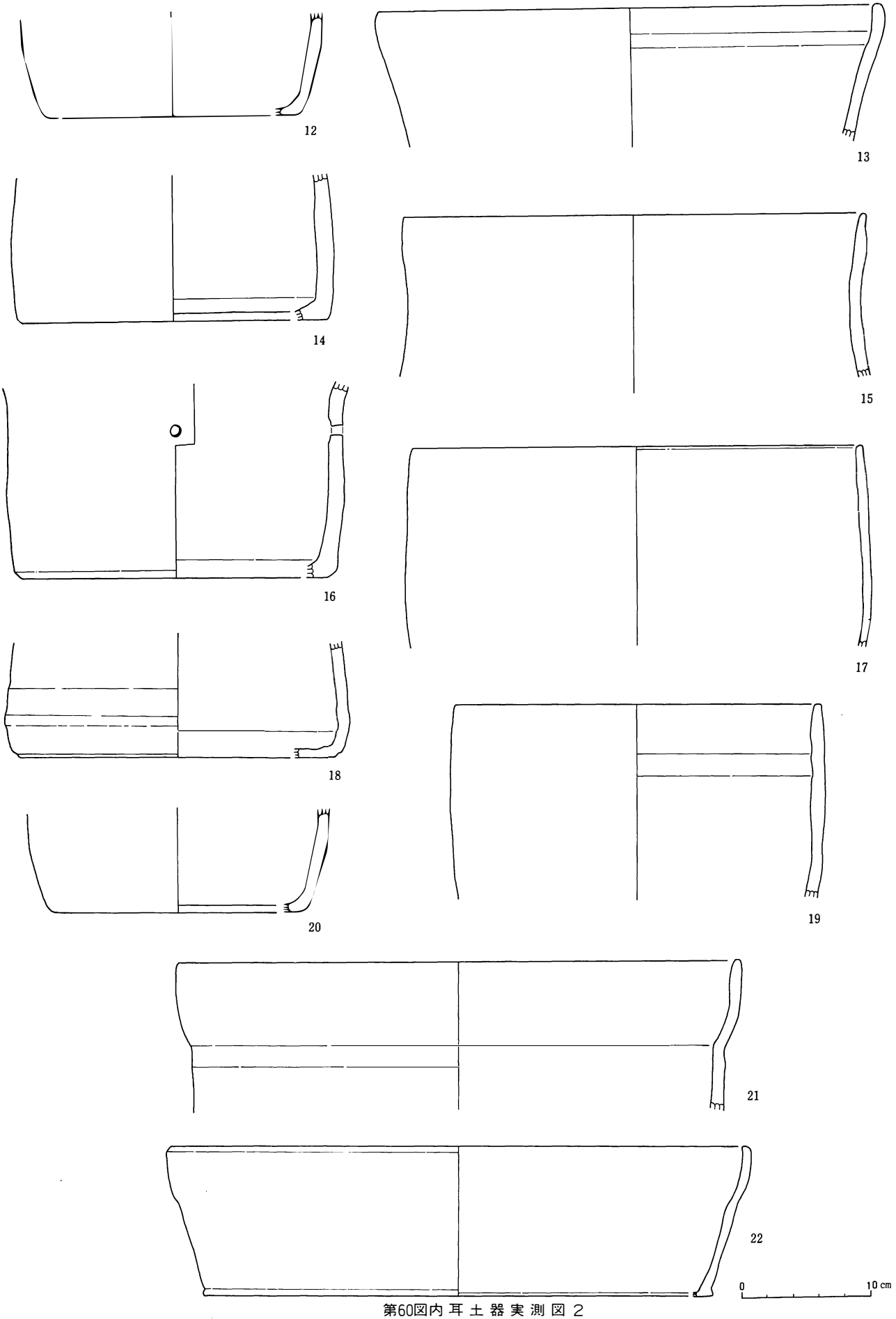
⑩ 青磁・白磁

第62図No.１～４が青磁、No.５～６は白磁である。No.１は口径11.6cmの口縁部波状の碗、No.２は口径13.4cmの口縁部波状の碗、No.３は口径15.4cmの碗、No.４は口径16.6cmの碗である。白磁は共に皿で口径10cmと12cmである。青磁の外面には蓮弁が施されている。白磁皿の口縁部は玉縁状を呈する。この他実測不能な

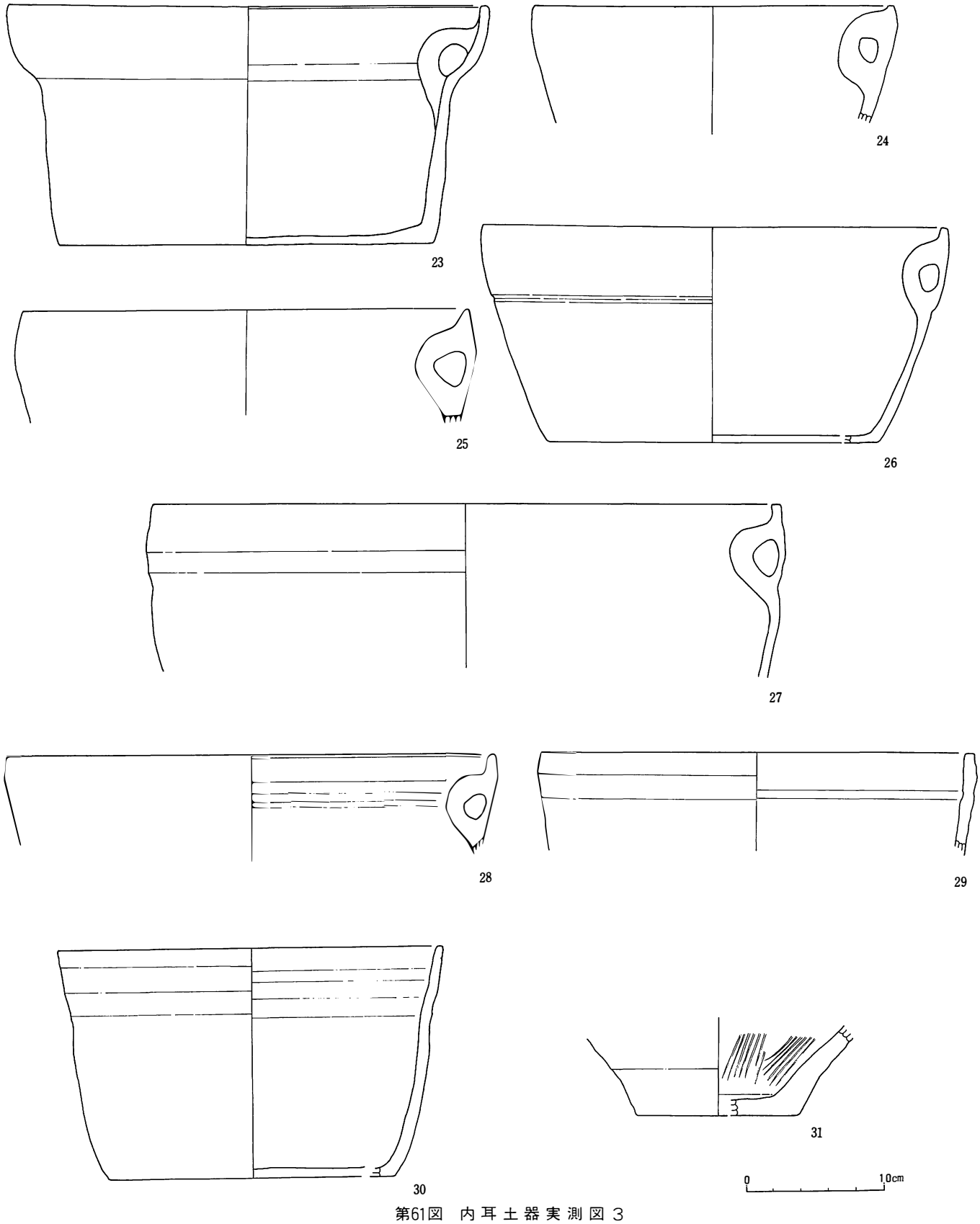


第59図　内耳土器実測図 1

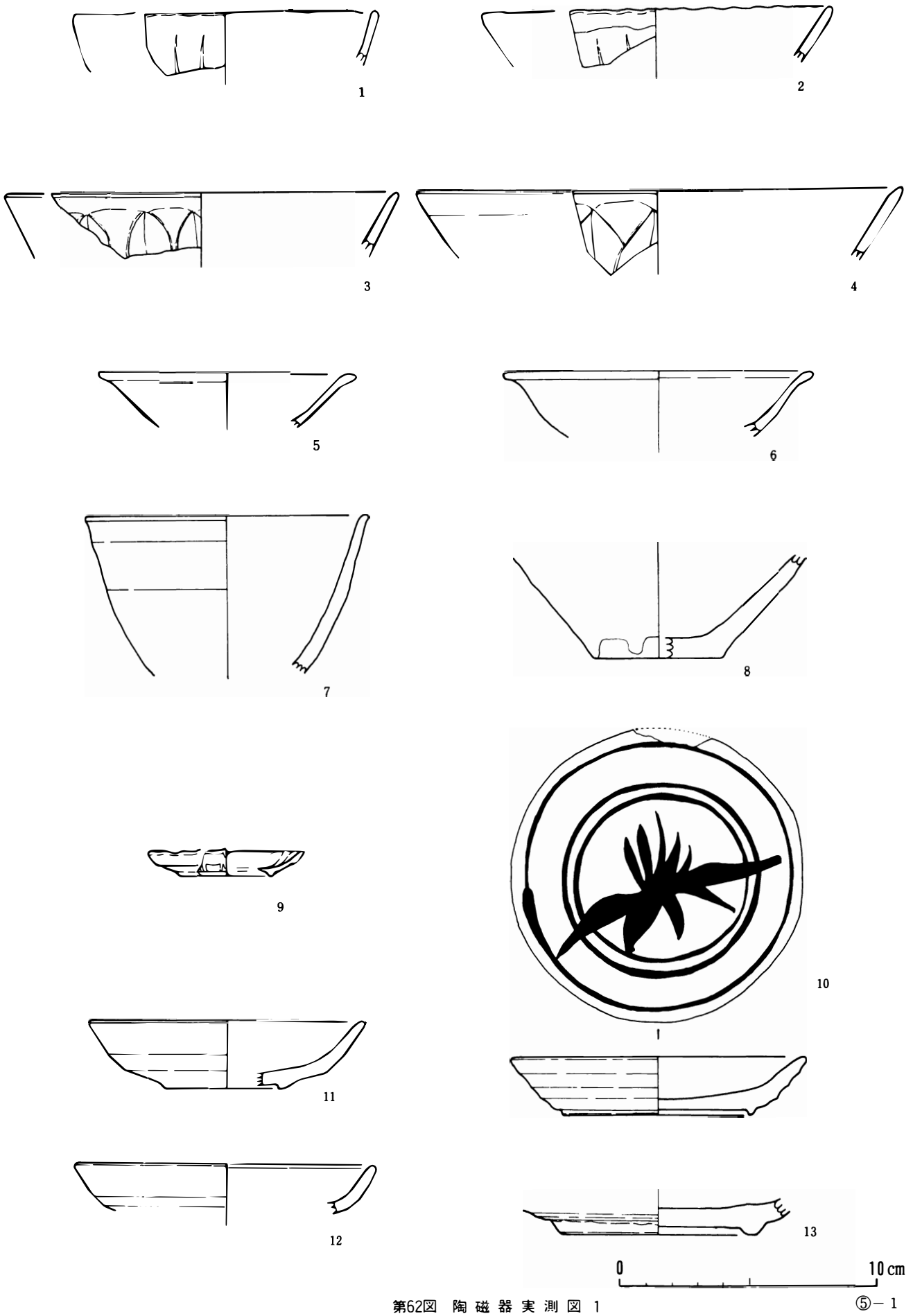
0　10cm



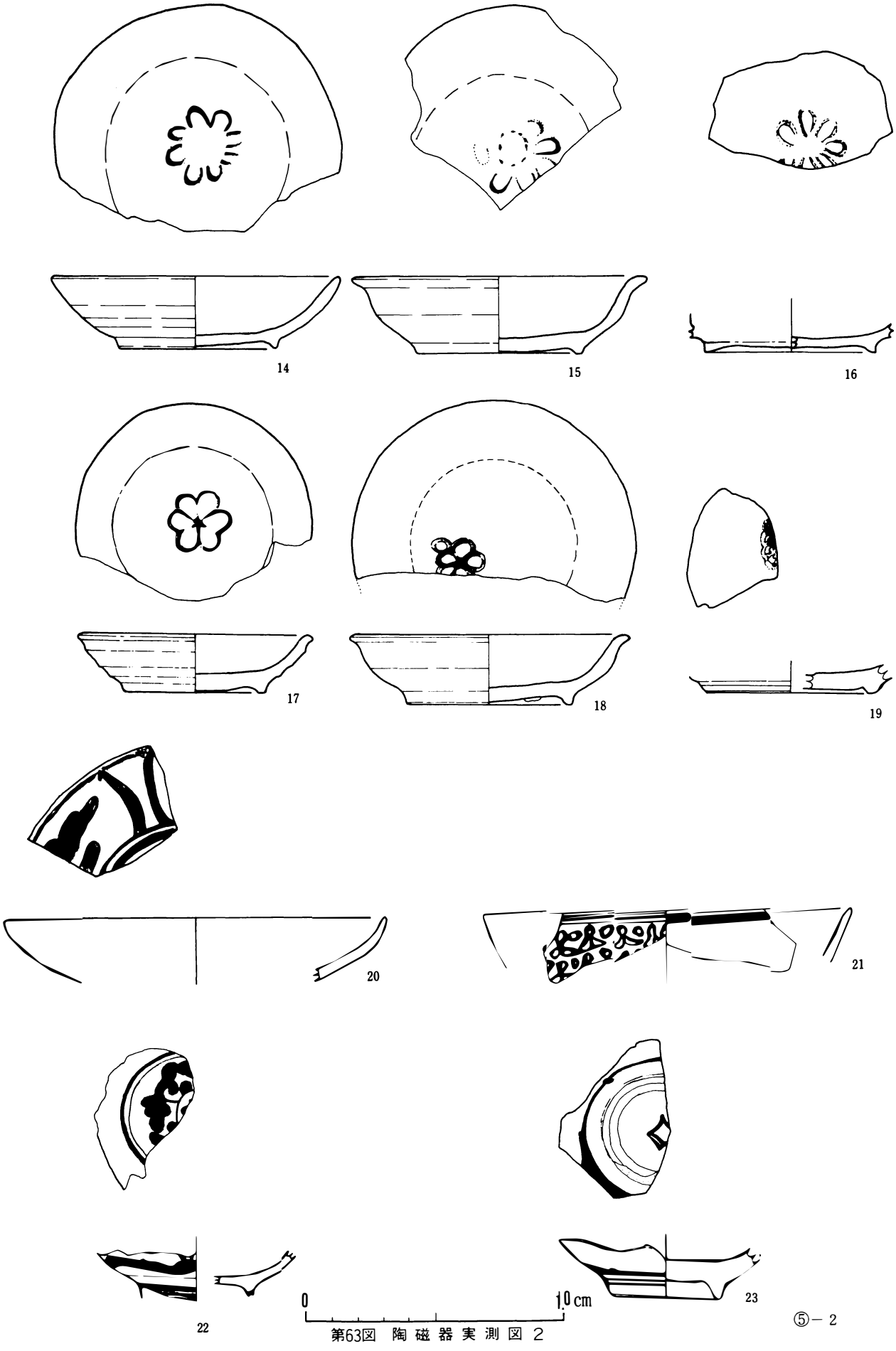
第60図内耳土器実測図 2



第61図　内耳土器実測図３

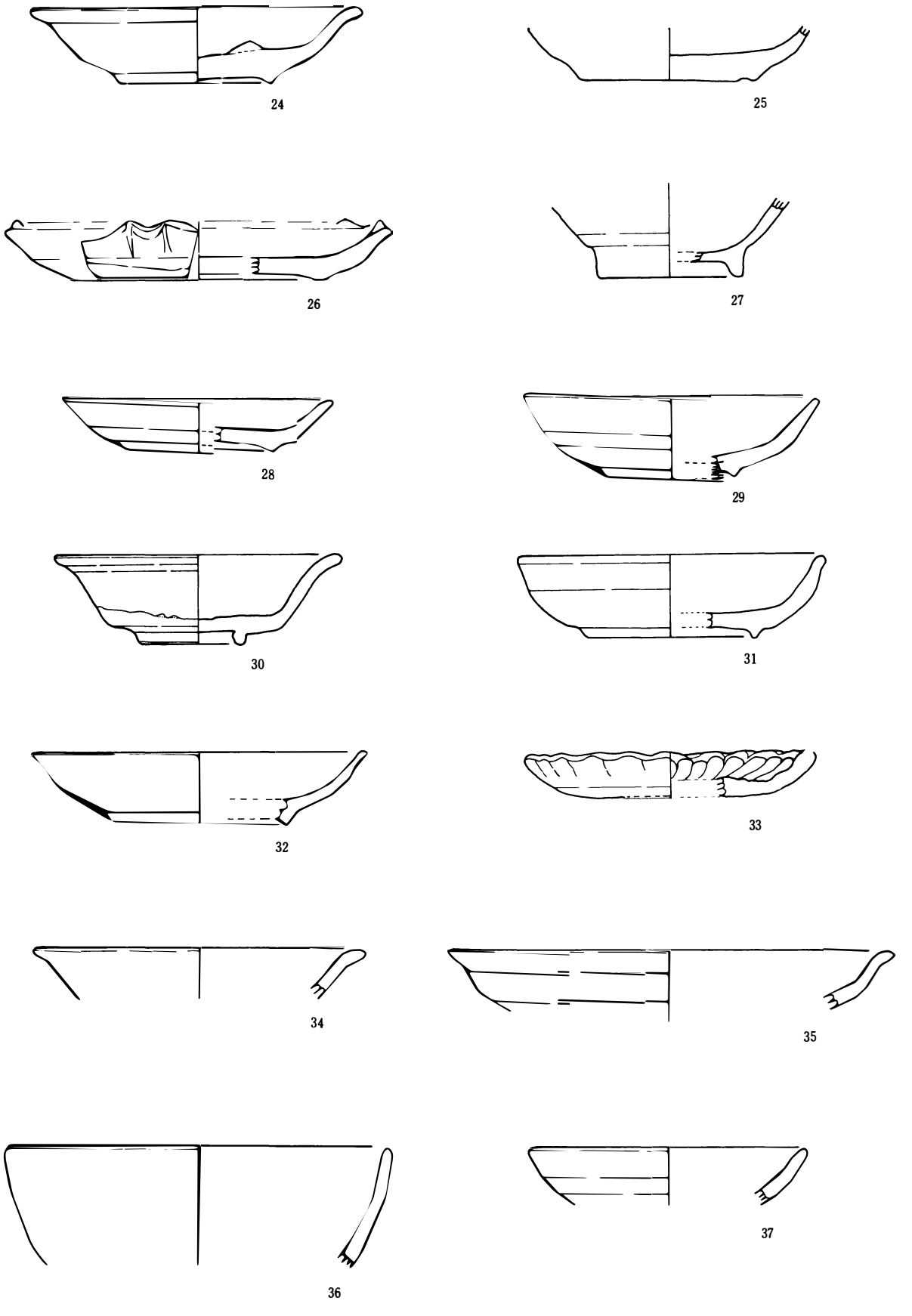


第62図　陶磁器実測図 1　⑤－1

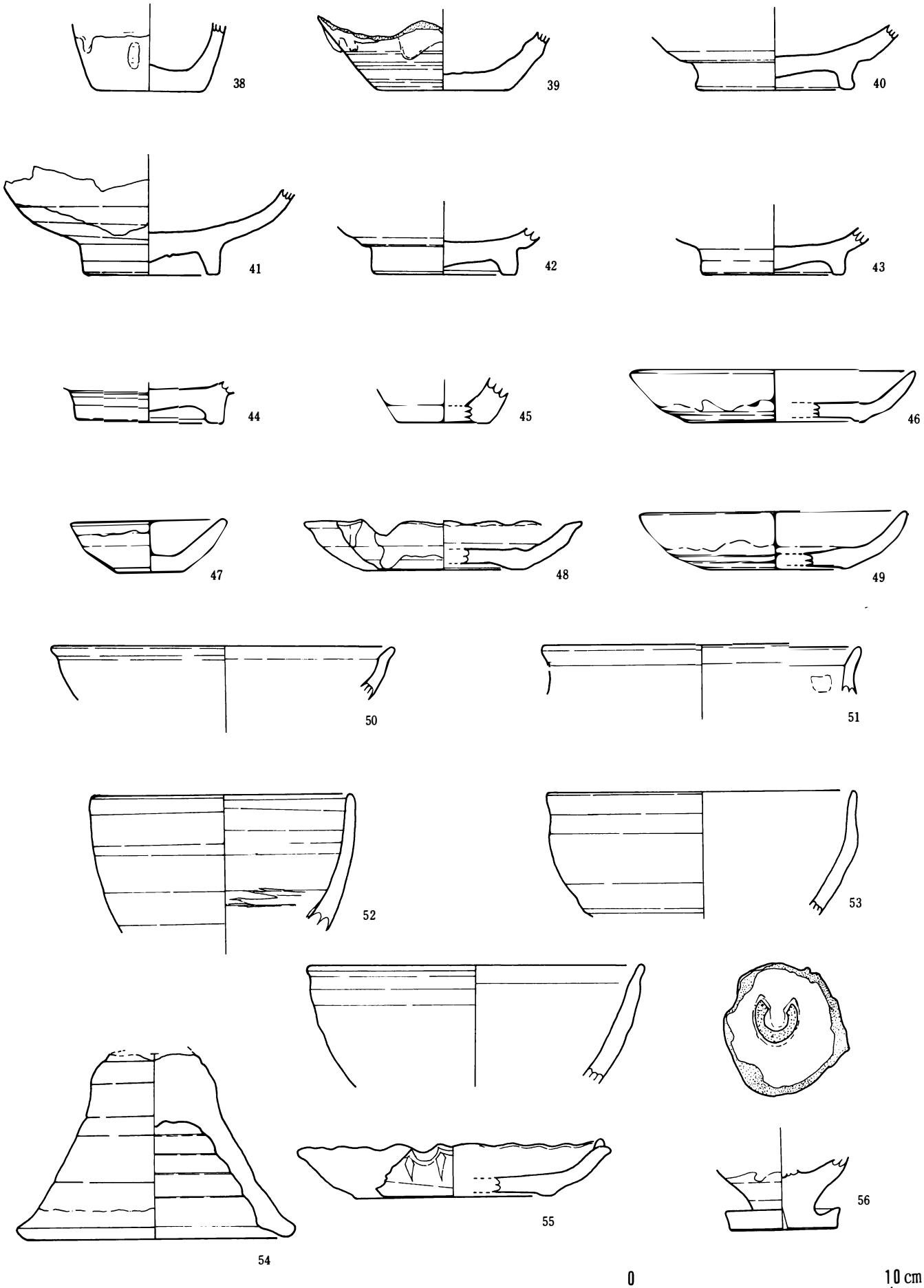


第63図　陶磁器実測図２

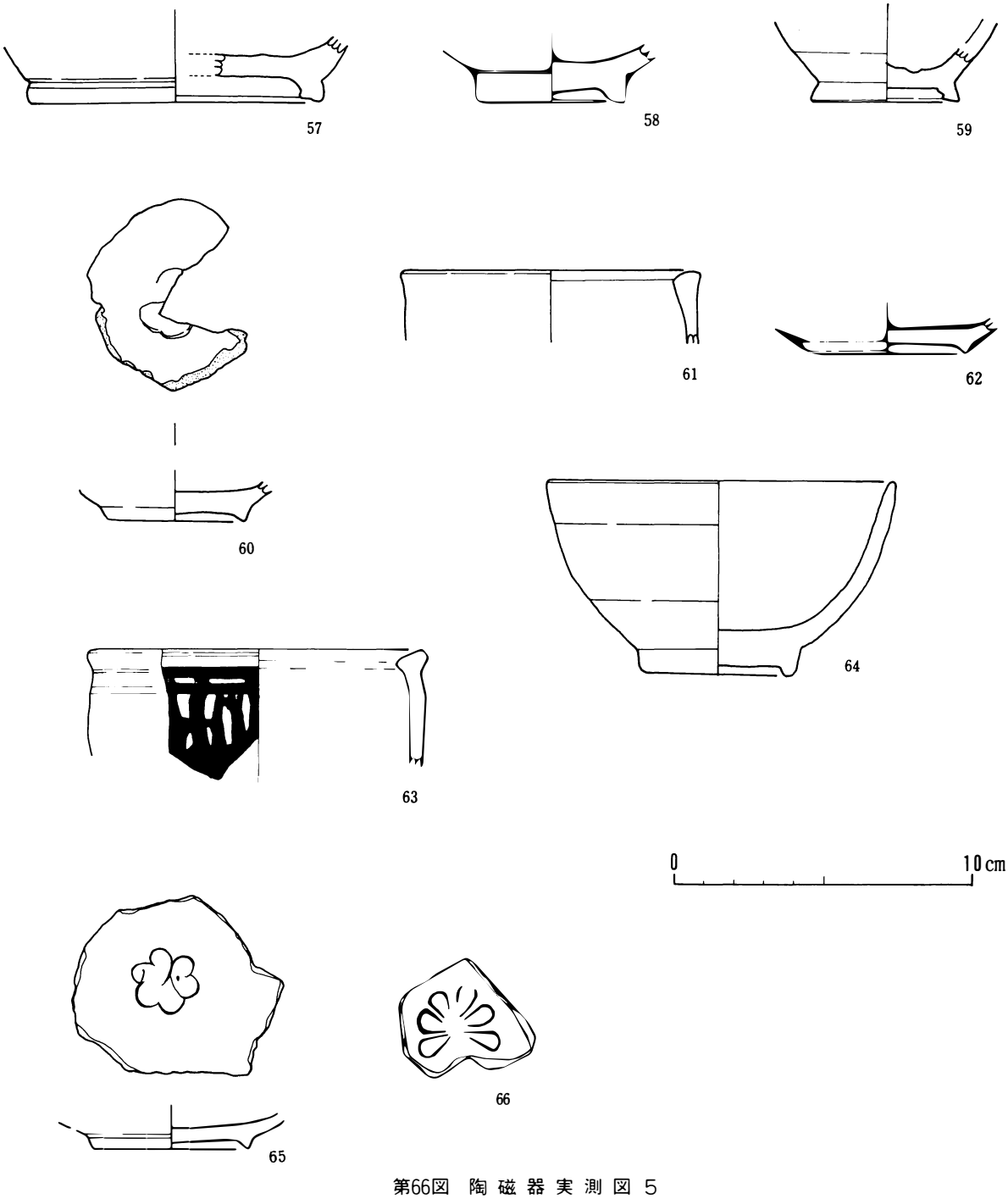
⑤－２



第64図　陶磁器実測図３　⑤－



第65図　陶磁器実測図 4　⑤－



第66図　陶磁器実測図５

破片は20点以上出土しているが、その多くは青磁の碗と思われる。白磁の形態は皿以外に検出されていない。

⑪　翡翠釉の小皿

第62図№9口径6.2cm、底径3.6cm、器高1.5cmを測る。胎土は灰白色で高台の畳付から内側は無釉である。口縁部は花弁状に波状で、外面には花弁の刻みがある。山西省あるいは河南省地方の窯で製作されたと言われている法花の翡翠釉に良く似ているものである。

3　石　　臼

本遺跡から出土した石臼は、大きく分けて穀臼と茶臼である。石材は安山岩であり、総てが破損品である。出土状況は10号地下式土坑から11号地下式土坑に入る部分を閉塞するために石臼が数個使われていた。また130号土坑（竪穴状遺構）の覆土中より細かく割られた茶臼が出土した。多くの石臼は調査区中央に南北にある石積の中から出土したものや土坑、石組中からの例がほとんどである。

①　茶　臼

上臼が1/4欠損している№1は130号地下式土坑の覆土中から細かく割られた状態で出土したもので、下臼は1/2が欠損している。上臼の溝は6分画で下臼と同様であるが溝の間隔は広い。この臼は全体的に表面が薄く細かく剝離しているため、火を受けたと考えられる。№3は茶臼の下臼であるが、溝が無く、一部が擦り減っているので廃棄後に砥石のような研磨作業用具に転用されたと言える。№4は茶臼の上臼で、溝の状態から№2とは別の個体である。№6は上臼、№7～9は下臼の外縁部分の破片である。

②　粉挽き臼

出土した粉挽き臼の多くは形状が変わるほど溝が擦り減っており、その使用頻度あるいは使用時間が多かったことを物語っている。上臼の中には左右の厚さが半分も違うものもあり、溝が摩耗した後に何度か刻み直していると考えられる。その他上臼の直径では25cm前後・30cm前後・35cm前後の3分類でき、厚さからは18cm前後・15cm前後・13cm前後に3分類される。第68図№10は径は26cmと小さいが厚さは16cmあり、№14は径は32㎝であるが厚さは12㎝である。　このことは、臼の用途に関係があるものと言える。下臼の径は28cm・32cm・35cm、厚さは5cm・13cm・15cmのそれぞれ3分類できる。溝の間隔は1.5cm～2cmが多く3cmのものもある。溝の幅は2mm～5mmであるが、これも挽くものによって異なる。

③　ひで鉢

中世から近世にかけて盛んに用いられた明かり取りの用具であるひで鉢が出土したが、形態は第70図№26・27にあるように丸い自然石をくりぬいたもので、内側に煤の付着が認められるものがある。

4　金属製品

本遺跡から出土した金属製品は、煙管、小札、鉄砲玉、柄頭をはじめ装剣金具、和鏡、鈴、鉄鏃、釘、毛抜き、刀子、火打ち金などであるが、この他に用途、形態とも不明の遺物も出土している。

①　煙管と火打ち金

第73図№37～44が煙管であるが、雁首が5個と吸口が2個出土している。雁首はいずれも火皿が管部分よ

り湾曲して高所に位置し、口径1.5～1.7cmである。No.40は羅宇が差し込まれる部分が六角形をしている。吸口はNo.44が直線的であるが、No.43は湾曲している。第73図No.45～47は火打ち金で出土地点は調査区南側の１号掘立柱建物址群に集中している。

② 小　札

第71図No.１～８が出土した小札であるが、No.１～４がＡ10グリット、No.５～８がＦ８グリットから検出されている。No.１は幅1.9cm、残存部分が３cmで2個の孔が確認できる。No.２は幅1.8cm、残存部分3.8cmを測り、４個の孔が確認できる。No.３は幅２cmで残存部分3.3cmを測り、孔は６個確認できる。No.４は幅1.8cm、長さ5.1cmを測り孔は７個である。No.５は幅2.3cmで残存部分2.8cm、孔は６個が確認できる。No.６は幅2.4cm長さ6.5cmを測り孔は４個である。No.７は幅２cm、長さ6.4cm、孔は６個確認できる。No.８は幅2.5cm、長さ6.2cmで孔は10個ある。

③ 鉄　鏃

第71図No.９は10号地下式土坑から出土した鉄鏃で、柄部の断面は方形であり、残存している長さは6.9cmである。第72図No.18は鉄鏃の柄部である。断面は方形を呈し、残存部分は長さ8.7cmである。

④鉄砲玉

第71図No.10、11は鉛の鉄砲玉である。２個とも出土した土層は遺構確認面の直上で、遺構との関係は不明である。形状は球形で径1.2cmである。

⑤ 鉄　鈴

第71図No.12は１号土坑から出土した鈴で、吊り具は中央よりやや外れた所にある。径は縦2.6cm、横2.1cmを測る。

⑥ 装剣金具

第71図No.13は刀の柄頭で、金銅製である。火を受けており、圧し潰された状態でＣ５グリットの柱穴内から出土した。表裏に同様な透かし文様が施されている。No.15は金銅製の小柄で、幅1.4cm、長さ8.2cmである。出土したのはＥ５グリットの北側である。No.16はＩ７グリットから出土した柄巻に付けられる目貫である。やはり金銅製で幅1.3cm、長さ3.4cmを測る。室町時代後半に位置付けられるものと言える。

⑦ 和　鏡

第71図No.14はＡ７グリット出土で文様は、秋の草が中心となっているものと考えられるため、秋草文とでも呼ぶことができるかもしれない。径9.2cmを推測するが、熱による変形のため、正確ではない。室町時代後半の遺物であろう。

⑧ 刀　子

第72図No.19～25は刀子で総てが破損品である。No.19は長さ8.7cm、No.20は長さ7.4cm、No.21は7.6cm、No.22は長さ3.2cm、No.23は5.4cm、No.24は5.4cm、No.25は4.9cm、No.26は4.9cmを測る。しかし、No.24は鎌の可能性もある。

⑨ 釘

検出された釘は20本以上であったが実測可能なものは第72図No.26～32の７本である。

⑩ 毛 抜 き

第72図No.34～36と第72図No.59は毛抜きである。No.36はＫ６グリットから出土し、長さ９cm、幅1.1cm、No.36はＥ７グリットから出土し、幅1.1cm、No.59はＪ９グリットから出土したもので幅1.1cmを測る。

⑪ そ の 他

第72図No.33は平安時代の紡錘車で、径3.8cmを測る。第71図No.17は家具の飾り金具の一部と考えられる円形のもので中心部分に孔がある。第74図No.48は用途が不明の銅製の断面方形の筒である。出土したのは130号土坑である。第74図No.50～58は比較的厚い鉄の板から出来ているが用途及び形態が不明である。No.60･61は銅製の管である。

5 銭 貨

金生遺跡から出土した古銭は、総数155枚を数え、その種類は開元通宝から寛永通宝まで31種類に及ぶ。腐食や破損によって種別不明になったものは33枚である。最も多いものは元豊通宝で11枚、永楽通宝が10枚、以下開通元宝・祥符元宝・皇宋通宝が９枚、元祐通宝が８枚、嘉祐通宝・熙寧元豊が７枚、天聖元宝、政和通宝が６枚、紹聖元宝が５枚、洪武通宝・景徳元宝が４枚、大観通宝・天禧通宝が３枚、寛永通宝・治平元宝・聖宋元宝・淳熙元宝・至和元宝が２枚、宋通元宝・宋寧通宝・咸平元宝・太平通宝・嘉定通宝・乾元重宝・宣徳通宝・咸淳元宝・治平通宝・改平通宝が１枚出土している。

調査区内での各古銭の出土傾向は、中央部より東側からの出土が顕著である。また古銭が多く出土した地区は調査区南側の地域であり、全体の半数近い量である。１号土坑からは33枚の古銭が出土したが、その内28枚が紐でつながって出土している。また、土坑墓からは六道銭として６枚が出土することが一般的であるが、本遺跡の土坑墓からは５枚の出土が最多枚数である。１号地下式土坑の竪坑内の石の間より大聖元宝と淳熙元宝が１枚づつ検出された。柱穴から出土した古銭は紹聖元宝・嘉祐通宝・天聖元宝・永楽通宝である。洪武通宝には背福が１枚あり、16世紀末に日本国内で鋳造されたものであるため、１号掘立柱建物址群の存続年代が16世紀から１７世紀にかけてと推測させる根拠となっている。また土坑墓から出土している古銭に寛永通宝が見られないことから土壙墓年代は17世紀前半以前と考えられる。地下式土坑から出土した古銭はNO93淳熙元宝（南宋1174～）、天聖元宝（北宋1023～）、皇宋通宝（北宋1039～）、聖宋元宝（北宋1101～）、開元通宝（唐621～）、元豊通宝（北宋1078～）、熙寧元宝（北宋1068～）である。以上のように出土した古銭はすべて宋銭であることから、地下式土坑の築造年代が12世紀以後で、16世紀以前であることを推測することを可能にしている。

6 平安時代の遺物

本遺跡からは平安時代の住居址が６軒検出された。柱穴群の中にもこの時期の遺構が含まれていると考えられるが、掘立柱建物址では柱穴の時期的な検討ができないため一括して記述した。この時期の遺物は遺跡のほぼ全体から検出されており、周辺にも遺構が存在していると考えられる。このため出土した遺物が検出遺構に伴うか否かは断じがたいため、遺物の記載のみとした。

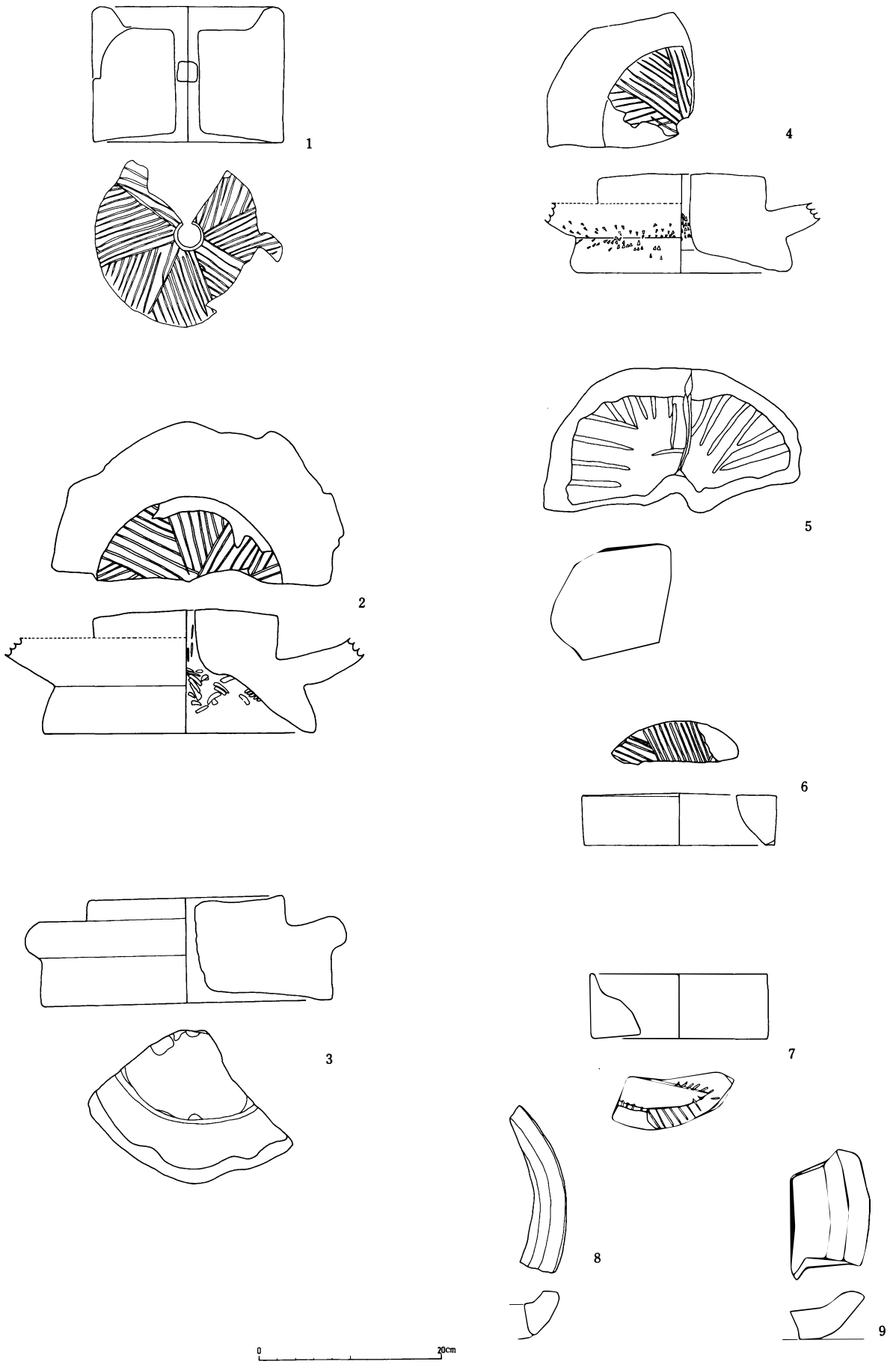
坏はいわゆる甲斐型の坏と国分型とに大別できる。第80図No.１・２・３・４・５・６・７・８は内面に暗文が施され、底部外面には篦削り調整がなされている。No.１は４号住居址のカマドから、No.６・７は５号住居址から出土している。共に土師編年のⅧ期（９世紀第四半期）に属するものと考えられる。第80図No.13は２号住居址のカマドから出土し、口径14.6cm､底径６cmを測り、裏面に墨書がある。第80図No.11とNo.12は

土師の蓋で編年のⅧ期にあたる。第83図No.75は宮間田遺跡の32号住居址から出土した内黒土器に似ている。この高台付き土師器は須玉町大小久保遺跡と高根町湯沢遺跡、大泉村東原遺跡でも検出されており、今後分布が注目される。No.79は２号住居址から出土したものであるが時期的には中世に属するものである。このことは2号住居址の南側が掘立柱建物址によって切られていたことと関係がある。カメの出土例は少なく、須恵器なども少なかった。第82図No.35は１号から出土しており口径30.5cmを測る。No.36とNo.37は２号住居址の竈からの出土でNo.36は口径28cm、No.37は口径17cm・を測る。No.38・39は４号住居址からの出土でNo.38が底径９cmでありNo.39は口径25.7cmを測る。No.40は表採資料である。カメの時期は10世紀を中心としたものと考えられる。

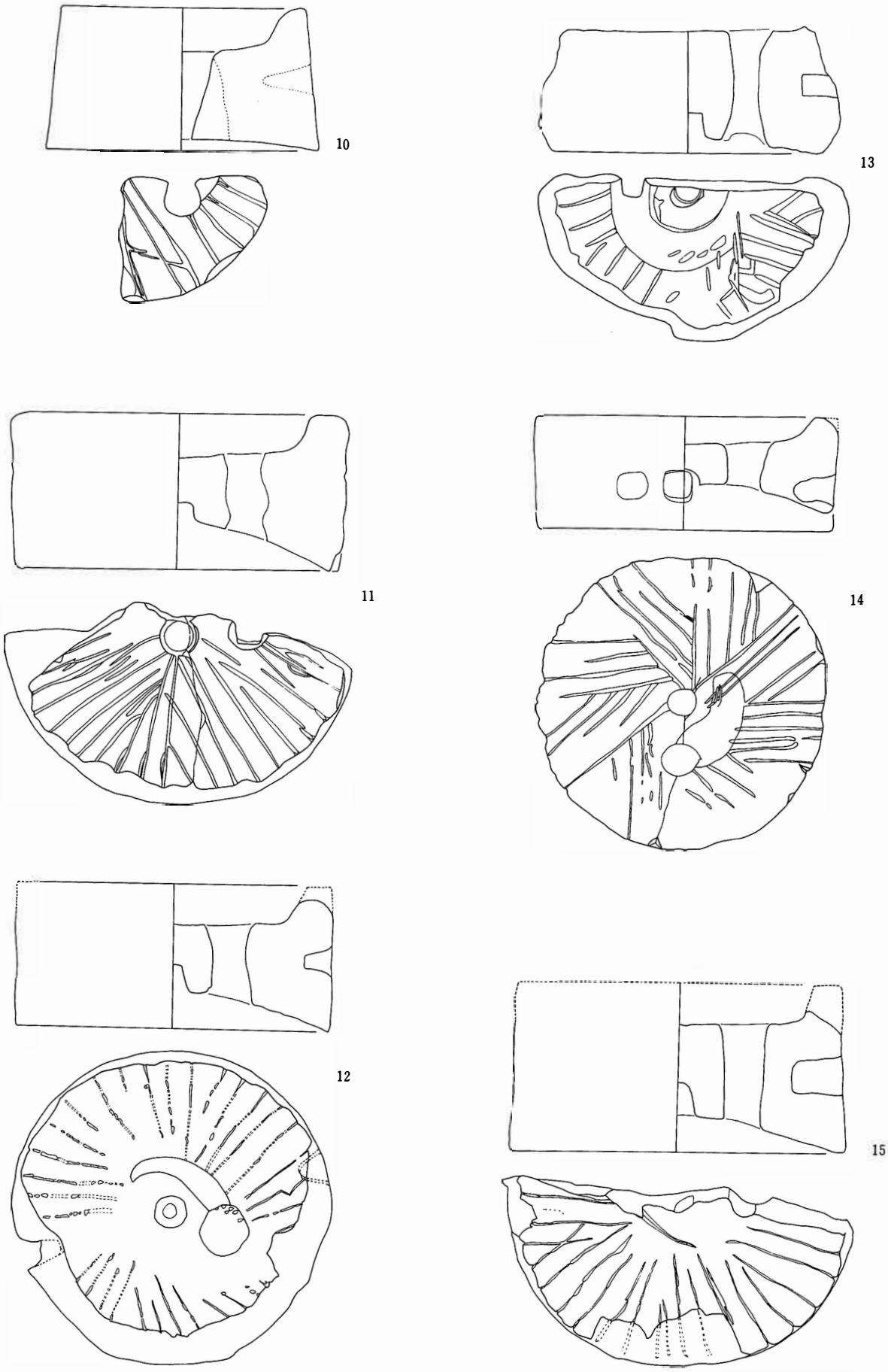
7　土師質土器

本遺跡から出土した土師質土器は、掘立柱建物址を含めても多くないが、遺跡全体から平均的に出土している。形態の分類は断面形が外面と内面で異なるものと異ならないものに大別することができる。第１類が第84図No.１～３・６・９～12、第85図No.20～23・26・36～37・42・44、第86図No.51・63のように胴部から底部にいたる断面が、内面は緩やかなカーブを描くが、外面は胴部と底部の境に屈曲部がある。第2類は内面と外面の断面形状がほぼ等しい第84図No.４・７、第85図No.19・28・29・38、第86図No.52・61などである。これらの遺物の胎土にはきわだった違いはなく砂粒子を含み、緻密で焼成は良好である。色調は淡褐色や黒褐色、白褐色など一定していない。口径からは10cm以下の小型のものと10cm以上の中型のもの、13cm以上の大型のものに分けることができる。器高は２～４cmの範囲にほとんどが入る。口縁部から胴部の肉厚は、比較的厚く一定である。以上のことから土師質土器は胎土に砂粒子を含み、口縁部から胴部の肉厚は一定で厚く、底部からの立ち上がり角度は40度前後であるということができよう。

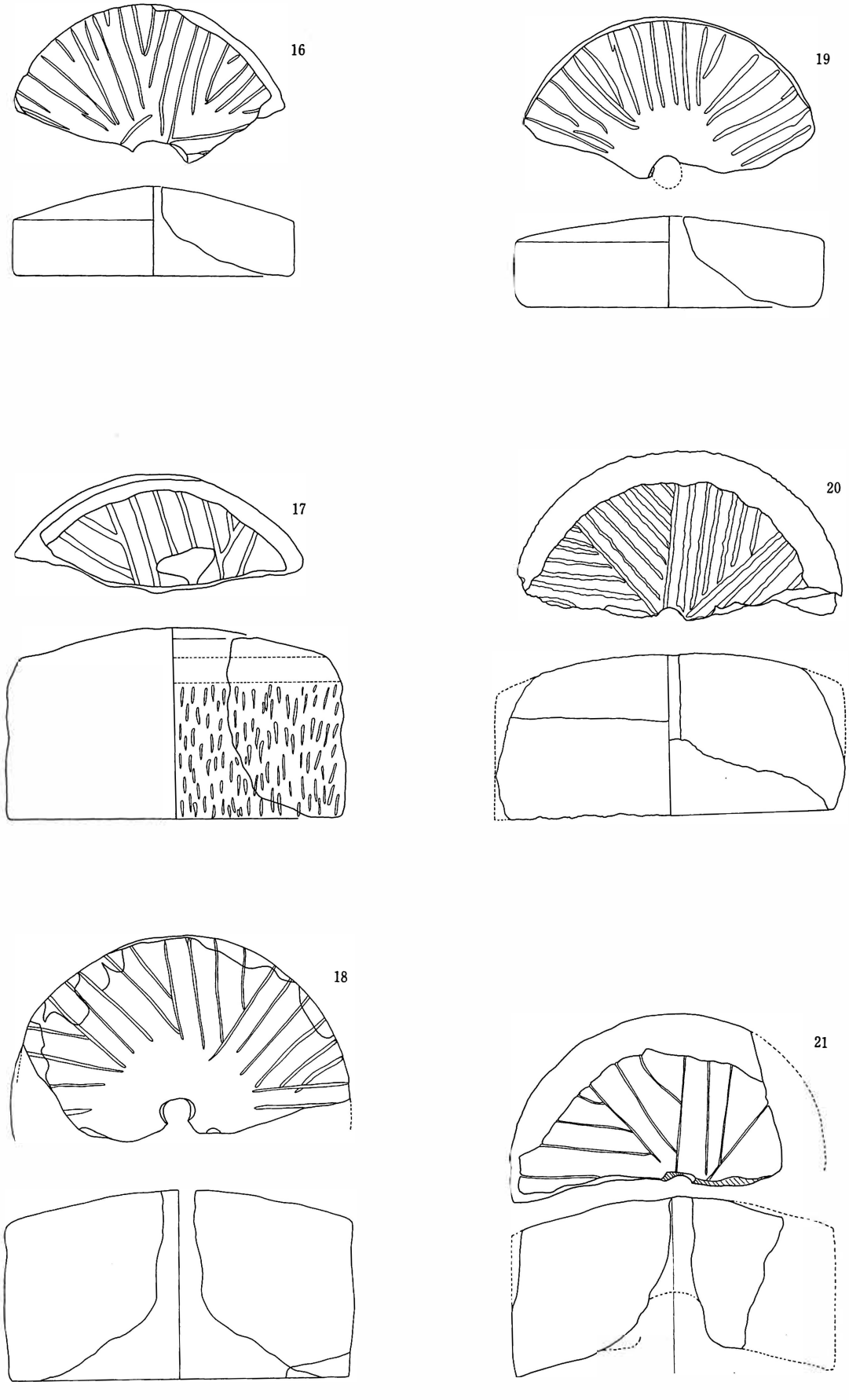
No.１は5号地下式土坑から出土し、口径11cm、底径6.6cm、器高2.4cmを測る。No.２は25号地下式土坑から出土し、口径13cm、底径6.3cm、器高３cmを測る。No.３は5号地下式土坑からの出土で、口径10cm、底径６cm、器高2.3cmを測る。No.10はＪ８グリットから出土し、口径7.2cm、底径4.8cm、器高1.3cmを測る。第85No.39は三脚付碗で口径6.8cm、底径５cm、器高3.2cmを測り胎土は極めて緻密で、胴部中央に刺突による円形文が施されている。No.40も同様な器形であるが、胴部がやや内湾し、口径10cm、底径6.6cm、器高4.3cmを測り、胎土は土師質土器と同等である。No.41はやはり三脚付の完形の碗で口縁部よりやや下に小孔があり、口径9.6cm、底径６cm、器高４cmを測る。



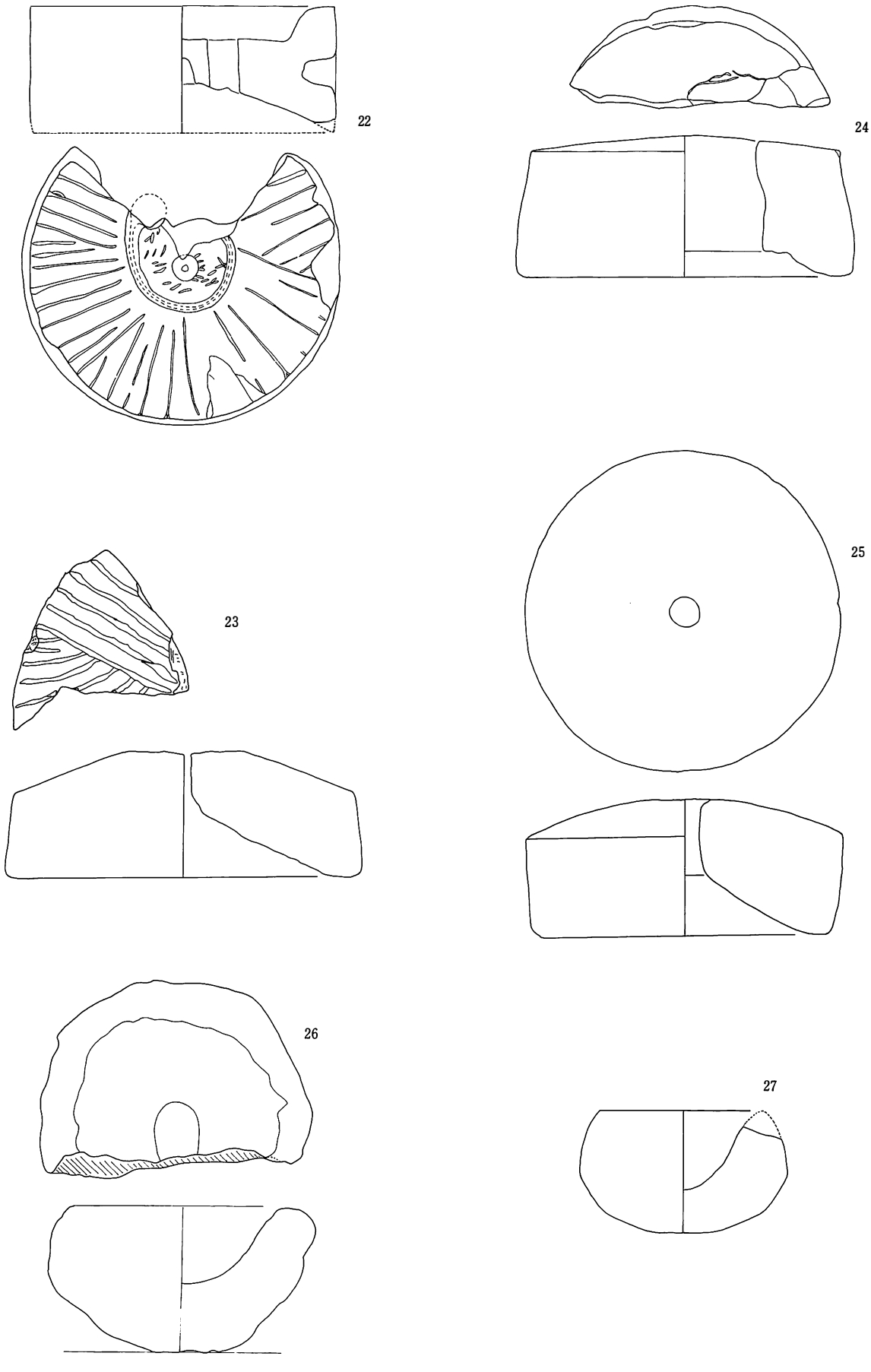
第67図　石臼実測図 1



第68図　石臼実測図２

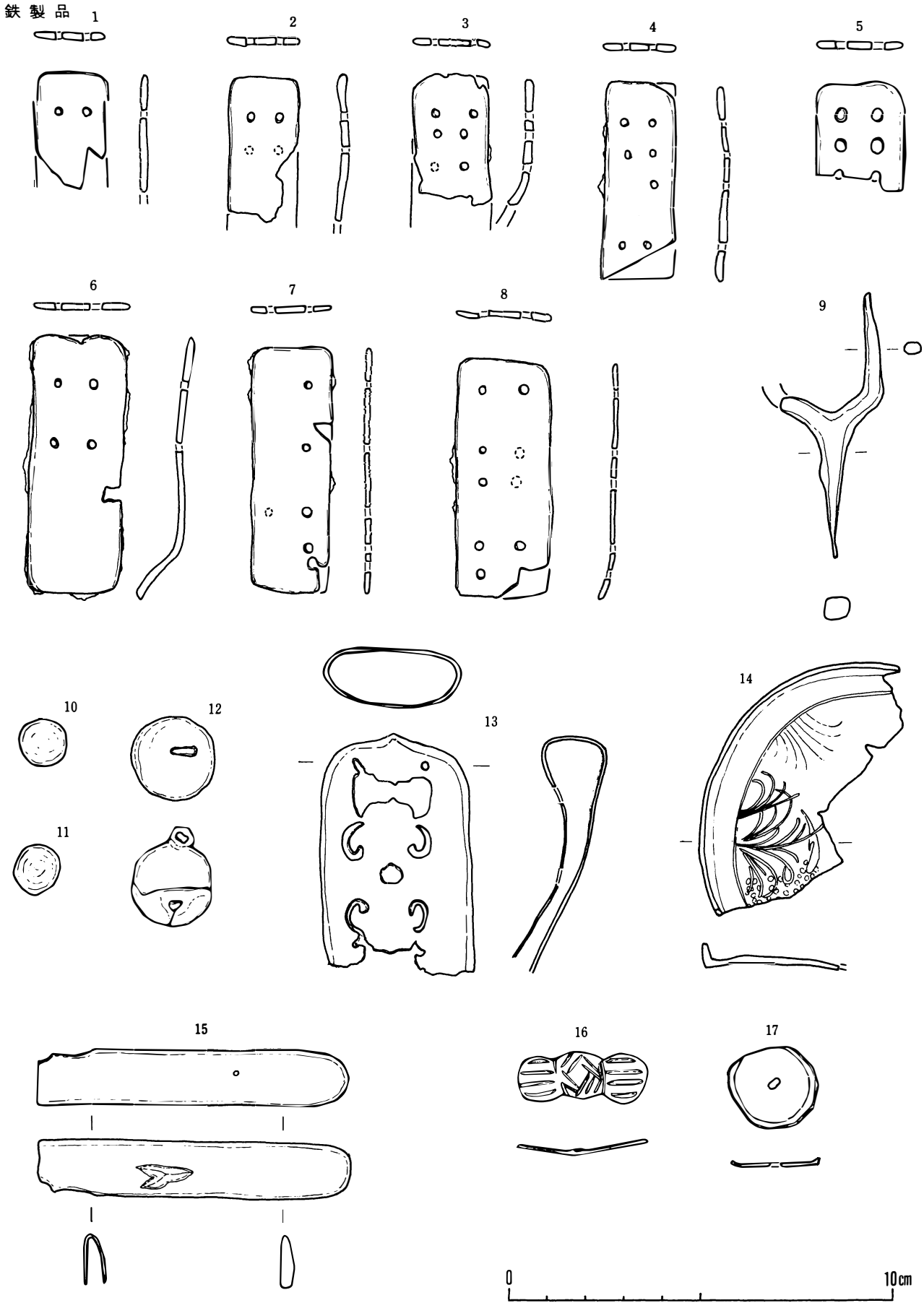


第69図　石臼実測図３

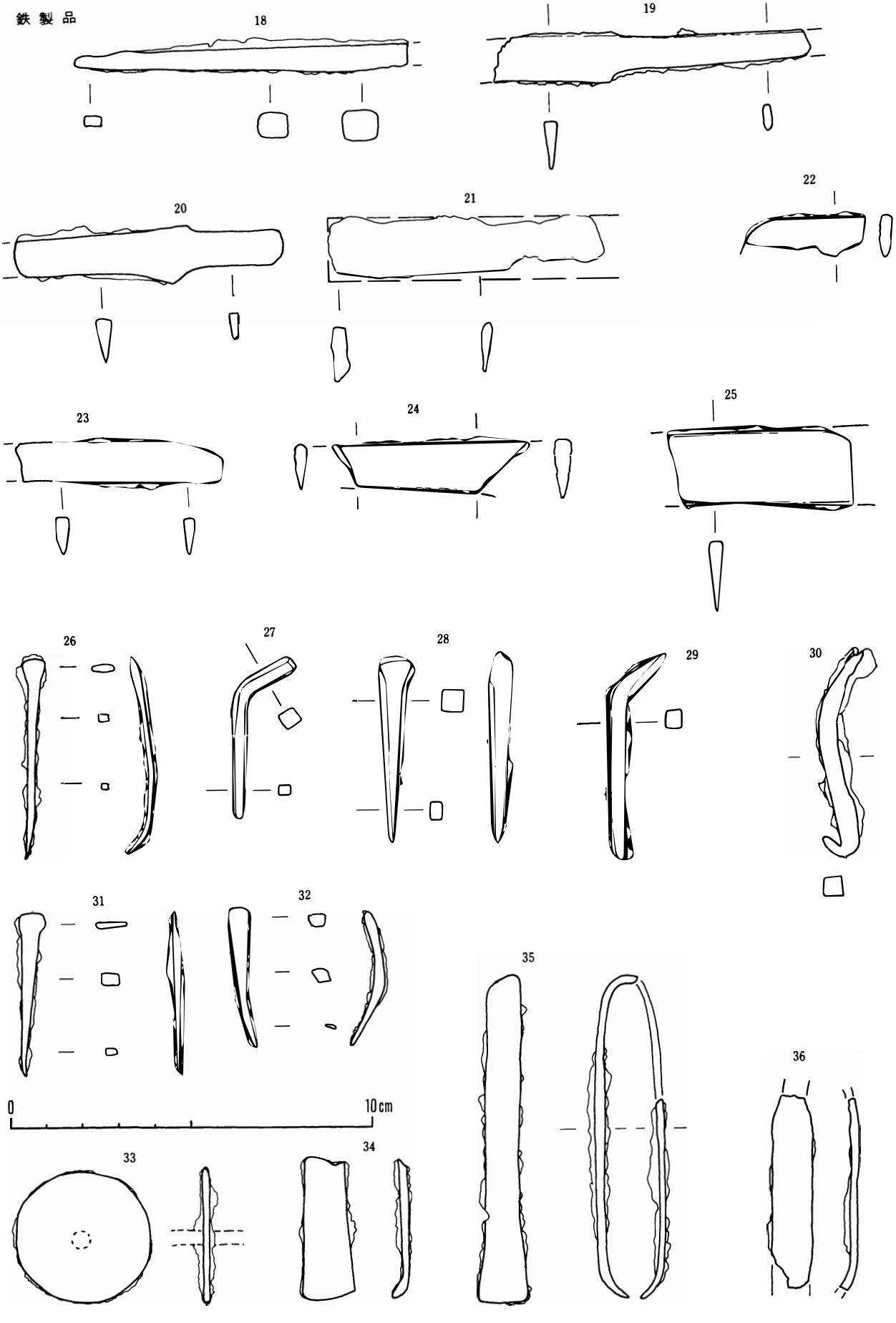


第70図　石臼実測図４

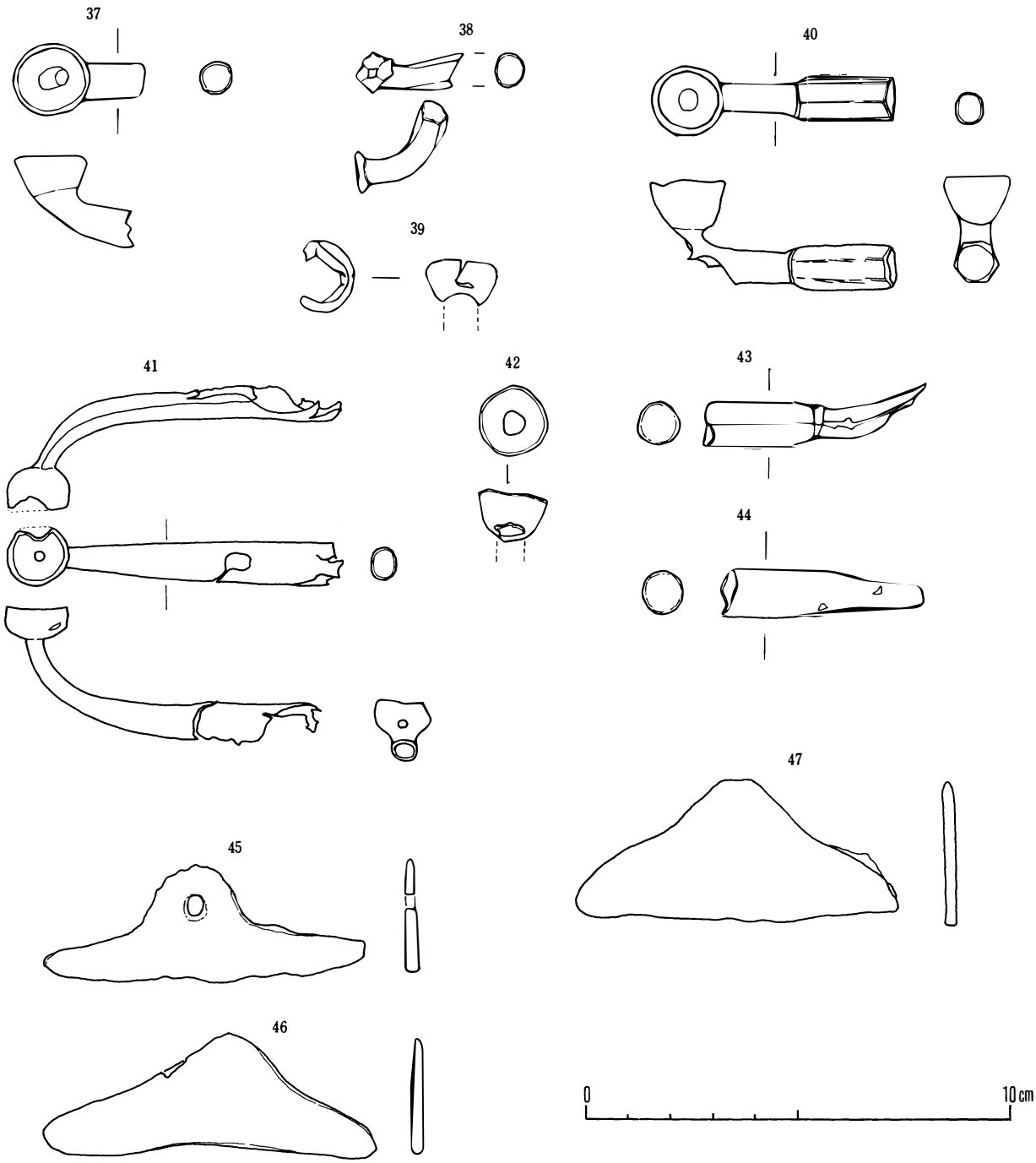
0　20cm



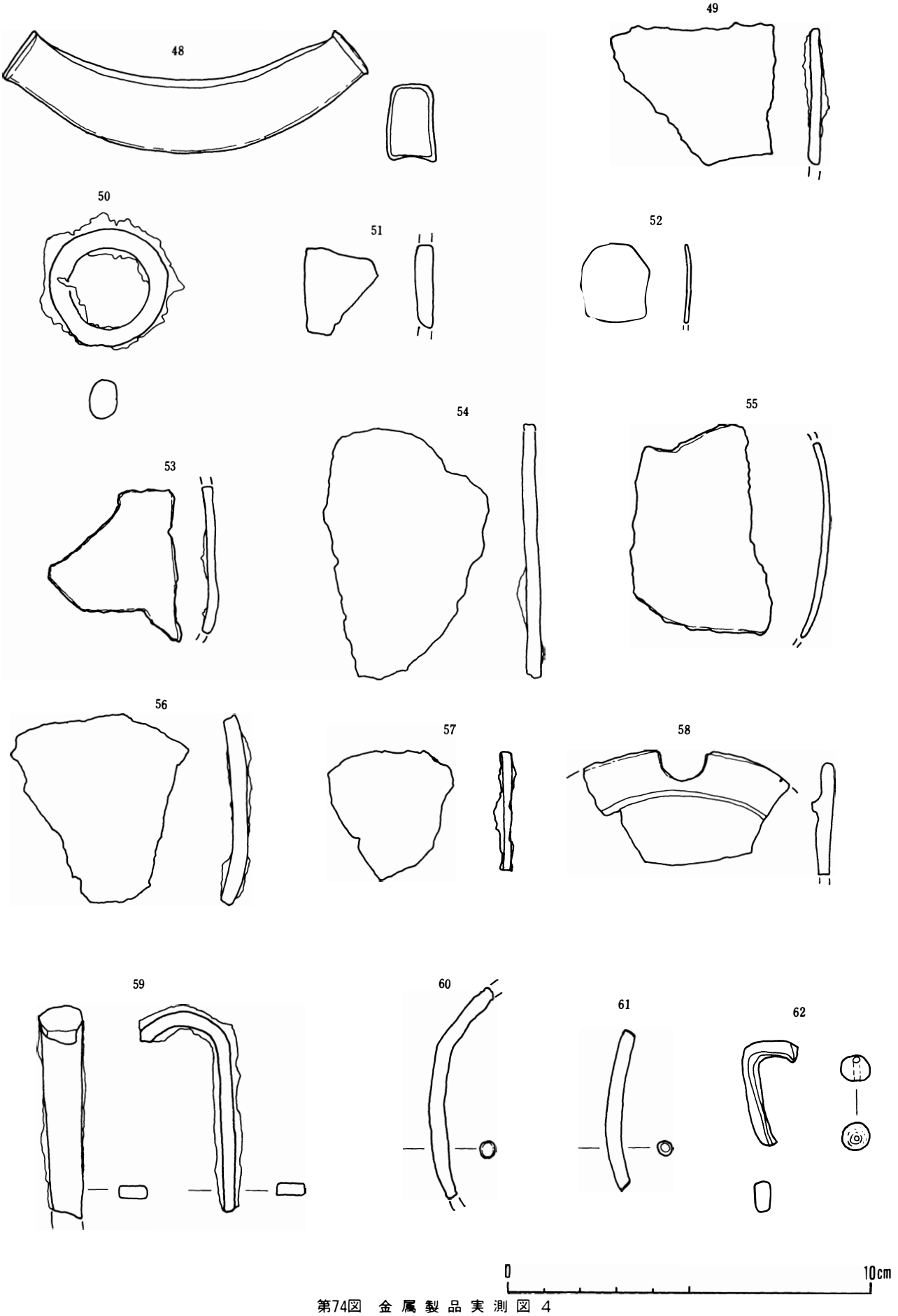
第71図　金属製品実測図 1



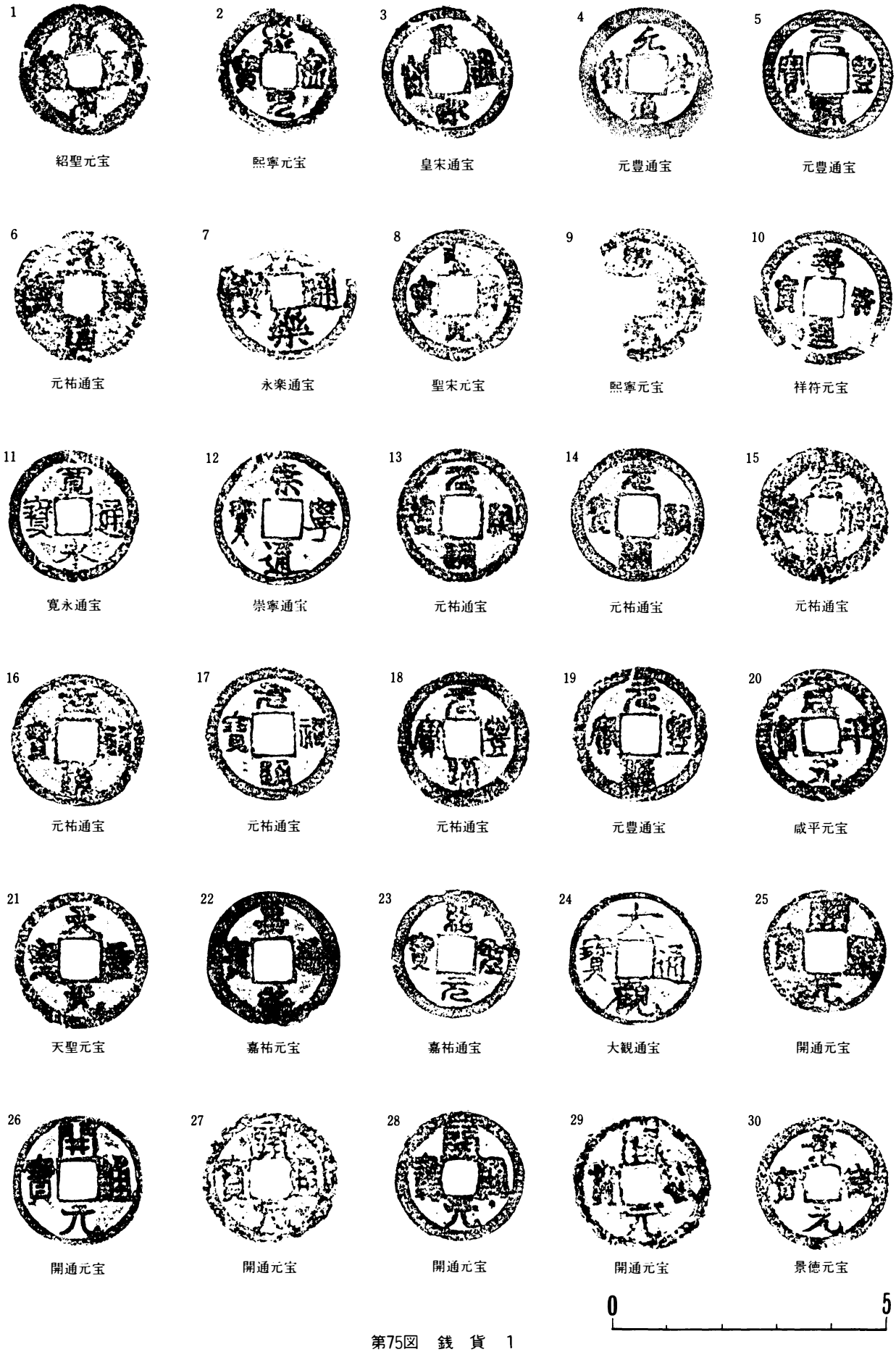
第72図　金属製品実測図２



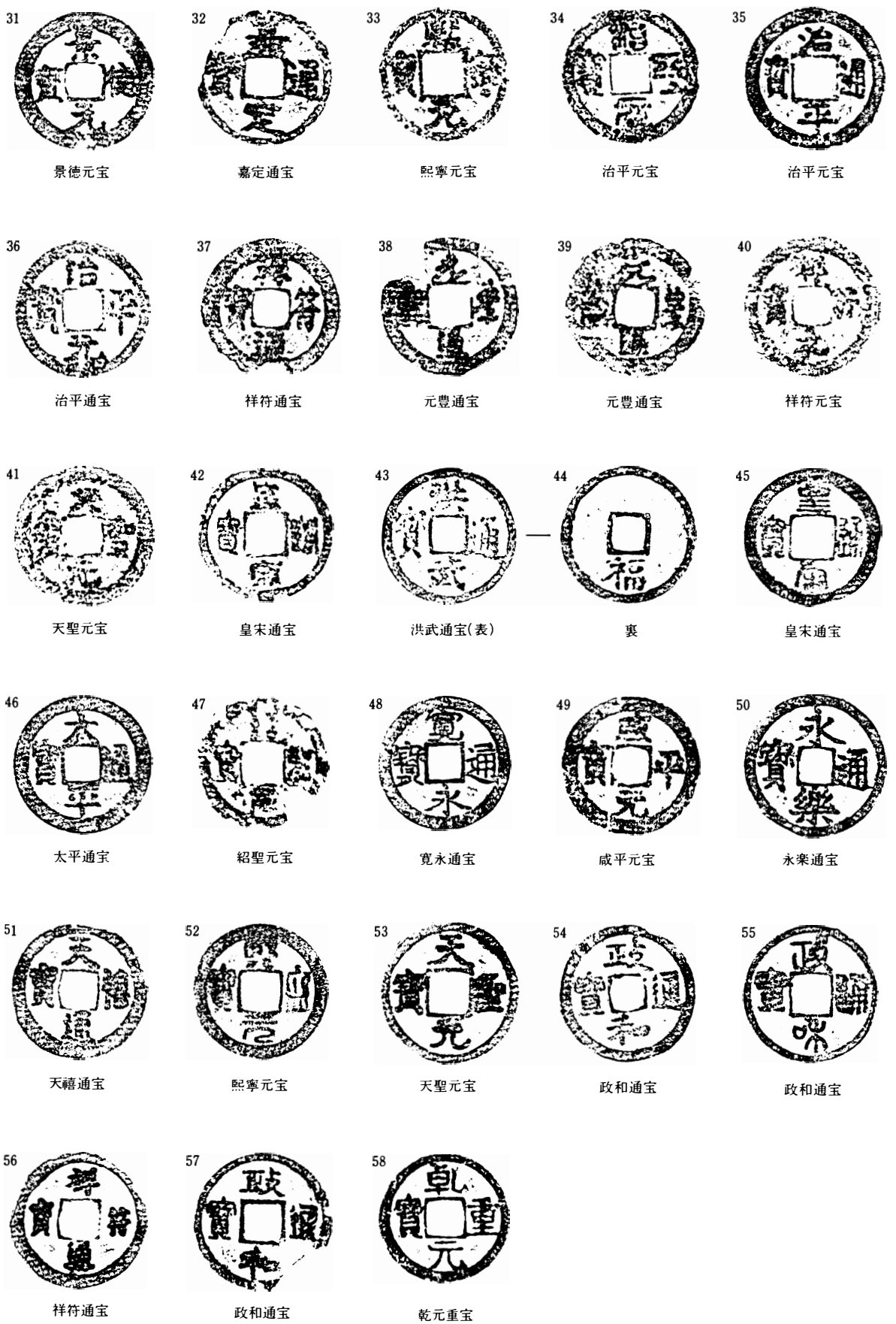
第73図　金属製品実測図３



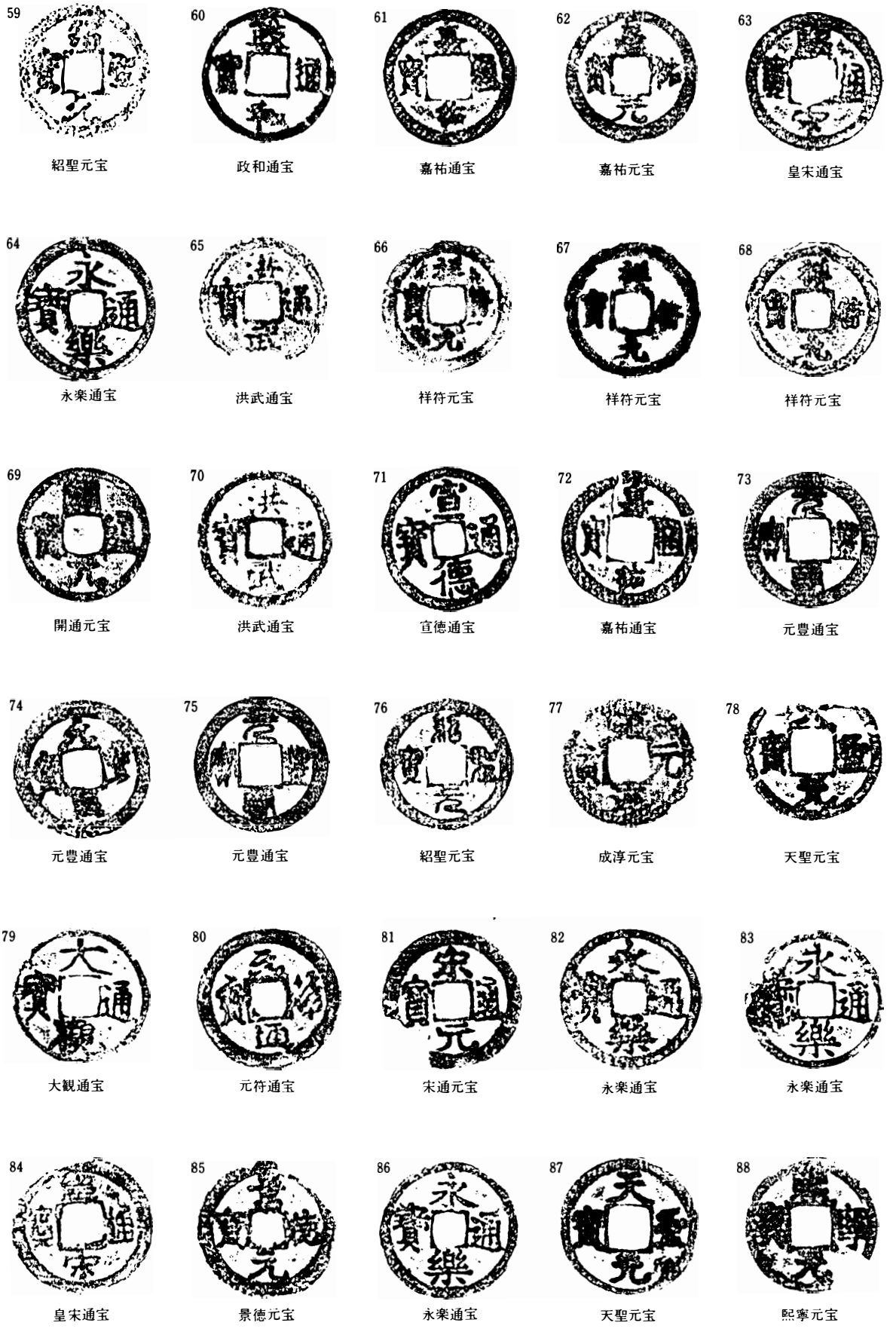
第74図　金 属 製 品 実 測 図 4


1 紹聖元宝
2 熙寧元宝
3 皇宋通宝
4 元豊通宝
5 元豊通宝
6 元祐通宝
7 永楽通宝
8 聖宋元宝
9 熙寧元宝
10 祥符元宝
11 寛永通宝
12 崇寧通宝
13 元祐通宝
14 元祐通宝
15 元祐通宝
16 元祐通宝
17 元祐通宝
18 元祐通宝
19 元豊通宝
20 咸平元宝
21 天聖元宝
22 嘉祐元宝
23 嘉祐通宝
24 大観通宝
25 開通元宝
26 開通元宝
27 開通元宝
28 開通元宝
29 開通元宝
30 景德元宝
0 5

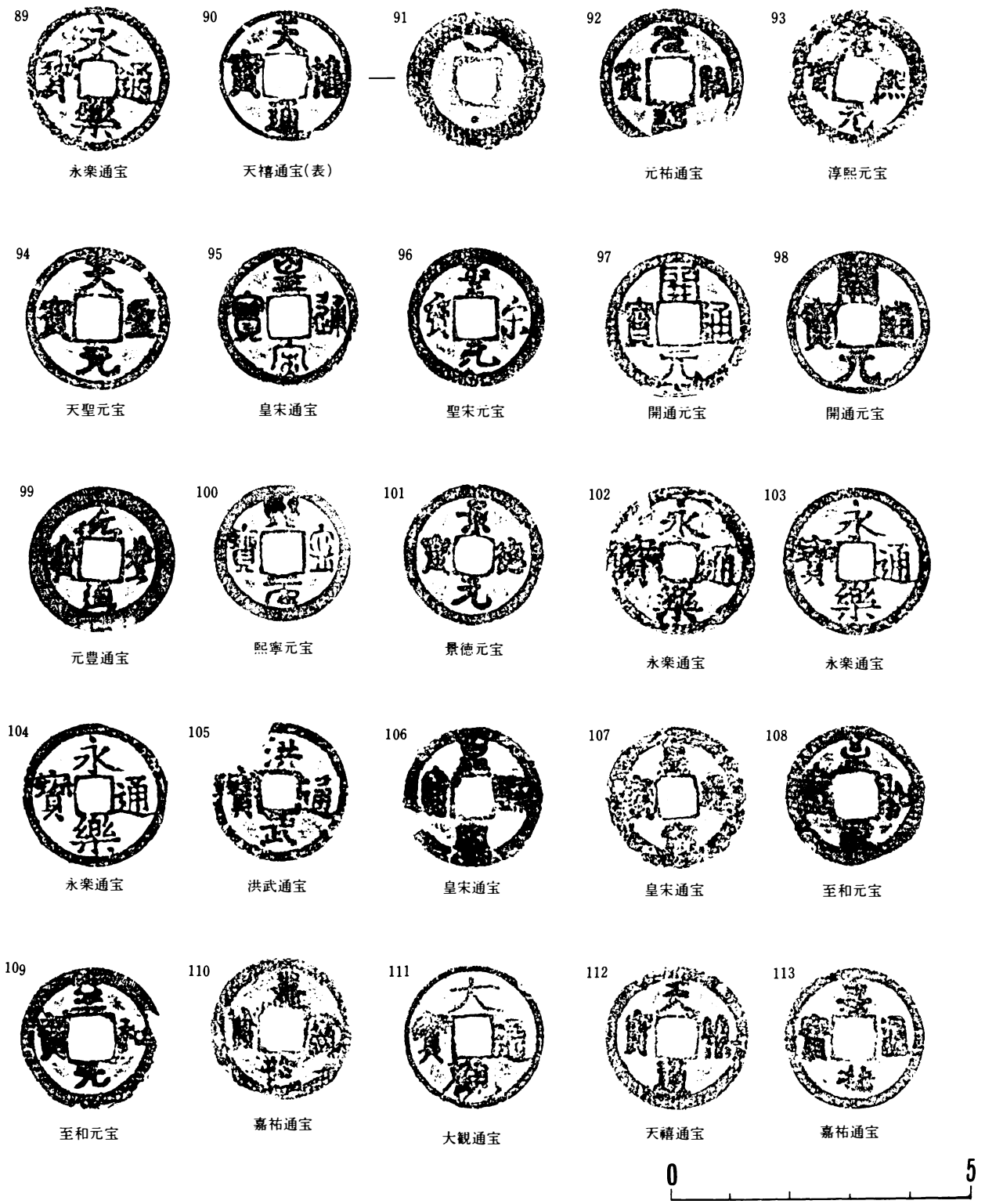
第75図　銭　貨　1


31 景德元宝
32 嘉定通宝
33 熙寧元宝
34 治平元宝
35 治平元宝
36 治平通宝
37 祥符通宝
38 元豐通宝
39 元豐通宝
40 祥符元宝
41 天聖元宝
42 皇宋通宝
43 洪武通宝(表)
44 裏
45 皇宋通宝
46 太平通宝
47 紹聖元宝
48 寛永通宝
49 咸平元宝
50 永樂通宝
51 天禧通宝
52 熙寧元宝
53 天聖元宝
54 政和通宝
55 政和通宝
56 祥符通宝
57 政和通宝
58 乾元重宝
0
5

第76図　銭　貨　2


59 紹聖元宝
60 政和通宝
61 嘉祐通宝
62 嘉祐元宝
63 皇宋通宝
64 永樂通宝
65 洪武通宝
66 祥符元宝
67 祥符元宝
68 祥符元宝
69 開通元宝
70 洪武通宝
71 宣德通宝
72 嘉祐通宝
73 元豊通宝
74 元豊通宝
75 元豊通宝
76 紹聖元宝
77 成淳元宝
78 天聖元宝
79 大觀通宝
80 元符通宝
81 宋通元宝
82 永樂通宝
83 永樂通宝
84 皇宋通宝
85 景德元宝
86 永樂通宝
87 天聖元宝
88 熙寧元宝
0
5

第77図　銭　貨　3


89
永楽通宝
90
天禧通宝(表)
91
92
元祐通宝
93
淳熙元宝
94
天聖元宝
95
皇宋通宝
96
聖宋元宝
97
開通元宝
98
開通元宝
99
元豊通宝
100
熙寧元宝
101
景德元宝
102
永楽通宝
103
永楽通宝
104
永楽通宝
105
洪武通宝
106
皇宋通宝
107
皇宋通宝
108
至和元宝
109
至和元宝
110
嘉祐通宝
111
大観通宝
112
天禧通宝
113
嘉祐通宝
0
5

第78図　銭　貨　4

114 熙寧元宝

115 嘉祐通宝

116 乾祐元宝

117 不　明

118 熙寧元宝

119

120

121 嘉祐通宝

122 不　明

123 天聖元宝

124 不　明

125 至道元宝

126 皇宋通宝

127 熙寧元宝

128

129

130 聖宋元宝

131 皇宋通宝

132 嘉祐通宝

133 元豊通宝

134 元祐通宝

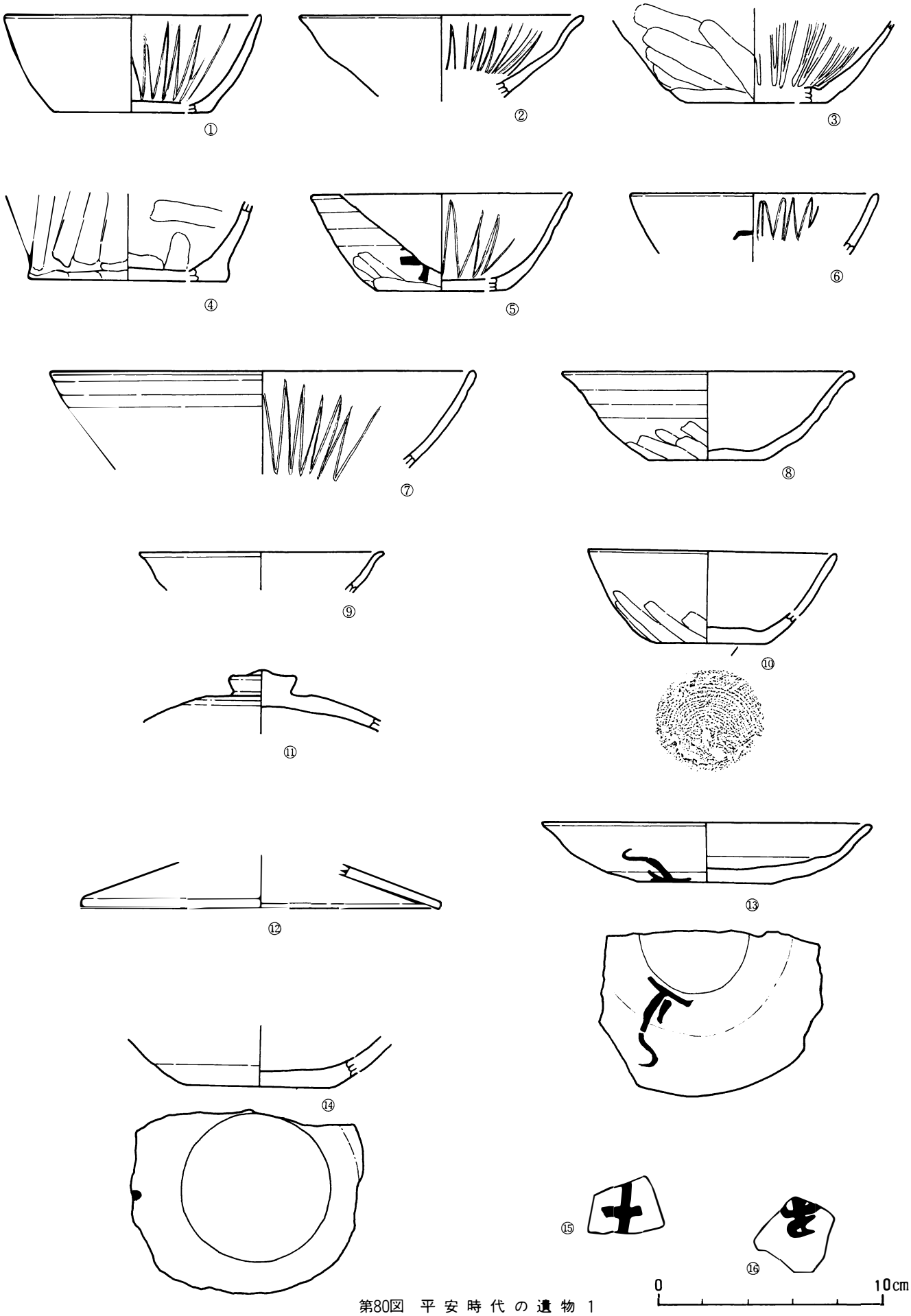
135 祥符元宝

136 元豊通宝

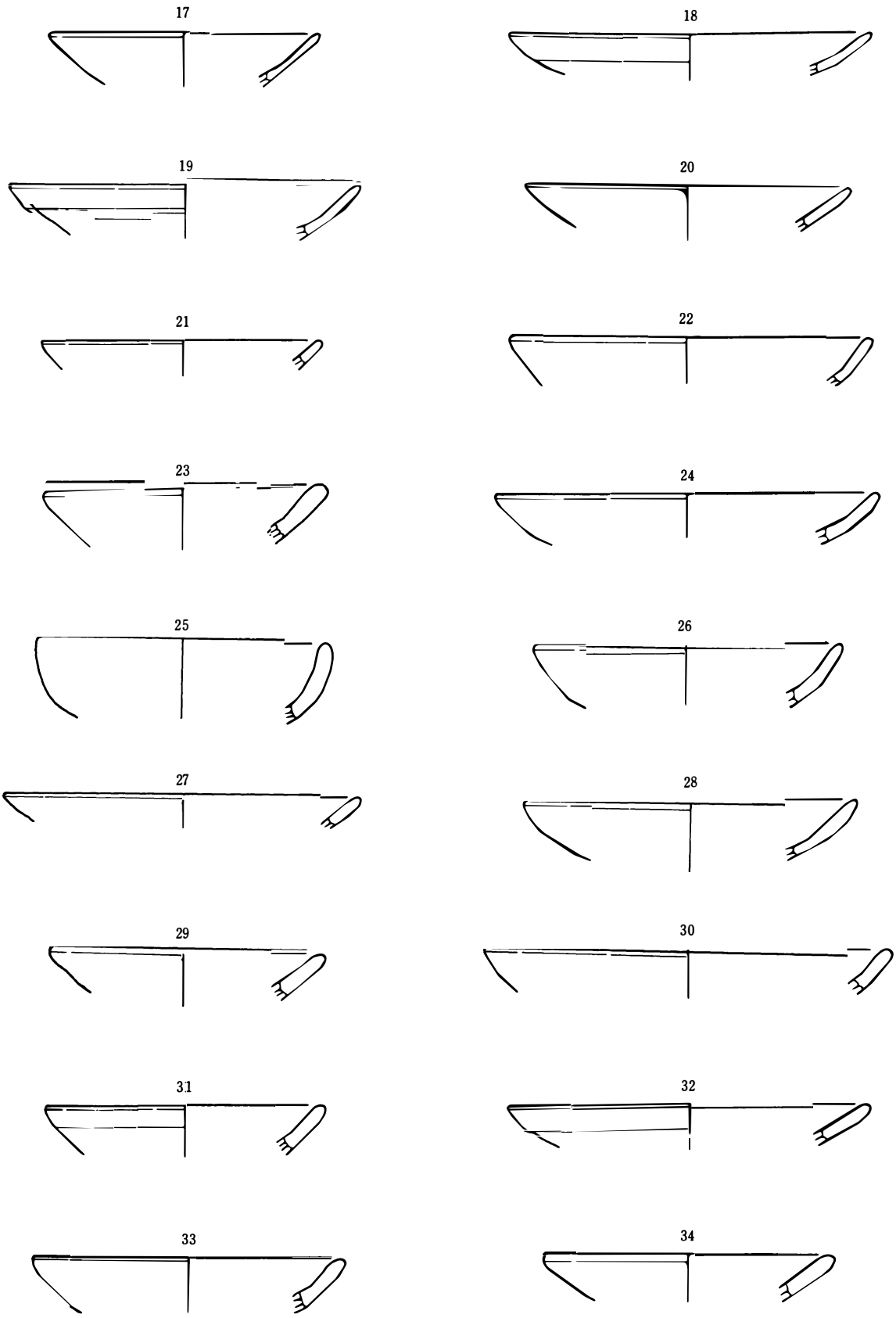
137 元豊通宝

0　　5

第79図　銭　貨　5

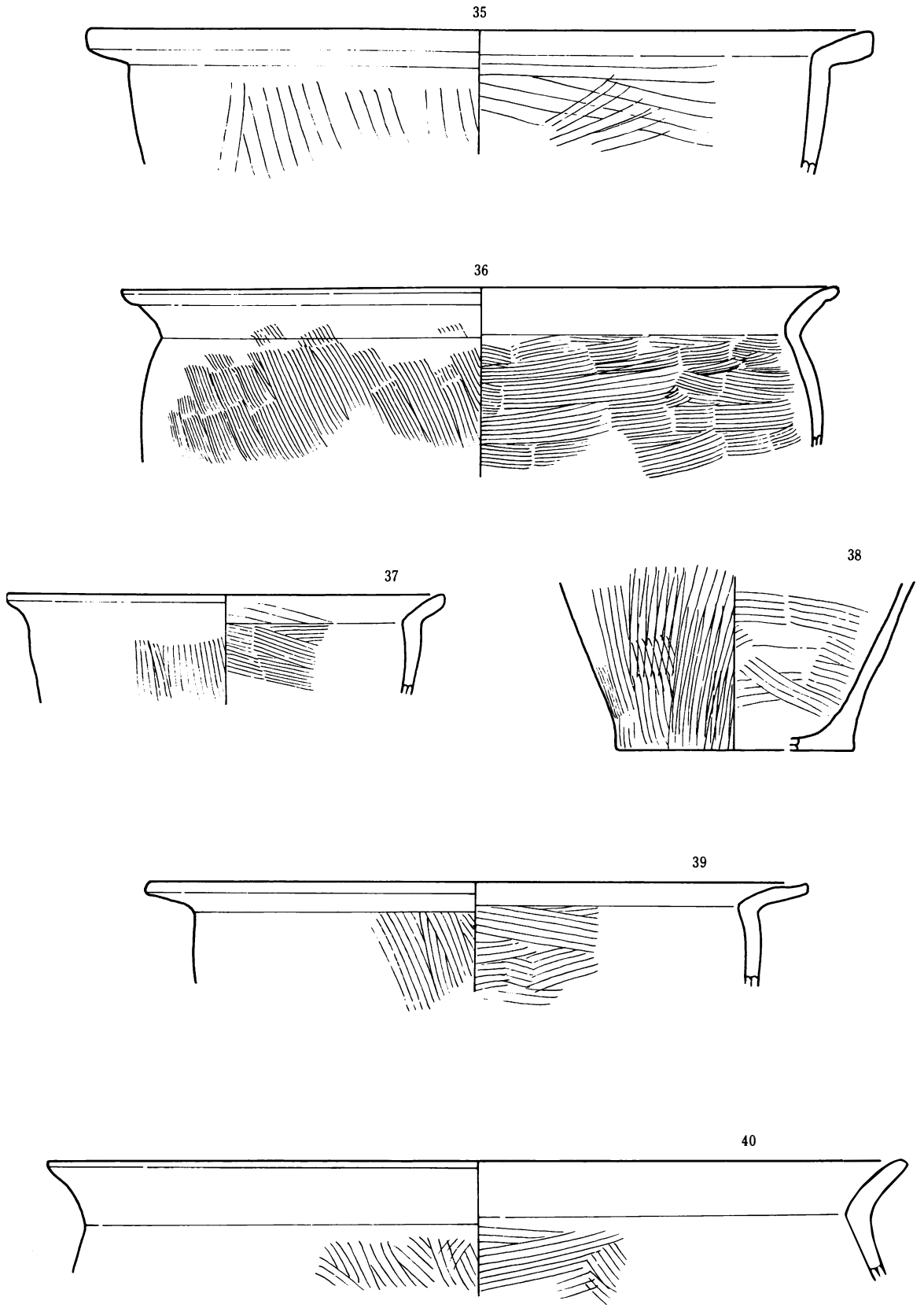


第80図　平安時代の遺物 1

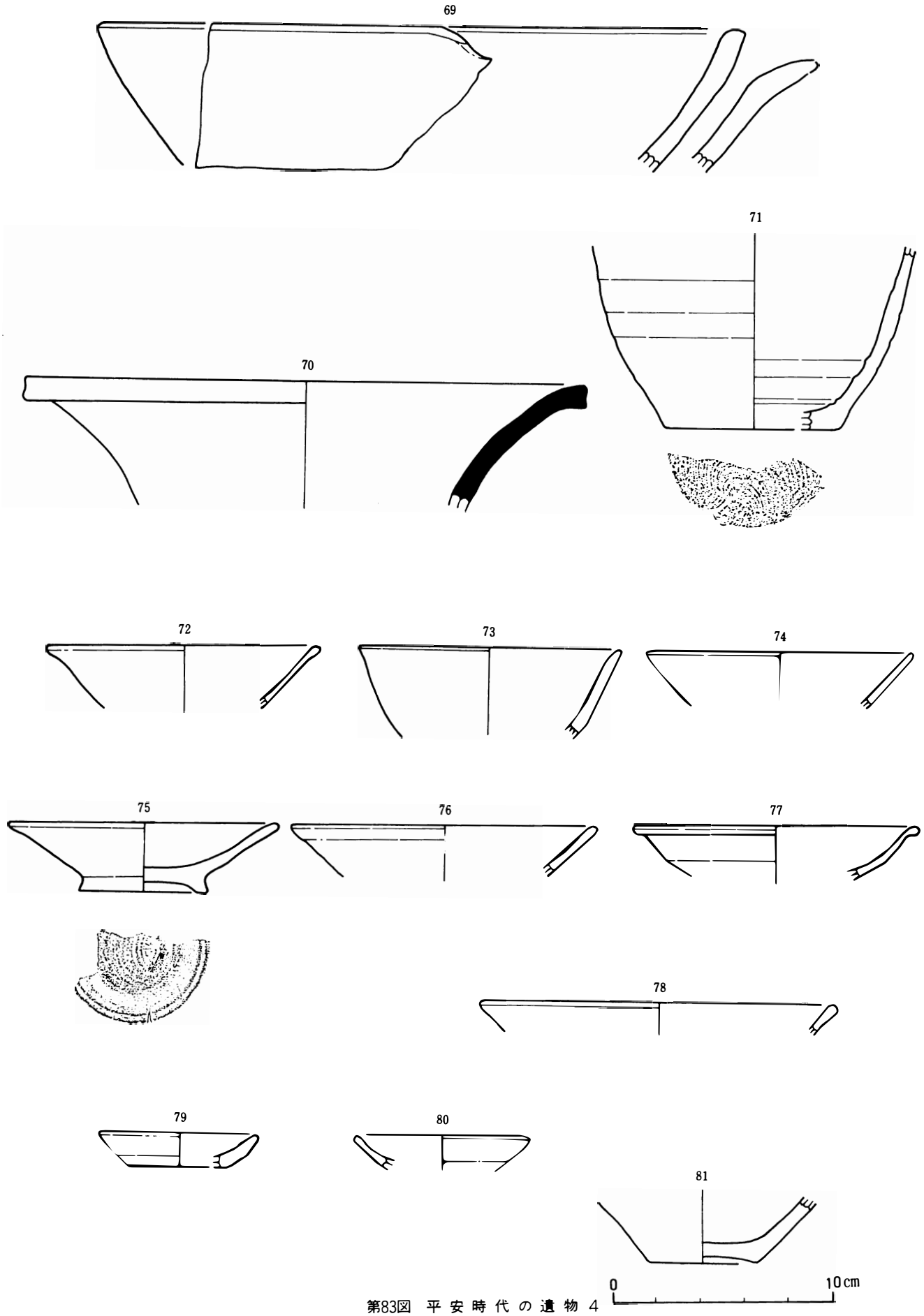


10 cm

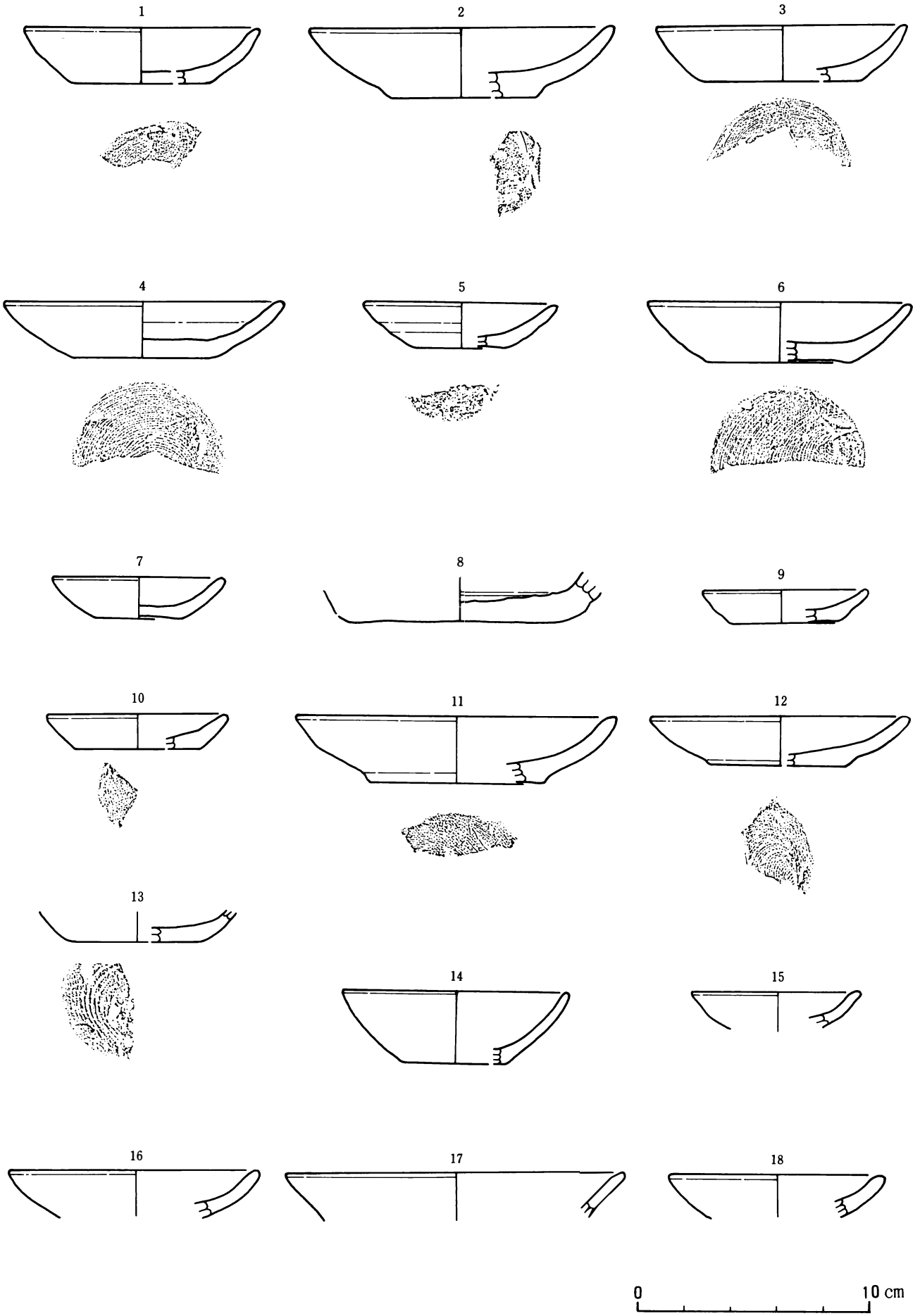
第81図　平安時代の遺物 2



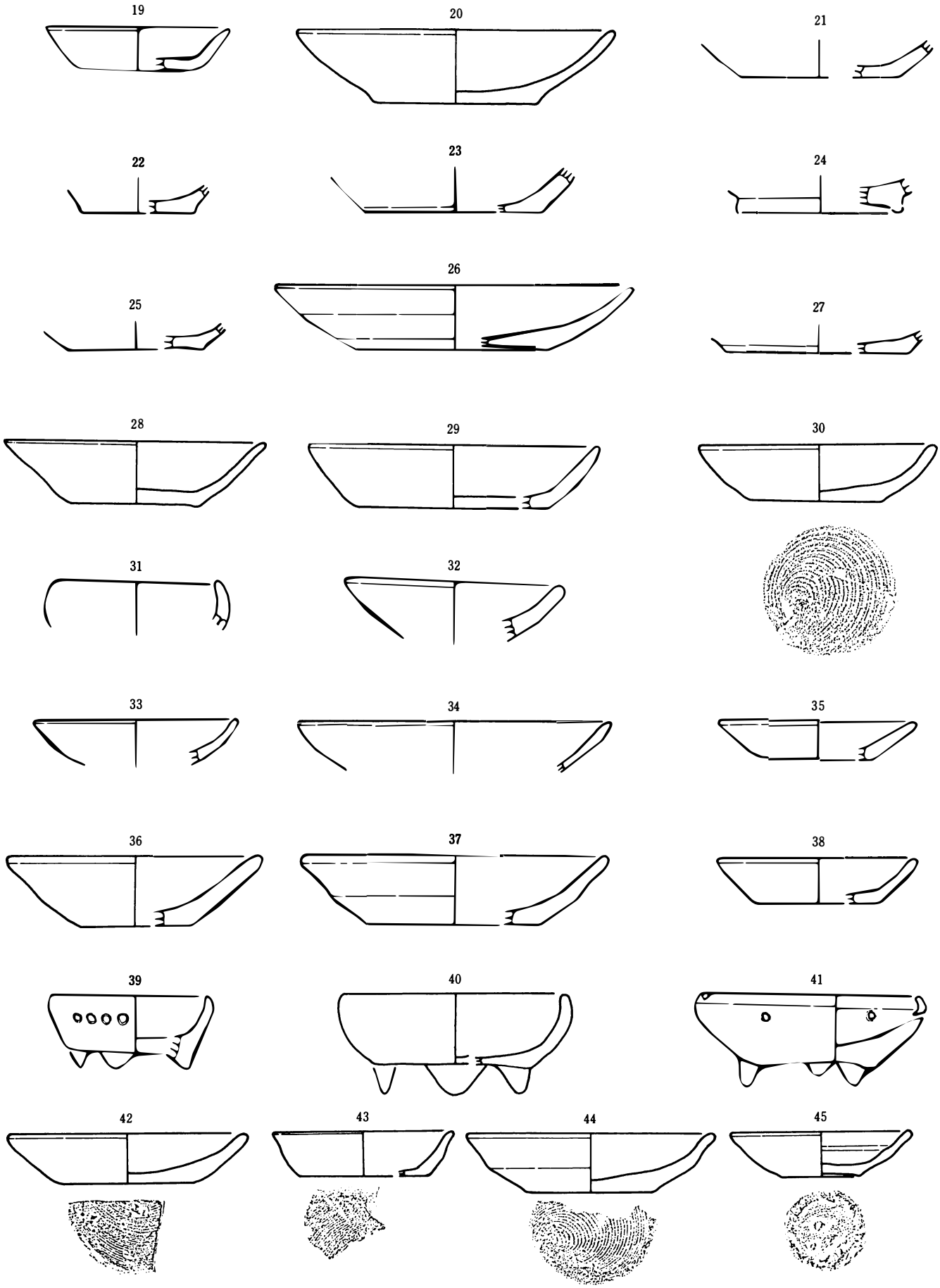
第82図　平安時代の遺物３



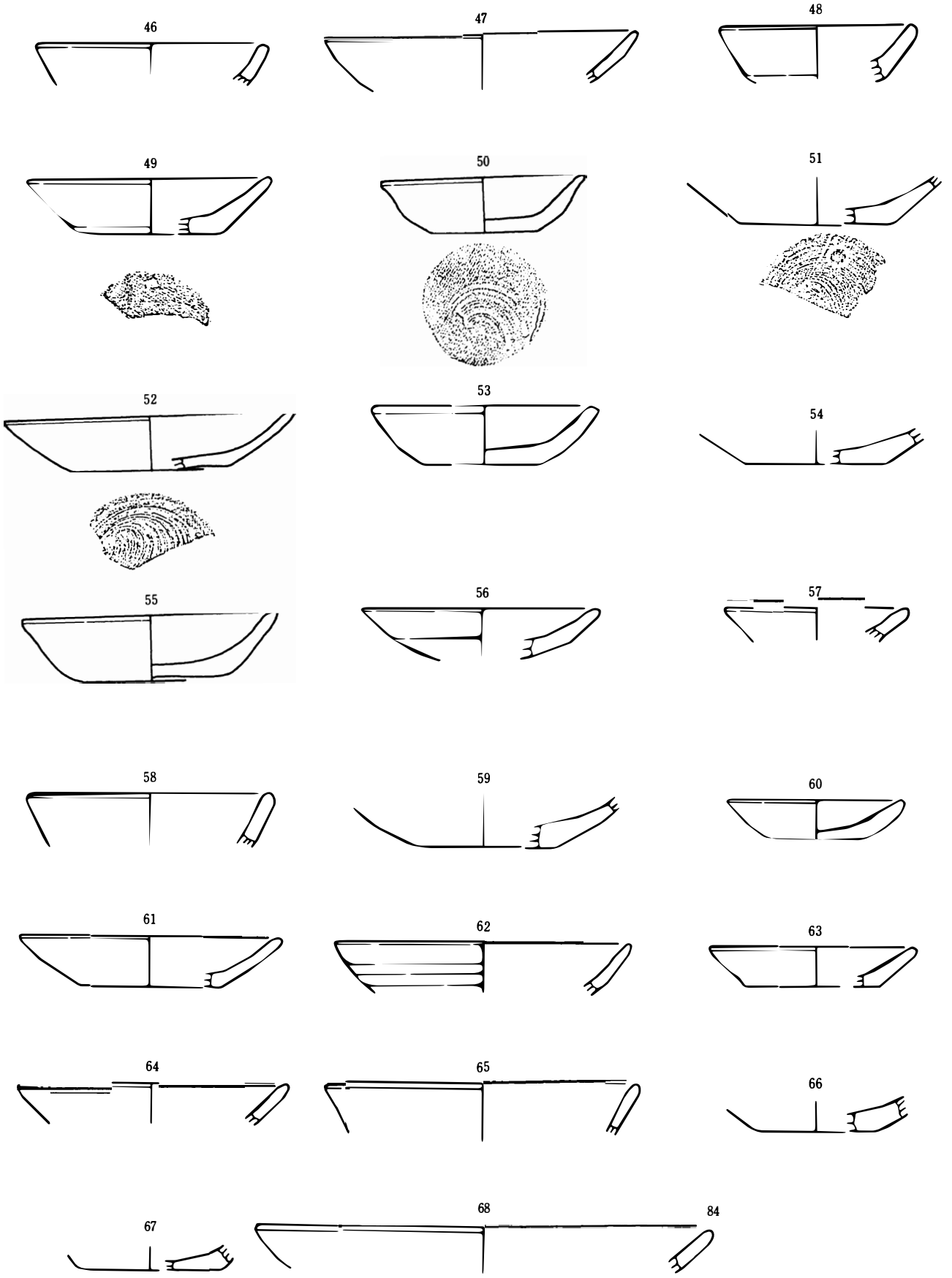
第83図　平安時代の遺物 4



第84図　土 師 質 土 器 1

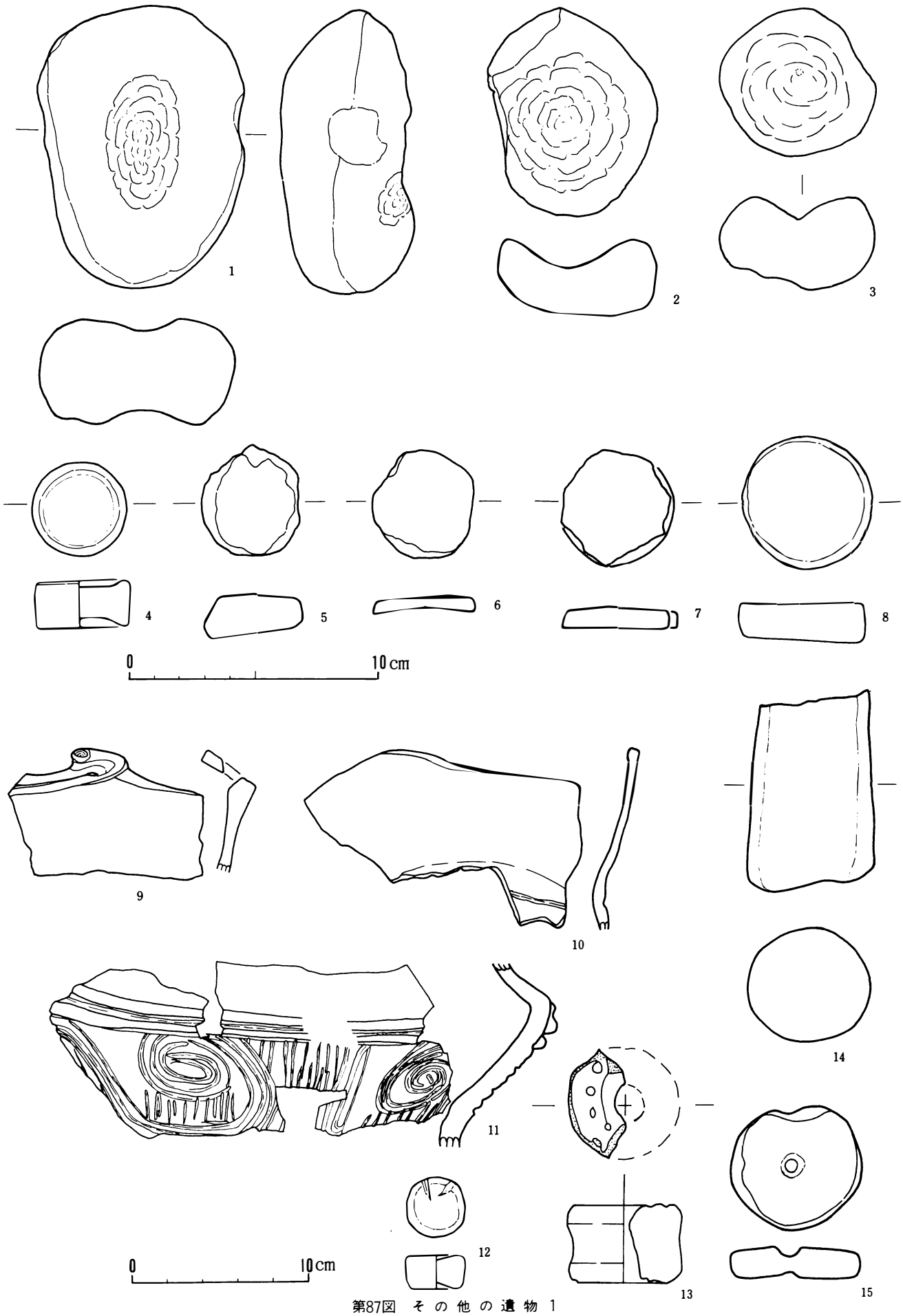

19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
0
10cm

第85図　土師質土器 2

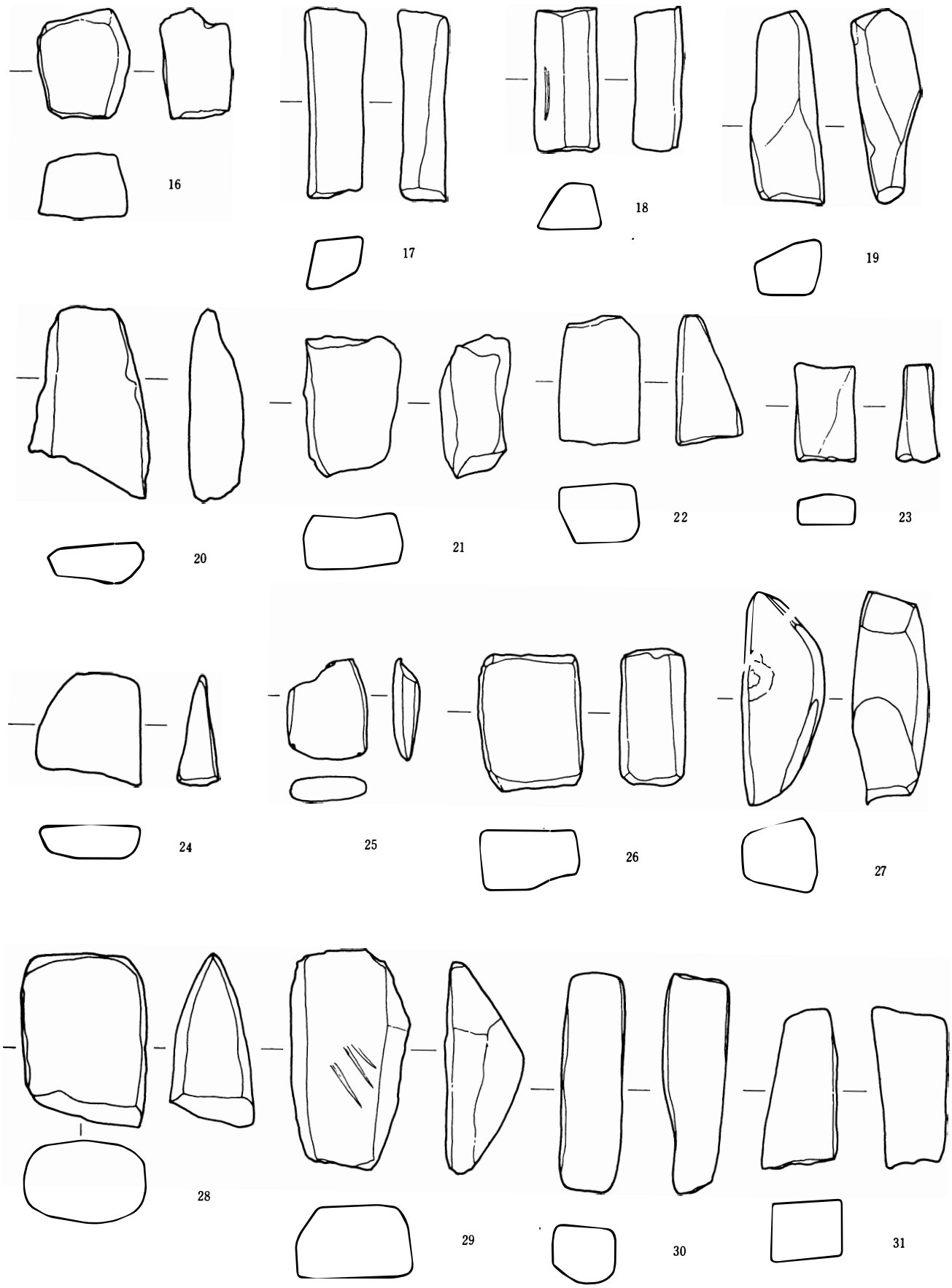


第86図　土 師 質 土 器 3

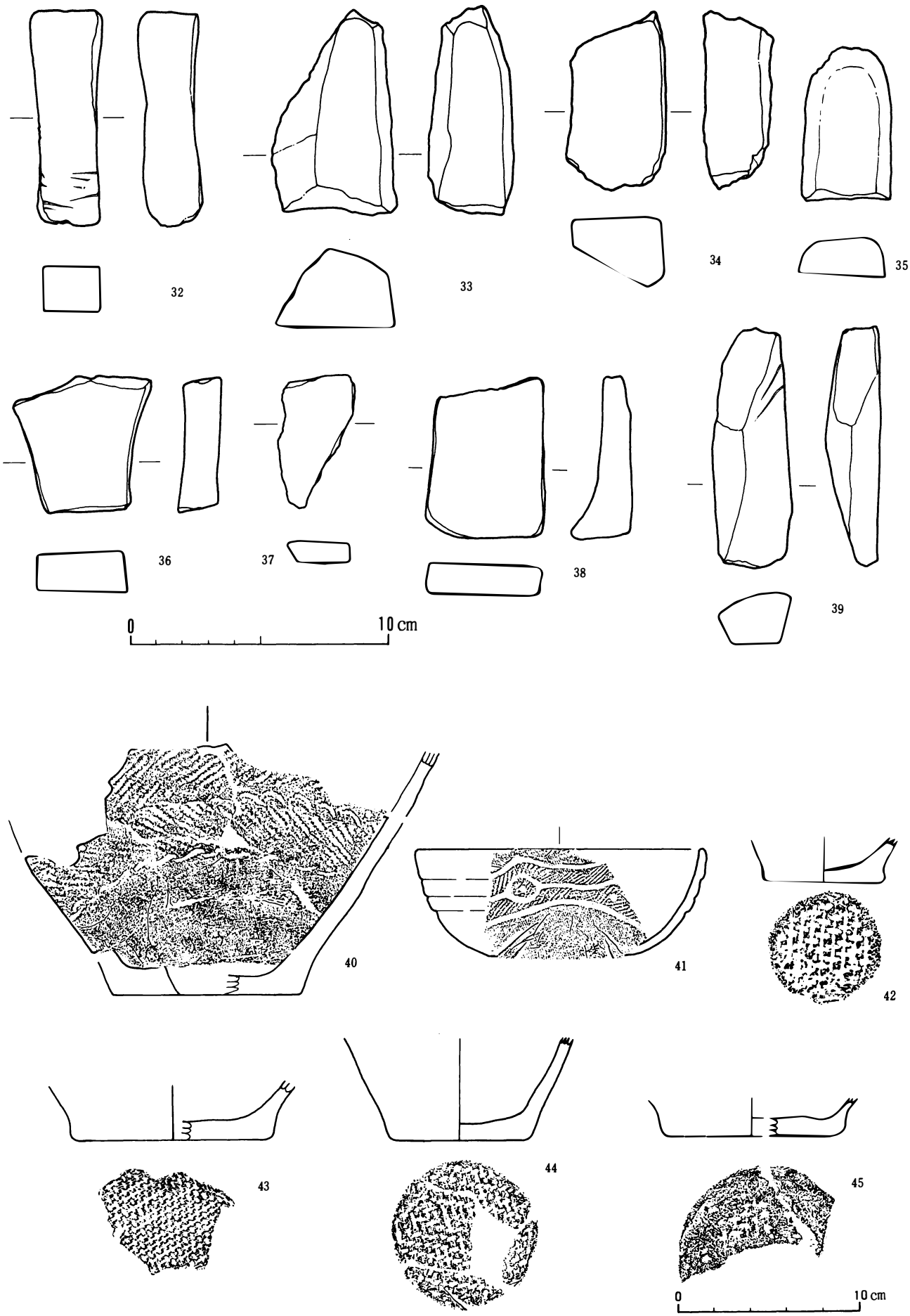
0　10 cm



第87図　その他の遺物 1



第88図　その他の遺物２



第89図　その他の遺物 3

9　その他の遺物

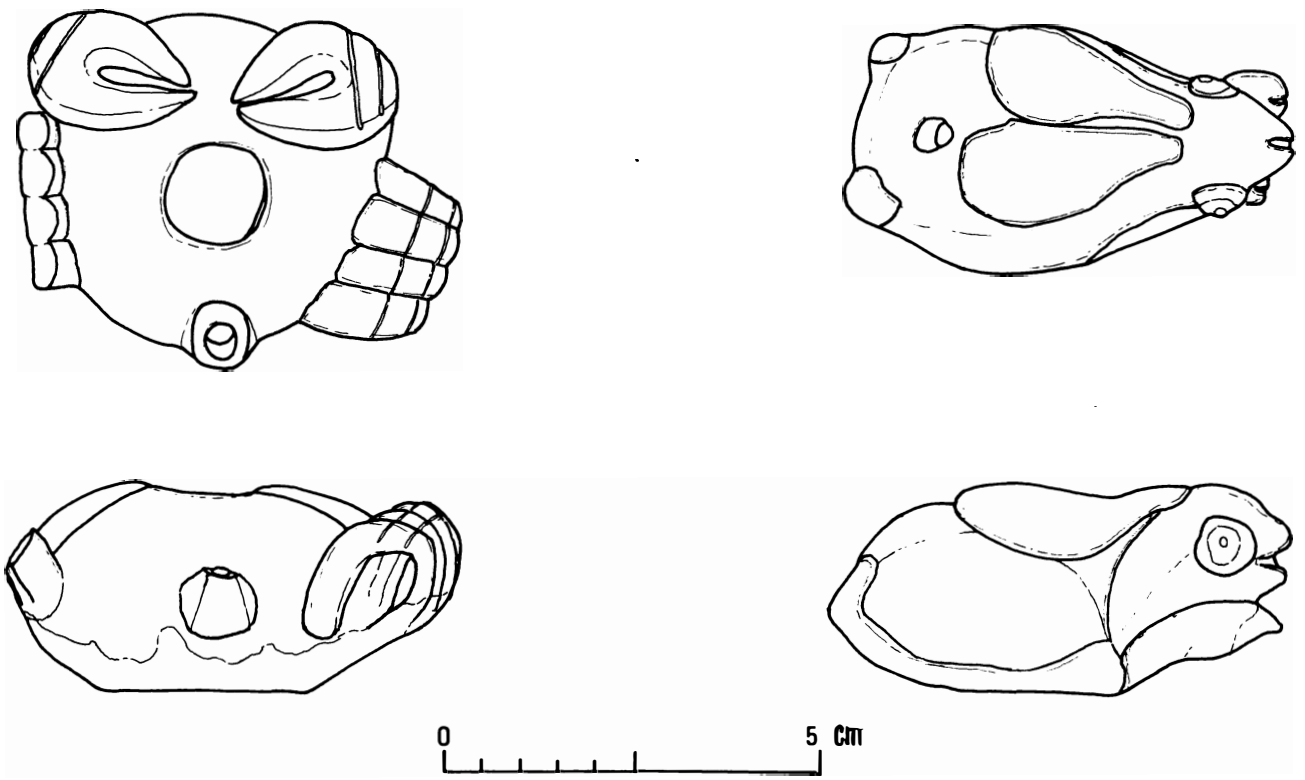
本遺跡の北には縄文時代後期から晩期にわたる配石遺構が出土した金生遺跡があるため、表土中からも多くの縄文土器や石器が検出されている。また、上述したように平安時代の遺構も存在しているため、その時代の遺物も検出されたのである。しかし、これらの遺物を伴う遺構の多くは中世遺構が営まれて行く間に消滅して行ったと考えられる。特に地下式土坑の天井の崩落によって壊された遺構は多いものと考えられる。何故ならば崩落した土砂の中には各時代の遺物が豊富に含まれていたのである。また、中世に位置付けられる柱穴群の覆土にも縄文時代中期から晩期にかかる土器片や平安時代の坏の破片が検出されている。

1）縄文時代の遺物

この時期の遺物が最も多く、凹石や土製円盤、耳栓、石鏃や土器片など多岐にわったている。第87図No.1～3は凹石で、No.4・12・13は耳栓である。No.5～8・15は土製円盤である。No.9・10は縄文時代後期に位置付けれる土器の口縁部破片であり、No.11は縄文時代中期後半の土器で、No.14は石棒の残欠である。第89図No.40は縄文時代後期、No.41は縄文時代後期末から晩期初頭に位置付けられる。No.42～45は縄文時代後期に位置付けられる土器の底部である。第88図25・28は縄文時代の磨製石斧である。

2）歴史時代の遺物

平安時代から中世にわたる遺物としては、砥石があげられる。第88図のNo.24・27以外の石器はすべて砥石である。また第89図のNo.32～38も砥石である。これらの砥石のほとんどは中世の遺物と考えられるが、中には平安時代のそれも含まれているものと推測できる。



第90図　鉄釉水滴実測図

8　金生遺跡出土人骨について

森　本　岩太郎

Ⅰ．はじめに

昭和55年５月～12月の発掘調査により、山梨県北巨摩郡大泉村谷戸の金生遺跡において、15世紀～17世紀初頭に属する人骨が発見された。山梨県埋蔵文化財センターからの委嘱によって、筆者がこの古人骨を調べたので、ここに報告する。

Ⅱ．人骨の出土状況と所見

金生遺跡のＢ区において、４個体分の人骨が発見された。人骨は焼けていない。

（ａ）　１号人骨

成人男性人骨１個体分であると思われる。長方形の土坑内から北頭位左側臥屈位で出土した。残っているのは主として下半身の骨格で左寛骨、左右の大腿骨・脛骨・腓骨などが見られる。ほかに上半身の骨格として左上腕骨がある。両側の股関節、膝関節を強く曲げている。人骨の保存状態が良くないので、形質の詳細は不明と言わざるを得ない。

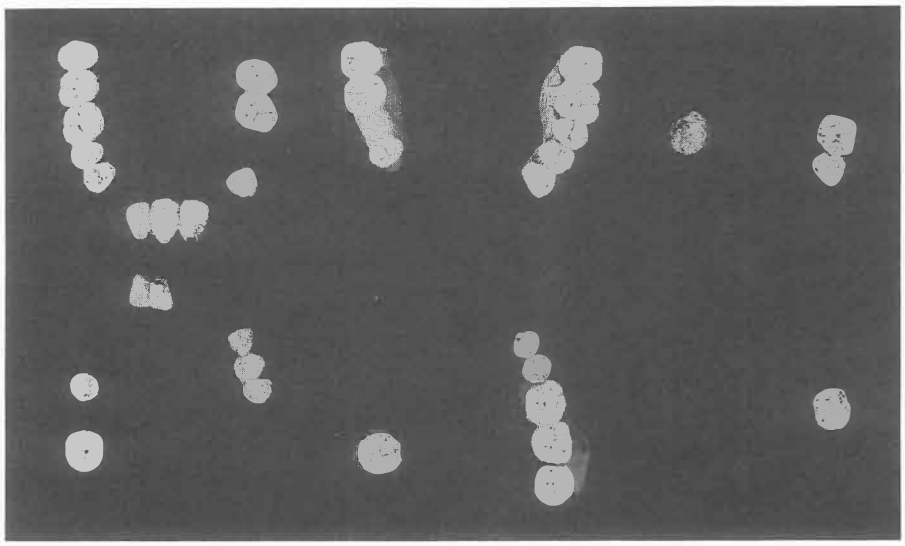


写真１　出土人骨の歯。左から右へ２号人骨、３号人骨、４号人骨の歯である。

（ｂ）　２号人骨（写真１）

壮年期女性人骨１個体分であると思われる。長円形の土壙内から出土した。残っている人骨が保存不良で、あまりにも少量のため、埋葬姿勢は不明である。歯は比較的保存状態が良好で、次の17本分がある。

７６　　３	１２　４５６７８
５４３	１２　　５　７

ただし、数字は残存する歯を表す（以下の場合も同様）。歯の咬合様式は鋏状咬合型と水底され、咬耗度は下顎切歯・上顎左第１大臼歯がBroca２度、他は同１度である。齲蝕は認められない。

（ｃ）　３号人骨（写真１）

壮年期男性人骨１個体分であると思われる。長方形の土坑内から北頭位右側臥屈位で出土した。頭蓋、左右の上腕骨・大腿骨・脛骨などが残るっている。股関節をほぼ直角に曲げ、膝関節を強く屈曲している。人骨の保存状態はは良くない。

頭蓋片で確認できるのは、前頭骨の眉間部付近、ブレグマ周辺の前頭骨・頭頂骨の破片、右側頭骨の外耳

孔より後方の部分とそれに続く後頭骨の一部、左側の側頭骨錐体、左右不明の頭頂骨片などである。歯は比較的保存がよく、次の14本がある。

7 6 5 4 3	5 7 8
8 7 6 5 4	7

下顎右第２小臼歯～第２大臼歯については不完全ながら歯槽がある。歯の咬耗度は上顎右の犬歯・第１大臼歯と下顎右の第１大臼歯がBroca２度、他は１度である。齲蝕は見られない。

右脛骨体中央の横断形は三角形を呈し、扁平でない。

（ｄ） ４号人骨（写真１）

１～２歳の幼児１個体分の人骨と思われる。地下式土壙から得られたねのである。残存する歯は次の４本である。

E D	E
E	

ただし、アルファベットの大文字は乳歯を表す。歯の咬耗度はBroca０～１度である。歯があるだけで、人骨片は残っていない。

Ⅲ．まとめ

金生遺跡Ｂ区の土坑内から出土した15世紀～17世紀初頭の人骨は、成人男性２・女性１・幼児１の計４個体分である。

第5章　まとめ

本遺跡の時期は既に遺構と遺物のところでおよそ述べてきたように、15世紀を中心とする地下式土坑が営まれた時期と、掘立柱建物址が営まれた16世紀から17世紀の時期に大別することができる。さらに、これら中世遺構以前には平安時代の住居址が営まれた9世紀後半から10世紀初頭の時期、縄文時代中期から後期が考えられる。ここでは中世に営まれた遺構の相互関係の解明を試みたい。地下式土坑と掘立柱建物址の詳細な時期差は、出土遺物からの検討は事実上不可能であるが、遺構の切り合いからはある程度推測することができる。この事実から二つ遺構群の大まかな時期差を検討してみたい。

17号地下式土坑の場合は、地下式土坑の上に中世の掘立柱建物址の柱穴が掘られており、天井を貫いている。そのため、柱が立てられず、地下式土坑を埋めたが地盤が安定しないため平石を置いて、その上部に柱を立てている例が確認されている。この行為は、地下式土坑が地下に存在しているという認識がなくなってから建物を建てていると考えることができる。地下式土坑があることを知りながら掘立柱建物を建設したことも想定することはできるが、この場合には柱の位置を移動する等の方法は計画当初から想定していると考えた方が現実的である。このように考えると、地下式土坑の存在が忘れられる時間が、両者の間に存在していると見る方が妥当であろう。

地下式土坑は本遺跡に49基営まれたことが今回の調査によって確認されている。この数はあくまでも調査範囲内で確認された数字であって、実際には調査予定外である南側や東側にも存在していると考えた方が良いように思う。本調査の前年に行った範囲確認調査によっても、南側の畑の中で地下式土坑を1基調査し、道路の東側でも中世遺構の存在を確認している。調査の経緯の章で既に述べたが、この遺跡の範囲は5ha以上であり、重要な中世遺跡であるとの判断がなされ、遺跡のほとんどを埋設保存することが協議の末決定されたのである。このような広範囲の遺跡の中の3000㎡程が埋設保存が不可能であったために発掘調査を行ったのであるから、当然確認された以上の地下式土坑が存在していると考えるべきである。地下式土坑の性格はすでに論じられているように、もがりの期間死体を仮埋葬する施設であるとすれば、このように多くの地下式土坑が営まれるには、この地域が長期間その場所として利用されていたとすることができる。この期間については地下式土坑からの遺物の検出が少なく、更に竪坑がふさがれた以後に何等かの原因で天井や竪坑が崩落し、後世の遺物が流れ込んでもいるため、出土した遺物からの時期決定は不確実にならざるを得ないのである。そのため、営まれていた時期については検討をさけるが、地下式土坑が築かれなくなった時からその存在が一般的に忘れられる期間とは、一世代は必要であろう。一つの埋葬方法が消滅して新たな方法に代わるこの時間を30年とすると、この時期には社会的な変革が同時に起こっているとも考える必要がある。

その年代については別の機会に論ずるとしても、15世紀後半の甲斐国の動乱は旧勢力が後退し、新しい勢力が台頭して来た時期である。本遺跡の遺物の年代については第4章で概説しているが、16世紀を中心としたものが多い。しかし、青磁や白磁などの遺物や鉄釉瓶子、鉄釉坏などの年代は15世紀以前とする事ができるのである。この遺物と大窯期を中心とした瀬戸美濃焼の遺物には若干の時期的隔たりが存在している。16世紀から17世紀に位置付けられる志野焼を中心とする遺物と、大窯期の遺物には連続性が確認されるため、やはり、15世紀と16世紀の間に遺跡の営みにかかわる空白が存在していると推測することのほうが妥当であろう。この空白期間が一世代30年とした時間と一致するかは不明であるが、遺物の連続性と遺構の切り合いから地下式土坑群と掘立柱建物址群には時間的なつながりは存在していないと考えられるのである。本県の場合に地下式土坑が中世城館跡内に検出されるケースが多いが、このような遺構の相互関係がこれらのケースに総て当てはまるかどうかは、さらに多くの資料の検討を行う必要がある。

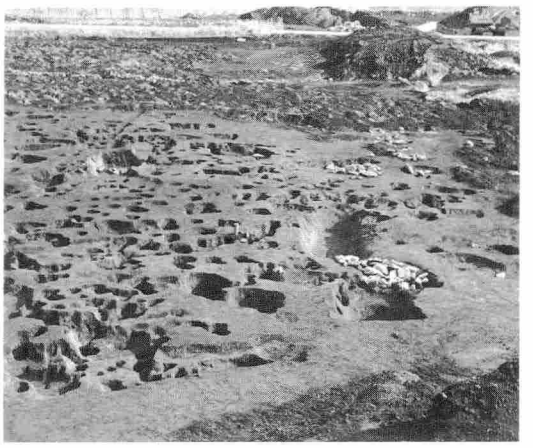
金生遺跡土坑計測値一覧表

No.	形　状	長　軸	短　軸	深　さ	グリット	No.	形　状	長　軸	短　軸	深　さ	グリット
1	隅丸方形	192	184	116	B－1	48	不整形	465	330	30	K－6
2	楕円形	204	158	110	－A－3	49	隅丸方形	175	150	16～ 25	F－7
3	隅丸方形	224	159	73	L－10	50	円　形	195	183	70	I－7
4	隅丸方形	214	100	50	L－10	51	隅丸方形	145	132	42	J－6
5	隅丸方形	85	68	46	A－1	52	不整形	364	120	45	J－7
6	円　形	90	90	95	A－1	53	円　形	194	193	77	J－7
7	円　形	129	110	98	B－1	54	隅丸方形	190	107	18	J－7
8	隅丸方形	187	95	95～123	D－1	55	隅丸方形	170	130	60	F－7
9	不整形	159	100	49	A－2	56	隅丸方形	135	80	44	F－7
10	楕円形	163	135	87	B－2	57	円　形	90	88	29	F－7
11	楕円形	160	118	97	B－2	58	隅丸方形	160	145	81	J－7
12	楕円形	141	122	66	B－2	59	隅丸方形	180	148	24	M－8
13	隅丸方形	221	135	65	B－2	60	隅丸方形	165	158	47	E－7
14	不整形	223	155	55～103	C－2	61	隅丸方形	140	138	52	E－8
15	隅丸方形	185	127	63	C－2	62	隅丸方形	126	112	50	F－8
16	不整形	122	70	61	A－2	63	楕円形	105	80	59	F－8
17	円　形	74	71	103	A－2	64	不整形	243	180	19	G－8
18	楕円形	74	66	59	A－2	65	楕円形	95	75	25	E－9
19	楕円形	164	93	63	B－2	66	不整形	175	83	25～ 27	J－9
20	隅丸方形	146	101	66	C－2	67	隅丸方形	247	205	6	J－9
21	不整形	240	130	57～ 93	B－2	68	隅丸方形	176	120	20	K－9
22	隅丸方形	220	140	72	D－3	69	隅丸方形	224	115	28	J－10
23	隅丸方形	165	98	64	A－3	70	隅丸方形	127	106	33	K－10
24	隅丸方形	122	80	78～116	A－3	71	隅丸方形	76	60	18	H－10
25	隅丸方形	135	92	90～117	B－3	72	楕円形	111	66	33	F－10
26	隅丸方形	177	144	40	E－3	73	隅丸方形	154	131	95	E－11
27	隅丸方形	125	102	62	E－3	74	隅丸方形	296	193	36	H－11
28	隅丸方形	152	96	55	E－3	75	楕円形	135	57	46～ 92	J－11
29	円　形	69	64	87	A－3	76	隅丸方形	117	90	16	L－11
30	楕円形	150	65	75	A－3	77	円　形	110	100	51	H－11
31	不整形	195	85	68	A－3	78	円　形	145	140	51	J－11
32	隅丸方形	168	160	38～ 74	C－3	79	隅丸方形	187	145	20	K－11
33	隅丸方形	150	120	63	E－3	80	隅丸方形	120	95	28	H－11
34	円　形	98	93	117	B－4	81	隅丸方形	280	193	51	K－11
35	隅丸方形	397	335	71	C－4	82	円　形	113	110	47	I－11
36	楕円形	159	93	40～ 91	－A－4	83	隅丸方形	147	107	25	I－11
37	隅丸方形	125	117	16	A－4	84	楕円形	150	138	14	I－11
38	不整形	173	120	37	B－4	85	円　形	110	109	10	I－11
39	楕円形	222	170	32	C－4	86	不整形	304	105	24	C－5
40	円　形	120	110	23	A－5	87	不整形	170	50	10～ 23	C－5
41	不整形	123	70	30～ 43	B－5	88					
42	不整形	210	144	24	C－4	89	隅丸方形	145	44	21	－A－5
43	隅丸方形	209	135	52	K－5	90	隅丸方形	220	200	23	－A－5
44	隅丸方形	220	180	33	H－6	91	円　形	125	119	25	A－6
45	隅丸方形	278	160	42	H－6	92	楕円形	134	100	30	A－6
46	隅丸方形	170	163	37	I－6	93	不整形	167	145	45	－A－6
47	隅丸方形	160	137	21～ 33	J－6	94	隅丸方形	100	90	66	－A－6

No.	形　状	長　軸	短　軸	深　さ	グリット	No.	形　状	長　軸	短　軸	深　さ	グリット
95	隅丸方形	187	108	25	A－6	142	不整形	294	120	30～100	A－9
96	隅丸方形	245	190	36	C－6	143	隅丸方形	182	168	61	A－9
97	楕円形	135	116	38	D－4	144	隅丸方形	135	112	23	B－8
98	隅丸方形	190	137	44～ 55	－B－6	145	不整形	95	60	77	B－9
99	不整形	365	135	72～119	－A－6	146	楕円形	110	51	20～106	C－9
100	不整形	120	83	65	A－6	147	隅丸方形	336	96	15	C－9
101	円　形	93	87	12	B－6	148	楕円形	195	128	22～ 38	C－9
102	楕円形	115	87	29	－B－6	149	楕円形	236	129	38	D－10
103	楕円形	107	80	56	－B－6	150	隅丸方形	205	119	41	D－9
104	隅丸方形	206	149	30	－B－7	151	楕円形	122	107	15	D－9
105	楕円形	70	60	54	A－7	152	隅丸方形	81	75	19	D－9
106	隅丸方形	348	209	64	C－7	153	隅丸方形	200	175	69	－D－9
107	隅丸方形	210	140	39	－C－7	154	隅丸方形	221	121	44	－C－9
108	不整形	150	118	50	－B－7	155	不整形	140	85	8	－B－9
109	隅丸方形	76	70	41	－A－7	156	楕円形	148	86	46	－A－9
110	不整形	119	60	58	A－7	157	不整形	265	161	55	－C－9
111	隅丸方形	146	98	30	A－7	158	隅丸方形	155	80	20～ 30	－C－10
112	楕円形	153	78	40	－A－7	159	不整形	205	73	21	－C－10
113	不整形	107	34	74～ 50	－A－7	160	隅丸方形	145	110	42	－C－10
114	隅丸方形	135	95	35	A－7	161	隅丸方形	95	90	16	－B－10
115	楕円形	95	50	54	A－7	162	隅丸方形	110	46	25	－B－10
116	隅丸方形	74	71	54	A－7	163	隅丸方形	352	192	76～ 91	－A－10
117	不整形	98	65	39	－A－7	164	不整形	280	200	28	A－10
118	隅丸方形	102	96	71	－A－7	165	不整形	138	72	16	B－9
119	隅丸方形	200	110	36	A－6	166	楕円形	160	117	85	B－10
120	円　形	187	143	49	C－6	167	隅丸方形	250	210	24～ 85	D－6
121	隅丸方形	190	102	25	C－7	168	円　形	135	120	30	C－10
122	隅丸方形	418	302	120	－C－8	169	隅丸方形	170	140	38	D－10
123	楕円形	130	115	92	－B－8	170	隅丸方形	130	123	36	D－10
124	隅丸方形	76	45	38	－B－8	171	円　形	145	130	50	－B－10
125	不整形	145	60	34	－B－7	172	楕円形	285	245	52	－A－11
126	隅丸方形	160	85	29～ 40	－B－8	173	楕円形	190	170	71～110	A－11
127	楕円形	124	112	120	－A－8	174	楕円形	180	120	23～ 46	B－11
128	円　形	93	89	52	－A－8	175	隅丸方形	248	161	19～ 53	D－11
129	円　形	100	95	108	－A－8	176	円　形	135	128	55	－A－9
130	隅丸方形	342	313	73	A－8	177	隅丸方形	243	196	34	－B－9
131	円　形	81	78	30	C－8	178	不整形	213	73	58	A－7
132	不整形	126	75	27～ 30	C－8	179	楕円形	137	126	17	－A－7
133	不整形	175	98	106	D－8	180	楕円形	138	110	19	－C－9
134	楕円形	225	125	30	D－8	181	隅丸方形	160	114	17	B－9
135	楕円形	174	93	31	D－8	182	隅丸方形	135	125	53	C－6
136	不整形	130	80	21～ 51	D－8	183	楕円形	150	118	45	B－7
137	楕円形	104	62	87	D－8	184	不整形	233	160	90	C－9
138	楕円形	97	52	37～ 70	E－8	185	半円形	130	65	43	－E－9
139	隅丸方形	82	74	18	－B－8	186	隅丸方形	105	77	28	－C－9
140	不整形	110	47	67	－B－9	187	円　形	110	103	120	C－2
141	不整形	115	90	80	－A－9	188	楕円形	95	80	52	C－3

図　　版

No.1 調査区北西部分



No.2 内堀周辺

No.3 調査区中央の作業風景

No.4 1号掘立柱建物址群の調査風景

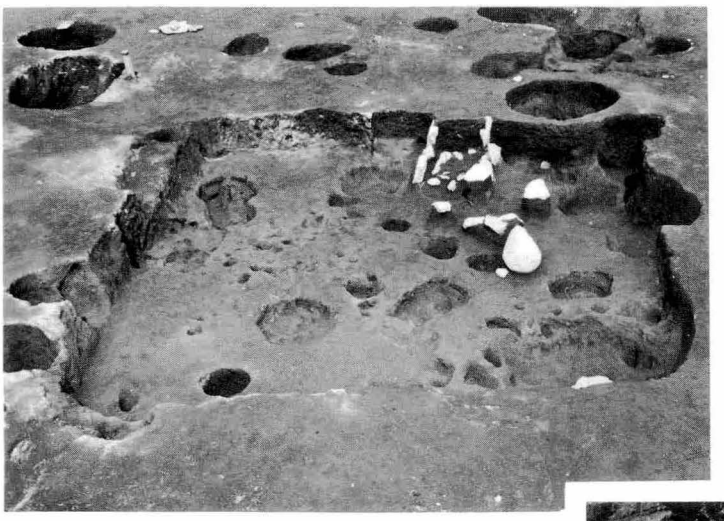
No.5 1号掘立柱建物址群全景

図版 2

No.6 調査区北東

No.7 調査区中央から東

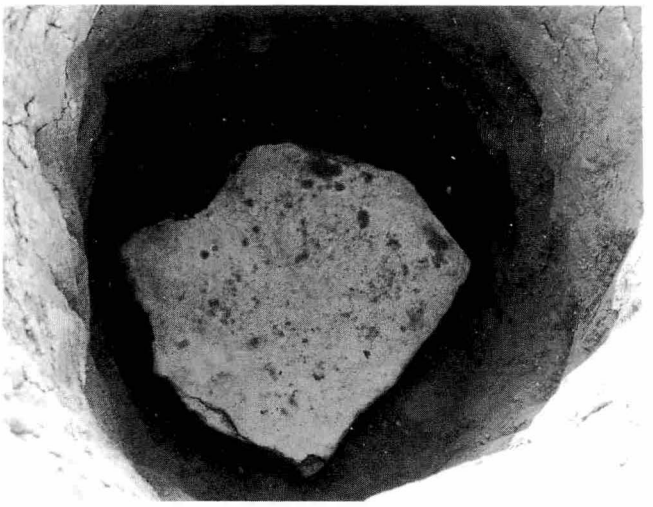
No.8 調査区東側



No.9 2号住居址

No.10 3号住居址

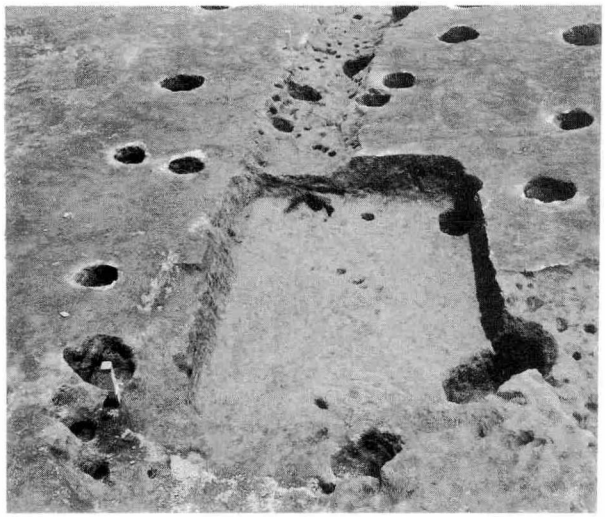
No.11 4号住居址



No.12 1号掘立柱建物址根石

No.13 1号掘立柱建物址の柱痕

No.14 106号土坑



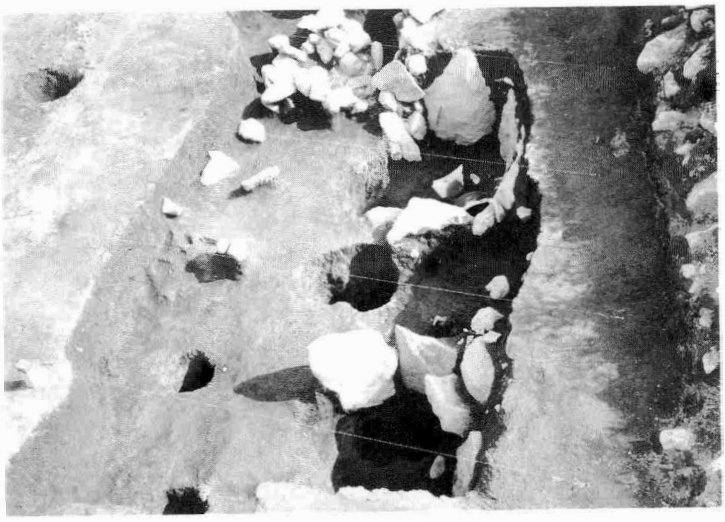
No.16

No.15

No.17

No.18 1号石組

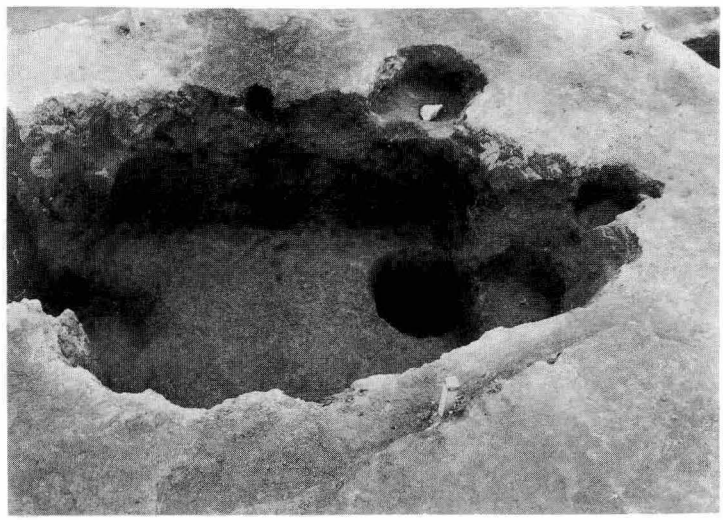
No.21 南西石組全景



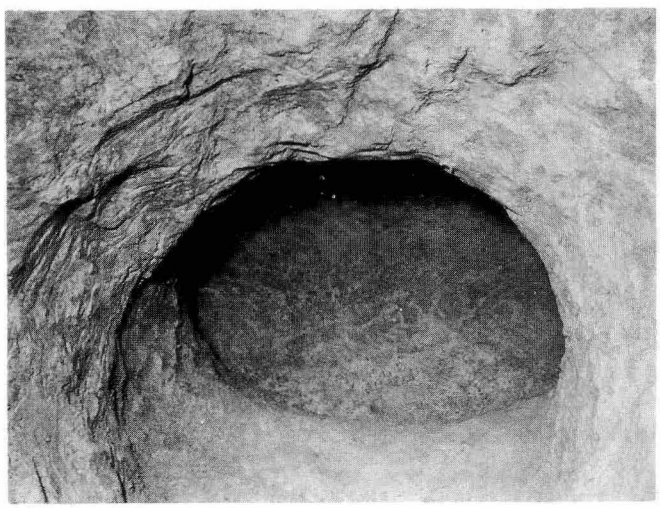
No.19 南西側の石組群

No.20 中央の石組群

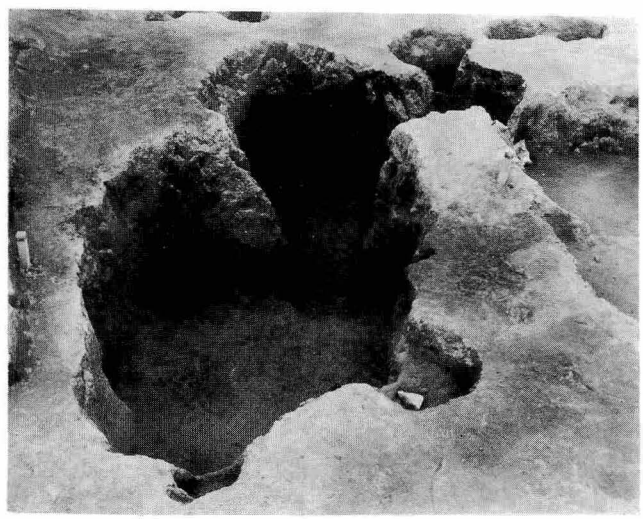
図版 6



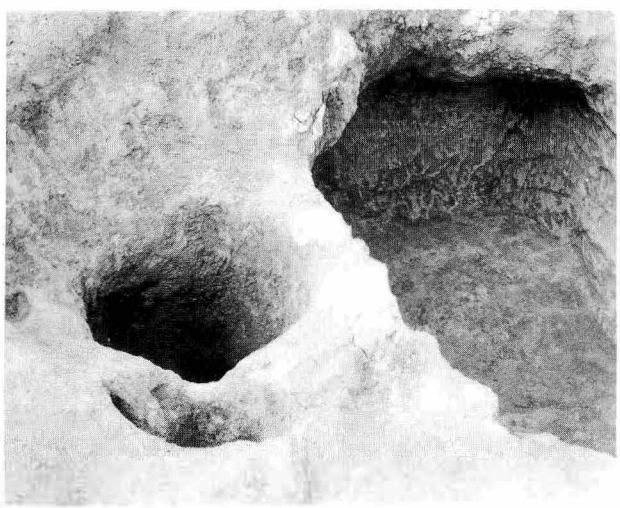
No.22 15号地下式土坑



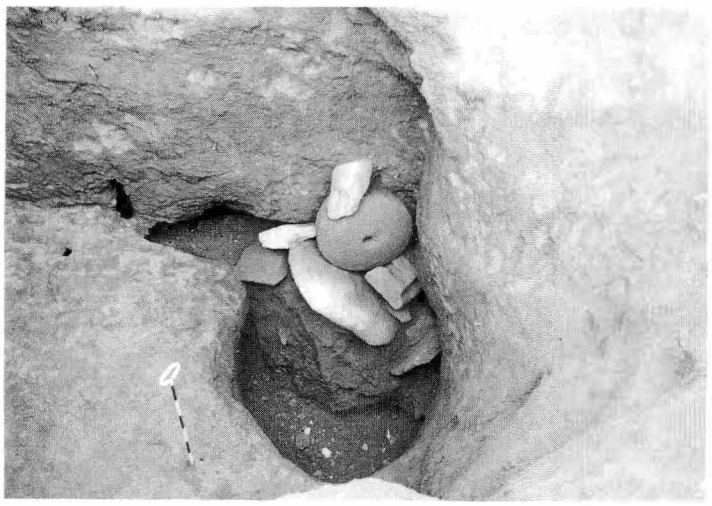
No.23 3号地下式土坑



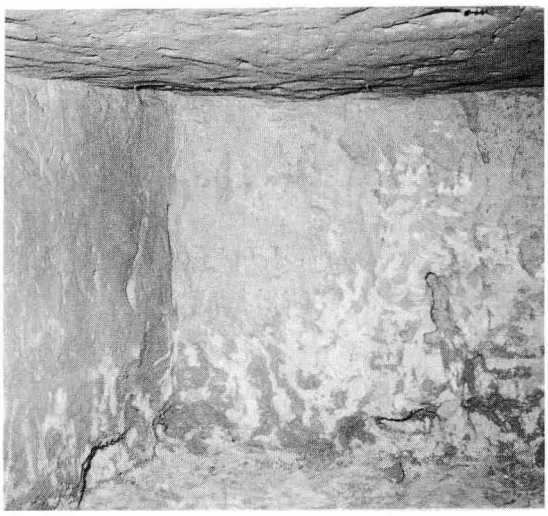
No.24 15・17号地下式土坑



No.25 4号・6号地下式土坑



No.26 10号地下式土坑閉塞石



No.27 8号地下式土坑内部

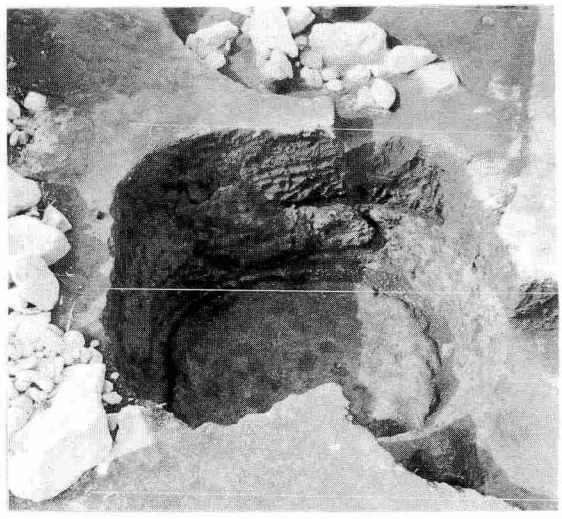
No.28 10号から13号地下式土坑を見る。

No.29 13号地下式土坑内部

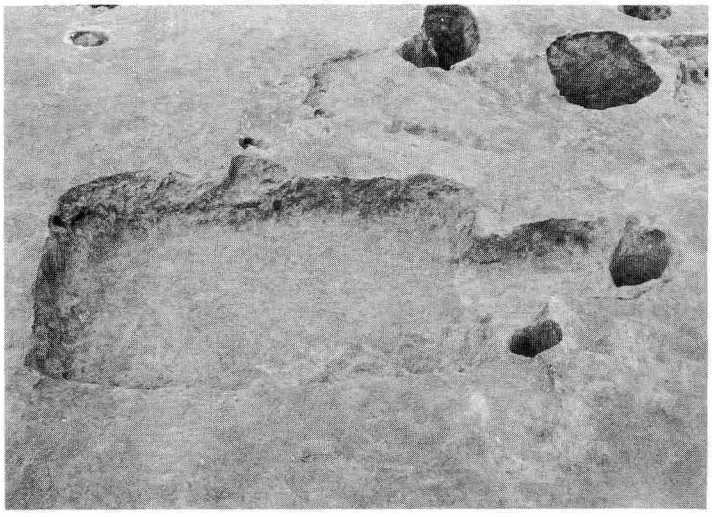
No.30 6号地下式土坑工具痕

図版 8

No.31 2号人骨

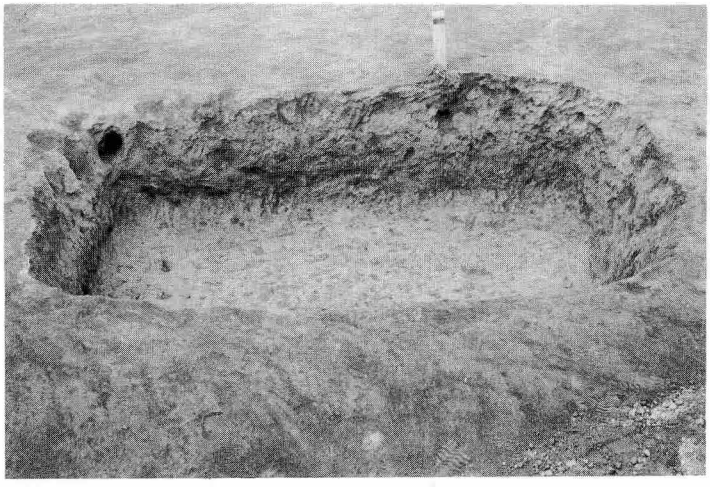


No.32 2号土坑

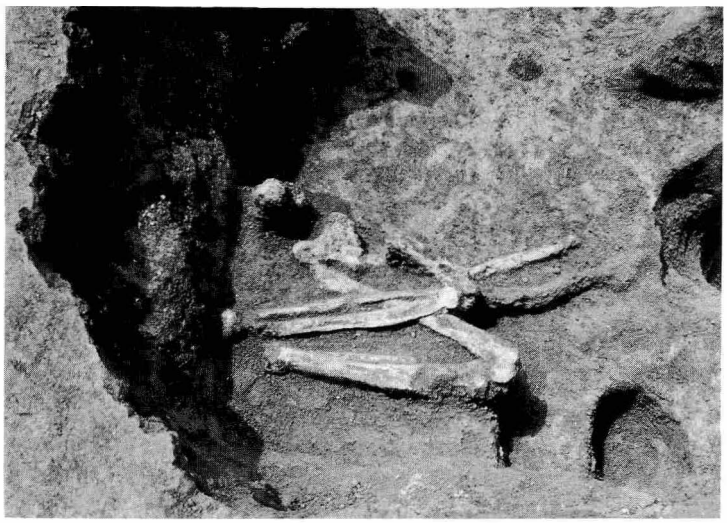


No.33 74号土坑

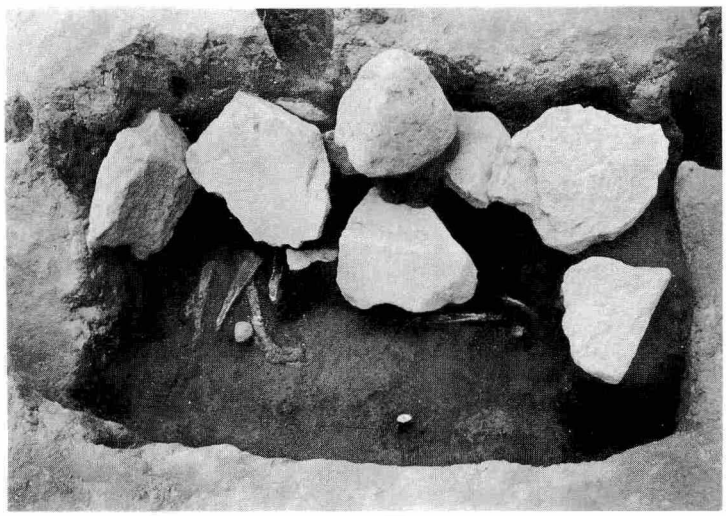
No.34 106土坑



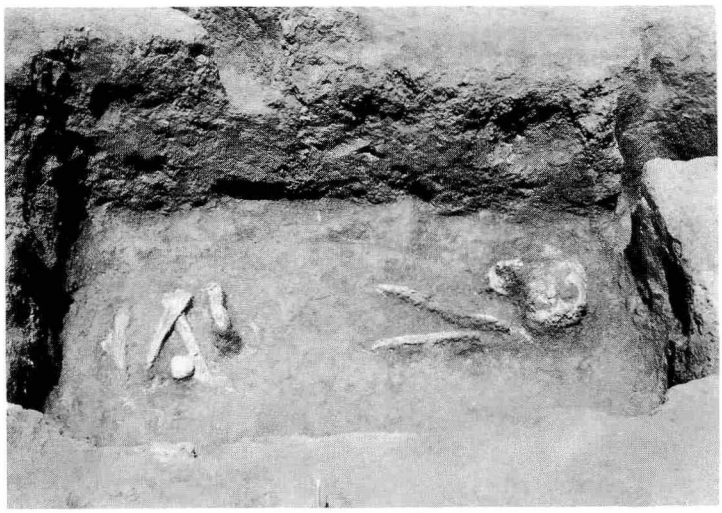
No.35 4号土坑



No.36 1号人骨



No.37 3号人骨上部

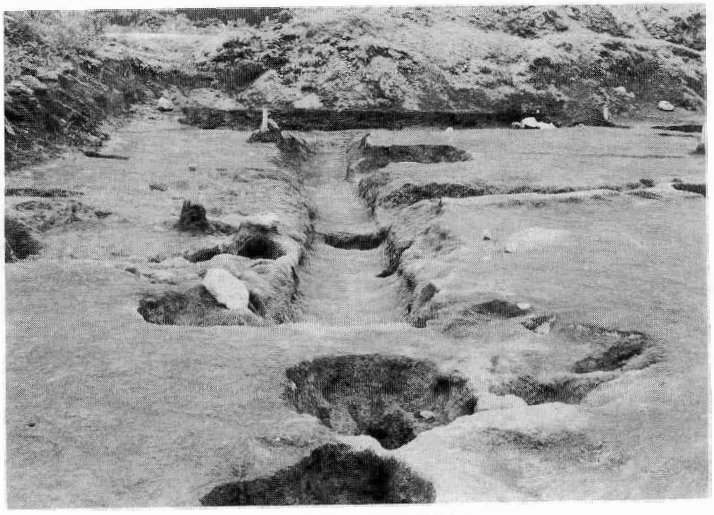


No.38 3号人骨

図版10

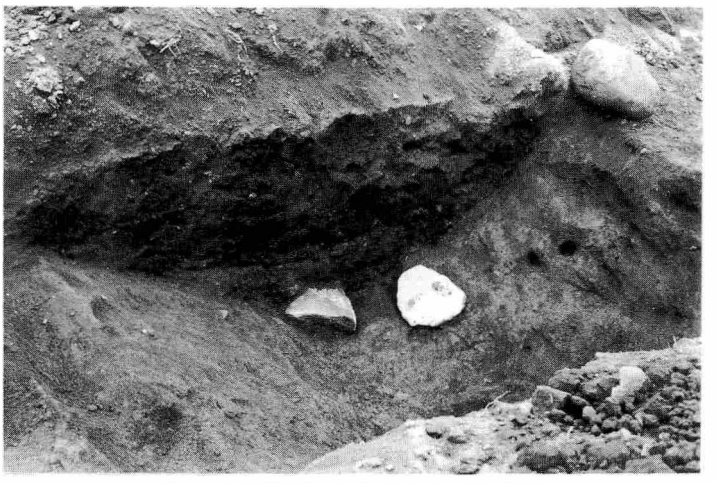
No.39 2号柵列

No.40 2号溝

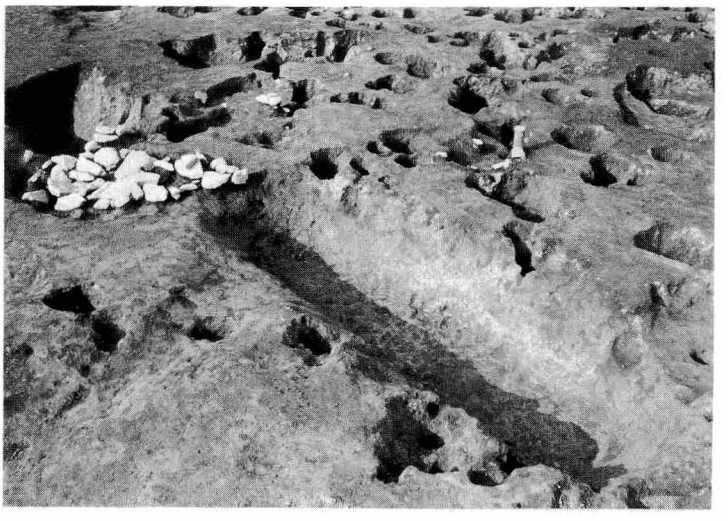


No.41 2号溝南部分

No.42 試掘調査で確認された堀(西側)

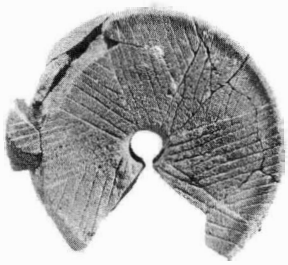


No.43 試掘調査で確認された堀(東側)



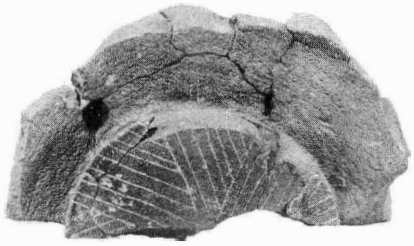
No.4　内堀と土橋

図版12



No.45 茶臼(上臼裏面)

No.46 茶臼全体



No.47 茶臼下臼

No.48 挽き臼(上臼裏面)

No.49 挽き臼(上臼)

No.50 挽き臼(下臼)

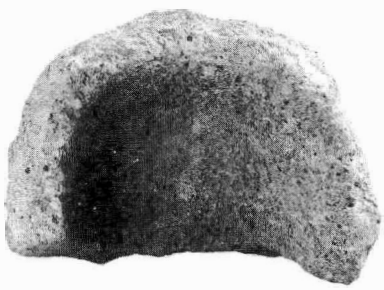
図版13

No.51 内耳土器(内耳部分)

No.52 内耳土器

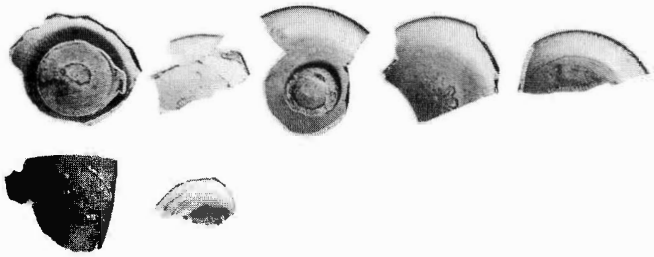
No.53 内耳土器出土状況

No.54 挽き臼(上臼裏面)

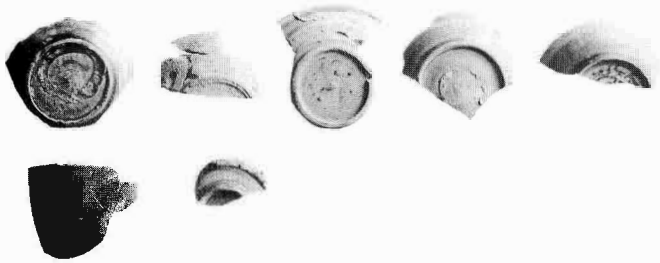


No.55 ひで鉢

図版14

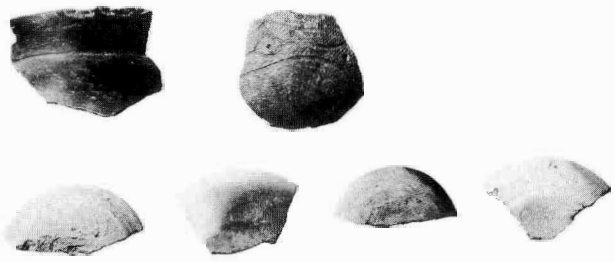


No.56 陶磁器(見込部分)



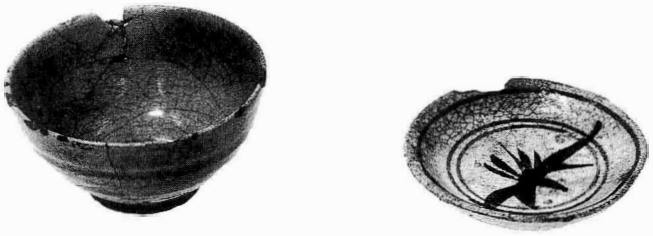
No.57 陶磁器(底部)

No.58 陶磁器(見込部分)

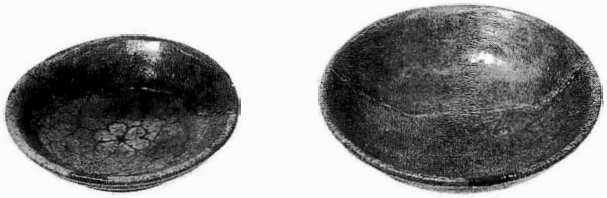


No.59 縄文土器・土師質土器

No.60 土師

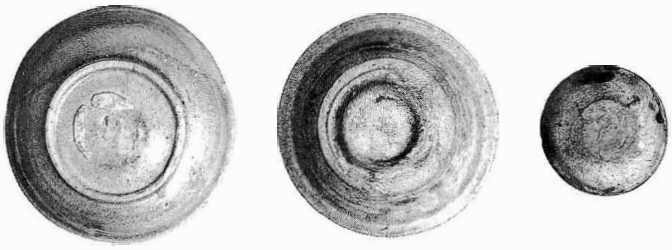


No.61 左 灰釉碗・右 志野絵皿



No.62 灰釉丸皿

No.63 左 灰釉丸皿・中央 灰釉段皿・右 鉄釉坏



No.64 同裏面

図版16

No.65 鉄釉水滴

No.66 同上

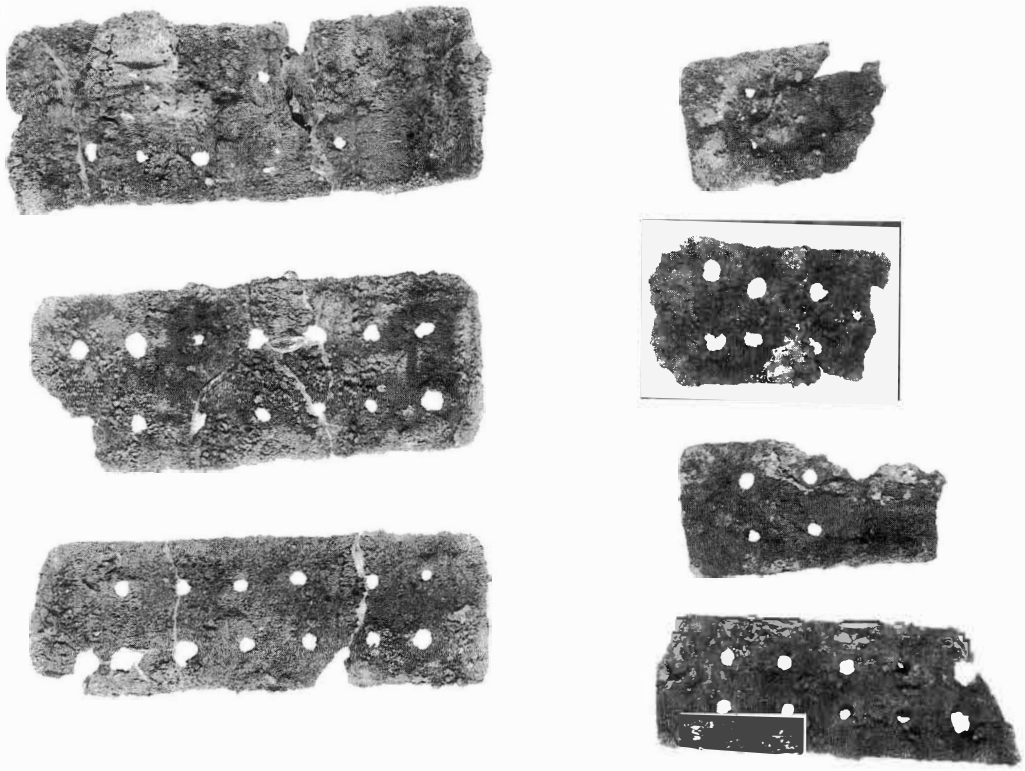
No.68 水晶数珠玉

No.67 鉄砲玉

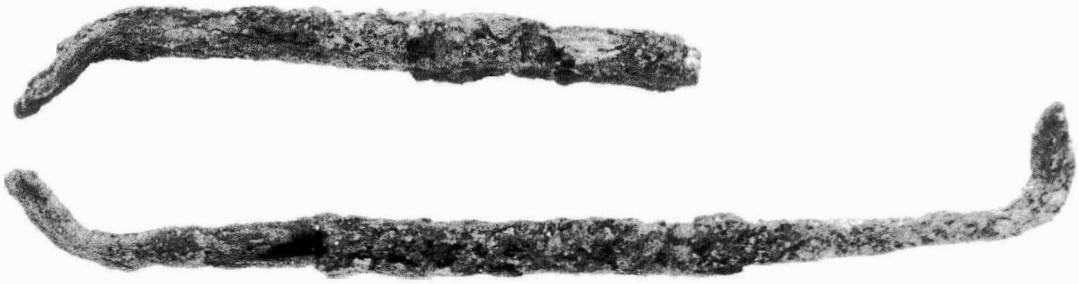
No.69 鏡

No.70 小柄

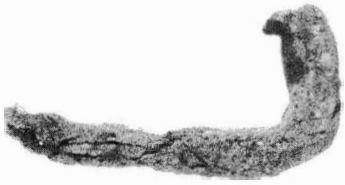
図版18



No.71 小札

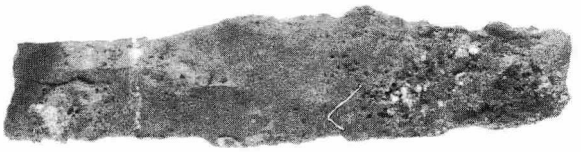


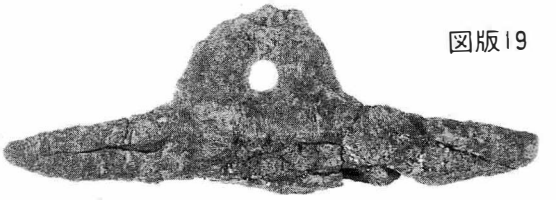
No.72 毛抜

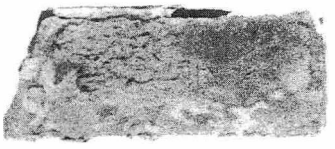


No.72

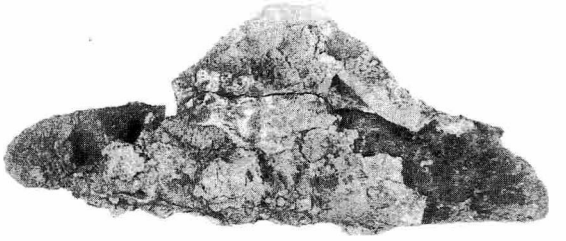
No.72







No.73 刀子

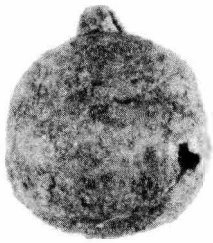


No.75 刀装具

No.74 火打ち金

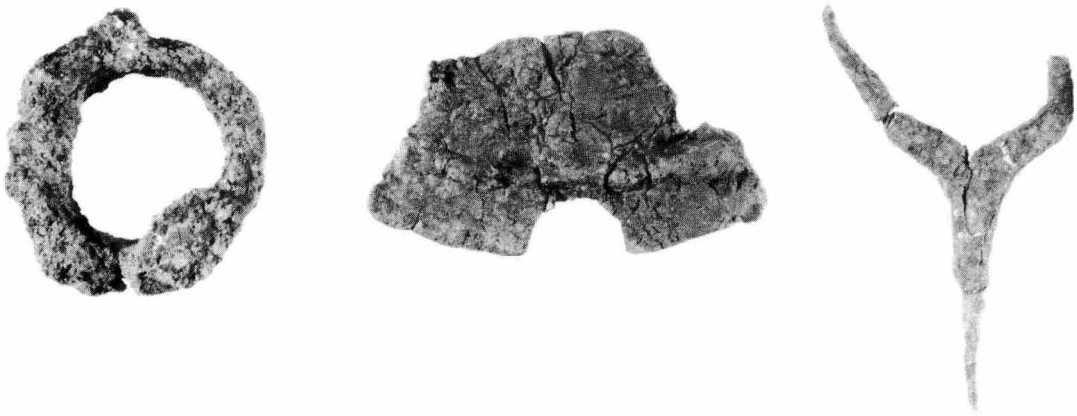
No.76 煙管

図版20

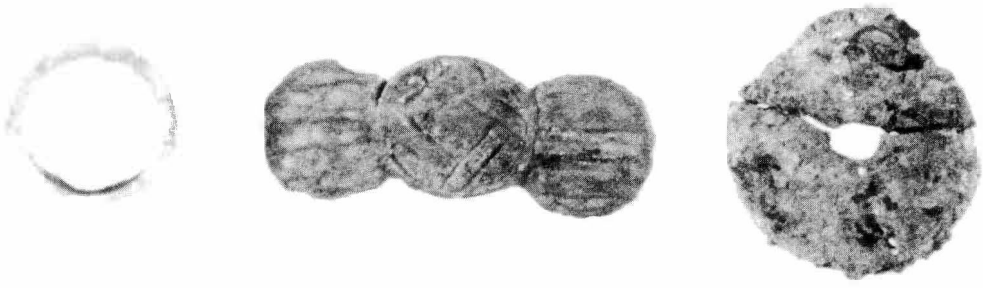


No.77　鉄鈴

No.78　銅製管



No.79 その他の金属製品



No.80 その他の金属製品

山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第39集

1988年3月25日　印　刷
1988年3月30日　発　行

金生遺跡Ⅰ（中世編）

発　行　山梨県教育委員会

印　刷　株式会社　少　國　民　社